

在日バングラデシュ人の日本語使用実態と 社会的関係の構築

—バングラデシュの日本語教育の改善を目指した
政策への提言—

アラム モハメッド アンサルル
(ALAM, Mohammed Ansarul)

政策研究大学院大学
国際交流基金日本語国際センター
連携大学院日本言語文化研究プログラム
博士（日本語教育研究）

2015 年 8 月

目次

論文要旨.....	v
第1章 本研究の背景と問題意識.....	1
1.1 バングラデシュの日本語教育の現状.....	1
1.1.1 バングラデシュの日本語教育の歴史.....	1
1.1.2 バングラデシュの日本語教育の概況：機関数、教師数、学習者数の推移.....	2
1.2 ダッカ大学の日本語教育.....	3
1.2.1 ダッカ大学の日本語教育機関の概況.....	3
1.2.1.1 現代言語研究所（IML）.....	4
1.2.1.2 国際関係学部（IR）.....	4
1.2.1.3 日本研究センター（JSC）.....	5
1.3 ダッカ大学の日本語教育内容と問題点：IMLの場合.....	6
1.3.1 IMLの授業内容と授業方法.....	6
1.3.2 日本語学習継続率の低さ.....	7
1.3.3 IMLの日本語教育の問題点.....	7
1.4 バングラデシュの外国語教育政策の課題.....	9
1.5 本研究の構成.....	10
第2章 先行研究.....	13
2.1 在日外国人の日本語使用実態に関する先行研究の概観.....	13
2.2 在日外国人が日常生活で直面する問題を明らかにした先行研究の概観.....	16
2.3 先行研究のまとめ.....	18
2.4 研究目的と課題.....	19
第3章 理論的枠組み.....	20
3.1 言語生態学.....	20
3.1.1 言語生態学の概要.....	20
3.1.2 言語生態学を構成する基本的な概念.....	22
3.1.2.1 言語生態学における能力観.....	22
3.1.2.2 自己保存.....	23
3.1.2.3 異なりの対立と内在的統合.....	23
3.1.2.4 生態学的リテラシー.....	24
3.2 日本語教育分野における言語生態学の研究と本論文の位置づけ.....	26
第4章 【研究1】日常生活で直面する問題への対応.....	28
4.1 質的研究の背景.....	28
4.2 研究方法.....	28

4.2.1	調査対象者	28
4.2.2	研究目的と研究課題	29
4.2.3	調査方法	30
4.2.4	分析方法	30
4.2.5	分析対象の選定	31
4.3	職場における問題解決：Iさんの場合	32
4.3.1	Iさんの全体ストーリー	32
4.3.2	分析結果と考察：アルバイトI（外国人スタッフとの対立）	36
4.3.2.1	SCAT分析の結果	36
4.3.2.2	考察	40
4.3.2.2.1	Iさん、日本人チーフ、外国人スタッフの人間関係	40
4.3.2.2.2	Iさん、チーフ、スタッフ間の異なりの対立	42
4.3.2.2.3	Iさんに見られる孤立実体的能力観	42
4.3.3	分析結果と考察：アルバイトII（終業時間をめぐる対立）	43
4.3.3.1	SCAT分析の結果	43
4.3.3.2	考察	49
4.3.3.2.1	残業に対するIさんと日本人チーフの考え方	49
4.3.3.2.2	Iさんに見られる孤立実体的能力観	50
4.3.4	分析と考察：アルバイトIII（相互配慮による業務時間の調整）	51
4.3.4.1	SCAT分析の結果	51
4.3.4.2	考察	55
4.3.5	来日4ヶ月後と8ヶ月後の間に起きたIさんの変化	56
4.4	宗教上のタブーをめぐる問題：Nさんの場合	57
4.4.1	分析結果と考察：Nさんの場合（宗教上の食文化（賄い））	58
4.4.1.1	SCAT分析の結果	59
4.4.1.2	考察	64
4.5	まとめ	66
第5章	【研究2】生活の場を広げるための社会参加	69
5.1	質的調査の背景	69
5.2	研究方法	69
5.2.1	調査対象者	69
5.2.2	調査方法と分析方法	69
5.2.3	分析対象の選定	70
5.3	研究目的と研究課題	70
5.4	Aさんのデータ分析	71
5.4.1	Aさんのストーリー概要	71

5.4.2	分析結果と考察：国際交流センターを通しての人間関係	71
5.4.2.1	SCAT 分析の結果	71
5.4.2.2	考察	75
5.4.2.2.1	A さんの社会参加の過程	75
5.4.2.2.2	社会参加による A さんの生活の変化	76
5.5	S さんのデータ分析	78
5.5.1	S さんのストーリー概要	78
5.5.2	分析結果と考察：自文化を認められる	78
5.5.2.1	SCAT 分析の結果	78
5.5.2.2	考察	81
5.5.2.2.1	自文化への理解を獲得する過程	81
5.5.2.2.2	自文化に対する周囲の承認による S さんの生活の変化 ...	82
5.6	まとめ	83
第 6 章	【研究 3】在日バングラデシュ人の日本語使用の実態	85
6.1	研究課題	85
6.2	調査・分析	85
6.2.1	調査内容	85
6.2.2	協力者	86
6.3	調査結果	87
6.3.1	因子分析の結果	87
6.3.2	使用必要場面の大別化	89
6.3.3	自由記述で見られた特徴	91
6.3.3.1	問題解決場面	92
6.3.3.2	社会参加場面	94
6.4	全体考察	96
第 7 章	総合考察	98
7.1	在日バングラデシュ人の日本語使用に見られた能力観	99
7.1.1	【研究 1】で見られた能力観	99
7.1.2	【研究 2】で見られた能力観	100
7.1.3	【研究 3】で見られた能力観	101
7.2	日本語教育現場への提言	102
7.2.1	提言（1）【研究 1】および【研究 2】の知見を踏まえた授業改善： ケース学習の導入	102
7.2.2	提言（2）【研究 3】の知見を踏まえた授業改善：サバイバル場面の Can-Do 化の試み	106
7.2.3	政府への提言	108

第 8 章	まとめと今後の課題	111
8.1	本研究のまとめ（本研究の意義）	111
8.2	今後の課題	112
参考文献	114
表と図	119
資料 1：調査票	120
資料 2：I さんのインタビューの全体マトリックス（1 回目と 2 回目）	128

論文要旨

バングラデシュでは、1972年からダッカ大学を中心に日本語教育が行なわれている。多くの日本語学習者は日本留学や日本企業への就職を目指して日本語を学んでいる。しかし、バングラデシュの多くの教育機関では、教育目標や教育方針が明確に示されておらず、また、授業内容と授業方法が学習者の学習動機と合致していないため、学習の継続率が非常に低くなっている。その改善には、授業内容を学習者の目的・動機に合うように変えていく必要がある。そのため、日本に暮らすバングラデシュ人が自分のアイデンティティや価値観、生活のスタイルを維持しつつも周囲の日本人との協力関係を構築し、問題を解決しながら生きていくために、どのような能力や技能が必要なのか、それを学習者に示すことが有効であろうと思われる。

以上の問題意識から、本研究は、バングラデシュのダッカ大学の日本語教育の内容と方法の改善に向けて、在日バングラデシュ人の日常生活における日本語使用実態を明らかにすることを目的とする。そして、教育現場・機関にむけて、教育内容と教育方法について具体的な改善案を提示するとともに、本研究で用いた調査研究方法を、海外に暮らすバングラデシュ人の言語使用実態や生活実態に関する情報収集に資する調査モデルとして提言することを目指す。

本研究では、具体的に次の3つの研究課題を設定した。

1. 在日バングラデシュ人は日常生活の中で直面している問題にどのように対応をしているか。【研究1】
2. 在日バングラデシュ人は豊かな生活を目指してどのように社会的関係を構築しているか。【研究2】
3. 在日バングラデシュ人は、日常生活のどのような場面で日本語使用を必要だと感じているか。【研究3】

また、上掲の3つの研究課題を考察・議論する理論的枠組みとして、本研究は言語生態学（岡崎：2009他）を採用した。本研究のデータ分析に当たっては、「孤立実体観」および「生態学的能力観」、「自己保存」、「異なりの対立」「異なりの内在的統合」「生態学的リテラシー」の概念を用い、在日バングラデシュ人が実際に周囲の人との接触場面でどのようなやり取り、あるいは、関わり合いをしているのかを考察した。

【研究1】では、在日バングラデシュ人が日常生活の中で直面した問題をどのように捉え、その解決に向けてどのような対応をしたか、さらには問題解決のプロセスの中で彼らの考え方や価値観がどのように変わっていったかを、日本語学校の学生2名に対するインタビュー調査によって探った。インタビューデー

タは、大谷（2008）のSCAT（4 ステップコーディングによる質的データ分析手法：Steps for Coding and Theorization）を用いて分析した。【研究1】では、アルバイト先での人間関係や就業時間に対する考え方についての異なりと、職場の賄い料理とムスリムの食材制限についての異なりについての語りから、当事者の価値観や考え方の保持（「自己保存」）の先鋭化が両者の「異なりの対立」に発展し、その「異なり」がどのように解決（内在化）あるいは決裂（外在化）するかを記述した。そして、問題解決の過程には、日本語能力だけではなく、当事者間の相互理解と意見調整、すなわち、自分の位置を把握し、周囲のコト、モノ、人との関わりを正確に捉える力である生態学的リテラシーが重要であることを示した。

【研究2】では、【研究1】と同様にインタビュー調査を行い、在日バングラデシュ人が豊かな生活を目指してどのように社会的関係を構築しているのか、彼らの語りを言語生態学の枠組みの中で質的に分析・考察した。日本に7～8年暮らしている社会人2人の語りから、日本での生活をよりよいものにするために、自ら周囲のコト、モノ、人にどのように働きかけ、どのように生活の場を拓いているのかを分析した。その結果、1人の社会人はさまざまなイベントやボランティア活動に参加することによって、精神的に誇りを持つことができるようになった。また、もう1人の社会人は職場で断食というイスラム教の習慣を説明し、周りの人に理解を得ることによって、自文化へのプライドを持って働けるようになった。この2人の社会人は、周りの人との協働作業を通して、自分自身の社会参加の場を拓け、社会に対する関わりを豊かにすることができており、【研究1】同様、生態学的リテラシーが重要であることが示唆された。

【研究1】および【研究2】は、それぞれ2人ずつと、限られた調査協力者のデータ分析の結果であり、これをもって在日バングラデシュ人の全体的傾向ということとはできない。そこで、【研究3】では、広く在日バングラデシュ人の日本語使用の状況を調べた。在日バングラデシュ人169人を対象に、どのような場面で日本語使用が必要だと感じているかをについて、日常生活に関する42項目の質問紙調査を実施した。その結果、「仕事」「地域コミュニティとの関わり合い」「医療サービスを受けるための行動」「居住地域における生活者としての行動」「店内の購買行動」「交通情報の確認」「メディアからの情報収集」という7つ因子が抽出された。その7つの因子に含まれる言語行動に共通する特徴を検討し、在日バングラデシュ人が日本語使用の必要を感じる場面は、大きく、①サバイバル場面、②臨機応変な問題解決場面、③外の世界への社会参加場面の3つに分けられた。そして、②の臨機応変な問題解決場面と③外の世界への社会参加場面では、【研究1】と【研究2】で指摘した生態学的リテラシーの重要性が確認された。

上掲の3つの研究の結果を踏まえ、総合考察では、バングラデシュにおける日本語教育の改善を目指して、教育現場と政府への3つの提言を行なった。1つ目は、生態学的リテラシー育成のために、3～4年生の授業にケース学習を取り入れ、教授方法を改善すること、2つ目は、【研究3】で示したサバイバル場面において求められる日本語能力をCan-doで記述することで、1～2年生の授業の学習目標とシラバス改善を図ることである。さらに、バングラデシュの外国語教育全般に通じる政策的な視点から、3つ目の提言として、海外に暮らすバングラデシュ人を対象にした外国語使用実態調査の必要性を述べ、調査モデルを提示した。

本研究の意義として以下の4点が挙げられる。1点目は、在日バングラデシュ人の日常生活における日本語使用と生活実態を調査する中で、問題解決場面や社会参加場面で生態学的リテラシーを持つことがいかに重要であることを示したこと、2点目は、これまで言語生態学の理論的枠組みを用いた研究は、主に受け入れ側からの視点で行われてきたものが多かったが、本研究は、参入側の視点から、周囲のコト、モノ、人との関わり合いのあり様を言語生態学の理論的枠組みの中で分析・考察したこと、3点目は、バングラデシュの日本語教育に、生態学的リテラシーの育成を目指したケース活動を取り入れる必要性を示したこと、そして、4点目は、バングラデシュの海外への労働力提供に関連して、海外在住バングラデシュ人の外国語使用実態と生活実態を調査・研究するモデルを提示したことである。

今後の課題としては、ケース活動の授業に用いるためのケース教材作成の作業を進めること、そして、【研究3】で明らかにしたサバイバル場面の言語行動をJFスタンダードのCan-doと照合し、具体的な学習目標と達成度が明らかにできるような環境を作ることを考える必要がある。そして、教育省、あるいは海外在住福祉就職省等にどのように調査モデルの有効性を説明できるかを考えることも今後の課題とする。

キーワード：バングラデシュにおける日本語教育、在日バングラデシュ人の日本語使用実態、言語生態学、生態学的リテラシー

Use of the Japanese Language and the Construction of the Social
Relations by Bangladeshi Residents in Japan
- Recommendations for Policy on Development of Japanese Language
Education in Bangladesh -

Alam, Mohammed Ansarul

Abstract

Since 1972 Japanese language has been taught in Bangladesh. This research focuses on Japanese language education at the University of Dhaka, which is the author's affiliated institution and is considered the leading and central academic institution in Bangladesh. The objectives of most of the learners of the Japanese language are to go to Japan for higher study, or to get employed by a Japanese company. But the objectives and the policies of Japanese language education at the University of Dhaka are not clearly stated. In addition, content and the teaching methods do not match the motivation of the learners. The consequence is a lot of students drop out in the middle of the course. To improve the situation, class content should be change in such way that matches the motivation of the learners. For that purpose, how the Bangladeshi residents in Japan preserve his/her identity, values, lifestyle etc. while they construct cooperative relations with the surrounding Japanese peoples should be investigated. At the same time we should also investigate what kind of problems they face, and what are the required abilities and skills to address those problems. Findings of such kind of investigations will be useful for the language learners.

Considering the above, the objective of this study is to find out how Bangladeshi residents in Japan use the Japanese language in their daily life, and to make necessary recommendations for the development of the Japanese language education at the University of Dhaka. Then, a concrete recommendation on the teaching content and teaching methods will be made to the educational institutions and other relevant institutions. At the same time the survey model that is used in this research will be proposed for use on Bangladeshi residents living in other countries. This study will investigate the following three research questions.

1. What are the measures that the Bangladeshi residents in Japan take when they face any problems in their daily life? [Research 1]
2. With the goal of improving their lives in Japan, what kind of measures do Bangladeshi residents in Japan take to construct social relations? [Research 2]

3. What are the areas in which Bangladeshi residents in Japan feel the necessity of using the Japanese language?

To investigate above mentioned 3 researches, the theory of Language Ecology of Okazaki (2009) is used. In the process of data analysis, the concepts of “isolated entity viewpoint” “ecological capacity viewpoint” “self preservation” “confrontation for difference” “intrinsic integration” “ecological literacy” were used. And on the basis of these concepts how the Bangladeshi residents in Japan communicate in the real situation has been discussed.

Objective of the [Research 1] is to reveal what the Bangladeshi residents in Japan consider to be the problems that they face in daily life; and what kind of measures they take to solve that problem. Moreover, in the process of settling various problems, what kind of change occurs in their thinking and values was also investigated. In this research a semi-structured interview survey was carried out on 2 students of the Japanese language school. Interview data has been analyzed using the SCAT (Steps for Coding and Theorization) method of Otani (2008). In [Research 1] among the 2 respondents, one faces problems with other staff at his part-time work place because of the differences of their way of thinking. Another respondent faces a problem while taking common food at his part-time work place, as the food includes some ingredients which he cannot eat because of religious restrictions. At the beginning both of them were strict to their “Self Preservation” which led to the “Confrontation for Difference”. How those differences were solved or why they were not solved is discussed in this research. It has become clear that to solve any problem language skill is not the only required means; rather the ability of grasping one’s self position and understanding the surrounding facts, things, and persons is important. In other words, ecological literacy is an indispensable element.

Like [Research 1], in [Research 2] an interview survey was conducted to investigate what kind of activities are done by the Bangladeshi residents in Japan to improve their living standard and expand network. Two service holders who have been living in Japan for 7-8 years were interviewed. The actions they take to expand their social circle were examined. One respondent took self initiative to be involved with society; and consequently he expanded his network and was involved with various social and volunteer activities. By participating in such activities he feels proud. Another respondent explained about “Ramadan”, a Muslim religious act, and how

important it is to Muslim people. He did it deliberately so that during Ramadan, everyone can understand his actions. And doing so, he was able to work in a relaxed mood without any stress. Both the respondents' collaborative acts have brought a better environment for them. And to achieve that, again ecological literacy was the key as in [Research 1].

In [Research 1] and [Research 2] only data from 4 respondents was analyzed, so from that result we cannot generalize about the whole situation of the use of the Japanese language by Bangladeshi residents in Japan. For that reason, to know the general trend of the language use, in [Research 3] a questionnaire survey was carried out. To reveal in which situations the Bangladeshi residents in Japan feel the necessity of using the Japanese language, a four scale survey on 42 daily life related language activities was carried out. Data from 169 respondents has been analyzed. A factor analysis was conducted and the analysis results reveal 7 factors; namely "F1: Job" "F2: Involvement with local community" "F3: Medical related acts" "F4: Conduct as dweller in residential areas" "F5: Purchasing conduct in store" "F6: Confirm the information of transport" and "F7: Getting information from media". To check the characteristics of the language activities, the sub items of these 7 factors have been reclassified. The result is 3 major categories have been revealed; namely "Survival situation" "Emergency problem solving situation" and "Social participation situation". And the results also confirmed the importance of ecological literacy; which also found in [Research 1] and [Research 2].

Considering the above mentioned 3 researches, 3 recommendations have been proposed to develop the Japanese language education in Bangladesh. They are; (1) to improve the skill of ecological literacy, introducing "Case Study" activities in the 3rd and 4th year of the Japanese language class; (2) language activities mentioned "Survival situations" in [Research 3], should be listed as "Can-do Statements" and used as tools for setting concrete learning objectives and improving the syllabus; and (3) from the policy level viewpoint for the development of all foreign language education in Bangladesh, the research emphasizes the necessity to survey Bangladeshi residents living in other countries as well; and proposes this survey model as an example.

There are 4 significant points of this research. Firstly, the importance of nurturing ecological literacy is pointed out. Secondly, so far the theory of language ecology is

used from the viewpoint of receiving side; but in this research is has been used from the viewpoint of entry side, that is Bangladeshi side. Thirdly, to nurture the ecological literacy to the Bangladeshi student, the usefulness of demonstrating via case studies has been proposed. Fourthly, carrying out a survey on language use of Bangladeshi living abroad based on this survey model has been proposed.

Regarding future research and tasks, it is necessary to prepare sufficient materials for conducting class using the case study method. And such environments should be required to list up all language items under the “Survival situations” mentioned in [Research 3] in accordance with Can-do Statements of the Japan Foundation Standards. Finally, effective ways to share the survey model of this research with the Ministry of Education, Ministry of Expatriates’ Welfare and Overseas Employment and other relevant organizations in Bangladesh should be addressed.

Keywords: Japanese language education in Bangladesh, Use of Japanese language by the Bangladeshi residents in Japan, Language ecology, Ecological literacy.

第1章 本研究の背景と問題意識

1.1 バングラデシュの日本語教育の現状

1.1.1 バングラデシュの日本語教育の歴史

バングラデシュの日本語教育は、1972年7月にダッカ大学と在バングラデシュ日本大使館の日本語講座で始められた。ダッカ大学は1921年に設立されたバングラデシュで最も歴史のある大学で、1948年度にフランス語と中国語が導入されて以来、ドイツ語、トルコ語、ロシア語、日本語、スペイン語、イタリア語、韓国語が相次いで導入された。

ダッカ大学の日本語教育は、まず、国際関係学部（Department of International Relations:以下IRと略す）の外国語履修科目（選択必修）の一つとして始められた。その後、1974年に現代言語研究所（Institute of Modern Languages:以下IMLと略す）が設立され、国際関係学部の外国語を履修する学生と社会人を対象にした日本語教育が始められた¹。さらに、2002年には日本研究センター（Japan Study Center:以下JSCと略す）で日本語教育が始められた。現在、ダッカ大学では、上掲の3つの機関で日本語教育が行われている。

1990年代に入ると、ダッカ大学以外の高等教育機関でも日本語教育が始められた。1996年にラジシャヒ大学、1997年にジャハンギールノゴル大学、2002年にはクルナ大学で日本語コースが開始された。2009年にダッカ市内の私立大学であるスタンフォード大学で、さらに2011年にはバングラデシュ第2の都市チッタゴンの国立チッタゴン工科大学にも日本語コースが開設された。近年日本語のコースが開始されたこれらの大学のコースはいずれも単位を取得できない選択科目で、到達目標は日本語初級前半レベルである。

バングラデシュに日本語教育が導入された当初から民間の日本語学校も重要な役割を果たしている。上掲した在バングラデシュ日本大使館内の日本語講座は、1995年に「ダッカ日本語教室」として独立し、バングラデシュでの民間の日本語学校の先駆けとなった（2010年に閉鎖）。2004年には、バングラデシュ日本留学同窓生協会（Japanese Universities Alumni Association in Bangladesh:以下JUAABと略す）が日本語学校を設立し、2009年度に日本政府から「草の根文化無償資金協力」を得て教室や教材などの整備を行っている。さらにJUAABは、国際交流基金の各種日本語助成プログラムによる支援でバングラデシュ国内の日本語教育関連行事の主催・実施機関として主体的な役割を果たしている。

初中等教育段階の日本語教育は、公的機関ではほとんど行われていない（国際交流基金調査2012年）。NGOとロータリークラブのサポートにより2機関で導入されているが、これらはいずれも私立の機関であり、主に校長や経営者の興

¹ IRの外国語コースは1974～2007年、IMLに合併され、独自のコースは開講していなかった。しかし、2008年ダッカ大学全体の専攻科目の制度改革により、6か月単位で成績を出すことが求められるようになったため、IRは独自のコースを再開させた。IMLの日本語コースは非専攻科目で1年履修する単位制となっている。

味関心により日本語教育が行われている。

1.1.2 バングラデシュの日本語教育の概況：機関数、教師数、学習者数の推移

国際交流基金の海外日本語教育機関調査の結果によれば、1998～2012 年のバングラデシュの日本語教育機関数、教師数、学習者数の推移は、教育段階別に以下の表 1-1 のようになっている。

表 1-1 バングラデシュの日本語教育：教育段階別機関数・教師数・学習者数
(単位：人)

	年度	初・中等	高等	学校以外	複数段階*	合計
機関数	1998	0	1	9	—	10
	2003	0	1	7	—	8
	2006	1	1	6	—	8
	2009	1	6	15	1	23
	2012	4	12	6	2	24
教師数	1998	0	1	25	—	26
	2003	0	7	17	—	24
	2006	3	5	19	—	27
	2009	5	12	35	10	62
	2012	4	30	30	15	79
学習者数	1998	0	30	487	—	517
	2003	0	300	233	—	533
	2006	60	300	1809	—	2169
	2009	60	414	233	70	777
	2012	94	1356	484	382	2316

*「複数段階」は社内講座などを示し、2009 年度以降の調査で加えられている
(国際交流基金 1998～2012 年度海外日本語教育機関調査の結果を基に筆者作成)

上掲の機関数、教師数、学習者数の推移を見ると、いずれも 1998 年以降、徐々に増えてきていることがわかる。最新の 2012 年の統計（表 1-1 網掛け部分）を見ると、機関数では全体の 50%、教師数では全体の約 38%、学習者数では全体の約 58.5%を高等教育機関が占めており、バングラデシュでは、現在、高等教育機関を中心に日本語教育が展開されているということが出来る。学校教育以外の機関、特に民間の日本語学校が全体に占める割合も大きい。民間の日本語学校の場合、日本の塾のような形態で教育が行われているケースが多く、開講するにあたって特段の公的な手続きがなされておらず、実質、どのような教育が行われているのか、確認することは難しい。また、個人経営的な学校が多いため、教育の継続性に問題がある。これに対して、高等教育機関（特にダッカ大学やジャハーンギールノゴル大学のような国立大学）の日本語教育は、安定したコースが開講されており、学習者数に多少の変動はあるものの、教育の継続性は確保されている。

以上、歴史的な観点と統計的な観点からみて、バングラデシュの日本語教育は、高等教育機関を中心に展開されてきているということが出来る。次章では、バングラデシュの高等教育機関、とりわけ日本語教育を牽引してきたダッカ大学の日本語教育に焦点を当て、その問題点を考えていく。

1.2. ダッカ大学の日本語教育

1.2.1 ダッカ大学の日本語教育機関の概況

「はじめに」で述べたように、ダッカ大学では現代言語研究所（IML）、国際関係学部（IR）、日本研究センター（JSC）の3機関で日本語教育が行われている。本章では、3機関の日本語教育の特徴と問題点を整理し、本研究の背景と問題意識を、①ダッカ大学の日本語教育の目標と方針、②ダッカ大学の日本語授業と学習者の日本語学習動機という二つの観点から述べる。

まず、3機関の日本語教育の概要（学習者数、学習者の特徴、学習時間、取得できるもの、最終到達レベル）を以下の表1-2に示す。

表1-2 ダッカ大学の3機関の日本語教育の概況

機関・コース		学習者数 (2014年度)	学習者の 特徴	学習時間	取得できるもの	最終到達 レベル
現代 言語 研究所 (IML)	レギュラー コース	1年生167人 2年生5人 3年生3人 4年生0人	ダッカ大学の学 部学生と社会 人	総計 480 時間 (120 時間×4 年)	ディプロマ	日本語能力試験 N3
	夜間 コース	3か月/6か月 各コース60人	日本留学が決 まっている人	3か月 60時間 6か月 150時間	修了証明書	日本語能力試験 N5
国際関係学部 (IR)		48人	国際関係学部の2年生	120時間 (1年コース)	選択外国語の単位	日本語能力試験 N5
日本研究センター (JSC)		1年生、2年生 各50人	修士課程の学生	240時間 (6か月×4学期)	必修外国語の単位	日本語能力試験 N5

(筆者が現地で各機関で調査した結果をまとめたもの)

表1-2に見られるように、3機関とも学習時間は決して多くない。基本的には1年間に120時間で、週に2～3回、各2時間の授業が行われている。学習者の特徴は、それぞれの機関によって異なっているが、学習修了時の最終到達レベルはいずれの機関も高いとは言えない。IMLのレギュラー・コースのみ、4年コース修了時にディプロマ (Higher Diploma in Japanese) を取得することができる。このディプロマは、バングラデシュ人が日本の日本語学校に留学を希望する場合、在バングラデシュ日本大使館でビザ申請する際に、日本語能力証明書として認められている。他に在バングラデシュの日系企業に就職する際に、本ディプロマが求められることもある。IRとJSCについては、それぞれのコースの選択外国語の一つとしての日本語の単位が取得できる。学習者数を見ると、IMLが最も多いが、2年生、3年生、4年生と学年が進むにつれて、学習者数が激減していることがわかる。表2-1は、2014年度の学習者数を示しているが、他の年度についても同様の傾向が確認され、学習者の日本語学習継続率は非常に低いといえる²。なお、継続率の低さについては1.3.2で述べる。

次に3機関の日本語教育の目標や方針について説明する。各機関には、それぞれの日本語教育目標や教育方針、さらにはシラバスやカリキュラムを明確に

² IMLの日本語学習者数の1年目と4年目では、2010年が158人→3人、2011年が153人→4人、2012年が93人→3人、2013年が110人→0人と大幅に減少している。

示した文書はなく、それらに基づいて記述することができない。そこで筆者は、2014 年 3 月、各機関のディレクターや学科長にそれぞれの機関の日本語教育や方針をインタビューした。以下に、その語りを示し、各機関が現時点でどのような教育目標を掲げ、どのような教育方針で日本語教育を行っているのかを、IML、IR、JSC の順にまとめる。

1.2.1.1 現代言語研究所（IML）

まず、IML の外国語教育の目標として、ダッカ大学の法令（Statute）には、①アラビア語、ベンガル語、英語、フランス語、日本語など様々な外国語教育を行うこと、②学習者がディプロマや学位を取得するのに必要な教育、研修、指導を行うこと、③言語学者や外交官などに役立つ教育を提供すること、これら 3 点が挙げられている。以上の記述からは、日本語教育に具体的にどのような教育目標が設定されているのかを把握することはできないものの、少なくとも日本語がアラビア語やベンガル語、英語、フランス語と同等の位置づけで捉えられていることは確認できる。

また、2014 年 3 月に現地調査で IML の所長にベンガル語でインタビューしたところ、IML 全体の外国語教育の目標や方針について次のように語っていた。（訳責：筆者）

元々の目的は国民に色々な外国語を学ぶ機会を与えることでした。近年、ドイツ留学希望者が増えています。ドイツ留学のビザも簡単に取れています。そして、この 10～15 年で中国語学習者も何倍も増えてきました。その理由は中国とのビジネスが増えたからです。中国はグローバル時代に向け、外国人の出入国も簡単になってきました。バングラデシュ人も留学やビジネスで行く場合もビザの問題はありません。最近では、中国の博士課程にも留学しています。

外国語学習目的全般について質問したところ、次のように述べていた。

インタビューの最初にも言ったように、私たち（IML）の目的はいい人材を育成することです。彼ら（学習者）は留学、就職、外交などで目的の国へ行っています。どの目的で行っても、言語能力は必要です。言語能力が不十分だと、海外で仕事も見つけれられない、見つけれられてもうまくできません。そのとき、色々な問題に直面します。だから、言語能力はとても重要です。観光で行っても、言語能力が足りないと、楽しむことができません。

IML の所長の語りから、IML では、学科に関わらず、学生は学習目的として目標言語が話されている国に行くことが重要だと考えられており、それを実現するために、IML 全体の教育方針として、海外での生活、研究、労働に役に立つ言語能力の育成を重要視していることが確認される。

1.2.1.2 国際関係学部（IR）

次に IR について見てみることにする。IR は外交関係や国際政治などを教育・

研究している機関で、設立当初から外国語の知識は不可欠なものと位置づけており、外国語教育を積極的に取り入れている。日本語教育は、前述のとおり 1972 年に導入されているが、その教育目標や教育方針は明らかにされていない。IR では、外国語履修科目として日本語が教えられており、国際関係学部の 2 年生は、1 年間（120 時間）履修している。IR の学部長にインタビューで確認したところ、個人的な見解として、日本語教育の目標や方針について次のように述べていた。

冷戦が終わってから、世界政治は多極化しています。現在は経済力が問われています。日本は経済大国として知られています。日本の技術や経済に興味を持ち、日本留学を目指している学習者も少なくないです。私の同僚の中でも日本の大学で博士号を取得してきた人がいます。そして、東アジア事情と日本事情という科目もあり、IR の学習者なら誰でも第 1 次と 2 次世界大戦について勉強するので、そのときも日本の歴史に触れています。

上掲の引用から、IR の学部長が、IR には日本の技術や経済に興味を持ち、日本留学を目指している学生がいること、学科長自身の同僚にも日本で博士号を取得した人がいること、IR では日本の事情や歴史に触れることは重要であること、以上の 3 点を強調していることがわかる。学科長の語りからは、日本語教育が具体的に何を目指しているのか、明確な言葉では示されていないが、日本留学や日本社会や歴史との触れ合いを求める考えが IR の日本語教育に繋がっているのではないかと考えられる。

1.2.1.3 日本研究センター（JSC）

では、JSC はどうであろうか。JSC は、日本の政治、経済、文化や社会についての理解を深めるために 1994 年にダッカ大学内に設立された。日本語教育は、2002 年に 6 ヶ月のディプロマ・コース（post graduate diploma course）の外国語科目の一つとして提供され、その後、2006 年に修士課程が設立された。現在、日本語は修士課程の必修科目として教えられている。修士課程の目的として、日本について理解を深めた研究者を育成することや、日本に留学にする学習者の日本語能力を向上させることである。JSC の修士課程は 2 年制のコース（6 ヶ月×4 学期）で、各学期に日本語の科目が設置されている。日本語教育の目標や方針について、JSC のセンター長は次のように述べていた。

JSC のコースは基本的に英語で行われています。でも、多くの学習者は日本留学を目指しています。彼らが実際に日本へ行けるようになったとき、日常生活に問題がないように、日本語も教えています。日本語学習者は大使館の様々なイベントに参加しています。短期ツアーで日本に行っている学習者も多いです。

センター長の語りから、JSC では学生たちの将来の日本留学を視野に入れ、

日本での研究活動と日常生活に役立つような日本語教育を教育の目標としていることがわかる。

以上、IML、IR、JSC の各長へのインタビューを踏まえ、それぞれの教育目標と教育方針を整理した。3 機関に共通して言えることは、①学生たちが日本留学を希望していること、②日本の経済や社会、歴史などを知ることが重要視していることの 2 点であった。

では、実際の授業内容は、これらの教育目標に合致しているのだろうか。次節では、3 機関の授業内容と授業方法、使用教材などについて、特に IML を具体例として現状を整理する。

1.3 ダッカ大学の日本語教育内容と問題点：IML の場合

1.3.1 IML の授業内容と授業方法

本項では、IML が実際にどのような授業を行っているのかを整理する。IML には、具体的なシラバスやカリキュラム、授業内容を整理した文書や資料が全く残されていないため、実際にどのような授業が行われているのかを詳述することはできない。ここでは、筆者のこれまでの教授経験や担当教員に確認できた範囲で IML のレギュラー・コースの授業内容を以下の表 1-3 に整理する。なお、IR、JSC の授業内容と授業方法については、筆者が担当講師に確認したところ、使用教材には若干の相違があるものの、授業方法については IML と同様であるとの報告を受けた。従って、以下の表 1-3 では IML の授業内容と授業方法をダッカ大学の日本語教育の内容として報告する。

表 1-3 IML の日本語授業の概要

学年	科目名	授業内容	使用教材
1 年生	日本語 (総合)	週 3 回。日本語の文法を教師が講義形式で説明する。口頭練習および学習者間の対話練習はあまり行われていない。	『みんなの日本語 1』(会話部分と語彙の CD/ビデオを含む) ひらがな・カタカナ表
2 年生	漢字	週 1 回。漢字の読み、意味、書き方を教師が板書し説明。学習者は教授された漢字を 10-20 回、ノートにくり返し書く練習。通常、1 回の授業で 10 ぐらいの新しい漢字を教える。教科書にある練習問題は宿題。	『基本漢字 1』
	文法	週 2 回。授業の進め方は 1 年生の「総合日本語」と同じ。	『みんなの日本語 2』(会話部分と語彙の CD/ビデオを含む)
3 年生	文法	週 1 回。授業の進め方は 1 年生、2 年生と同じ。学習した文型を使った短文作りを加える。	『新日本語の中級』
	読解	週 1 回。教科書にしたがって、読解教材を音読し、教師が新しい語彙や文法の説明をし、一文一文にベンガル語に翻訳する。最後に教科書の内容確認の問題に答える。	『日本語中級読解入門』
	漢字・作文	漢字の授業の進め方は 2 年生と同じ。作文は、トピックを与えて宿題として書かせ、提出されたものを教師が誤用を訂正して返却。	『基本漢字 2』

4 年生	文法	週 1 回。授業の進め方は 3 年生と同じ。	『文化中級日本語 1』
	読解	週 1 回。授業の進め方は 3 年生と同じ。	『日本を知る—その暮らし 365 日』
	漢字・作文	週 1 回。授業の進め方は 3 年生と同じ。	『にほんご作文の方法』

表 1-3 で示したように、1 年生は「日本語（総合）」という文法を中心に扱う授業（各 2 時間×3 回＝計 6 時間）、2 年生は漢字（2 時間）と文法の授業（2 時間×2 回＝4 時間）、3 年生と 4 年生は、文法、読解と漢字・作文の授業がそれぞれ 2 時間ずつ行われている。それぞれの授業の教え方を見ると、文法の授業は、教師が講義形式でベンガル語を用い文法を説明することが中心に行われ、実際に学んだ文法を使った運用練習はほとんど行われていない。読解の授業は、いわゆる文法訳読法に基づいた授業で、一文一文、教師が新しい単語や文法を説明しながらベンガル語に翻訳することが中心で、最後に教科書に挙げられた内容理解確認の問題に答えるという流れで行われている。漢字の授業は、教師が説明した漢字をノートにくり返し書くという作業を中心に行われている。アラム（2005）は、IML の日本語教育は、言語知識教授が中心で学習者の日本語運用練習がほとんど行われていないという問題点を指摘しているが、その問題点が今も改善されていないことが確認された。

1.3.2 日本語学習継続率の低さ

表 1-3 にまとめられたこのような教育内容と方法に関する問題点は、学生の日本語学習継続率の低さと大きな関係があると考えられる。表 1-2 に示したように、2014 年度の IML の学習者は、1 年生の段階で 167 人だったのが、2 年生で 5 人、3 年生で 3 人、4 年生に至っては 0 人と著しく減少している。この IML の学生の日本語学習継続の難しさについて、筆者はダッカで調査を行い、アラム（2011）では、その原因を学習動機の観点から分析している。IML の学生 18 人にインタビュー調査を行い、彼らの日本語学習動機が（1）日本留学、（2）「日本、あるいはバングラデシュ国内の日系企業への就職、（3）「日本文化、日本社会、日本人の生活習慣などに対する興味関心」の 3 点を中心であることを指摘した。アラム（2013）は、IML の学生 69 人に対して日本語学習動機に関するアンケート調査を行い、この 3 点が IML の学生の日本語学習動機として強いことを確認している。そして、IML の授業内容について、学習者が自分たちの学習目的や興味関心から遠く離れたものであることが、学習継続を難しくしていることを指摘している。

1.3.3 IML の日本語教育の問題点

以上のように、IML の授業内容および方法に、日本語の運用能力育成が視野に入っておらず、あくまで日本語の文法や語彙の知識の蓄積を目指すものであることを指摘した。1.3.1 で述べたようにダッカ大学の他の 2 機関の授業内容も IML とほぼ同様である。このことから、IML、IR、JSC の 3 機関の授業内容は学習者の目標に合致したものとは言い難いと思われる。3 機関の各長は、日本留学

や日本の経済・社会・歴史に関する知識などを意識した日本語教育への期待を述べていた。しかし、表 1-3 に示された授業内容では、そのような目標を達成するための日本語教育を行うことはできない。また、学習者の動機と教育内容とのずれが、学習継続を困難にしている点も指摘した通りである。

これらの点から考えると、IML の日本語授業の内容は、上述した 3 機関の教育目標に合致してないだけでなく、その食い違いが IML の学生の日本語学習動機を減退させ、ひいては学習継続率の悪化の重大な原因となっているといえよう。

以上、バングラデシュの日本語教育の現状を IML の授業内容と授業方法を中心に整理してきた。その作業を通して、バングラデシュの日本語教育の問題点が明らかになった。

まず、第一の問題は、ダッカ大学の日本語教育の教育目標や教育方針が明確化されていないことが挙げられる。各機関のディレクターや学科長の個人的な見解をインタビューの語りとして紹介したが、いずれも 3 機関の日本語教育の目標として明示されているものではなく、各機関の日本語教育関係者（特に教師や学生）は、目標や方針を全く知らされていない。加えて、いずれの機関も日本語教育の具体的なシラバスやカリキュラムが決まっていないことも大きな問題である。現状では、教える教科書が決まっていて、その内容を時間数で割り、担当教師が与えられた時間内に教えている。それぞれの授業で具体的にどのような学習目標を設定しているのか、その学習目標がどれくらい達成できたのか、それらを確認・チェックする時間・方法などはまったく考えられていない。3 機関の長はいずれも日本留学を目指している学習者に適切な日本語教育を与えることが重要な目標だと述べているが、果たして現在行われているコースで、その目標はどれくらい達成できているのか、まったく検証されていない。

第二の問題は、授業内容と授業方法が機関の学習目標とも学習者の日本語学習動機とも合致していないことである。言語知識を教えることが授業の中心になっており、日本語を運用するという点は十分に考えられてない。バングラデシュは学歴社会であり、教師は修了証とディプロマを取得させるために、試験対策のための授業を行う場合が多く、授業では言語知識を教えることが多くなってしまう傾向が強い。しかし、そのような内容や方法では、日本留学や日本での就職、日本文化や日本社会に対する興味関心を深めたいという学習者の日本語学習動機に合致した授業を行うことはできない。アラム（2011）が述べているように、授業内容や教え方などに対する不満が日本語学習の継続を難しくしている原因になっているとも考えられる。

上掲のような問題を解決するためには、ダッカ大学の日本語授業の内容と方法を機関の教育目標と学習者の日本語学習動機に適ったものに改善していくことが必要である。では、その改善のためには、どのような作業が必要であろうか。まず、授業内容を機関の教育目標や学習者の学習目的・動機に合うものに変える必要がある。そのためには、日本留学や日本での就職、日本社会に暮らすバングラデシュ人の生活やそこで接する日本人との関係、社会参加の様子、日本人の考え方や生活習慣、日本文化などについての情報と知識を収集し、それらを教授内容の中に適宜、反映させていく作業が必要になる。例えば、ダッ

カ大学の日本語教育シラバスの改訂である。そのためには、在日バングラデシュ人が日本での日常生活の中でどのような場面でどのように日本語を使って社会生活を行っているのか、そして日常生活を送る中でどのような問題に直面し、どの問題にどのように対処しているのか、周囲の日本人や日本社会とどのような関係を築き、協働作業を進めているのか、そして自分自身の生活をより良いものにするために周囲の環境に対してどのような働きかけをしているのかなどを、可能なかぎり具体的に明らかにする必要がある。それらの情報を、日本での留学や就職を目指してバングラデシュで日本語学習に真摯に取り組んでいる学習者に提供し、日本で生活するために必要な能力や技能を学習者とともに学び合っていくことができれば、バングラデシュの日本語教育の改善に確かな一歩を示すことができるのではないかと考える。本研究は、そのような観点からバングラデシュの日本語教育の改善に向けての方向性と具体的な提言を述べることを目的とする。

1.4 バングラデシュの外国語教育政策の課題

前節では、バングラデシュの日本語教育の中心機関であるダッカ大学における日本語教育の課題を述べた。同様の課題は、ダッカ大学以外の外国語教育の現場でも、他の高等教育機関でも見られる。このように見てくると、バングラデシュでは、高等教育段階の外国語教育全般において、外国語教育の目標や方針は明確に示されておらず、また、教育内容や教育方法を学習者の動機や学習目的に合わせようという試みはなされていない。2011年に教育省から出された『2010 年国家教育政策』にも、外国語教育の目標や方針は明記されていない。つまり、バングラデシュは現段階では、国として明確な外国語教育政策を打ち出していないということになる。

バングラデシュは出稼ぎ大国だと言われている。多くのバングラデシュ人が海外に暮らし、勉強、研究、仕事に従事している。バングラデシュ政府は、2001年に『海外在住福祉就職省 (Ministry of Expatriates' Welfare and Overseas Employment)』を設立し、海外に出る人々を対象に様々な研修を実施している。また、上掲の『2010 年国家教育政策』では、海外に暮らしているバングラデシュ人の言語生活や社会生活に関する調査の重要性を謳っている³。Erling et al. (2015)は、中東アジアを中心に海外に出稼ぎに出ているバングラデシュ人、27名を対象に、①海外で働くとき、コミュニケーション上、どのような言語が必要か、②収入と英語能力とどのような関係があるかについて聞き取り調査をしている。その結果として、今、住んでいる国の言語を理解し運用することと、異なる文化や生活習慣にうまく適応することが海外でより良い生活をするためには不可欠であると述べている。しかし、Erling et al. (2015)は、中東アジアに住むバングラデシュ人を中心に調査を行っており、宗教的にはバングラデシ

³ A survey will be conducted about the needs of the countries that import manpower from Bangladesh. Course materials in vocational and technical education will be included accordingly. Provision will be there to train the students to have some primary skills of the languages of those countries. [National Education Policy 2010, p26]

ユと同じ環境を共有する地域での調査であるが、日本に暮らすバングラデシュ人の場合、宗教的にも生活習慣的にもかなり異なっている環境での生活であり、ただ単に異文化に適応できればいいと言えるだろうか。前節に述べた日本語使用実態調査は、このようなバングラデシュの外国語教育政策に対する貢献にも繋がると考えられる。

1.5 本研究の構成

本研究の構成は、以下の図 1-1 の通りである。まず、第 1 章では、バングラデシュ日本語教育の概況を述べ、特にダッカ大学の日本語教育の現状と問題点について詳述した。ダッカ大学では、①大学の日本語教育の教育方針や教育目的が明らかにされていないこと、②授業内容と授業方法が学生の学習目的と合致していないことが重大な問題となっていることを確認した。このような状況を改善する方策として、本研究は在日バングラデシュ人の日本での生活、日本語使用、日本人および日本社会との関係構築についての情報を収集し、その知見を活かし日本語授業の内容やカリキュラム、教授法などを改善していく必要性を強調した。

第 2 章では、日本に暮らす外国人の日本語使用実態調査と生活実態調査に関する先行研究を概観する。在日バングラデシュ人および在日外国人がどのような場面で日本語をどのくらい使用しているかを整理する。そして、職場や地域コミュニティなどでどのような抵抗を感じたり、問題に直面したりしているかをまとめ、このような問題に対してどのような提言がされているかを整理する。そして、在日外国人の日本語使用実態や生活実態に関する残された課題を基に研究の方向性を提示する。本章の最後に、上掲のバングラデシュの日本語教育現状、在日外国人の日本語使用と生活実態に関する先行研究を踏まえて、本研究の目的と具体的な研究課題を示す。(1) 在日バングラデシュ人が日常生活で直面する問題への対応、(2) 生活の場を広げるための社会的関係の構築、(3) 在日バングラデシュの日本語使用実態、という 3 つの研究について記述する。

第 3 章では、本研究の理論的枠組みとする言語生態学の理論について述べる。言語生態学の理論で本研究のデータ分析に重要であると思われる「孤立実体観」および「生態学的能力観」、「自己保存」、「異なりの内在的統合」「生態学的リテラシー」の概念を説明する。今まで日本語教育のどのような分野で言語生態学の理論が採用されているかを概観し、在日バングラデシュ人が実際に周囲の人と場面でどのようなやり取り、あるいは、関わり合いをしているのかを分析・考察するために、上掲の概念を広い範囲で扱う必要を示す。また、参入側としての在日バングラデシュ人が日常生活や職場で周囲の人とどのような関わりも持っていて、その関係性が彼らの生活の良さにどうつながっているかを言語生態学の観点から検討する。

第 4 章（【研究 1】）では、「在日バングラデシュ人が日常生活で直面する問題への対応」について記述する。在日バングラデシュ人で、日常生活でさまざまな問題に直面している日本語学校の学生のデータを分析・考察し、具体的にどのような問題に直面し、どう対応しているかを明らかにする。また、日本滞在

でさまざまな経験をする過程で当事者の考え方や価値観などがどう変わるかを考察する。

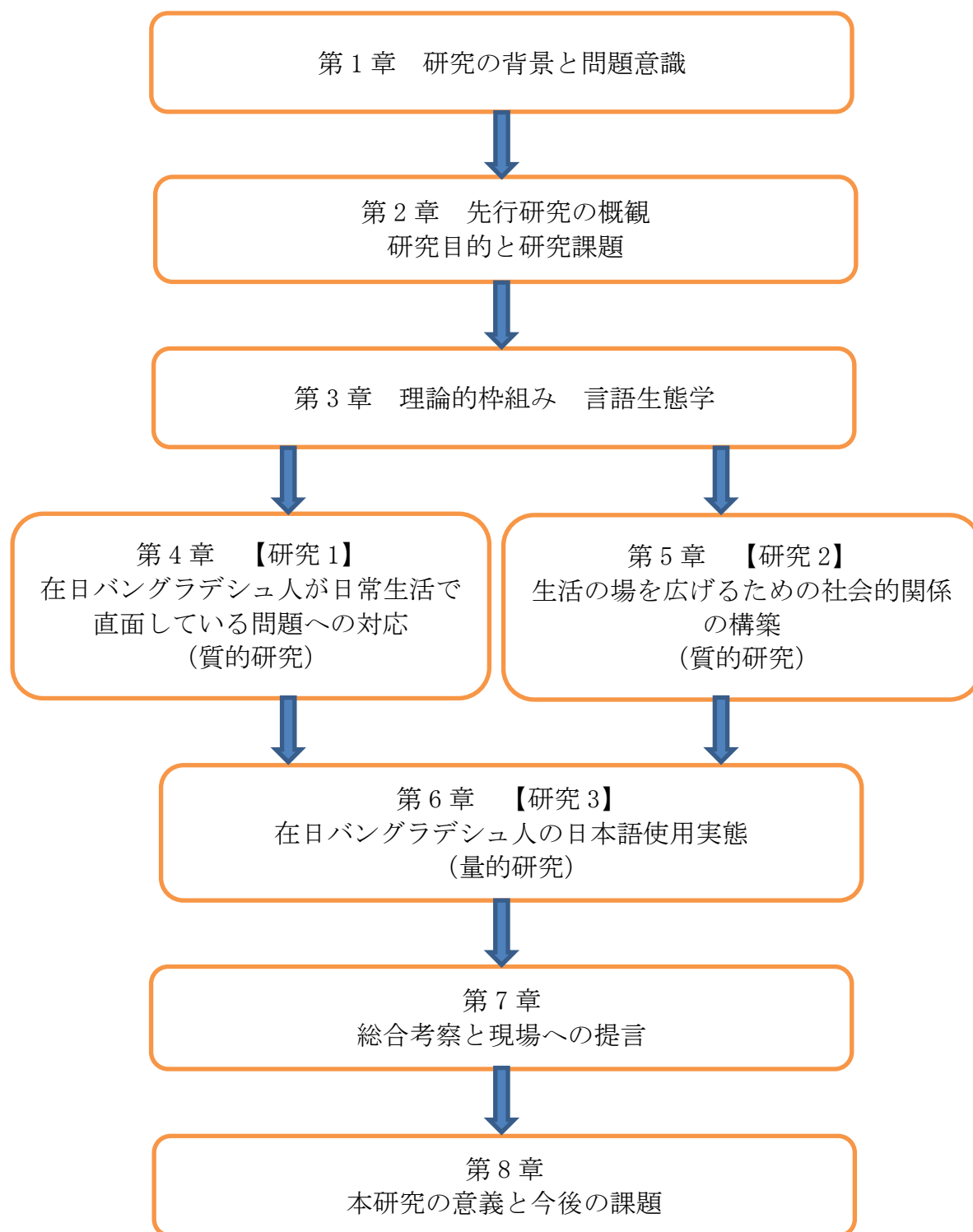


図 1-1 本研究の構成

第5章（【研究2】）では、「生活の場を広げるための社会的関係の構築」について記述する。在日バングラデシュ人が日常生活で問題の場面に直面することだけではなく、日本での生活の場を広げるために、周囲の人や地域コミュニティとの関わり合うこと、すなわち社会参加が自然である。本章では、在日バングラデシュ人がどのように社会参加をしているか、それによって彼らの生活がどう変わっているかをインタビュー調査で明らかにする。

第6章（【研究3】）では、「在日バングラデシュの日本語使用実態」について記述する。【研究1】および【研究2】で明らかにする在日バングラデシュ人が日常生活で直面する問題への対応と生活の場を広げるための社会参加の過程は、限られた対象者の経験談を分析した結果である。これらの結果をバングラデシュの日本語教育の改善に活かすためには、より多くの在日バングラデシュ人の日本語使用や生活実態について明らかにする必要がある。そこで、アンケート調査を行い、インタビュー調査で得られた知見が確認できるかどうかを量的に検証する。

第7章では、上掲の3つの研究で得られた知見を踏まえ、現場への提言をする。その際、ダッカ大学（特にIML）に対しては、日本語授業の内容や教授法の改善を提言としてまとめ、バングラデシュ政府に対しては、海外に暮らすバングラデシュ人を対象にした言語使用および生活実態調査の調査モデルを、提言としてまとめる。また、本章で、研究全体を通して総合考察をする。

最後の第8章では、本研究の意義と今後の課題を述べる。

以上、本研究の各章の内容を示した。研究全体の構成については、次頁の図1-1に示す。

次章では、そのような在日バングラデシュ人の日常生活での日本語使用実態と日本社会参加の様相について、これまでの先行研究でどのようなことが明らかにされているのか、日本語使用実態と社会関係構築という2つの観点から、参考研究のレビューを行う。

第2章 先行研究

本章では、在日バングラデシュ人および在日外国人の日本での日本語使用実態を探り、彼らが日常生活の中でどのような問題に直面しているか、その問題にどのように対処しているかに関する先行研究を概観する。また、在日外国人の日本語使用を知るためには、彼らが日常生活の中で問題解決以外の目的で周りの日本人コミュニティとどのような関わりを持っているのかを知ることも重要になると考えられる。そこで、本章では、在日外国人の日本社会との関わりや社会参加の有様に関する先行研究も併せて概観する。

2.1 在日外国人の日本語使用実態に関する先行研究の概観

これまで在日外国人の日本語使用実態に関する先行研究は数多く行われてきた。本節では、在日外国人が日常生活のどのような場面で日本語を多く使用しているか、日本語使用場面に焦点を当てた大規模な質問紙調査について、先行研究を概観する。

名古屋大学留学センター（2008）は、豊田市在住外国人の「日本語使用状況」「日本語能力」「日本語学習に対するニーズ」「学習環境」について、質問紙調査と聞き取り調査を行った。質問紙調査協力者は地域コミュニティ関係者と企業関係者の日本人 87 人と外国人 247 人、計 334 人である。そして、聞き取り調査の対象者は受け入れ側の人 20 人と外国人 38 人、公的機関 24 である。質問紙調査は具体的な言語行動（Can-do-statements）を記述し、そのようなやり取りを日本語でした経験があるかを尋ねた。その結果、「車内アナウンスを聞いて目的地で降りる」「駅で表示を見て、目的地までの切符を自動販売機で買う」「スーパーで店員に買いたいものの売り場を尋ねる」のような日常的な場面で日本語を使用する機会が多いことがわかった。また、子供を持っている協力者は学校や保育園との連絡、給食の献立などを見る機会が多いことも確認された。その一方で、地域コミュニティとのコミュニケーションの機会が非常に少ないことが確認された。さらに、日常生活でのゴミ処理の問題や工場での機械操作に関する問題などを解決するために日本語能力の向上が不可欠であることがわかった。これらの結果を踏まえ、名古屋大学留学センター（2008）は、乗り物関係や買い物場面などの日常生活で必要最低限の日本語習得のための支援システムを提案している。そして、共通の能力評価基準として、未学習段階（0 段）から熟達段階（6 段）という 7 段階の「とよた日本語能力レベル」を設定している（名古屋大学留学センター 2008：3）。そして、外国人が日本語や日本の習慣を学ぶと同時に、受入れ側の日本人も外国人に対してわかりやすい話し方を考え、表現や外国の習慣を学ぶ機会として「地域に密着し交流の要素を兼ね備えた日本語教室」を提案している。この調査では、外国人の日本語学習と同時に地域の人々との相互理解を進めるための交流会などの機会を設ける必要性を強調している。

国立国語研究所（2010）は、中国、ブラジルなどの 1,662 人の在日外国人を対象に、14 場面の 105 項目の言語行動について「接触頻度（言語を問わない）」「日本語による行動の可否」「学習ニーズの有無」を調べている。その結果、「家

族や友達との会話」「テレビやラジオでニュースを見聞きする」「自宅にかかってきた電話に対応する」などの自宅場面で接触する頻度が最も高く、次に、買い物、交通手段、飲食店などの日常生活の身近な場面での接触頻度が高いことがわかった。そして、日本語を使用する上で困難を感じる場面としては、「介護認定の申請をし、必要な手続きをとる」「役所の福祉課にデイサービスなど、介護に関することを相談する」などの医療・福祉場面が上位に挙げられている。職場や緊急事態などの場面に関する困難度も高い。また、日本語でできるようになりたい項目として「火災・救急（119）や警察（110）に電話する」「災害・事故時に他の人に助けを求める」などの緊急事態とともに、医療・福祉場面の項目が上位に挙げられている。今までの日本在住外国人を対象に行なった調査で特定の地域に住む人に焦点を当てたものが多いが、本調査は、全国の外国人を対象にした大規模な日本語使用実態調査で、全体的な傾向を把握した点に意義がある。

宇佐美（2010）は、国立国語研究所（2010）の「接触頻度」のデータの一部（908 人分）を因子分析し、日本に住む外国人が日常生活の中で日本語を使ってどのような行動をしているのかを分析・報告している。そして、「①生活（サバイバル型）」「②生活（密接交流型）」「③業務」「④子どもの教育」「⑤就職」「⑥医療」の 6 因子を抽出し、各因子に結びつく行動を「特定の状況・場所でのみ行われる行動」（第 3～第 6 因子）、「個人的状況を問わず必要となる可能性のある行動」（第 1、第 2 因子）に分類している。そして、後者の因子得点と調査協力者の日本語能力、滞日歴、職業との関係を分析し、第 2 因子について職業・身分と日本語能力の間に相関関係が見られたと報告している。しかし、宇佐美（2010）では、「職業・身分」や在留形態の違い（例えば、日本語学校の学生、大学・大学院の学生、社会人などの違い）によって、日本語使用実態にどのような違いがあるのかについては、明らかにされていない。また、宇佐美（2010）では、在日外国人のより質の高い生活のためには、日本語能力の向上だけではなく、社会参加も重要であると述べているが、そのためにどのような能力が必要か、その能力を伸ばすためにどのような方法が必要になるのかは、課題として残されている。

文化庁（2010）は、在日外国人が生活者として日本語でできるようになると期待される「生活上の行為」について検討し、代表的な事例を抽出するために質問紙調査を行った。「診察を受ける」「物品購入・サービス利用をする」「電車、バス、飛行機、船などを利用する」「就職活動をする」など、日常生活で関わりのあるさまざまな場面を取り上げ、4 段階評価で必要性について探索的に尋ねた。調査協力者は 53 人で、社会人が中心であり、「教育・学習支援」に携わる関係者が 4 割以上含まれている。本調査の結果を踏まえて、外国人が日本語で意思疎通を図り生活できることを目指して標準的なカリキュラム案を開発している。その過程において、生活上に必要と考えられる行為を整理し、これらの行為の事例に対応する学習項目および関連のある社会・文化的情報について記述している。最後に、学習時間と学習順序を検討し、標準的なカリキュラム案を開発している。具体的な学習項目は「能力記述」「場面」「やり取りの例」「機能」「文法」「語彙」「4 技能」である。標準的なカリキュラム案で「健康・安全に暮らす」

「消費活動を行う」「社会の一員となる」などの生活上の行為を取り入れた。来日して間もない外国人が日常生活で使用する可能性が高い行為を抽出し、具体的な学習内容まで提案した点に意義がある。

中東（2014）は、岡山県総社市在住ブラジル人 66 人を対象に、質問紙調査を行い、職場、家族、友達、地域社会などでの日本語使用実態を調べた。その結果、日常生活ではポルトガル語が中心に使用され、職場では日本語とポルトガル語が同等程度に使用されていることがわかった。また、現状としては、地域社会における日本人住民との関係は希薄であるが、日本人との交流を望む声が高くなっていることと、日本人コミュニティとよく接触しているブラジル人の日本人に対するイメージが比較的の良いことも報告されている。また、日常生活を円滑におくるためには、日本語習得だけではなく、地域社会にともに暮らす日本人と外国人の積極的な交流が必要であると報告されている。そして、参入側の外国人の背景を考慮した上で受け入れ側としてどのような支援が必要なのか課題として残されている。

以上、在日外国人を対象に行われた大規模な日本語使用実態調査の結果を概観してきたが、最後に、在日バングラデシュ人の日本語使用実態に焦点を当てた研究の成果を整理しておきたい。アラム（2015）は、上掲の名古屋大学留学生センター（2008）と国立国語研究（2010）、文化庁（2010）で使用された質問調査票の項目を参考に調査票を作成し、在日バングラデシュ人 111 人に対して、日常生活の 42 場面の日本語使用頻度について、4 段階評価（4:よくある、3:ときどきある、2:あまりない、1:ぜんぜんない）を求め、そのデータの因子分析を行っている。その結果、「求職活動」「医療関連の行動」「交通情報の確認」「地域コミュニティとの関わり合い」「メディアからの情報収集」の 5 つの因子が抽出され、日常生活に密接な関係を持つ場面と、社会との関わりに関する場面で日本語が使用されていることを明らかにしている。さらに、アラム（2015）は、「日本語学校の学生」「大学・大学院生」「社会人」という 3 つの在留形態別に使用頻度にどのような違いがあるかを分散分析によって分析・考察している。その結果、全体的に「大学・大学院生」より「日本語学校の学生」および「社会人」の日本語頻度が高いこと、また、在留形態の違いに関わらず、地域コミュニティとの関わり合いが希薄であることを明らかにしている。アラム（2015）は、在日バングラデシュ人が日本での日常生活の中のどのような場面で多く日本語を使用しているかは明らかにしているが、それぞれの場面で具体的にどのように日本語を使用しているのか、そこでどのような問題が生じ、その問題に日本語を使ってどのように対処しているのか、さらには、自分の周りの日本人社会とどのような関係を構築し、地域コミュニティ活動に参加しているのかなどについては調査されていない。

以上、在日外国人の日本語使用実態に関する先行研究をまとめると、日常生活における日本語の使用頻度が高いことがわかった。また、使用頻度はそれほど高くないが、地域コミュニティとの関わり合いの場面でも日本語が使用されていることが確認された。しかし、これらの研究では、在日外国人がどのような場面でどれぐらい日本語を使用しているかは、明らかにされているが、それぞれの場面で実際にどのように日本語でコミュニケーションが行われているの

か、そして、そこでどのような問題が生じ、在日外国人がその問題にどのように対応しているのかなどについて、その詳細は明らかにされていない。次節では、在日外国人が仕事や日常生活の上で直面している問題と、その対処法について調査研究した先行研究を概観する。

2.2 在日外国人が日常生活で直面する問題を明らかにした先行研究の概観

在日外国人が日本での日常生活の中でどのような問題に直面し、その問題にどのように対応しているのかについては、多様な視点から調査・研究が行われている。本節では、日本に暮らす外国人が職場や居住地域での生活の中でどのような問題に直面しているか、また在日ムスリムが日常生活の中でその宗教的な制約ゆえにどのような問題に直面しているかに焦点を当てて行われた調査研究の成果を概観したい。

まず、日本で働く外国人の生活について、茂戸藤（2012）は、アジア 5 カ国（中国、韓国、タイ、インドネシア、インド）の 21 名の在日外国人を対象に、彼らが現在の職場で感じているギャップや抵抗についてグループ・インタビューを行った。その結果、日本人が仕事の上で言いたいことをはっきり言わないことや曖昧な言い方をすることなど、「仕事の進め方」に関する問題が最も多く出された。また、残業や勤務時間に対する考え方の違いや、職場での同僚や上司との上下関係・人間関係構築の難しさなどについての発言も多かった。茂戸藤（2012）は在日外国人が職場で感じるギャップや抵抗への対応として、受け入れ側が彼らの本音を把握し、それぞれの違いを認める必要があると主張している。しかし、「参入側」の外国人が自分自身の考え方や能力を「受け入れ側」である日本人に理解してもらうためにどのような働きかけを行っているかについては言及していない。

武田（2011）は、外国人住民の多様な社会的「つながり」を捉えるために、「親族」「近隣」「友人」「就労」の 4 つの領域を設定し、ライフストーリー・インタビューを行い、その分析結果を報告している。武田（2011）は、女性移住者にもインタビューを行い、多様な社会的「つながり」の有様を報告しているが、その「つながり」の難しさとして、日本語でのコミュニケーションの難しさ、「高度人材」受け入れ政策の盲点、移住者に対する差別やいじめの問題、移住者の第 2 世代の貧困化と下層化、ライフステージによる支援ニーズの変化を前提とした支援の仕組みの必要性、エスニックコミュニティの把握の難しさの問題・課題を挙げている。武田（2011）は、上掲の問題や課題に対する多文化共生的な取り組みとして、日本人住民と外国人住民の「接触の十分な頻度と密度」を創出し、「協働活動」を展開できる国際交流ラウンジの活動に期待しているが、一人一人の外国人住民が日々直面する問題にどのように対応しているのか、その場で実際にどのような能力や技能が必要になるのかなどについて、具体的な行動は述べていない。

在日外国人にとって宗教上の問題は重要である。日本に暮らすムスリムの生活に焦点を当てて行われた調査研究も数多く見られる（中野他：2015、アフタモヴァ：2012、市嶋：2013）。在日バングラデシュ人の約 89.7%は、イスラム教

徒であり⁴、彼らが日常生活の中でどのような問題を感じているのかを整理することは重要な意味を持つ。以下、在日ムスリムの生活実態に焦点を当てた先行研究を概観する。

中野他（2015）は、在日ムスリム学部生と大学院生 21 人に半構造化インタビュー調査を行い、日常生活で不便なこと、困ったこと、戸惑いを感じたことなど、社会生活上の困難について尋ねた。その結果、食材や食べ物の中身などに関する「飲食の制限による困難」と、礼拝の時間と場所に関する「礼拝習慣に関する困難」が上位に挙がっている。その他に、ニュースなどの報道によってイスラム教やムスリムに対して否定的な印象を持たれていることも問題点として報告されている。また、日本には特に男女の区別がない施設が多くあるが、それらの施設をムスリムが利用する際に起こる問題についても述べられている。本調査では、ムスリムの留学生が日常生活でどのような問題に直面しているかは調べられているが、それらの問題を解決するために、日本語使用も含めて、彼らがそれらの問題にどう対応したかについては述べられていない。

アフタモヴァ（2012）は、日本国内の企業で勤務する在日ウズベキスタン人 12 人対象（全員ムスリム）に、職場の日本人と接する中でどのような問題があるかを半構造化インタビューで尋ねた。その結果、彼らは「日本的な仕事のやり方への抵抗感」「日本人の外国人に対する差別の感覚」「人間関係に対する不満」「日本人のウズベキスタンについての認知の低さ」という 4 つの問題を抱えていることがわかった。アフタモヴァ（2012）は、調査の結果を踏まえて、在日ウズベキスタン人・ムスリムのための異文化教育の課題として、①日本人同僚との役割を理解した上で仕事ができる資質を養うこと、②日本の文脈の中で積極的に関係構築ができる資質や能力を育成すること、③ムスリムの宗教的価値観を自己超越的に認識し、日本の状況で対応できる資質を高めるために、彼らの「文化的覚知法（cultural awareness）⁵」を開発すること、以上の 3 点を挙げている。アフタモヴァ（2012）の提言は、非常に興味深いが、では具体的に在日ムスリムが上掲の①～③の異文化教育の課題を解決するために、どのような対応を考えていけばいいのかについては、具体的な方策は述べられていない。

また、市嶋（2013）は、大学生と教員研修生である在日ムスリム留学生 6 人にインタビュー調査を行った。調査では、どのようなコミュニティとの関わりがあるか、日常生活でどのような問題に直面し、どう対処しているかを調べた。その結果、礼拝など宗教的な活動を中心に、ムスリム留学生間の連帯が強いことがわかった。そして、日常生活の中では、食品や食事、宗教的な活動や価値観について困難を感じていると報告している。それらの問題に対する対処法として、市嶋（2013）はムスリム・コミュニティだけではなく、日本人コミュニティとの関わりの重要性を挙げている。

⁴ 外務省のホームページ<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>>
2015 年 8 月 14 日アクセス

⁵ カルチュラル・アウェアネスとは、自分の価値観や行動様式が自分の属している集団の文化に規定されていることにどれだけ気付いているかということ。
<<http://www.nihongokyoshi.co.jp/manbow/manbow.php?id=337&TAB=1>>

以上の先行研究から言えることは、日本人や日本社会との接触場面で外国人が抱えている問題は、必ずしも日本語能力だけが原因で起きていると言えないということである。在日外国人が日常生活や仕事の中で直面している問題は、彼らと日本人、あるいは日本社会との相互の関わり合いの中で起こっている問題であり、それは、参入側の在日外国人と受け入れ側の日本人、および日本社会が双方向的にその解決を考えなければならない問題である。受け入れ側の日本人が、在日外国人が感じる違和感や抵抗感に敏感になり、その原因を探り、かれらの考え方や行動の違いを認めることはもちろん重要であるが、参入側の在日外国人が日本社会とどのような関わり合いを持ち、その関わり合いの中でどのような能力や知識が必要になるのかを知る必要もあるといえる。

また、周りの日本人、日本社会との関係を構築し、積極的に日本社会とのつながりを持つことは、問題解決のための対処法としてだけでなく、自身の生活の場を広げ、生活の質を豊かにするためにも不可欠である。松本（2000）は、日本からバングラデシュに帰国した元留学生 6 人に対して、日本留学で得たものや帰国後の日本とのつながりなどについてインタビュー調査を行った。その結果、日本留学を成功させる要素として、地域の日本人コミュニティとの関わり合いが非常に重要であったことを報告している。しかし、具体的にどのような関わり合いがあり、彼らの留学生生活をよりよいものにしたのかについては、具体的に述べられていない。このような先行研究は、決して多くないが、日本に暮らす外国人が、自分自身の興味・関心を広げるために、あるいは自国と日本との交流に自分も貢献するために、そして日本での生活の場を広げ、国籍を問わず周りにいる人とのネットワークを大きく、深くしていくために、新たな社会参加の場を求めていくことも、在日外国人の日本での生活実態を考える上では、非常に重要な視点になると考える。

2.3 先行研究のまとめ

第 2 章では、在日外国人の日常生活における日本語使用実態、日本での生活の中で起こる問題とその対処方法、2 つの観点から先行研究を概観した。これらの多くは外国人が日常生活のどのような場面で日本語を使用しているか、職場や地域コミュニティでどのような抵抗を感じたり、問題に直面したりしているかなどについて述べている。いくつかの先行研究では、これらの問題の改善・解決を目指して提言もしているが、在日外国人が当事者としてどのように問題解決をしているか、あるいは、社会参加を目指してどのように行動をしているかについて、具体的な情報収集と情報提供が残された課題である。

留学や就職などの目的で来日を目指しているバングラデシュ人学習者に日本語使用や生活に関する情報が提供できれば、学習目的や学習動機を高め、学習内容や学習方法を考える上で非常に有用であろう。バングラデシュ人学習者に有用な情報を提供するためには、在日バングラデシュ人が日常生活でどのような問題に直面しどう対応しているか、そして、どのように日本社会との関わり合いを持っているのかを調べる必要がある。このためには、まず、日本に暮らすバングラデシュ人の日本での生活や日本語使用に関する語りを、質的に分析し、一人一人の在日バングラデシュ人が実際に日々の生活の中で、自身の日本

語能力を駆使して、さまざまな問題に対処しているかを明らかにする必要がある。そして、そのように対処するために、在日バングラデシュ人がどのような能力や技能、考え方や価値観、態度や姿勢を身につける必要があるのかを、丁寧に分析・考察する必要がある。

2.4 研究目的と課題

本研究では、バングラデシュにおける高等教育段階の日本語教育の内容と方法を改善するために、在日バングラデシュ人が日本での日常生活の中でどのような場面でどのように日本語を使って社会生活を行っているのかを明らかにすることを目的とし、3つの研究を行う。それぞれの研究の目的と課題は次の通りである。

【研究1】

研究目的：在日バングラデシュ人は日常生活の中で直面している問題にどのように対応をしているかを、明らかにする。

研究課題

- 1-1 問題を解決する過程を通して彼らの考え方や価値観の中にどのような変化が見られるか。
- 1-2 問題を解決する過程を通して周囲の人の理解を得るために、どのような対応をしているか。

【研究2】

研究目的：在日バングラデシュ人が日常生活の中でより良い生活を目指して、社会参加を通して、どのような行動をしているかを、明らかにする。

研究課題

- 2-1 どのように社会参加をし、自分の生活の場を広げているか。
- 2-2 異質とされる文化的背景への周囲の理解をどのように得ているか。

【研究3】

研究目的：在日バングラデシュ人の日本語使用実態を明らかにする。

研究課題

- 3-1 在日バングラデシュ人は、日常生活のどのような場面で日本語使用を必要だと感じているか。

第3章 理論的枠組み

第1章では、バングラデシュの日本語教育の現状と問題について論じ、在日バングラデシュ人が日本での日常生活の中でどのような場面でどのように日本語を使い、どのように社会生活を営んでいるのかを明らかにすることが課題であることを指摘した。続く第2章では、在日外国人が日常生活のどのような場面でどのくらい日本語を使用しているか、そして、日々の生活の中でどのような問題に直面し、その問題にどのように対処しているかについて、これまで行われてきた先行研究の知見を概観した。その結果、日常生活においてどのような問題に多く直面するかについては、さまざまな知見が得られているが、その問題に対して個々の在日外国人がどのように対処すればいいのか、そしてうまく対処するためにどのような能力や技能が必要になるかについては、まだ十分に分析・考察されていないことが確認された。また、日本での生活の質をよくするためには、周りの日本人社会や日本人コミュニティへの積極的な参加を通して、自身の生活の場とネットワーク、協働作業の場を拓けていくことが必要だということも確認された。

以上を踏まえ、本章では、本研究が理論的枠組みとする「言語生態学」について述べる。言語生態学は、日本語教育のみを扱うのではなく、言語と言語話者の属する社会との関係性を扱うことから、まず、3.1で、この理論の概要および特に本論文に関係の深い重要な概念について説明する。続く3.2では、言語生態学理論に基づいた日本語教育分野の先行研究を概観し、言語生態学の観点から在日バングラデシュ人の周囲の人との関係構築の過程と日本語使用のあり方について分析する意義についてまとめる。

3.1 言語生態学

3.1.1 言語生態学の概要

言語生態学(岡崎 2009a 他)は、Haugen (1972) を引用して提唱された「ある所与の言語とそれを取り巻く環境との間の相互交渉的關係の学」(岡崎 2009a:3)である。生物学の領域の一つである生態学が、生物とそれを取りまく生物・非生物間の関係を記述し、その育成・保全を目指す自然生態学の性格を持つに至った(岡崎 2006)のと同様、言語生態学は、その記述・育成・保全の対象を言語に限定するのではなく、「言語と(人間)社会の間の相互交渉的關係」をも対象とする。そして、その言語がうまく機能しているかどうか(言語生態)は、その言語の話者の生活のあり様(人間生態)が良好かどうかと一体化して捉える。言い替えると、「言語の生態の福祉⁶(wellbeing:あり方のよさ)の状況は言語話者の生態の福祉(wellbeing)の状況に直結」し、「言語は人の生活の質(quality of life)に直結する」(岡崎 2009a:12)ということである。また、両者を一体化してとらえるということは、言語話者の生活が、言語の状況を左右する(上掲書:12)という面を持つことも意味する。

⁶ 「福祉」とは、「幸福。特に、社会の構成員になどしくもたらされるべき幸福」(三省堂 Web Dictionary)を意味する。

では、「言語のあり方（言語生態）の良さ」が「人々の生き方（人間生態）の良さ」であるとは、どのようなことだろうか。自分が住んでいるところで話されている言語でのコミュニケーションが困難で、同国者の援助もない場合、さまざまな場面で生活に支障をきたし、その人の人間生態は良いとは言い難いものになる。一方、たとえその国の言語の母語話者であっても、周囲との人間関係に問題があると、自分が伝えようとしたことがうまく伝わらず、また相手の言うことも理解できないということが起きる。これは、言語話者の生活のあり様が言語生態に影響を及ぼす例である。

本論文が対象とする在日バングラデシュ人のような、在住外国人の場合を考えてみよう。彼らは、日本社会に参入側として生活している。そして、その暮らしを充実させ、自分がより生きやすくなるために、家庭、学校、職場、ビジネス、社会、国際社会など様々な段階や環境で、自分が接触し、関与できる場を広げようとしたり、問題が起きれば、解決しようと努めたりすると考えられる。言語は、そのような生活上の諸場面における相互交渉に不可欠である。

ここで重要なことは、言葉の意味が所与的に言葉そのものにある、あるいは、相手との単なるやり取りの中だけで決まっていくものではなく、言葉は、そこで関わりのある人や事物や現象、出来事への配慮の有無によって適切な意味を持つかどうかが決まる(岡崎 2010a)ということである。つまり、自分が言いたいことを相手との関係、その場の環境、周囲にある他のコト、モノ、人を配慮した上で伝えようとしないと、たとえ言語能力が十分あっても有効なコミュニケーションにならない恐れがあるということであると考えられる。

以上を踏まえ、本論文では、前述の岡崎の「言語の生態の福祉の状況は言語話者の生態の福祉に直結する」にある「言語の生態の福祉」とは、言語能力を問わず、周囲の人に自分の考えを丁寧に伝え、それが相手に受けとめられ、また、周囲が言っていることを自分が受けとめられるような状態であると考えられる。そして、「言語話者の生態の福祉」とは、上記のようなやり取りが可能な関係性の中において緊張にさらされない状態にあることとする。

日本社会の「参入側」である非母語話者と「受け入れ側」である母語話者の双方の生態が良好か、もし良好でないなら、どうすればよいのか、それが言語生態学の問いである(杉原 2010)。参入側である在日外国人は、日本語の運用能力の制限や文化、宗教など違いから、多くの困難や問題に直面することが考えられる。その一方で、周囲の人々との関わりを深め、日本社会の中に新たな自分の「居場所」を見つけていこうとする人もいる(井上 1999)。本研究に照らし合わせて考えると、研究対象とする在日バングラデシュ人は、海外での生活で自分が所有する文化的、宗教的、社会的背景に誇りを持って生きていくために、どのようにして直面する課題を乗り越え、自らの世界を広げているのか。そして、その過程で起きる日本語のコミュニケーションについて、彼らはどのように捉えているか。そして、彼らの振舞いによって、その周囲の環境はどのような変化を見せるのか。その在り様を言様語生態学の観点から詳細に分析と記述することは、単に日本語を知識として学ぶだけでは得ることができない、世界と自分の関わり合いに対する認識やものの見方を獲得するための示唆を得ることができる。その示唆は、来日を目指し、バングラデシュで日本語を

学ぶ学習者にとって、充実したよりよい生活、つまり良好な言語生態と人間生態に自分を置くための貴重なリソースになると思われる。

3.1.2 言語生態学を構成する基本的な概念

前項では、言語生態学の概要および本論文との関連について述べてきた。本項では、人と接触する場面で生じる問題の原因とその解決を目指した行動などのプロセスを明らかにするという目的のために、本論文が援用する言語生態学の基本概念、すなわち、言語生態学の立場から見た2つの能力観（「孤立実体的」能力観と「生態学的諸関係によって構成されている能力」観）、「自己保存」、「異なりの対立」および「異なりの内在化」、そして「生態学的リテラシー」について説明する。

3.1.2.1 言語生態学における能力観

言語生態学が、ある環境において言語がうまく機能しているかどうかを、その言語話者の生活が良好かどうかと一体化して検討する学問であることは先述の通りである。では、言語をうまく機能させる「能力」について、言語生態学の立場では、どのように考えられているのだろうか。

岡崎（2009a：29）は、能力には、「孤立実体」観からの捉え方と「生態学的諸関係によって構成されている能力」観からの捉え方があると述べている（本論文では、前者を「孤立実体的能力観」、後者を「生態学的能力観」と表現することとする）。「孤立実体観」とは「能力がその個人に具わっているものであり、それは生得的であったり、個人の努力によって形成されていくものという見方」である。一方、「生態学的能力観」とは、「能力は、個人が取り巻くコト、モノ、人との多様で多次元な関係の中で発動され、あるいは遮られ、さまざまな試行錯誤を繰り返す中で、それらのコト、モノ、人との間で固有の生態学的関係が形作られることによって形成されていく」と説明している。つまり、前者は、能力を個人が所有するものとして見ているのに対して、後者は、能力を人が置かれている環境とその周辺のコト、モノ、人との関係から構成されるものとして見ている。たとえば、ある問題の解決過程を例に考えてみると、問題解決ができるかできないかは、その人の能力次第であると考えるのが孤立実体的能力観の立場である。それに対し、後者の「人が置かれている環境とその周辺のコト、モノ、人との関係から構成されるもの」として能力を捉える立場では、問題解決の成否は、当事者だけではなく、その人を取り巻く他者や事物や状況によって決まると考える。そして、何か問題がある場合、言語や言語話者など「それ自体に問題がある」のではなく、「関係のあり方に問題がある」（岡崎 2009a：xv）と考える。たとえば、平野（2011）は、受け入れ側である母語話者と参入側である非母語話者の相互交渉について、彼らの「社会的相互作用が円滑に進まない場合、「孤立実体観」が日本語を母語としない者のみに原因があるとみなされるのに対し、「生態学的能力観」では社会的相互作用に関わっていた人々のつながりの悪さが起因している」（p. 23）とみなされると指摘している。

日本で暮らす外国人が周囲の他者と相互交渉を行う際に、日本語能力は、さまざまな能力の中でも特に注意を向けられる能力といえよう。その日本語能力

を話者自身や周囲の他者が、孤立実体的に捉えるか、それとも生態学的に捉えるかで、その評価や判断は、非常に大きく異なるだろう。そして、その評価や判断は、その話者の言語生態に大きな影響を与えるのではないかと考える。

3.1.2.2 自己保存

参入側と受け入れ側が共に暮らす社会において、個々人が持つ言語や文化や考え方をどのようにすり合わせ、ともに良好な言語生態と人間生態を維持していくか、ということは重要な課題である。岡崎（2003）は、自然界において生命体が他の生命体と自己を区別する要素を保持しつつ、共生することで全生命体の存続を可能にしてきたことを踏まえ、各自の言語および文化・生活様式の保持、すなわち「自己保存」と、それを前提とした参入側と受け入れ側の協働的な歩み寄りが「コミュニティに緩やかな形で多様化をもたらす」（p. 42）と指摘している。

この「自己保存」の概念は、在日バングラデシュ人の日本社会における生活実態を把握するための観点として重要である。在日バングラデシュ人は、文化・社会的背景において、周囲の人々（本論文では日本人）と著しく異なることが推察される。周囲の人間と自分との違い、すなわち、考え方、価値観、宗教、文化、習慣などの違いをどのように共有し、交渉し、相手に受け止められているのか。そして、それが彼らとその周囲の人々の生活にどのような影響を与えるのか。「自己保存」は、固定的ではなく、「流動的な中で自己を保つ」過程を指す。すなわち、「自己と他者が互いに影響しあう変化の只中にありながら、双方共に自己を保とうとする志向」（杉原 2010:22）である本論文では、在日バングラデシュ人の語りの中に見られる周囲の人々における「自己保存」の過程を記述する。それを通して、受け入れ側との交渉を通して自分自身の文化、習慣、考えなどを大切にできるか否かが、彼らの言語生態、人間生態の良さにどのように影響するのか、その実態を探る。

3.1.2.3 異なりの対立と内在的統合

人は、仕事や学習その他のさまざまな活動を、お互いが持つ異なる考えや知識、価値観などを言葉のやり取りを通して調整しながら遂行する。それぞれの考えや持っている知識の違いは当然であり、その違い、すなわち「異なり」が互いの「自己保存」への志向により表出する場合がある。

岡崎（2003：39-40）は、このような「異なりの対立」を、「自己保存性を持つお互いの異なりとの出会いが対立関係に発展するのではなく、併行してなされる協働的過程を通して調整され、異なりの内在的統合が形成されていく過程である」と説明する。お互いが「自己保存」のために主張することで、「ぶつかり合い」や「軋轢」が生じるが、協働的な行動による歩み寄りを通して「異なり」が新たな環境のもとに「統合」されるということである。杉原（2010）は、参入側（非母語話者）と受け入れ側（母語話者）の間に生じる異質性をめぐる「異なりの対立」を、「双方の異質性があるがゆえに対立し、その結果として外在的なものとして排除される権力作用が現れるような、強い緊張状態での葛藤を伴

う」現象と捉え、その対立関係に変化を起こし、「組み替える」ことで、「異なりの内在的統合」が生起するとしている（pp. 27-28）。

平野（2011）も、「異なり」との出会いがこれまで知らなかった新たな視座を知り、自分が自明だと信じてきた前提を覆すことになりかねない経験であることから、「異なりの対立」における葛藤が大きいとき、異なりと正面から向き合わずに「外在的」なものとして排除しようとする動きにつながることもあるとしている。しかし、それでもなお、異なりをめぐる交渉が新たな環境を生み出すための必要な過程だと述べている。

以上の議論は、受け入れ側の母語話者が、ともすれば参入側を外在化しようとする傾向を問い直そうとする立場から、異なりの対立と内在化・外在化を論じている。その議論をより深めるために、本論文では、参入側（バングラデシュ人）がこれらの現象をどのように経験するのかを検討する。それぞれの場面でどのような異なりが生じ、当事者であるバングラデシュ人と日本語母語話者がどのように内在的統合をしているか、あるいは外在化されているかを、在日バングラデシュ人の語りから分析・考察する。

3.1.2.4 生態学的リテラシー

グローバル化が進む現代社会においては、人の移動が活発化するのに伴い、多くの人々が新しい環境や人との関わりを日常的に体験するようになってきている。その中で、充実した、より良い生活（良好な言語生態と人間生態にあること）を送るためには、その変動や変化を感じ取り、考えなければならない。その能力を「生態学的リテラシー」という（岡崎 2009a）。リテラシーとは、「生き方のベースとしての基本的な能力」（岡崎 2009a：65-66）であり、生態学的リテラシーとは、「変動する世界を能動的に認識する過程を形作り、具体的に実践していく能力」である。すなわち、「実践の中でその認識を修正・改善しつつ、育成していく能力」である。自分の周囲、そして、より広い範囲（地域、国、あるいは世界や自然環境）で、今何が起きているのかを捉え、個人としての自分の知識や考え方を適切に利用し、必要に応じて反省し、改善することである。つまり、「生態学的世界認識、生態学的行動基準／生き方、生態学的人間関係、生態学的アイデンティティ、生態学的意思が相互につながりながら、らせん的に形成されていくリテラシー」（岡崎 2009a:66）と説明している。ここで「らせん的」とは、「同じ問いに繰り返し立ち戻りながらも、その過程で新たなつながりを通して、より高い次元、より広い視野に進んで行く」ということである（岡崎 2009a:66）。

岡崎（2009a：83-84）は、生態学的リテラシーを構築する諸力を次のように挙げている（下線は筆者）。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1) 世界の<u>コト・モノ・人の関連</u>をとらえる力。2) より厳密には、世界の<u>コト・モノ・人の関連</u>を、自己の生き方と主体的関連の下に、自己を起点として視野を拡大しつつとらえてゆく力。また、世界のこれら「<u>諸関係をとらえる力である想像力</u>」の育成によって、特に、世界に存在するリスクが自他の間で共有されていることの認識、自覚を媒 |
|--|

介とした、他者の視座を感知しつつとらえる力。

- 3) 世界のコト・モノ・人のつながりと自己をつなげてとらえる力。従って、世界がどうなっているかに関する知識プロパーの把握力ではない。
- 4) 世界のコト・モノ・人を、4 つの問い「世界はどうなっているか」、「そのような世界の中でどのように生きていくか」、「そこで人とどのような関係を作っていくか」、「私とは何か」の契機からとらえ、生態学的諸関係をこの4つの問いの契機に沿って形作る力。
- 5) 以上の諸力により、世界のコト・モノ・人の、つながりの原初形態としての自己と世界の紡ぎ方を変える力、また、その力に基づき、生態学的自他支援システムを形作っていく力。これはまた、世界的な変動に対する自他の防衛に対応する生態学的自他支援システムを形作っていく力とすることができる。
- 6) 以上を統括する世界のコト・モノ・人の関連を想像力によってとらえる力。

生態学的リテラシーを支える重要な概念は「想像力」である。自分とコト・モノ・人のつながりを考えた上で行動をとる能力である。自分の周囲の出来事は自分の考えや価値観だけで判断するのではなく、その出来事に関わる人や環境、社会的な背景などを理解した上で行動することによって自分の視野が広がる。それが生態学的リテラシーを獲得していくことであると考ええる。

在日バングラデシュ人は、新しい環境や人との関わりを日常的に体験する人々の事例の一つである。在日バングラデシュ人が日本社会との関わり合いの中で、想像力を働かせ、周囲はどう変わっているかを認識した上で行動することができるになれば、コト・モノ・人にまつわる様々な問題に対する向き合い方が変化する可能性がある。言い換えると、在日バングラデシュ人が生態学的リテラシーを獲得することによって、諸コミュニティに参加できるようになるとともに、精神的な安定が得られる可能性があると考えられる。これは単に知識としての日本語を学ぶこととは一線を画している。本論文では、在日バングラデシュ人が生きる場、すなわち彼らの「生態場」(岡崎 2009b)における人々の言語使用と振る舞いの記述を通して、生態学リテラシーの獲得の過程を探る。

本論文においては、本節で提示した言語生態学における諸概念、すなわち「孤立実体観」および「生態学的能力観」、「自己保存」、「異なりの内在的統合」「生態学的リテラシー」という概念を参照しつつ、在日バングラデシュ人の生活を記述する。日本とバングラデシュの宗教、文化には著しい違いがあるため、本研究においては、在日バングラデシュ人の自身が慣れ親しんできた習慣などへのこだわりにより、どのような困難が生じているかに関しても、丁寧に記述する。なぜなら、周囲の人々との対立してしまうこと、あるいは、物事がうまく行かない場合、人間生態が悪くなってしまう、生活のリズムが悪化してしまう恐れがある。そして、何か特別な困難に直面していなくても、自分の今の生活が更に豊かにするために、すなわち、人間生態の良さを目指して、日本社会にどう向き合うかを見る必要がある。それで、岡崎が提唱する言語生態学の概念をもう少し広い観点から説明していく必要がある。分析の過程で必要に応じて

上掲の概念を広くしていくことを考える。

3.2 日本語教育分野における言語生態学の研究と本論文の位置づけ

日本語教育の分野では、言語生態学の考え方を理論背景として、おもに教育実習場面における母語話者・非母語話者実習生のやり取りに注目した研究（鈴木 2013、半原他 2012、平野 2011 など）や、地域の日本語教室や大学における話し合い活動を分析した杉原（2010）などがある。

平野（2011）は日本語母語話者・非母語話者実習生がともに多言語多文化共生社会を目指す日本語教室運営の取り組みに注目し、実習生の議論や授業実践の発話データにおける「異なりの対立」と「内在的統合」の過程を記述している。個人個人が有している能力や考え方、価値観などの違いを「異なり」と定義した上で、「異なりの内在的統合」を「自己と他者の異なりがぶつかり合い、不断の交渉を経て、双方の異なりが混ざり合うことで生まれる新たな統合的な能力・言語」と説明している。分析の結果と考察から、言語的共生化を進める前提となる行動特性、言語的共生化が形成されるプロセス、あるいはそのプロセスが阻まれる場面を見ることにより、共生日本語教育のための教員養成の可能性と課題を明らかにしている。

半原・佐藤・三輪（2012）も、共生日本語によるやり取りをもとに日本語母語話者と日本語非母語話者の言語的共生プロセスを明らかにしている。協力者が自己の経験と意見の表出によって自己保存の過程を作り、相手の視点を取り入れ、自己の視点を批判的に考察することによって、新たな視点が生まれ、結果として異なりの内在的統合ができていると報告している。そして、「異なりの内在的な統合」について、「母語話者と非母語話者それぞれが、自己の言語・文化的枠組みを批判的に捉え返しながら、自分とは異なる相手の言語・文化的な枠組み（見方・考え方・視点・価値観など）を取り入れ、統合し、新たな枠組みを共に創造する過程」と説明している。グローバル化の下で受け入れ側と参入側、両者が直面している課題に向き合い取り組む「連帯的な関係」を築くプロセスが記述されているという点が本研究の意義として挙げられる。

鈴木（2013）は、内省モデルの限界を克服するために、言語生態学的内省モデルを用いて、共生日本語教育実習生の学びの様相を明らかにした上で、生態学的リテラシーを育成する場としての共生日本語教育の意義を明らかにしている。本研究も、データとして日本語母語話者と日本語非母語話者実習生の教室での会話を分析している。本研究では、現代日本における共生日本語の必要性と共生日本語教育によって日本語教師がかけがえのない学びを得られることが主張されている。

杉原（2010）は、地域の日本語教室や大学で実践されている相互学習型活動における母語話者と非母語話者の会話をデータに、そこに現れる非対称性を分析している。そして、母語話者と非母語話者の「言語的共生化」の過程における異なりの対立と内在的統合の過程を、会話分析の手法を用いて記述している。

以上の先行研究では、いずれも教室場面におけるやり取りを記述、分析の対象とし、「正しい日本語の抑圧」の下に、多くの日本語非母語話者がプレッシャーを感じざるを得ない現状（鈴木 2013）について問題提起している。つまり、

受け入れ側の母語話者と参入側の非母語話者の両方のことを述べているが、最終的にこれからの日本語教育で参入側の人間に対してどのような対応が必要であるかに焦点を当てている。そして、非母語話者と母語話者の会話で起きていることを言語生態学的な観点から検討することの意義を示している。

では、実際に日本に住む非母語話者の言語生態と人間生態はどのようなものなのか。その視点からの分析と考察は、これまでの先行研究が蓄積してきた知見と議論を深めることにつながると考える。

以上をまとめると次のことがいえる。言語生態学の理論に基づく研究は、おもに教室場面や受け入れ側に観点を絞ったものである。本論文で分析するような日本で暮らす外国人の目から見てどういう言語使用の実態があるのか、を明らかにする必要がある。

しかし、在日バングラデシュ人と周囲の人が実際の現場でどのようなやり取り、あるいは、関わり合いをしているのかを観察し、分析するには限界がある。そこで本研究では、日本に暮らすバングラデシュ人が自らの体験を語る内容に注目し、そこに見られる他者との関わり合いを分析することにする。本論文の課題を明らかにするために、在日バングラデシュ人が周囲の人との関わり合いで日本語をどのように使用していたかについても検討する。ただし、今回扱うデータは、先行研究のような実際の場面で起きた会話を録音した会話ではなく、当事者の語りであることから、彼ら自身が自分の日本語使用のあり方と日本語能力をどう捉えているのかに焦点を当てる。語りの中でのやり取りだけではなく、当事者として直面し、違和感を抱く考え方や価値観の「異なり」も、彼らの生活に重要な影響を与えているものとして注目する。

本論文では、参入側としての在日バングラデシュ人が言語生活、および生活の中の様々な場面で周囲の日本人や外国人と関わる、その関係性が彼らの生活の良さにどうつながっているかを言語生態学の観点から検討する。つまり、対象とする在日バングラデシュ人の言語使用実態、諸問題への対応、および社会的関係の構築を把握するために、在日バングラデシュ人が生活の場を拡張するプロセスを言語生態学的な観点から記述することを目指す。

第4章 【研究1】日常生活で直面する問題への対応

4.1 質的研究の背景

第2章の先行研究の概観で明らかになったように、在日外国人は、日常生活のさまざまな場面で習慣や考え方、価値観などの違いから、さまざまな問題に直面し、その対応に苦慮している。しかし、先行研究を概観する限り、問題の所在とその原因については、多様な議論がなされてはいるが、では、在日外国人がそのような問題にどのように対処すればいいか、適切に対処するためにどのような能力や技能、取り組み方が必要になるのか、また、それらはどのようにすれば育成できるのかなどについては、十分な調査研究がなされているとは言えない。

問題にどう対応するかはかなり個別的な事情に絡む、非常に繊細なテーマである。一つ一つの問題が当事者の生活環境や、生き方やアイデンティティ、価値観、さらには宗教のような個別事情との関わりをもつものも決して少なくなく、それらは大規模な質問紙調査や表面的なインタビュー調査などでは十分なデータを収集することはできない。そこで、【研究1】では、十分な時間をかけ、じっくりと調査協力者にインタビュー調査を行い、必要があれば、2度、3度とフォローアップ・インタビューを依頼し、彼らが自分が直面した問題をどう捉え、どのように解決の糸口を見つけ出し、周囲の人とどのような対話を通して自分の生活や考え方、価値観、生活習慣などを保持することができたのかを分析した。これまで、日本に暮らす在日外国人の生活実態調査は、多くの場合、日本人研究者によって行われてきたことが多かったと思われるが、本研究では、調査者が同じバングラデシュ人であったため、調査協力者とのラポール関係をうまく構築することができ、かなりのプライバシーにかかわる部分までインタビューすることができた。そして、そのインタビュー・データを言語生態学の観点から分析・考察し、在日バングラデシュ人が問題の背景にあるものをどう捉え、その解決に向けてどのような態度や姿勢、考え方、能力や技能を身につける必要があるのかを考察した。

4.2 研究方法

4.2.1 調査対象者

日本に暮らすバングラデシュ人は、日本語学校の学生、大学・大学院の学生、社会人の3つの在留形態に分けられる。アラム(2015)で明らかにされているように、この3つの在留形態別に見ると、在日バングラデシュ人の日本語使用の実態は、必ずしも一様だとは言えない。そこで、本調査の協力者を選定することにあたっては、まず、この3つの在留形態別に協力者を探すことを決め、筆者が都内のバングラデシュ人集住地域に赴き、協力者を募ったり、関東エリアに住むダッカ大学の卒業生や関係者に連絡を取り、調査協力を依頼したり、さらには、フェイスブックなどのソーシャル・ネットワークを利用したりして、在日バングラデシュ人に広く調査協力を依頼した。このようなプロセスを経て、日本語学校の学生4名、大学・大学院の学生3名、社会人5名、計12名から調査協力を得ることができた。

【研究 1】では、その 12 人のうち、日本語学校の学生 2 人のインタビュー・データの分析結果を報告する。特に、日本語学校の学生のデータに焦点を当てる理由は、以下の通りである。バングラデシュの現状では、日本の文部科学省の奨学金を得て大学・大学院に直接留学したり、日本の会社に直接、就職して来日したりすることは容易ではなく、多くの場合、まず日本語学校に留学し、1 年余り日本語を学んだあと、大学や専門学校に進学するパターンが最も一般的である。筆者が勤務するダッカ大学の学生の場合も、このパターンで来日している学生が多い。日本語学校に留学する学生の場合、来日前にバングラデシュ国内で日本語を学ぶ時間が少ないこともあり、来日時点の日本語能力はほとんどないか、あっても初級レベルだと予想される。このような状況を踏まえ、来日して 1 年以内の日本語学校の学生たちに、日本でどのように日本語を使って日常生活を送っているのか、周りにいる人とどのような関係作りを行っているのか、そこでどのような問題に直面し、どのように対処しているのかなどについて情報を得ることは、バングラデシュで留学を目指して日本語を学ぶ学習者に還元すべき内容や情報として、豊かで有益であると考ええる。

今回、インタビューした日本語学校の学生 4 人のうち 1 人は、来日してすでに 1 年以上過ぎており、そろそろ帰国するか日本の専門学校に進学するか、インタビュー時点で未定であったため、【研究 1】の分析対象から外した。もう 1 人は調査時期の都合で、フォローアップ・インタビューが難しかったことから、同様に分析対象から外した。残りの 2 人は、ともにインタビュー時点で日本に来て 4 ヶ月の段階であり、日本での生活にも慣れ始め、アルバイトなどのさまざまな活動始めていた。そこで、この 2 人の学生を対象に、来日して 4~5 ヶ月の時点で最初のインタビューを行い、さらに 8~9 ヶ月の時点で再度インタビューを行い、その間に二人の中にどのような意識の変化が見られるかを確認することとした。

以下に、【研究 1】の調査協力者 2 人（I さん、N さん）の属性を紹介する。I さんは、20 代後半の男性で 2014 年 7 月に来日し、東京都内の日本語学校で日本語の勉強を始めた。I さんは、来日前、バングラデシュのダッカ大学の日本語コースで 240 時間余り（約 2 年間）日本語を学習している。来日時点の日本語能力は、本人の申請によれば、日本語能力試験 N4 程度のレベルであった。今回の来日が初めての海外渡航であった。

N さんも I さん同様 20 代後半の男性で、2014 年 7 月に来日し、東京の日本語学校で日本語学習を始めた。来日前、バングラデシュの民間学校の日本語コースで 180 時間余り（約 6 ヶ月）日本語を学習している。来日前、マレーシアとドバイで 4~5 年、働いていた経験があり、海外生活が初めてということではなかった。来日時点の日本語能力はとても低かった。

4.2.2 研究目的と研究課題

第 2 章で述べたように、【研究 1】の目的は、在日バングラデシュ人が日常生活の中で直面している問題にどのように対応しているかを明らかにすることである。具体的な課題は、次の 2 点である。

研究課題 1-1 問題を解決する過程を通して彼らの考え方や価値観の中にどのような変化が見られるか。

研究課題 1-2 問題を解決する過程を通して周囲の人の理解を得るために、どのような対応をしているか。

以上の点のうち、職場における問題解決を 4.3 で、宗教上のタブーをめぐる問題については 4.4 で検討する。

4.2.3 調査方法

本研究では、在日バングラデシュ人が周りのコト、モノ、人と向き合う中で直面した問題を解決するために、日本語を使ってどのような考えで行動したのか、半構造化インタビュー調査を行い、調査協力者の語りの中から彼らの意識や態度、価値観の変容を明らかにすることを目指した⁷。インタビューに際しては、細かな質問項目を決めて、順に質問していくというよりは、オープンな質問をし、彼らの回答に合わせて、より深く細かい情報が必要な際に質問をつけ加えていくことに注意した。主な質問項目は「日常生活の自分の周りのコト、モノ、人との関わりの中で、どのような問題や課題に直面したか」「その問題や課題を、日本語を使ってどのように解決していったか」であった。インタビューはベンガル語で行い、IC レコーダーで録音し、筆者が日本語に翻訳した。翻訳は、日本語とベンガル語を理解する第三者にダブルチェックを依頼し、その妥当性を確認した。

4.2.1 で述べたように、日本語学校の学生の 2 人（I さんと N さん）には、2 回ずつインタビューを行った。回答内容を確認し、さらに詳細な情報を得る必要がある場合にフォローアップ・インタビューを行った。詳細は、表 4-1 を参照されたい。

表 4-1 分析対象とするデーター一覧

氏名	インタビュー	日付	時間
I さん	1 回目のインタビュー	2014 年 11 月 4 日	56 分
	2 回目のインタビュー	2015 年 3 月 8 日	44 分
	フォローアップ	2015 年 4 月 19 日	26 分
N さん	1 回目のインタビュー	2014 年 12 月 7 日	1 時間 1 分
	2 回目のインタビュー	2015 年 4 月 19 日	41 分

4.2.4 分析方法

分析方法として大谷 (2008, 2011) の SCAT (Steps for Coding and Theorization)

⁷ データに関して、本来であれば、【研究 1】で取り上げる課題について考察するためには、日常生活の中で問題に直面したとき、その場で周りの人と日本語でどのようなやり取りをしたのか、その場で交わされた生の会話をデータとして収集し、談話分析や会話分析などの手法を用いて分析・考察するべきである。しかし、今回の調査対象者の場合は、実際に問題に直面したときの日本語でのやり取りをその時間に戻ってそのまま録音することは不可能であることから、インタビューを行い、その語りを分析することにした。

分析法（以下、「SCAT」とする）の手法を参考にした。質的研究法としては、Glaser, B. G. & Straus, A. J. のグラウンデッド・セオリーや木下（1999、2003、2007）の修正版グラウンデッド・セオリー（M-GTA）などの方法がよく知られているが、これらの方法は、長い期間と大量のデータを必要とするのに対し、SCAT は、比較的小さな規模の質的データの分析を、短い指導を受けただけで自立して始められるような手法（大谷 2008：28）として開発された。また、SCAT では、明示された作業手続き（4 段階のコーディング）に従って作業することで、分析に必要な諸段階を経て理論化に至ることができるように、分析者を円滑に誘導する機能を有している（大谷 2008）。SCAT の持つこれらの特徴は、分析の恣意性を極力排除することにもつながる。また、分析過程をマトリックスに明示化することを通して、分析過程の「省察可能性（reflectability）」を高めることができ、さらに本研究の結論への「反証可能性（falsifiability）」も高めることができる（大谷 2008：40）。以上のような理由で、本稿は、収録したインタビュー・データを SCAT の分析手法の一部を援用して分析した。

SCAT では、マトリックスの中にセグメント化したテキストを記述し、それぞれのテキストについて、まず（1）「そのテキスト中の注目すべき語句」を書き出し、次に（2）「注目すべき語句」として書き出したことを「テキストにない語句で言い換え」、（3）「言い換えた語句」を説明することができる「テキスト外の概念や語句、文字列」を記入し、最後に（4）それまでの作業を通して浮かび上がってきた「テーマ・概念」を記述する（大谷 2008：31-32）。コーディング作業の後、そのテーマや構成概念を意味のつながりを持たせてストーリーラインを作り、データの潜在的意味を再文脈化し、最終的にそのストーリーラインから重要な部分を抜き出し理論を記述する。本研究では、上掲の（3）（4）のコーディングの段階で「テキスト外の概念」を記述するための理論的枠組みとして、第 3 章で記述した言語生態学の理論を参照した。なお、今回の分析では、ストーリーラインを作成する段階までを行い、理論記述は行っていない。その理由は、本研究の目的は、調査協力者の語りから理論を構築することが目的ではなく、コーディングの第 4 段階で言語生態学との関連付けを視野に入れて抽出したテーマや構成概念から【研究 1】で注目したい問題の意識化からその解決に至る過程が語られている部分を特定することが重要であったからである。

4.2.5 分析対象の選定

【研究 1】の目的は、日本での日常生活の中で、周囲のコト、モノ、人と向き合う中で生じる問題を、日本語を使ってどのように対応しているのかを明らかにすることである。

概して、日常生活の中で問題に直面する場合、その原因になるのは、在日バングラデシュ人と彼らの周りの人々の間に、考え方、価値観、生活習慣などに関する相違や理解のトラブル、すなわち異なりの対立が見られる場合である。その異なりの対立を解決、あるいは回避するために、日本語を使ってどのような話し合いを行ったのかを、2 人の語りから分析・考察する。

上掲 2 人のインタビュー・データを上述の SCAT のコーディング手順に従って分析した。次節に詳述する全体ストーリーラインを得ることができた。それぞ

れのストーリーラインを問題やトラブルに注目して詳細に観察した結果、(1) アルバイト先における周囲の人と関わり、(2) 宗教上タブーとされる食べ物をめぐる周囲の人とのやり取りの 2 つの場面における語りに興味深い現象が観察された。そこで、本研究では、この 2 つの場面に焦点を絞って分析を行う。

なお、分析の過程を明確にするために、4 節に I さんの 1 回目と 2 回目のインタビュー・データの全体ストーリーラインを提示する。その中から特にどの部分に注目するかを示し、その部分のマトリックスを提示する。分析・考察に際しては、必要に応じてフォローアップ・インタビューで得られた会話を分析する。1 回目と 2 回目のインタビュー全体のマトリックスは、紙幅の関係上、添付資料に付することにした。また、本来であれば、N さんのマトリックス全体を資料に載せるべきであるが、膨大な量であり、全体を提示することは難しいため、以下では、分析対象とするエピソードのみのマトリックスを提示する。

4.3 職場における問題解決：I さんの場合

4.3.1 I さんの全体ストーリー

I さんは、子どものころから日本の社会や文化、経済に対する興味を持っていた。彼はバングラデシュで経営学の修士号を取得し、日本に留学して研究を継続したいと考え、2014 年 7 月に来日した。

来日 4 ヶ月時点と 8 ヶ月時点で 2 回のインタビュー調査を行った。最初のインタビュー時点では、I さんの日本語能力は低く、周りのコト、モノ、人との関わりの中で生じた問題や課題に対する対応策は限られていたと思われるが、2 回目のインタビュー時は 8 ヶ月後であり、日本語使用にも慣れ始め、さまざまな経験を通して、周りのコト、モノ、人との関係作りにもいろいろな工夫が見られたのではないかと考えた。そこで、I さんの 2 回のインタビューの語りの内容を比較することによって、日常生活の中でさまざまな問題に直面し解決していく中で、I さんの考え方や価値観がどのように変容してきたのかを分析した。

I さんの 1 回目インタビューの全体ストーリーラインは、以下のようにまとめられた。

[I さんの 1 回目インタビューの全体ストーリーライン]

将来のために憧れの国である日本へ留学した I さんは、留学を本国でのキャリアにつながる貴重な知識獲得の機会や経験として価値あるものと捉えている。来日には、親戚や日本語学校のサポートを得て準備した。来日して、時間の観念における自文化との際立った差異に驚き、それを高く評価するも、周囲についていけない自分自身に焦燥感を抱いている。日本人の仕事の速さについて、周囲の非日本人の評価を根拠に、その特殊性を強調している。

I さんの日本社会へのチャンネルは、血縁ネットワークの支援により開かれ、働き始めた日本料理のレストランでは、日本人チーフという信頼できる日本人と出会い、良好な関係を構築した。しかし、日本語力不足という、当時の I さんにはどうしてもならないことを理由に自分につらく当たる外国人スタッフの言動を批判している。日本人と非日本人の対比、すなわち、業務指導にお

けるチーフへの肯定的、外国人スタッフへの否定的評価を通して、I さんの日本人に対する肯定的イメージは強化されていく。I さんは退職するが、その原因を外国人スタッフの陰悪な振る舞いと学生の本分である学業への支障にあるとし、自身の行為を正当化する。

I さんは、XX 人スタッフとの対立問題についてチーフに相談し、自分側にたった仲裁を期待したが、その交渉プロセスにおいて、チーフは、職場での立場、外国人スタッフの言動に対する肯定的評価を示し、I さんの譲歩と努力を要請した。その結果、チーフと I さんの間に異なりが対立し、結局、I さんは譲歩の努力の継続ができず、自己保存を貫き、仕事を辞めた。その背景には、チーフの自分と XX 人スタッフに対する対照的態度の違いに見られる 3 人の関係性と心理的状态があるとし、自己の正当化と責任の再分配をしている。さらに、問題の原因としての日本語能力不足や日本文化・社会の知識不足への言及から、I さんの孤立実体的な能力観がうかがえる。

マナーについて、周囲の観察を通してバングラデシュと日本における行動規範の異なりの気づきを挙げている。この気づきは、自国での日本語学習経験での限られた経験とつながるものであり、既有能力として保持される自国での学習経験の意義を指摘している。日本語については、十全的な人間生態における不可欠な要素なものと捉えている。いくつかの具体的場面で、限られた日本語という既有能力や言語以外の行為によって問題を解決しているが、I さんは、日本語能力不足を、そういう場面での緊張や、恐怖心、不安、そして日本人との交流が困難な原因として捉えている。日本語能力獲得がネットワーク構築の質の向上と拡大の実現に不可欠であると述べ、強い孤立実体的な能力のとらえ方をしている。来日直後の変化として、日本語力の若干の上達を挙げると同時に、粘り強いさや支援的な態度に見られる日本人の要素を自分に取り入れたいことを強調している。

日本語学校の生活については、授業の活動を通して日本社会との関わりの第一歩ができたことや教師のサポートに対して好感を持っている。また日本語使用については、限られた場面で既有能力（英語）を使用した上での工夫をしているが、日本語力に関する自己評価は低く、日本語使用の不可欠性を強調している。

求職活動でも日本語能力が最重要の要件であり、また人脈による紹介も重要であると捉えている。求職活動では、最初の接触段階（電話）で拒絶される体験を繰り返すことで、日本語能力を何よりも優先すべきだという意識が強化されている。目標として、相手の発話を聞き取り、要求に応えられるレベルを想定している。

将来の展望については、先進国の教育（学位）がキャリアにつながるとし、学位取得後の仕事の有無で決まるとしている。

日本人コミュニティとの関わりについては、現時点で接触が少ないが、接点を持つことを強く希望しており、その背景には自国と日本（お祭りなど）に見られる対照的な特徴を挙げている。個人的な日本文化への執着心、日本文化の知識獲得、自国への貢献を自国と日本の比較の理由としている。コミュニティへの関わりは、様々なチャンネルやリソースを利用して試行錯誤しており、よ

り効率的なチャンネルを求めている。血縁ネットワークである親戚は、道具的な動機が強い出稼ぎ労働者で、言語能力や時間的余裕がなく、自分のような知的好奇心は薄く、チャンネルの機能は期待できない。また、血縁ネットワークの中にあっても、日本に滞在するからには日本人と接触し、日本の知識を得ることは重要であることは、実際の体験に基づき断言できると主張している。

また、病院に付き添いで行った経験があり、そのときに日本の医療機関の診察際の手続きについて観察し、そのシステムを高く評価している。その反面、既習知識や言語能力を超えた相互行為を求められる場面であり、単独では、遂行が困難であるとしている。

公共交通機関の利用やあちこちに行くことに関しては、ハロウィンのイベントに参加した経験を挙げ、そこに集う日本人とのやり取りへの欲求と、その実現に必要な日本語能力の不足を強く感じたことを述べている。そして、日本での円滑な生活のために、コミュニケーションに必須の発話能力と情報収集に必須の漢字の知識を挙げ、自国で日本語学習を継続しなかったことへの後悔に触れており、孤立実体的能力観にたった日本語能力のとらえ方を示している。また、食生活上の困難については、宗教上、禁じられている食品の区別を指摘している。

バングラデシュの日本語学習者へのアドバイスとして、日本という国に対して肯定的に評価する一方で、サバイバルから関係構築まですべての生活の場面で日本語能力が必要であり、それを可能な限り習得してくることが在日生活の成否を左右するという孤立実体的能力観にたった見方で語っている。そして、日本人の勤勉さや仕事の繊細さと自国を比較し、日本文化、日本人社会への強い同化志向を示している。

上掲の全体ストーリーラインを見ると、マナーについて周囲の観察から自国と日本での行動規範の異なりに関する気づきがあった。Iさんの語りには傍観者の視点からこのような異なりの気づきが多い。その中で、日常生活の中でIさんが当事者として周りのコト、モノ、人との関わりの中で問題に直面したのは、「日本料理店でのアルバイト」の場面であった。

では、続いて、1回目から4か月後に行ったIさんの2回目のインタビューの特徴を見てみよう。Iさんは、1回目のインタビューで言及したアルバイト先を辞めた後、新しいアルバイトを見つけた。しかし、そこも辞め、2回目のインタビューの時点では、3つ目の職場で働いている。2回目のインタビュー全体ストーリーラインは次の通りである。

[Iさんの2回目インタビューの全体ストーリーライン]

Iさんは、来日してから現在までの変化として日本社会での生活上の安定感を挙げている。その背景には言語能力向上や自律的な行動の広がりに伴う自信と楽観的な見通しができてきたことがある。様々な場面における来日時と現在の対照的な自分のあり様に言及し、課題を克服してきたことからくる日常生活での自信を示している。特に際立った変化の例として、アルバイトでの経験に言及している。Iさんは、そこで再び労働環境や勤務条件における異なりの対

立と自己保存に関する経験をした。すなわち、自分の信念と職場の慣行を優先する上司との間に起きた勤務時間をめぐる異なりの対立があり、Iさんは、妥協せず、自己保存としての退職を選んだ。その理由として、再就職できる自信ができており、リスクの高い行動が取れたとしている。上司との交渉の過程について、学生の本分を主張するIさんと上司は、互いの自己保存が先鋭化し、異なりが対立した。Iさんは、それまで職場の人間関係の構築を視野に入れ、承認を得るための努力をしてきたが、職場のシステム化された残業に対する疑問を持ち続けた。自分の職務遂行能力に関しては、徐々に向上していたと自己肯定している。さらに、職場での日本語使用に関しては、学校で学ぶ教室場面と実際の場面で日本語使用の違いからくる会話参加の困難さに触れている。辞めたいきさつについて、1つ目のアルバイトは人間関係、2つ目のアルバイトは勤務時間をめぐる異なりの対立として説明した。

3つ目の現在のアルバイト先もこれまでと同業種の職場であり、仕事への慣れもあり、安心感を持って働いている。労働環境は良好で、仲間との調整行動もできており、同僚の支援に対して感謝の気持ちを持っている。職場はシフト性を取り入れ、アルバイトの間に互助的、互恵的な関係ができています。労働時間の調整においては、柔軟に対応され、学生の状況に配慮された環境である。管理者とIさんの間に都合がつかず、異なりが生じることもあるが、調整行動、想像力による相手へ状況への配慮を通して、異なりの対立の回避や内在的統合が図られていた。

Iさんは、3つ目の職場を、血縁ネットワークの助言をもとに、自身の自主的で積極的な求職活動によって獲得した。その過程で、日本語能力向上の必要性を要求されることもあったが、面接では、持っている日本語の力で課題を達成し、採用された。採用には賄賂が当然視される自国の就職と違い、日本では、職務遂行に十分な言語能力とまじめさがあればよいと述べている。孤立実体的な考え方の中に、共に働く人間としての適性に対する評価、すなわち関係性への意識が見られる。

以前の職場に関して、最初の職場は、言語能力の欠如による不本意な退職であったと言っている。XX人スタッフに対して、自己保存を可能にするだけの言語能力があれば、勤務を継続できたという孤立実体的能力観に基づく解決のイメージを持っている。

バングラデシュ人、日本人との関わりについては、前者とは稀薄、後者とも接触の機会が限られ、人間関係構築が困難であると言っている。新しい出会いもあったが、相手はIさんの期待とは異なる宗教勧誘の目的があり、交渉を拒絶し、関係は終結した。

日本語学校では、良好な学習環境にあり、学習動機が上がり、人間関係も構築できているという。また、日本人コミュニティに関しては、目標達成に向けた情報収集を行う過程で、日本語の上達が社会活動などへのチャンネルを開くと励まされて、日本語能力の重要性を確認している。

日本語使用については、言語能力の上達によって不安が解消し、自身で解決可能なことが増加したと述べ、孤立実体的な能力観にたった見解を述べている。また、警官の路上尋問を例に、このような同じ体験の繰り返しにおいては、

相手の行動パターンの理解、法的滞在であるという自信から、自身の反応が変化し、以前にはなかった余裕をもって対応できたことを述べている。

日本の生活では、孤立実体的な能力観の立場で、発話能力、漢字とマナーの知識が重要であり、日本人との関係構築には、仕事の正確さと速さ、礼儀正しさが重要だとしている。職場の人間との交渉については、自分の主張や提案を積極的にすれば、相手は受け止めてくれるといい、対話や交渉における相手の反応に対する信頼を示している。そして、職場は、相互行為を通して自分の存在をアピールできる場であるとしている。

Iさんの1回目と2回目のインタビューの全体ストーリーラインを通して見ると、日常生活の中での問題・課題解決の場としての「アルバイト」の重要性を確認できる。Iさんは、2回のインタビューで3つのアルバイト先での体験を語っている。1回目のインタビューでは、日本料理店でのアルバイト（以下、アルバイトⅠと称す）について、2回目のインタビューでも、2か所の日本料理店でのアルバイト（以下、アルバイトⅡ、アルバイトⅢと称す）について述べている。それぞれのアルバイト先でIさんは直面していた問題を解決するためにどのような対応をしていたのか、それは有効な対応であったのか、その中で彼の考え方や価値観のどのような変化が見られたのかを詳細に整理していく。

まず、次節では、アルバイトⅠで、Iさんが日本人チーフと外国人スタッフの間に生じた人間関係上の問題をどのように解決していこうと考えたのか、その際のIさんの考え方や実際の行動を詳細に追っていきたい。

4.3.2 分析結果と考察：アルバイトⅠ（外国人スタッフとの対立）

4.3.2.1 SCAT 分析の結果

本節では、IさんのアルバイトⅠのエピソードについての分析結果を述べる。まず、SCATによって分析した結果（マトリックス）を表4-2に提示する。表中、下線を付してある部分は、インタビューの中でIさんが日本語で言った部分を表している。また、マトリックス中の<1><2><3><4>は、SCATの4段階のコーディング作業、すなわち、<1>はテキスト中の注目すべき語句、<2>はテキスト中の語句の言い換え、<3>は<2>を説明するようなテキスト外の概念、<4>はテーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）を表している。マトリックス中、テキストの内容が本研究の分析対象にならないようなものである場合は、空欄になっている。発話番号の欄に18a、18bとあるのは、テキストが長く複数のテーマを述べているような場合、テーマごとにセグメントに分け、数字a、bのように示した。また、マトリックス中、「XX人」とあるのは、外国人スタッフの国籍を伏せるための工夫である。

表4-2 Iさんの「アルバイトⅠ」のSCAT分析

番号	発話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>
17	聞き手	来日してからどのような印象を受けましたか。自分が考えていた日本と実際の日本、何か違っていましたか。				

18a	I さん	日本は本当に…子供のころから日本に來たいと思っていました。來日してから、日本は(自分の国とは)違うということに気づきました。特に、日本人は時間をとても大切にします。これは第一の印象です。日本人は時間をとても大切にします。このことは、自分がアルバイトをし始めたとき、もっと強く感じました。アルバイト先の日本人は仕事がとても速かった、とても速いです。最初は、彼らについていけなかったです。第二は、仕事中に10分のブレイク、休憩がありました。10分の休憩だったが、私は8分～10分ぐらい休んでいたが、日本人は5分で戻ってきていました。彼らは休憩に行く前に何をするか計画を立てていて、戻ってきてすぐやっつけてしまいます。とても速いです。	子どものころから日本に來たいと思っていた、日本人は時間をとても大切にする、日本人は仕事が速い	日本への関心、仕事のスピード、時間に対する考え方	観察者、自分との違いの気づき	時間の観念における自文化との際立った差異に対する驚き、日本文化に対する高い評価、焦燥感
18b	I さん	そして、私にも(仕事を)速くやるよう求めてきました。これは私の生きた体験になりました。そして、日本語学校でも、先生や校長先生はとても親切でとても速い(仕事が)です。そんなことに気づきました。また、クラスメートはみんな外国人です。中国、ベトナム、インドネシア、フィリピンの学生がいます。彼らも(同じ意味で)日本は違うと思っています。バングラデシュとは違う(日本が)ことが気づきました。	日本語学校の先生も速い、日本語学校のクラスメートも同じことを感じている	仕事の速さ、自分だけの観察ではない	日本人の仕事の速さ、周囲の非日本人の評価	仕事の速さにおける日本人の特殊性、根拠としての非日本人の評価
19	聞き手	クラスメートたちもそれぞれの国と比べて日本は違うと言っているわけですね。				
20	I さん	はい。				
21	聞き手	アルバイトの話をしていましたね。今は何かアルバイトをしていますか。				
22	I さん	今はアルバイトをしていません。したいから、今は求職中です。				
23	聞き手	アルバイトは1つやったことがあると言っていましたね。どうやってそのアルバイトを見つけたか。				
24	I さん	日本に私のおじさんがいます。おじさんが紹介してくれました。そこで働いていました。	日本にいるおじ、アルバイトの紹介	親戚からの就職支援	血縁関係の支援による日本社会とのつながり	血縁ネットワーク日本社会へのチャンネル
25	聞き手	どんな仕事でしたか。アルバイトだったかちょっと教えてくださいませんか。				
26a	I さん	はい、もちろん。レストランのアルバイトでした。日本料理を作っていました。とても楽しかったです。楽しかった、同時に多少辛い経験もしました。楽し	楽しかった、日本人のチーフ、とてもいい人、いろいろなこと	日本人チーフとの友好な関係、指導者として	日本人の上司に対する肯定的な評価、親密	信頼できる初めての日本人との出会いと関係構築

		かったことは、そこにいた日本人のチーフはとていい人でした。彼はユーモアがあり、楽しく仕事していました(チーフが)。私を気に入ってくれていました。そして、いろいろなことを教えてくれました。明るい人だったので、私も落ち着いて働いていました。	を教えてくれた、私を気にしていた	の信頼感、自分にとっての居場所	な関係、自己肯定観、自尊心	
26b	I さん	逆に苦い経験はというと、そのXX人のスタッフがいきました。彼は私にときどき嫌がらせをしました。いじめともいえます。これはちょっと嫌な経験でした。日本語があまりできないので、いじめられたり、バカと言われたりしました。これは辛い経験です。それ以外、日本はOKです。	XX 人のスタッフ、私に対する嫌がらせ、日本語があまりできない、いじめ、バカと言われた	外国人スタッフの言動、日本語能力不足が原因のいじめ	対立関係の(唯一の)原因としての日本語能力不足	自分ではどうにもならない日本語力不足、外国人スタッフの言動への批判
27	聞き手	他の外国人が君に対してそのような行動をしたというわけですか。				
28	I さん	はい。そのとき、日本人とXX人の区別がだいたいできました。日本人のチーフはとても丁寧に仕事を教えてくれていたが、XX人は怒りっぽくて、親切ではありませんでした。このことから日本人は素晴らしいとあらためて感じました。	日本人チーフはとても丁寧に仕事を教えてくれていた、XX人は怒りっぽく親切ではない	XX 人に対する否定的なイメージ、日本人チーフに対する肯定的なイメージ	熟練者としての教え方の比較、日本人に対する肯定的な評価	業務指導におけるチーフへの肯定的、外国人スタッフへの否定的評価、非日本人と日本人の対比、日本人に対する肯定的イメージの強化
29	聞き手	そのアルバイトはどのくらい続けましたか。どうして辞めましたか。				
30	I さん	辞めた主な理由は、XX 人との苦い経験、あるいは彼の陰悪な振る舞いです。時々ひどいことをされたので、嫌になってやめました。また、家からも遠かった。学校から直接(バイト先に)行っていたが、家に帰るのが遅くなったので勉強に支障が出ました。このような理由で辞めました。このようにいくつかの理由で辞めました。	XX 人との苦い経験、陰悪な振る舞い、家からも遠かった、勉強に支障	人間関係の悪さ、日本語、学習に悪影響を及ぼす要因	XX 人スタッフに対する非難埋め合わせとしての他の要因	退職の原因としてのXX人スタッフの言動と学生の自分への支障、自身の行為の正当化
31	聞き手	仕事は君のおじさんが紹介してくれたのですね。				
32	I さん	はい。				
33	聞き手	そのため、君は履歴書を書いたり、インタビュー(面接)を受けたりしましたか。正式な手続きがありましたか。				
34	I さん	はい、履歴書が必要でした。履歴書(を書くの)はおじさんが手伝ってくれました。近くのコンビニから、市販の履歴書を買って、記入した上で、持って行きました。面接がありました。	履歴書、おじさんが手伝ってくれた、面接、日本語はまだまだ不十分、簡単	求職活動、おじさんのサポート、不十分な日本語能	生活の場を作るために親戚の助け	血縁関係ネットワークの支援

		いろいろなことを聞かれました。だいたい答えることができました。そのとき日本語はまだまだ不十分だったので、簡単な日本語で答えました。パスポートも見せました。履歴書を書くときちょっと大変だったが、おじさんが手伝ってくれてなんとかできました。	な日本語で答えた	力ながらも課題達成		
35	聞き手	バイト先で他のスタッフと起きた問題の解決のために何かしようとはしなかったのですか。				
36	I さん	はい、解決しようと思いました。日本人チーフに伝えました。もっと <u>頑張ってください</u> と言われました。そして「XX 人は社員で、君はアルバイトなんだよ」と言われました。2 人の間には差があるんだよと。チーフは私のことを気に入ってくれていました。「彼（XX 人）は君の仕事のためにいろいろいい事を言ってくれているのだから、もっと <u>頑張ってください</u> 」と言われました。頑張っでは見ましたが、我慢できなくなって辞めました。	解決しようとした、頑張ってくださいと言われた、XX 人は社員、君はアルバイト、XX 人スタッフは君のために言っている、もっと頑張ってください、我慢できなくて辞めました	問題解決に向けたチーフへの訴え、チーフへの期待とチーフの反応、XX 人スタッフに対するチーフの肯定的なコメント、努力の要請、努力の限界	調停者への期待、職場での上下関係・役割関係への理解の要請、XX 人の言動に対する正反對の評価、納得していない、譲歩の継続の不可能さ	XX 人社員との対立チーフへの自分側に立った仲裁の期待、譲歩と努力の要請、交渉プロセスにおける異なりの外在化、自己保存
37	聞き手	それは仕事が遅かったからですか。それとも他の原因もあったと思いますか。				
38	I さん	私を感じているのは、私にも問題があったということです。仕事が遅かったことも認めます。同時に、（XX 人の）自尊心の問題だったともいえます。チーフは私によく冗談など言っていました。私もそのような冗談を楽しんでいました。でも、チーフは XX 人とそのようなことはしていませんでした。だから、彼はやきもちを焼いていました。それも原因でした。仕事ができなかったことが 60%で、チーフが私のことを気に入って、いろいろな話をしてくれたことが 40%か 30%原因だったと思います。時々チーフは彼に対して、私に対するのとはちょっと違う態度をとっていました。	私の仕事が遅かった、自尊心の問題、XX 人スタッフははやきもちを焼いていた、チーフは私のことを気に入って、時々チーフは彼に対して、私に対するのとはちょっと違う態度	職場の一員としての自分の未熟さ、チーフの自分の関係と XX 人との態度の比較、XX 人の自分に対する嫉妬	自分の落ち度への言及、対立の原因の分析、XX 人スタッフに対する非難への埋め合わせ	3 人の関係性と各々の心理、対照的なチーフの態度、責任の再分配、自己の正当化
39	聞き手	そこで言語能力が影響したと思いますか。				
40	I さん	はい、もちろん。まず、日本語を十分学習していなかったことです。特に、日本のレストランで使用する日本語をほとんど知らなかったともいえます。それは大きかったです。例えば、仕事でチーフあるいは他の	日本語を十分学習してこなかった、レストランで使用する日本語、何を示している	仕事ができなかったことを示す具体例	問題の原因としての日本語能力、日本の社会・知識不足の具	孤立実体的能力観に基づいた能力、知識の捉え方

		日本人社員が「〇〇」を持ってきて、と言われても、その「〇〇」って何を示しているかわかりませんでした。あるいは、料理の名前は分かりましたが、どういう風にお客さんに出したらいいのか分かりませんでした。普段教えてくれましたが、忙しいとき、彼らも「〇〇」はこれだ、ここにあると、一々説明する時間がありませんでした。これは私の至らない点でした、学んでこなかったからです。そして、日本のレストランに関する他のもの、マナー、態度にも足りない部分がありました。それも感じました。	か分からなかった、どういう風にお客さんに出したらいいのか、マナー、態度		体的な説明	
41	聞き手	どんなところが足りませんでしたか。				
42	I さん	日本のレストラン（職場に）行った時や帰る時の挨拶、出るときの挨拶、あるいはお客様への接し方、このようなことに私の至らない点がありました。何を話さなければいけないのか、言語能力が足りませんでした。少しずつ乗り越えていましたが、そのとき感じたのはこの弱点は無くさなければならないということです。日本の文化ではマナーはとても大事です。日本人はマナーにとっても気をつけています。	挨拶、お客様への接し方、私の至らない店、言語能力が足りなかった、乗り越えていた、弱点は無くさなければならない、マナー	言語能力が不足、マナーを身につける	持っている知識を重視	孤立実体的能力観に基づいた日本語についての捉え方

4.3.2.2 考察

I さんはアルバイト I をする際に、周りの人とどのような問題を生じ、その問題へどう対応していたのか、ここでは、日本人チーフと 1 人の外国人スタッフ、I さん、3 人の人間関係について、表 4-2 から何が言えるかを考えてみたい。

4.3.2.2.1 I さん、日本人チーフ、外国人スタッフの人間関係

まず、I さんと日本人チーフの関係について、〈26a〉の発話を見ると、I さんは、日本人チーフについて、「そこにいた日本人のチーフはとてもいい人でした。彼はユーモアがあり、楽しく仕事していました」と好意的に評価し、「私を気に入ってくれていました」「いろいろなことを教えてくれました」と述べている。I さんは、〈38〉でも「チーフは私によく冗談など言っていました」と述べ、日本人チーフと良好な人間関係を作ることができていたことを強調している。日本人チーフとの冗談話をしたり、いろいろなことを共有したりしたことによって、職場で親密な個人的な関係を構築していたといえる。

次に外国人スタッフとの関係について見てみよう。I さんは、〈26b〉で「彼は私にときどき嫌がらせをしました。いじめともいえます。これはちょっと嫌な経験でした。日本語があまりできないので、いじめられたり、バカと言われたりしました」と述べている。また、〈28〉では、「…（前略）XX 人スタッフは怒りっぽくて、親切ではありませんでした」と述べ、外国人スタッフとの関係がよ

くなかったことを述べている。外国人スタッフと I さんの間で具体的にどのようなやりとりがあったのかを詳細に見るために、フォローアップ・インタビューを行った。結果、以下のような語りが得られた。

聞き手：そのような距離があったこと、あるいは仕事の速さについて彼の期待が高かったこと、それがわかるような具体的なやり取りの例を言ってもらえませんか。

I さん：例えば、サラダ（を作る）のことです。日本のサラダは違います。いろいろな材料で作ります。野菜やドレッシングなどを使います。最初のころは覚えられませんでした。同じサラダでも 7～8 種類の材料が使われます。そしてサラダもまた何種類もありました。それで、最初のころは「これはここで使えるか」など聞かなければなりませんでした。そのようなことが彼の気に召さなかったようです。

聞き手：気に入らなかったことがあったとき彼は何と言いましたか。

I さん：「これはここで使えない。早く覚えるように。速くできるようにしなさい。」などと言いました。私は精一杯頑張りました。それでも、彼の態度はちょっと変でした。彼の態度は特に他の人とは違うと私には思われました。

この語りを見ると、I さんは、外国人スタッフが自分に親切に教えてくれなかったと感じている。ここからも I さんは XX 人とあまりいい関係がなかったことがわかる。また、<30>を見ると、外国人スタッフとの関係の悪さは、I さんがアルバイトを辞める大きな原因の一つになっている。

I さんは、日本人チーフと外国人スタッフの関係をどのように見ていたのだろうか。<38>の発話を見ると、「チーフは私によく冗談など言っていた。私もそのような冗談を楽しんでいた。でも、チーフは XX 人とそのようなことはしていなかった。だから、彼はやきもちを焼いていた。」と述べている。自分と日本人チーフとの関係が、外国人スタッフと日本人チーフとの関係より良好であり、そのことを外国人スタッフが快く思っていなかったと、I さんが考えていたことがうかがえる。

では、I さんは、外国人スタッフとの問題を解決するために、どのような対応策を考えたのだろうか。<36>の発話を見ると、I さんは、日本人チーフに相談した。その結果、日本人チーフから「もっと頑張ってください」「『XX 人は社員で、君はアルバイトなんだよ』と言われました。2 人の間には差があるんだよと。チーフは私のことを気に入ってくれていました。『彼（XX 人）は君の仕事のためにいろいろな事を言ってくれているのだから、もっと頑張ってください。』と言われました」。I さんはチーフが I さんの味方をして、この問題解決に XX 人に何か指示してくれるだろうと期待していたが、チーフのこの言葉は、I さんの期待とは大きく異なったものであり、日本人チーフの積極的な支援を得られなかったことがアルバイトを辞めた原因の 1 つになっていたともいえる。アルバイトを辞めることに関してチーフと具体的にどのようなやり取りがなされたのかを

明らかにするために、フォローアップ・インタビューで確認した。結果、以下のような語りが得られた。

聞き手：そのとき、チーフは何を言いましたか。

I さん：チーフは「こちらで聞いてみる。君はもう少し速くできるように頑張って。彼も君がもっと速く仕事をしてくれるようにと思っている。彼にも聞いてみる。」と言いました。その後、彼（XX 人）と直接話したようです。

これらのやり取りを見ると、チーフは I さんの期待通りに対応してくれなかったことがわかる。I さんは日本人チーフと良好な人間関係を築いていたと考えていたが、実際には、それは冗談を言い合ったり雑談をしたりする際に感じられた個人的な良好な関係であり、円滑に業務を遂行する、他の社員との関係を修復するなど、仕事レベルでの込み入った場面でも有効に機能する関係ではなかったと言える。

4.3.2.2.2 I さん、チーフ、スタッフ間の異なりの対立

ここで異なりの対立について考察する。ここでの異なりは、I さんと日本人チーフとの関係について、冗談・雑談レベルでの良好な人間関係と、仕事に絡む制度的な社会的な立場の違いを考えた人間関係の異なりである。I さんは、外国人スタッフとの関係修復のために、自分と良好な関係にあると考えている日本人チーフが、自分の味方になって、有利な仲介をしてくれるだろうと期待していたと考えられるが、実際には、その期待に反して、日本人チーフは I さんに外国人スタッフの指示に従うように言った。その思いの食い違いが、I さんがアルバイトを辞める大きな原因になったと考えられる。

言語生態学の考え方によれば、他者とこのような異なりの対立が生じたとき、対話を通して交渉し、理解し合うことによって異なりの内在的統合を図ることが必要である。この異なりの内在的統合は、人間生態の良さ、すなわち、生活の質の良さにつながる(平野 2011)からである。異なりの内在的統合が実現しなければ、異なりはそのままの状態の外在化されることになる。それは、互いの考えや態度を否定的に見る状態の持続を意味し、双方にとって決してプラスにはならない。

このデータから I さんがどれぐらい日本人チーフと外国人スタッフと自分との異なりの内在的統合を意識していたかはわからないが、外国人との問題についてチーフに相談したことは、何らかの解決を目指していたと推察できる。しかし、最終的に I さんと日本人チーフと外国人スタッフの間の異なりは内在的統合されず、I さんにとって働きやすい環境にならなかったと考えられる。

4.3.2.2.3 I さんに見られる孤立実体的能力観

本節では、I さんが能力をどのように捉えているかを検討する。I さんはアルバイトの失敗の原因を「自分自身の日本語能力」や「日本人の仕事の進め方」

や「マナーに対する知識や情報が充分ではなかった」ことに帰している。言い換えれば、自分自身の日本語能力を高め、日本人の仕事の進め方についての知識を豊かにすることができれば、日本料理店のアルバイトで体験したような人間関係によって引き起こされた問題にうまく対応できると考えていると言えよう。データを詳細に見ると、質問者からアルバイトを辞めた理由を聞かれて、Iさんは<40>で第一の理由として、「まず、日本語を十分学習していなかったこと。特に、日本のレストランで使用する日本語をほとんど知りませんでした。」を挙げている。<42>では、「日本のレストラン（職場に）行った時や帰る時の挨拶、出るときの挨拶、あるいはお客様への接し方、このようなことに私の至らない点がありました。」と述べ、自分自身の日本語の知識や日本語能力が充分ではなかったことを吐露している（<26b><34><40><42>）。

そして、Iさんは仕事の進め方を身につけることの重要性を強調している。具体的には、<18a>でアルバイト先で気がついた点として「日本人は仕事がとても速かったです。」「最初は、彼らについていけませんでした。」「日本人は5分で戻ってきていました。彼らは休憩に行く前に何をするか計画を立てていて、戻って来てすぐやってしまいます。」「私にも（仕事を）速くやるよう求めてきました。」などと述べ、日本人の仕事の速さに驚いている。マナーや態度の重要性も強調している。

言語生態学の理論で考えると、Iさんは、言語能力を含めた自分の能力を非常に孤立実体的に捉える傾向が強いといえる。つまり、彼は、能力を、自身を取り巻くコト・モノ・人との関係を包括したもの、つまり生態学的能力としてではなく、まず、自分が獲得するものとして考えている。自分の言語力さえ上達できれば多くの問題が解決できると思い込んでいるように思われる。言語生態学では、生態学的能力の重要性を強調している。Iさんは、日本人チーフや外国人スタッフの考え方や価値観、さらには彼らの職場での立場と社会的な役割などをもう少し考慮し、自分との異なりを埋め、内在的統合に向けて努力することが必要だったと考えられる。それは、自分の能力や知識を高めることだけで達成されることではないと考えられる。Iさんにとって、周りにいる人のことをよく知るとともに、自分の考えや価値観を周りの人に知ってもらうための努力をどのように進めていけばいいかが重要だったと思われる。

4.3.3 分析結果と考察：アルバイトⅡ（終業時間をめぐる対立）

Iさんは来日して8ヶ月後2回目のインタビューを行った。この時点でIさんが当事者として日本社会にどう関わっているかに注目した。Iさんの2回目のインタビューから得た全体ストーリーラインは前節に記述したとおりである。マトリックス全体は添付資料とする。

本節では、2回目のインタビューでIさんが語った2つのアルバイト先でのエピソードを、必要に応じてフォローアップ・インタビュー・データの分析を加えながら、問題解決の過程を分析・考察していく。

4.3.3.1 SCAT 分析の結果

本項では、2つ目のアルバイト先のエピソードについての分析結果を述べる。

まず、SCAT によって分析した結果（マトリックス）を表 4-3 に提示する。

表 4-3 I さんの「アルバイトⅡ」の SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>
5	聞き手	分かりました。日本はどうですか。				
6	I さん	日本…以前よりも暮らしやすくなったと感じています。経験も積んでいるし、いろいろなことも分かるようになっていくし、以前と比べていい感じになってきています。（日本のことを）知れば知るほどいいなと思うようになりました。	経験も積んでいる、以前と比べていい感じ、知れば知るほどいい	体験から来る自信、充実感	緊張からの開放	日本社会での生活上の安定感
7	聞き手	そうですか。この前、話したのは4ヶ月前ですね。この4ヶ月で生活上で何か重要な変化がありますか。				
8	I さん	生活の面です。当然いくつかの変化が起きています。特に、私の言語能力は以前と比べて向上したような気がします。そして、どこかへ行くこと、何かを探して見つけること、日本人とのコミュニケーション（会話）すること、全体的に上達しました。（これから）時間と共にもっと上達していくでしょう。だんだん上達しています。	生活、変化が起きている、言語能力、日本人とのコミュニケーション上達した、全体的に上達した	言語能力の向上、自信が身に付く、情報検索		言語能力向上に伴う自信と楽観的な見通し、自律的な行動の広がり
9	聞き手	はい。ここで「上達」って何を示していますか。もう少し具体的に教えてください。				
10a	I さん	「上達」は特に、アルバイト先で、そして、電車で移動するとき、学校でも上達したことを感じています。特に、アルバイト先ですね。以前は、萎縮したり、心細く感じたりしていましたが、いまはほぼ克服できました。来日直後に自分が頼りにならなくて、いつも不安を感じていました。今は一人であちこち行けるようになりました。そして、アルバイト先で以前の不安は今は感じていません。今、アルバイト先の社員とか、正社員とのやり取り、あるいは、返答をすることはできるようになりました。	以前は萎縮したり心細く感じたりした、自分が頼りなくて、いつも不安を感じていた、正社員とのやりとり、あるいは返答することができるようになった	言語能力の向上、緊張感や不安の減少、自信の高まり	日常生活への慣れ、緊張感や不安感の克服、以前との比較	様々な場面における来日時と現在の対照的な自分のあり様、自律的な生活、日常生活での自信

10b	I さん	特に前のアルバイト先のチーフとの出来事をここで挙げたいと思います。12 月にその仕事を始めました。その店長あるいはチーフは面接のとき、仕事は午後 6 時から 10 時半までだと言っていました。ですが、いつも 10 時 52 分、10 時 53 分あるいは 10 時 50 分ごろになってから、「今日はこれで終わり。帰ってもいいよ。」と言われました。一ヶ月、ほとんど毎日これが繰り返されました。それがとても気になりました。私は学生ですから、時間はとても大切です。それで、ある日、チーフになぜ私に余分な仕事をさせているかと尋ねました。契約の時間より 20～22 分もオーバーしています。そのとき、そのチーフというか店長の答えは「ここでのルールはこうだ。仕事は 10 時半まででも、その後も残ってしなければならない」というものでした。私は、それは 10 分、5 分、7 分ぐらいならいいけど、毎日 20～22 分、18 分、20 分、16 分ぐらいともなると私にとっては問題だと伝えました。すると向こうはそのとき「それはどうしようもない。ここでアルバイトをするなら、このようにしないとイケない」と言いました。それで私はそのとき、私も「それなら、私は新しい仕事を探す」と言いました。彼らも「いいよ」と言い、私はその仕事を辞めました。なぜこうなったかというところ…	仕事は午後 6 時から 10 時半まで、10 時 50 分になってから、とても気になった、なぜ私に余分な仕事をさせるのか、時間はとても大切だ、契約の時間より 20～22 分もオーバーしている、「ここでのルールはこうだ」、新しい仕事を探す、仕事を辞めた	契約時間と実際の終業時間に差、慢性化した残業に対する不満、取り合ってもらえなかった主張、自分にとって時間の意味	アルバイトの雇用条件と理解の齟齬、労働に対する自分なりのルール、不当な労働に対する疑問の表明、上司による職場の慣行の尊重の要求、退職を選択	勤務時間をめぐる職場の慣行、自分の信念と職場の上司との異なり、対立、自己保存としての退職
11	聞き手	はい。どうぞ続けて。				
12	I さん	なぜかという、私は自信がついてきていたんです。この仕事を辞めても新しい仕事を見つけることができるという気持ちがありました。ですから、そのアルバイトをやめたんです。	自信、仕事を辞めても新しい仕事を見つけることができる	楽観的な行動	自信	再就職できる自信、リスクの高い行動

13	聞き手	そうですか。余分に仕事させられたことによって、辞めてしまったわけですね。自分の事情を説明し、10時半までに終わらせるように交渉しなかったのですか。				
14	I さん	はい。そのことは伝えました。10時半までなら、助かります。その場合、20～25分で家に帰って、2時間ぐらい勉強することができます。他の仕事（家事）もあります。これは彼らに伝えました。勉強と同時に料理などの家事もしなければなりません。しかし、それを言っても向こうは聞いてくれませんでした。自分たちの言い分を主張してきました。	家に帰って、勉強することができ、勉強と同時に料理などの家事もある、向こうは聞いてくれなかった	事情説明、勉強と仕事の両立、学生の本分、勤務先の無理解	労働慣行をめぐる異なり、交渉の決裂、	学生と立場での主張、自己保存の先鋭化、異なりの対立
15	聞き手	はい。				
16	I さん	確かに（以前）仕事ももっとスピードアップするよう言われたこともあります。私は（アルバイトを始めた）最初から仕事をできるだけ速くするように努力していました。まあ、彼らはいい人でした。最後に（営業時間の終わりごろ）注文が入ったとき、対応したことを「頑張りましたね」と褒めてくれました。	仕事ももっとスピードアップ、仕事をできるだけ速くするように努力した、彼らはいい人、褒めてくれた	仕事の効率化、肯定的評価	要求に応える姿勢	人間関係構築、承認を得るための努力
17	聞き手	10時半までの仕事は具体的にどんな仕事でしたか。				
18	I さん	どうしてそういう仕事が発生したかという、（そのレストランでは）ラストオーダーは10時、9時55分～10時ごろに入っていました。それに対応してから、片付けし始めていました。片付けながら注文にも対応していました。お客様は10時40分、45分あるいは35分に帰っていました。お客様が帰ると、その使い終わった皿を洗わなければなりません。それで、勤務が10時50分を越えてしまっていました。これは結構な（長い）時間といえます。	ラストオーダー、9時55分～10時ごろ、片付けながら注文にも対応、勤務が10時50分を越えてしまっていた、結構な（長い）時間	労働慣行、残業、営業時間の使い方、バイト先の制度への不満	労働慣行に対する異なり	システム化された残業に対する疑問
19	聞き手	先ほど、最初のころは、仕事のスピードを速くするように言われたということでは				

		たね。				
20	I さん	はい。				
21	聞き手	君の仕事ぶりに、彼らはどの程度満足していましたか。あるいは、君自身はどう評価していますか。				
22	I さん	どこであろうと最初のころは仕事に慣れるまで少し時間がかかります。仕事になればスピードは上がります。そうでないと時間がかかります。だから、最初のころはちょっと時間がかかっていました。少し時間かかっていました、あるいは、できませんでした。ですが日毎に改善できていたと感じています。	仕事に慣れるまで時間がかかる、慣れればスピードは上がる、日毎に改善できていたと感じている	自己評価、仕事に対する慣れ、スピートアップ	慣れ、高い自己評価、労働能力の向上	自信、能力向上、能力向上の実感、自己肯定
23	聞き手	つまり、自分では満足できていたということですね。				
24	I さん	そうですね。だいたい満足できていたと思います。				
25	聞き手	1ヶ月間その仕事をしたわけですが、言語使用上に何か困ったことがありましたか。				
26	I さん	言語に関する問題は最初のころは多少ありました。日本語は細かいところで意味が微妙に違うってしまう言語なので、時々理解できないことがありました。多少問題はあったことは確かです。来日してから5・6ヶ月で完全に（日本語を）習得することは不可能でしょう。そして、私たちは教科書で「普通形」を学びましたが、彼らの話し方はちょっと違います。私と話すときには…。私は「丁寧形」で話しましたが、彼らは私に対して「普通形」を使いました。（話し方が）ちょっと違っていたし、彼らの話すスピードが速かったです。日本人の会話はスピードがとても速くて、私には理解しにくいものでした。	日本語は細かいところで意味が微妙に違うってしまう、理解できないことがあった、5・6ヶ月で完全に習得することは不可能、「普通形」、「丁寧形」、彼らの話し方はちょっと違って、スピードが速かった	日本語の特徴、日本語理解の難しさ、教科書で学ぶ日本語と実際に使われている日本語の異なり、スピード	教科書の日本語の限界、日常生活の中での日本語理解の難しさ	教室場面と実際の場面で日本語使用の違い、会話参加の困難
27	聞き手	教科書で習ったのは「丁寧形」でしたか、「普通形」でしたか。				
28	I さん	教科書は主に「丁寧形」でした。				
29	聞き手	そうですか。				
30	I さん	みな私に対して速いスピードで話をしました。例えば、	速いスピード、彼らは	丁寧体と普通体、受容		

		私たちは「いいです」と言うところを、彼らは「いいよ」と言います。このような場合、言葉はちょっと（分かりにくい）…	「いいよ」と言う	の難しさ		
31	聞き手	4ヶ月前に話したときは、仕事をひとつ辞めた後でしたよね。				
32	I さん	はい。				
33	聞き手	そのとき、仕事を辞めた原因として、「言語能力」と「仕事の速さ」を挙げていましたね。それと比べて、まあ、そこにいたある外国人（の同僚）とうまくいかなかったこともあったかと思いますが、そのときと比較して今回の仕事を1ヶ月で辞めた原因には、同様な、あるいは違った要素がありますか。				
34	I さん	ええと…、同じようなこととは言えば合わなかったこと、つまり時間が合わないことです。それから、前の仕事のときと比べて今回は日本語が上達しています。	時間が合わない、前の仕事のときと比べて今回は日本語が上達している	時間調整の難しさ、日本語能力の向上	日本語能力、自信、時間調整	
35	聞き手	はい。				
36	I さん	その仕事で良かったことと言えば私の言語能力が以前と比べてあがったことです。同時に、仕事もスピードアップできました。そうしたことは満足しています。ですが、遅くまで仕事をさせられたことが不満でした。	言語能力が以前と比べてあがった、仕事もスピードアップ、満足、遅くまで仕事、不満だった	日本語能力の向上、仕事の効率化、残業に対する不満	日本語能力と仕事の効率アップに対する満足感、外的要因による退職	1つ目のアルバイトとの対照的な言語、業務遂行における向上
37	聞き手	ここでちょっと伺いたいの、この2つの仕事を辞めた理由に何か比較できますか。				
38	I さん	前の仕事との比較…、今回の仕事でスピードが速くなった、言語能力も高くなったです。ですが、一番問題として感じていたのは時間通りに終わらせてくれなかったことです。遅れて帰らせることです。そして、前の職場で一人の外国人がいて、彼は私を嫌がらせをしました。この仕事でこのようなことはありませんでした。この面でしました。前の仕事で言葉の理解が不十分でしたが、この仕事で比較的にできるように	前の仕事との比較、スピードが速くなった、言語能力も高くなった、一番問題、時間通りに終わらせてくれなかった、前の仕事で言葉の理解が不十分	日本語能力の向上、仕事の効率化、残業に対する不満、人間関係上の問題がなかった	残業に対する考え方の異なり、異なりの対立、良好な人間関係	人間関係の問題、勤務時間の問題、異なりの対立

		なっていました。これもいい点でした。だけど、問題は遅くまで仕事をさせられることです。				
--	--	--	--	--	--	--

次にアルバイトⅡで問題になった終業時間をめぐる日本人チーフとの対立について、Iさんのインタビュー・データを詳しく分析・考察する。分析方法は前述の4.3.2と同様である。

4.3.3.2 考察

2回目のインタビューでのIさんの語りからは、生活上の安定感、自信などの特徴が見られた。まずは、発話<6>で「経験も積んでいるし、いろいろなことも分かるようになっていっている。」と述べていることから、安心して生活ができていることがわかる。また、<8>に「私の言語能力は以前と比べて向上したような気がします」とあるように、この時点で最も変化を感じているのは日本語能力の向上である。アルバイトⅠでは、日本語能力が足りないからさまざまな問題が生じていたと強調したIさんは、この時点で日本語でコミュニケーションができるようになったことを自分の中で最も大きな変化として捉えている。Iさんの中では日本の生活において余裕が出てきたように思われる。

以上のようなIさんの変化をふまえ、アルバイトⅡの場面でIさんと周りの人との間にどのような問題が生じ、それを解決するためにどのような対応をしていたのか、ここでは、日本人チーフとIさん、2人の人間関係に焦点を当てて考えてみたい。

Iさんは<16>で「彼らはいい人でした。」と述べており、職場でいい関係にあったといえる。また、<16>では、「最後に（営業時間の終わりごろ）注文が入ったとき、対応したことを「頑張りましたね」と褒めてくれました。」と述べている。Iさん自身も店側の要求に応える姿勢を見せていた<16>。このようなエピソードから、両者の人間関係に特に大きな問題はなかったといえよう。

4.3.3.2.1 残業に対するIさんと日本人チーフの考え方

しかし、Iさんは、仕事の面接のとき「10時半まで」と言われたにもかかわらず、ほとんど毎日20～30分程度の残業をさせられることを非常に不満に感じるようになっていた<10b>。Iさんは、チーフになぜ契約外の時間に働かなければならないのかを聞いた<10b>。チーフは20分ぐらいの終業時間の延長は、その店の慣行であることを説明した。そのとき日本語でどのようなやり取りがあったのかを具体的に提示するために、フォローアップ・インタビューを行った。結果、以下のような語りが得られた。

聞き手：前のインタビューでこれ（時間の延長）は自分にとって受けられることができなかったと言っていましたね。そのときの話を、完璧には言えないかもしれませんが、覚えている範囲でチーフとのやり取りを教えてくださいませんか。

I さん：ええと、最初、店長に「私の契約時間は 10 時半まででした。『終わり』となるのが 10 時 35 分なら良いのだけれど、こうやって毎日 20 分とか、22 分とか、18 分とかオーバーするのはなぜですか。」と彼に質問しました。「その理由を教えてくださいませんか。」と聞きました。彼（チーフ）はあまり詳しい話はしませんでした。「我々のお客様が店を出るのは 10 時 40 分になってしまいます。お皿を片づけしていると時間がちょっとオーバーしてしまう。」と答えました。そのとき、私は「そうでしたら、11 時まで仕事をさせてください。もう 10 分延長したら、時間の節約ができます。私は学生だから、時間の節約ができます。終了時間を 20 分だけ伸ばすなんて意味がありません。」と言いました。

聞き手：ちょっと確認させてください。11 時までなら、「時間の節約ができる」とはどういうことですか。

I さん：そうしたら、30 分の給料をもらえるからです。

上記の 2 つ目の発話「毎日 20 分とか、22 分とか、18 分とかオーバーするのはなぜですか」に見られるように、I さんは延長した時間に関してこだわりがあった。このことに関して、フォローアップ・インタビューでは、もう 10 分延長し、30 分の給料がもらえるなら、不満がないと考えていたことがわかった。すなわち、終業時間が 20 分オーバーしていたことというよりも、報酬がない労働を 20 分させられていたことが問題であったことがわかった。上記の I さんの 2 つ目の発話にみられる「もう 10 分延長したら、時間の節約ができます」という表現から、なるべく時間を効率的に使いたいという気持ちがうかがえる。

それに対して、チーフは<10b>では「それはどうしようもない。ここでアルバイトをするなら、このようにしないとイケない」と答えた。フォローアップ・インタビューの 2 つ目の発話に見られる、「後片付けで時間がちょっとオーバーしてしまう」というチーフの返事からもこの程度の延長は当たり前だという店側の姿勢がうかがえる。

しかし、I さんはその職場で終了時間後にも残って後片付けするという労働慣行を了解することができず、他に仕事を見つけれられるという自信もあり、そのアルバイトを辞めた。自分の労働時間を職場の慣行に合わせるという調整をしないことが I さんの自己保存の現われだったと考えられる。すなわち、I さんとチーフがそれぞれの自己保存が表出し、異なりの対立が起き、解決のために歩み寄りの交渉はされず、その結果、異なりが外在化されたと考えることができる。この背景には、I さんが自国で働いたときの経験があると考えられる。バングラデシュの労働慣行では、契約の時間に仕事が終わるのが普通である。

4.3.3.2.2 I さんに見られる孤立実体的能力観

バングラデシュでは大学生がアルバイト、特に飲食店のアルバイトをする習慣はない。社会的にこのような仕事はあまり評価されないこともあり、通常の学生は自国ではこのようなアルバイトの経験はほとんどない。I さんも来日前は

事務職の経験があるが、いわゆる飲食店のアルバイトの経験はなかった。来日直後に最初のアルバイト(アルバイトⅠ)をしたが、数ヶ月でそこを辞めて2つ目(アルバイトⅡ)で働き始めた。Iさんは、このアルバイトの業務が以前と比べて円滑にできていたと述べ、その理由は「仕事の進め方」の理解と「日本語能力」の向上だと述べている。自分が持っている能力だけで相手に評価されることを期待していた。ということから、Iさんの中で孤立実体的能力観が見られたといえるだろう。Iさんはチーフに「仕事が遅いです」と言われ、自分もそう感じている。また、〈18〉で述べているように「10時40分に帰るお客さんもいます」ということは誰かが後片付けをしないとイケない。そのレストランのルールでもあるし、仕事が元々遅いIさんにチーフが後片付けを期待したことが店側の慣行からみると不適切ではないと考えられる。それに対して、Iさん自身が、仕事が円滑にできないことに気づいているにもかかわらず、終了時間直後に帰らせてもらいたいと言ったことは、仕事に対する責任を感じていなかったように見られたとも考えられる。Iさんが取っていた対応策が有効ではなく、この問題の解決はできなかった。職場の慣行について、Iさんとお店側の考え方最後まで対立したままで、ここも問題の解決ができず、異なりの外在化されてしまった。

4.3.4 分析と考察：アルバイトⅢ（相互配慮による業務時間の調整）

本節では、3つ目のアルバイト先のエピソードについての分析結果を述べる。

4.3.4.1 SCAT 分析の結果

まず、SCATによって分析した結果（マトリックス）を表4-4に提示する。

表4-4 Iさんの「アルバイトⅢ」のSCAT分析

番号	発話者	テキスト	〈1〉	〈2〉	〈3〉	〈4〉
53	聞き手	しかし、その仕事は1ヶ月で辞めてしまいましたね。その後、今は何かしていますか。				
54	Iさん	今はまた別のところで仕事をしています。同じような仕事です。これもレストランの仕事です。キッチンで料理を作っています。以前のところと比べてこれの方がよくて、自分に向いていると思っています。	同じような仕事、以前のところと比べてこれの方がいい、自分に向いている	慣れている仕事、今の職場に対する満足感	慣れた仕事で落ち着く	同業種の職場、仕事への慣れ、安心感
55	聞き手	まず、そのキッチンのスタッフについて、何人いますか、どんな人たちですか、簡単に教えてください。				

56	I さん	そこは、ホールとキッチンに合わせて、ちょっと（人数が）多くて 20 人ぐらいいます。シフト制なので、キッチンにだいたい 8 人で、ホールは 12 人ぐらいが働いています。ホールで働いている人のほとんどは学生だから、それぞれの（勤務）時間を <u>短く</u> し、みんなに仕事が行き渡ようになっています。	シフト制、ホールで働いている人のほとんどは学生、それぞれの（勤務）時間を短く、みんなに仕事が行き渡る	働いている人が多い、学生が多い、勤務時間の調整	学生アルバイトが働きやすい環境	良好な労働環境、仲間との調整行動
57	聞き手	キッチンでは 8 人全員がいつぺんに働いているんですか。				
58	I さん	いいえ、キッチンには 5 人が入っています。				
59	聞き手	そこには君以外に外国人がいますか。				
60	I さん	いいえ、他の外国人はいません。				
61	聞き手	そのスタッフとの関係はどうですか。彼らといっしょに仕事することはどうですか。				
62	I さん	他のスタッフとの関係は良いです。仕事で分からないことがあると教えてくれます。最初、全く分からなかった時も教えてもらって助かりました。	他のスタッフとの関係は良い、仕事で分からないことがあると教えてくれる	良好な人間関係、親切的なスタッフ	支援が得られる場	同僚の支援への感謝
63	聞き手	そこでは勤務時間はどうですか。時間通りに帰らせてもらっていますか。				
64	I さん	前のような問題は新しい職場ではありません。時間になったら、彼らのほうから「 <u>終わり</u> 」と声がかかって、「タイムカードを押してください」と言われます。5 分、7 分ぐらい超過することはあるが気になりません。その程度なら問題はあります。だいたい時間通りに終わっています。3、4 分の遅れは気にしません。	彼らのほうから「終わり」、タイムカード、だいたい時間通りに終わる	問題にならない程度勤務時間の延長	終了時間に対する安心感	
65	聞き手	なぜ彼らは時間通りに帰らせてくれるのでしょうか。君の方から勉強のこととか言いましたか。				

66	I さん	自分からは言っていないです。私が帰ってしまっても、他のスタッフがいるからです。ですから、帰らせてもらえます。私と同じような状況の人がもう一人いて、彼も用事があるときは早くあがることがあります。例えば、今日は私が早く帰って、あしたは他の人が早く帰るというようなことになります。誰か必ずいるから、店は私を時間通り帰らせることができます。	他のスタッフがいるから、帰らせてもらえる、誰か必ずいる	シフト制、お互いに助け合う	安心感	互助的、互恵的関係
67	聞き手	その後、誰かが（新たに）入りますか。あるいは、そこに別の人がいるということですか。				
68	I さん	誰かがいるのです。				
69	聞き手	そうですか。				
70	I さん	（学校で）試験があるときなどは、そう申し出れば時間より早く帰らせてもらえます。例えば、あしたは試験だと伝えれば1時間とか2時間前に帰してもらえますが、その場合は事前に伝えておかねばなりません。伝えておけば、検討してもらえます。今日はだめだけど、次のときは言ってくれば、考えてみるとか言われます。交渉の余地があります。	試験があるとき早く帰らせてもらえる、事前に伝えておけば検討してもらえる、交渉の余地がある	事前に説明、交渉、早退できる、事前連絡の必要性	労働時間の調整・交渉	労働時間の調整、柔軟な対応、学生の状況への配慮
71	聞き手	そうですか。これについてもう少し具体的に教えてください。時々、試験や勉強のために早退させてもらっているわけだね。				
72	I さん	はい。				
73	聞き手	どういう風にそれが可能になるのでしょうか。またそのことを店側はどう見ていますか。				
74	I さん	実は、試験のことは7日、…5日前に連絡しなければなりませんが、例えば今月20日とか、22日に試験があるからとか言えば勤務時間を変えてくれました。夕方7時から10時まで、あるいは、6時から9時まで、というふうに調整してくれたんです。それに伴ってその日、私と一緒にシフトに入っていた人の時間が長くなりました。	試験のことは7日…5日前に連絡しなければならない、勤務時間を調整してくれた、一緒にシフトに入っていた人の時間が長くなった	事前連絡、勤務時間の調整、他のスタッフとの調整	職場の責任者による時間の調整、柔軟なローテーション、実際に調整してもらえた経験	雇用者によるシフトの調整、柔軟な労働環境、事情に合わせる勤務時間

75	聞き手	そうですか。				
76	I さん	(他の人の時間を) <u>長く</u> し、 私の <u>を短く</u> してくれたんです。 私と一緒にもう一人の学生が働いています。彼も同様に試験があるときはそうしてもらっています。つまり事前に言っておけば、(勤務)時間を調整してもらえます。	もう一人の学生が働いている、彼も同様に試験があるとき、時間を調整してもらえる	学生に対する待遇、仕事時間の調整、事前連絡、他のスタッフも同様な現象	時間調整、互恵性・互助性、手続きすれば学生は誰でも調整してもらえる	柔軟な労働環境、仕事への安心感、制度として確立した時間調整システム
77	聞き手	はい。				
78	I さん	店長は、彼は私を1時間前に帰らせるように工夫してくれました。その代わりに、他の人の時間を調整しました。	店長、帰らせるように工夫、他の人の時間を調整	シフト制の有効性	時間調整	異なり、解決
79	聞き手	それはつまり、交渉してみれば、何か解決法が見つかるかもしれないということでしょうか。				
80	I さん	そうですね。うまくいっています。				
81	聞き手	例えば、交渉してもうまくいかないこともありますか。				
82	I さん	1回ありました。なぜかというとその日はたぶん月曜日で店が混んで忙しい日でした。このような忙しいときには、「今回は難しいが、また今度ね」と言われます。レストランが忙しいときは、頼んでも駄目だということが分かりました。	忙しいとき、「今回は難しいが、また今度ね」と言われる、忙しいときは頼んでも駄目だ	希望の却下の経験、次の交渉の余地、レストランの事情の理解	状況に合わせた雇用の調整行動に対する配慮、拒否の理由説明と次の可能性の示唆による学生への配慮	相互配慮、想像力、自己保存の保留
83	聞き手	そのときは、君はどう思ったか。				
84	I さん	そうですね…。そのときは、自分に「また別のときには許可してもらえるので1回駄目だと言われても仕方ない」と自分を納得させました。なぜかといえば、相手が私の都合を考えてくれるなら、私も向こうの都合を考えなければならぬと思うからです。	1回駄目だと言われても仕方ない、自分を納得させた、相手が私の都合を考えてくれるなら、私も向こうの都合を考えなければならない	了解、持ちつ持たれつ、相互扶助、納得	お互いの事情に対する配慮、互恵的な労働環境	異なりの対立の回避・解決、異なりの内在的統合、調整行動、配慮行動

次に、4.3.2で記述した分析方法でIさんのアルバイトⅢのエピソードを詳しく分析・考察する。

4.3.4.2 考察

Iさんは「3つ目のアルバイト」をする際に、周りの人とどのようななどのような問題が生じ、解決するためにどのような対応をしていたのか、ここでは、日本人チーフと他のスタッフ、Iさんの関わりについて、表5-4から何が言えるかを考えてみたい。

新しいアルバイト先での人間関係は概ねいいようである。発話番号<62>に「他のスタッフとの関係は良いです。仕事で分からないことがあると教えてください。」と語っているように、Iさんは、人間関係からみて、このアルバイト先でいい環境にあるといえる。加えて、新しい職場では、<56><64><66><74>などの語りを見られるように、Iさんのようなアルバイト学生の受け入れ態勢が整備されているように見える。シフト制を引き、学校の勉強や試験などの事情で早く帰りたい学生のために、代わりの人を準備し、可能な限り学生の希望を聞こうという労働環境が整えられている。前述した2つ目のアルバイト先では、20分程度の終了時間の延長が常態化しており、Iさんが労働時間改善の希望を申し出ても、その職場の労働慣行だからという理由であっさりと拒否され、それがIさんがアルバイトを辞める直接的な原因となっていたが、3つ目のアルバイト先では、そのような心配をする必要はなく、Iさんは安心して仕事をすることができた。また、インタビューのあとで確認したところ、Iさんがアルバイト時間の調整を希望する場合、まずIさんが他のスタッフに相談し、自分の代わりを務めてくれるスタッフを探した上でチーフに報告するのが自然だが、チーフが代わりに他のスタッフと交渉し調整してくれることもあったという。<78>からも、チーフが時間を調整してくれることがわかる。

Iさんは、周りのスタッフとの人間関係がよく、自分の希望に合わせて労働時間を調整してくれる労働環境に非常に満足しており、<54>「以前の仕事と比べてこの方がいいです。自分に向いていると思っています」と述べ、円滑に仕事ができている。生態学的リテラシーの観点からみると、「終了時間直後に帰りたい」と「試験のとき時間を調整してもらいたい」という自分の立場を保つことができ、「自己保存」が維持されていると言えよう。

3つ目のアルバイト先のIさんの語りの中で最も興味深いのは、<82>に述べられているように、店が混んで非常に忙しく、希望が聞き入れてもらえないとき、Iさんが「また別のときに許可してもらえるので、今回はダメだと言われても仕方ありません」と考え、自分を納得させ、時間延長を受け入れていることである。そのときの実際にチーフとIさんの間に交わされたやり取り（あるいは交渉）について確認するため、フォローアップ・インタビューを行った。インタビューでは日本語使用に注目して具体的などのようなやり取りがあったのかを尋ねた。

聞き手：そのときはどんな会話になりますか。（あなたから）時間の調整は同じように求めるとして、彼らは何と言って断るのですか。

Iさん：断ってくるときは、私に「君の代わりに仕事に入ってくれる人は忙しいので（代わりが見つからないので）、君を（その日）1

時間、2時間前に帰らせることは不可能だ。無理なんだ。それで、今週は早めに切り上げさせてあげることにはできない。通常の時間まで働いてほしい。」といくつかの理由を取り上げて説明してくれます。「1つ目は君の代わりをする人がいないこと、2つ目はその日は忙しい。また、君がいなくなったら、その仕事は誰がするの？」このような理由を説明して、「どうする？」と聞かれていました。私は「それなら、やらなければなりません。」と答えました。「なぜなら、他の日、休ませていただけるから、1・2回ダメと言われても、問題ありません。」と答えました。

この語りから、店が忙しいとき、Iさんは休ませてもらえないことがあったことがわかる。〈84〉でIさんは、「また別のときには許可してもらえるので、1回駄目だと言われても仕方ない」「相手が私の都合を考えてくれるなら、私も向こうの都合を考えなければならぬ」と述べており、店側の事情を配慮し、店側の利益になるような時間調整を行っている。一回の自己主張よりも、店との友好的かつ互恵的な関係を重視し、結局は自分が働きやすい関係を維持することに成功している。自分の主張や希望を通すためには、時として相手側の利益や事情を優先し、自身の希望を引っ込めること、そのような調整行動や配慮行動の重要性に気がついたと考えることができる。このようにIさんは自己保存のために、相手側と自分との「異なりの対立」を回避・解消させる工夫を見つけて出すことができた。

互恵性の重要性に関する発言は、Iさんの語りの中にくり返し現れる。例えば、〈70〉のように、試験があるとき、Iさんはその前の日に早退させてもらえるように交渉している。また、Iさんは、お互いの事情に配慮した上で行動することの重要性を意識している。上述したように、Iさんは、必要なときに時間を調整してもらい、自己保存ができる場合もある一方、対立する場合もあった。〈82〉では、Iさんの希望が「今回は忙しいが、また今度ね」と言われ、拒否されている。通常、拒否されるとそこで違和感を覚えたり、対立が激しくなったりすることも考えられるが、Iさんは周りの事情を配慮した上で、〈84〉のように「別のとき許してくれるから、…（後略）」と考え、異なりの内在的統合に至っている。さらに、〈84〉のような「なぜかといえば、相手が私の都合を考えてくれるなら、私も向こうの都合を考えなければならぬ」という考えは、自分が置かれる環境の人・ものへの配慮が見られるという点から、この段階でIさんは生態学的リテラシーを身につけていると考えることができる。

4.3.5 来日4ヶ月後と8ヶ月後の間に起きたIさんの変化

上掲のように、Iさんには来日4ヶ月後と8ヶ月後にインタビューをしている。ここでは、この2回のインタビューの間でIさんは日本での生活、日本人あるいは日本社会との関わり、直面している問題への対応などにどのような変化が見られたかをみていきたい。

1回目のインタビューの時点では、傍観者的な立場からの異なりの気づきが多

かったが、数ヶ月を経ての2回目のインタビューの時点では、Iさんに当事者としてさまざまな場面での関わりが増えたことがわかる。また、日本滞在経験が長くなっていくことによって、緊張せずに一人で移動できるようになったり、日本人とコミュニケーションする上での言葉に関する困難が減少したりしている。その理由として、Iさんは、生活に慣れてきたことと、日本語能力の向上を挙げている。2回目のインタビューでは、Iさんは最も明確な変化として言語能力の向上を挙げているが、他にもIさんの語りからいくつか重要な変化が見られた。具体的には、周囲の環境を観察すること、自己を保つこと、互惠性的に考えることなどが挙げられる。

1回目のインタビューの時点でアルバイト先で外国人スタッフとの問題が話題として挙がっているが、Iさんはその問題の背景に何があったかを考えず、ただ何が生じたかに注目していた。これに対して、2回目のインタビューの時点では、同様なアルバイト先の問題がなぜ起きているか、その背景や原因までを考える姿勢が見られるようになった。具体的な例を挙げると、2回目のインタビューで語った2つ目のアルバイト先で終了時間が延びていたという問題があったが、なぜ延びていたかを周りを観察することで理解していた。また、この段階で学生としての自分という新しいアイデンティティを主張していた。勉強に支障がでる恐れがあるので、アルバイトの終了時間をしっかり守って欲しいという自己を保つ姿勢もこの段階で見られた。そして、3つ目のアルバイト先では、必要なとき勤務時間を調整もらったり、他のスタッフの代わりに自分が残業したり、という互惠的な考えが見られるようになった。

Iさんは来日直後と比べて生活に慣れてきた原因として日本語能力の向上をあげていたが、実際には、言語能力だけでなく、周囲のコト、モノ、人との接触の仕方、周囲の人への配慮、そして、自分が置かれた場所に何が起きているか、それが自分とどう関わるかを観察し、把握する力、すなわち生態学的リテラシーも身につけていたと考えられる。

4.4 宗教上のタブーをめぐる問題：Nさんの場合

宗教上のタブーをめぐる問題は、在日バングラデシュ人にとって非常に重要な問題の1つである。イスラム教徒が9割前後を占めるバングラデシュ人が日本で暮らす場合、文化的習慣、特に宗教上のタブーに関して周囲の日本人との間にしばしば問題や摩擦が起きることがある。今回収集したインタビュー・データの中にもそのような現象が見られた。

このデータに出てくるAさんは職場の習慣として他の日本人スタッフと飲み会に行った。Aさんはムスリムでお酒や豚肉を宗教上タブーとして摂らないようにしている。以下は一緒に行ったスタッフとAさんの宗教上のタブーをめぐるやり取りである（下線部は日本語で語られた部分）。

聞き手：私たちはムスリムでお酒を飲まないことは、彼らは知っていますか。

Aさん：はい、もちろん。

聞き手：どう反応しましたか。

A さん：酒を飲まないことを知ると、「これは君にとっては宗教的にだめ、そのことは分かっているけど。なぜだめなの？」、と何度も聞かれました。飲んだら何が問題なのか、と聞かれます。アラが見ているのだから…。多くの人は理解できません。私が「油もだめ」と言うと、また「なぜ油はだめ」だと聞かれます。同じフライパンを使ったら、混ざってしまうので…。

聞き手：豚の油ですね。

A さん：はい、豚の油です。だが、彼らは理解できません。いくら言っても理解できません。しかし食べなくなかったら、無理やり食べさせようとはしません。食べなければならないとは言いません。

聞き手：周りの人たちにそういうことを理解してもらいたいと思いませんか。彼ら（同僚）だけではなく、他の日本人にも。

A さん：Umm…、彼らは理解しようとしません。それで、正直に言うと、**自分も理解してもらおうというふうにも思いません**。

上記の語りでは、A さんが宗教上のタブーについて説明すると、相手の日本人スタッフは次々と質問し続けている。ここでは相手が何を理解しようとしているのかは明確ではなく、単なる興味・関心や好奇心を持って、A さんにいろいろ聞いていたと考えられる。酒の席であることから、質問が真剣なものであったかどうか、疑問である。一方、A さんは聞かれたことに一つ一つ真面目に答えている。その背景には、職場の人間関係を考えて、相手に配慮していることと、自分の宗教が誤解されてはいけないという考え方があると推察される。その場が飲み会であったため、A さんが日本人スタッフに理解してもらえなくても、その後の関係や仕事には支障はなかったと考えられる。

しかし、宗教上のタブーをめぐる問題では、上記の事例のように興味や好奇心の対象となることだけではない。中には、仕事の継続、人間関係の維持、ムスリムのアイデンティティの危機につながるような対立になる場合もある。本節では、日本語学校の学生である N さんがイスラム教のタブーに関してアルバイト先で直面した、賄い料理をめぐる興味深いデータを分析・考察する。

4.4.1 分析結果と考察：N さんの場合（宗教上の食文化（賄い））

N さんに対しては、来日 5 ヶ月時点と 9 ヶ月時点で 2 回のインタビュー調査を行った。N さんは来日してからさまざまな問題に直面していると語っているが、ほとんどはサバイバル場面での問題であり、周りの人との継続的なやり取りを必要とする場面は限られていた。その中で、アルバイト先で日本人スタッフといっしょに賄いを食べる場面で、その賄い料理の中に入っている食材をめぐる問題が生じている箇所があった。それは、N さんが宗教上の理由でその食材を食べることができないということを周囲の日本人スタッフに説明し、了解を得、自分が食べられる料理を賄いに加えてもらうという解決に至る過程であり、そこに周囲の人とのいろいろなやり取りが観察された。この場面は、【研究 1】の研究課題 1-2 を明らかにするために適切であると考えられたため、分析対象と

した。

4.4.1.1 SCAT 分析の結果

本項では、N さんの「宗教上の食文化（賄い）」のエピソードについての分析結果を述べる。まず、SCAT によって該当部分を分析した結果（マトリックス）を表 4-5 に提示する。表中、下線を付してある部分は、インタビューの中で N さんが日本語で言った部分を表している。

表 4-5 N さんの「宗教上の食文化（賄い）」の SCAT 分析

番号	発話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>
134	聞き手	そうですか。では、日本で食事／食品に関して困ったことがありますか。				
135	N さん	我々はバングラデシュ人で、さらにムスリムだから、問題が生じます。彼らが食べる食品を私たちは食べられないことがあります。彼らは豚肉を食べたり、豚の油を使ったりするが、それは私たちにはできません。イスラム教で豚を食べることは禁じられているので、その料理がいくら好みにあっても、いようと、いくら衛生の基準を満たしていようと、私たちは食べられません。私たちは慣れている食品を食べています。ここでは何か食べる前に、これは食べても良いか、宗教上に問題がないのかを考えなければなりません。	ムスリム、食べられないことがある、イスラム教で豚を食べることは禁じられている、いくら好みにあっても、いようと、いくら衛生の基準を満たしていようと、これは食べても良いか	宗教、嗜好や衛生基準より優先、禁じられた食品の摂取に対する不安	食生活において宗教上のタブーが最優先される	食品における宗教上の価値観の最優先
136	聞き手	そのことで誤解が生じたり、困ったりしたことはありますか。				
137a	N さん	レストランの仕事に行ったら、食事を出してくれました。どんな食材が入っているかは分かりませんでした。確かめることもできませんでした。後で（仕事を）紹介してくれたおじさんに、このようなご飯は食べても良いかと尋ねると、牛肉、鶏肉、魚、野菜なら大丈夫だけど、他の肉が入っていたら、何の肉かを先に確認するように言われました。ムスリムが食べられるものなら問題ないが、他のものが入っていたら私たちは食べられない、禁じられているので食べないようにしなさいと言われました。最初の日には知らずに食べてしまいました。	レストランの仕事、食事を出してくれた、このようなご飯は食べても良いか、何の肉かを先に確認するように言われた、ムスリムが食べられるもの、禁じられたも	レストランの慣行、賄い料理、材料の確認、禁じられた食品、初日の望ましくない出来事、親戚のアドバイス	食事に関して自国では不要の確認手続き	賄い料理の材料の確認に関する困難と失敗

			の、最初の日は知らずに食べてしまった			
137b	Nさん	次の日はおじさんはいなかったが何を入っているかを確認したら、「豚肉」だと言われて、食べられないことが分かりました。なぜ食べないと聞かれました。いいものを用意したのになぜ食べないのかと。私はいくら良い食事でも、私の宗教ではこれは食べてはいけないから、と答えました。彼らは「せっかく用意してやったのに食べてくれなかった」とがっかりしたようでした。でも私が宗教上の問題を説明したら、納得してくれたようでした。知らないままでいるとこのような問題が起きることがあります。	何を入っているかを確認、なぜ食べないと聞かれた、私の宗教ではこれは食べてはいけないから、がっかりしたようだった、宗教上の問題を説明、納得してくれた	2度目は自分で確認、賄いを作ったスタッフの疑問、宗教上のタブーについての説明、失望、相手への説明、相手の理解	宗教上のタブー、職場の人間の不満、職場の慣行の板ばさみ、職場コミュニティでの新入りとしての立場	賄い料理をめぐる自分の立場の説明、相手の失望、説得と納得、異なりの対立、自己保存
138	聞き手	そのとき、来日したばかりだったでしょう。どうやって説明しましたか、言葉は問題にならなかったでしょうか。				
139	Nさん	以前勉強した経験があったので、言葉は少しは知っていました。これは何の肉かと聞いたら豚肉という答えでした。それで食べてはいけないことが分かりました。言葉は完璧でなくても少しは知っていました。それで食べられるか、食べられないか、確かめることができました。	以前勉強した経験、豚肉という答え、食べてはいけない、言葉は完璧でなくても少しは知っていた、確かめることができた	日本語学習経験、若干の知識、料理の材料の確認	限られた言語能力で重要な情報の確認	既有能力の発動
140	聞き手	これは食べ物のことですね。他にもイスラム教について人はいろいろな興味を持っているでしょう。アルバイト先、あるいは、他のところでも日本人に何か聞かれたことがありますか。				
141	Nさん	聞かれたことがあります。何かをもらおうといつも中身を確認するので、なぜそうするかを不思議に思われています。僕たちが食べているのに、なぜ君が食べないの、何が問題なの、など聞かれます。イスラム教でこれは食べてはいけないと答えると、みんな不思議に思います。彼らは自分たちが食	いつも中身を確認する、不思議に思われている、同じ人間なのになぜイスラム教の人	毎回の料理の材料の確認、理解しにくい存在、説明の不十分さから来る誤解	同僚の食習慣の異質性に対する日本人の当惑	交渉の過程における課題、未知の存在への警戒感、誤解による非難、異なり、自

		べているものを、同じ人間なのになぜイスラム教の人が食べられないのか驚きます。変だと思う人もいれば、それぞれが自分の宗教に従えばいいと思う人もいます。それで、彼らは私たちに食べ物をくれる際、迷ったりするようになっています。（私から）あれこれと質問をされる可能性があるからです。（逆に日本人から）いろいろ聞かれることも、言葉で丁寧に説明できないので、かえって誤解を生じる恐れがあります。食べるものをやったのに食べずにごみ箱に捨てた、何故だ、となります。	が食べられないのか驚く、彼らは私たちに食べ物をくれる際迷ったりする、言葉で丁寧に説明できない、誤解を生じる恐れがある			己保存
--	--	--	--	--	--	-----

表 4-5 に示した分析の結果、以下のストーリーラインが得られた。

<p>ムスリムである N さんは、食品においては、宗教上の価値観を最優先にしなければならない。しかし、仕事先の賄い料理の材料を確認できず、失敗してしまうという困難に直面した。そこで、職場の人に賄い料理をめぐる自分の立場を説明したが、受け入れ側の失望と異質な存在に対する理解の困難があり説得を続けた。自分の宗教上の問題の説明によって理解を得られた。</p> <p>宗教上の食品のタブーをめぐる日本人とのやりとりの過程には、未知の存在への警戒感、誤解による非難など、さまざまな自己保存の先鋭化による異なりの対立がある。</p>

上掲のマトリクスに見られるように、1 回目のインタビューでは、N さんが周囲の日本人スタッフに対して、日本語を使って、どのように事情を説明し了解を得ようとしたのか、食材について生じた異なりの対立を解決するべく、どのようなやり取りをしたのかは、訊ねることができなかった。そこで、2 回目のインタビューの際に、その詳細を訊ねた。以下に 2 回目のインタビューの該当部分のマトリクスを挙げ、N さんの行動を追っていきたい。

表 4-6 N さんの 2 回目のインタビュー・データ

番号	発話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>
B-47	聞き手	ここはちょっと大事な話なので、もうちょっと具体的に言ってもらえませんか。僕たちにとっては <u>だめ</u> だと言いましたね。そのときの話でどのようなやり取りがありましたか。ちょっと思い出して言っていいただければと思います。				
B-48	N さん	ある日、彼らが出してくれたご飯を食べるとき、何か味がちょっと違うなと感じまし	味がちょっと違う、何の料理、 <u>豚</u> の料	味に違和感、料理の材料の確	制限のある日本語での説明、個人	自己保存、異なりの対

		た。そのとき「私にくれた料理は何の料理ですか」と聞きました。彼らは「1つはチキンの料理で、1つは豚の料理だ」と答えました。豚って何なのか、そのときは知りませんでした。彼らは英語でポークと言ってくれました。それで、豚肉だと分かりました。そのとき、私は「実は私は豚肉は食べません。ムスリムの人々にとって、豚肉は <u>全然だめ</u> なんです。私は卵、野菜あるいは魚なら、そして牛かチキンなら食べられます。」と言いました。それで私に「ごめんなさい」と言ってくれました。「 <u>だめ</u> 」と言ったら、それが無理なことを理解してくれます。	理、英語でポーク、ムスリム、豚肉は <u>全然だめ</u> 、私に「ごめんなさい」と言ってくれた、無理なことを理解してくれる	認、英語の使用、宗教上の食文化の説明、日本人スタッフの理解と謝罪	の選択肢が許されないタブー、配慮のなさに対する受け入れ側の謝罪	立、既有知識の発動、個人の嗜好ではなく絶対的な規範、理解と歩み寄り
B-49	聞き手	はい。				
B-50	Nさん	私が「私はこれは食べられません。ムスリムの人にはこれは食べてはいけません。」と言ったので、彼らは私に「ごめんなさい」と言い、「それなら、君は何が食べられるかを教えてくれれば、そういう風に用意する」と言ってくれました。私は「私が食べられるものを用意するに何か問題があるようなら、気にしないでください。私は賄いを食べませんから」と言いました。	ムスリムの人にはこれは食べてはいけない、君は何が食べられるか、そういう風に用意する、何か問題があるようなら、私は賄いを食べないから	宗教上の食生活、希望通り食事の用意、遠慮	食事の用意に関してお互いの配慮、お互いの理解	自己保存、歩み寄り、妥協点の模索、異なりの内在的統合
B-51	聞き手	はい。				
B-52	Nさん	みんな心から申し訳ないと思っていました。「僕たちは知りませんでした。知っていたなら、この料理を出さなかった。」と言ってくれました。	申し訳ない、知っていたなら、この料理を出さなかった	知識の欠如に対する謝罪	参入側の宗教・食文化の尊重	自分の宗教・食生活の承認
B-53	聞き手	その後、あなたのために別の料理を用意してくれますか。				
B-54	Nさん	その後、サンドイッチ、ピザ、あるいはハンバーガーのような食べ物を用意してくれています。卵と野菜もあります。ただ、いつも私だけのことを考えて作ることはいけません。なぜなら、ここにいるすべてのスタッフのために料理が用意されてみんな同じご飯を食べるわけですから。私に相応しくない食べ物が出た場合でも、（特別に私のために）別の品を用	食べ物を用意、いつも私だけのことを考えて作ることはいけません、相応しくない食べ物、別の品、ためらい	安心して食べられる料理の提供、異例の扱い、スタッフへの配慮	職場の慣行からの逸脱、特別扱いされる後ろめたさ、相手への行為への配慮	新しい賄い慣行から見える異なりの内在的統合、相互配慮

		意することには彼らはちょっとためらいを感じると思っています。				
B-55	聞き手	ここでもう少し教えてください。これはイスラム教の人が食べられないことは詳細に伝えましたか。あるいは、ただ食べてはいけないと言いましたか。彼らは何か疑問を持ちませんでしたか。				
B-56	Nさん	彼らは驚きました。豚肉は彼らの大好物です。日本人みんなこれを食べています。「僕たちが食べられて、なぜ君が食べられませんか。」と聞かれました。そのとき、私は、「皆さんの宗教と僕の宗教に違いがあります。私たちの宗教ではこれを口にすることは禁止されています。アラーはコーランを通して禁じています。コーランは私たちにとって最高の教典です。コーランで禁じられているので、食べてはいけません。ですから、これを食べません。牛肉、鶏肉なら大丈夫ですから、食べています。」と伝えました。	彼らは驚いた、豚肉は彼らの大好物だ、僕たちが食べられてなぜ君が食べられないか、宗教に違い、アラーはコーランを通して禁じている、最高の教典、牛肉、鶏肉なら大丈夫	日本人スタッフの驚き、好物を避ける態度への疑問、理由の説明の要求、詳細な理由の説明、最高教典の禁止、共通点への言及	違う宗教の食文化への疑問、宗教上の規範の強調、個人に選択肢はない、固有名詞を使った分かりやすい説明	他者の理解のために説明を工夫
B-57	聞き手	はい。				
B-58	Nさん	そして、彼らは「これも肉でしょう。これも美味しいでしょう。」と言いました。私は「いくら美味しくても、禁じられていることはしません。あなたたちも何かをしようとしたとき、『これはしないように、だめです』と言われたら、それはやってはいけません。あなたたちもそれを守っているでしょう。私たちも同じことです。禁じられたことはしません。」と答えました。	あなたたちも何かをしようとしたとき、『これはしないように、だめです』と言われたら、それはやってはいけない、あなたたちもそれを守っているでしょう、私たちも同じだ	不可能であることの主張、共通点への言及	相手に自分の立場を想像するように求め	規範を守る人間という共通点、(食生活上の)異なりの解消
B-59	聞き手	それで聞いて、彼らの反応はどうでしたか。				
B-60	Nさん	その後、彼らは私のために時々別のものを用意してくれました。	その後、時々別のものを用意してくれました	特別な措置	日本人スタッフの態度の変化	異なりの内在的統合

表 4-6 のマトリックスに示した分析から以下のストーリーラインが得られた。

アルバイト先の賄い料理にイスラム教で禁じられている食材が入っていて、

Nさんが食べられないということについて、日本人スタッフとの間に異なりの対立が起こっていた。Nさんは異なりの対立を解消するために、これが個人の嗜好の問題ではなく絶対的な規範であること繰り返し説明した。その結果、日本人スタッフの理解が得られ、Nさんのための特別な料理を用意するという賄い料理に関する新しい慣行ができた。つまり、異なりの内在的統合が実現した。その背景には、相互配慮や自身の宗教に関する規範を他者に理解してもらうための説明、すなわち、自分たちが、同じように規範を守る人間であるという共通点への言及といった工夫があった。

次節では、Nさんの1回目と2回目のインタビュー・データを詳しく分析し、Nさんが周囲のコト、モノ、人と向き合う中で生じる問題をどう解決していったのかについて考察する。

4.4.1.2 考察

Nさんはレストランのアルバイト先で、どのような問題に直面していて、どう対応していたのか、について表4-5と4-6から何が言えるかを考察する。

上掲のマトリクスには現れていないが、Nさんの語り全体を通して、アルバイト先で周囲の人と人間関係上の問題はなかった。この職場では、通常、スタッフが人数分の食事（賄い）を用意し、そこからそれぞれほしだけ取ることになっていた。Nさんに対しても、最初の時点では特別扱いはなされず、全員同じ賄いを食べるようになっていた。そのような状況の中、ある日の賄い料理に豚肉が入っていたことで問題が起きた。Nさんは、その時の状況を、「最初の日には知らずに食べてしまった。次の日は、おじさんはいなかったが、（店の人に）何が入っているかを確認したら、「豚肉」だと言われて、食べられないことが分かりました。」発話番号<137a>と語っている。Nさんは、知らないうちに宗教上食べてはいけない料理を食べてしまった。この事件のあと、Nさんは、どんな食材が入っているかを周りの日本人に細かく確認するようにしていたが、そんなNさんに対して、周りの日本人は、「なぜ食べないと聞かれました。いいものを用意したのになぜ食べないのかと。…せっかく用意してやったのに食べてくれなかった」とがっかりしたようでした。」<137b>や、「何かをもらおうといつも中身を確認するので、なぜそうするかを不思議に思われています。僕たちが食べているのに、なぜ君が食べないの、何が問題なの、など聞かれます。イスラム教でこれは食べてはいけないと答えると、みんな不思議に思います。彼らは自分たちが食べているものを、同じ人間なのになぜイスラム教の人が食べられないのか驚きます。」<141>というような、困惑した反応を示している。これらの発言から、イスラム教が食べられない食材があるということについて、Nさんと周りの日本人スタッフの考え方や捉え方に異なりがあったことが確認される。このような異なりは、<141>に「それで、彼らは私たちに食べ物をくれる際、迷ったりするようになっていきます。（私から）あれこれと質問をされる可能性があるからです。（逆に日本人から）いろいろ聞かれることも、言葉で丁寧に説明できないので、かえって誤解を生じる恐れがあります。食べるものをやっただに食べずにごみ箱に捨てた、何故だ、となります。」と述べられているような、

新たな問題や誤解、つまり異なりの対立に発展していく恐れがあった。

では、このような重要な問題の解決に N さんはどのような対応をしたのでしょうか。前述の通り、来日してから数ヶ月しか経っていない N さんは日本語能力がまだまだ不十分で、自分の気持ちや考え方を論理的に述べて、相手に何かを説明することは困難であった。上掲の<141>に「(逆に日本人から) いろいろ聞かれることも、言葉で丁寧に説明できないので、かえって誤解を生じる恐れがあります。」と述べられているように、N さん自身もそれに気付いている。しかし、N さんは、「言葉は完璧でなくても少しは知っていました。それで食べられるか、食べられないか、確かめることができました。」<139>や、「でも私が宗教上の問題を説明したら、納得してくれたようでした。」<137b>からわかるように、不十分な日本語能力でありながら、問題の解決を目指して自ら積極的に一歩を踏み出したことがわかる。

上掲の表 4-6 のマトリクスを見ると、宗教上の理由で N さんが賄い料理を食べられないことに対して、アルバイト先の日本人スタッフは非常に丁寧な対応をしてくれていることがわかる。N さんはその時の日本人スタッフの様子を、「私が「私は、これは食べられません。ムスリムの人には、これは食べてはいけません。」と言ったので、彼らは私に「ごめんなさい」と言い、「それなら、君は何か食べられるかを教えてくれれば、そういう風に用意する」と言ってくれました。」<B-50>や、「みんな心から申し訳ないと思っていました。「僕たちは知りませんでした。知っていたなら、この料理を出さなかった。」と言ってくれました。」<B-52>のように語っている。N さんと周囲の日本人の間に良好な人間関係があり、周りの日本人が N さんの食事に関する宗教上のタブーに配慮し、N さんの労働環境を少しでもよくしようと努力してくれていたことがわかる。最終的には、<B-54>に述べられているように、サンドイッチ、ピザ、あるいはハンバーガー、卵や野菜のような、N さんが食べられる賄いを特別に用意してくれるようになった。このような周りの人の配慮に対して、N さんも、「いつも私だけのことを考えて作ることにはできないですね。なぜなら、ここにいるすべてのスタッフのために料理が用意されてみんな同じご飯を食べるわけですから。私に相応しくない食べ物が出た場合でも、(特別に私のために) 別の品を用意することには彼らはちょっとためらいを感じると思います。」<B-54>と述べ、日本人スタッフに対する配慮を示している。N さんの語りから、N さん、日本人スタッフ双方が、相互に相手の状況を思いやり、共に共存していける道を探し、うまく実現できている様子が確認できる。

では、最初からこのような両者の配慮・調整行動は可能だったのであろうか。1 回目のインタビューの分析・考察の中で見たように、N さんが言う宗教上のタブーについて、周りの日本人は全く疑問や問題を感じることなく、N さんの要請を受け入れたのかと言うと、けっしてそうではない。N さんの説明に対して、困惑したり、不思議だという感想を述べたりする様子は、N さんの 1 回目のインタビューの語りの中に多く現れていた。この点について、2 回目のインタビューでも、筆者は、<B-55>で周りの日本人はその宗教上のタブーについて何か問題を感じる様子はなかったかどうかを訊ねている。それに対して、N さんは、まず、<B-56>で、「皆さんの宗教と僕の宗教に違いがあります。私たちの宗教ではこ

れを口にすることは禁止されています。アラーはコーランを通して禁じています。コーランは私たちにとって最高の教典です。コーランで禁じられているので、食べてはいけません。ですから、これを食べません。牛肉、鶏肉なら大丈夫ですから、食べています。」と、イスラム教で豚肉を食べることがどのように禁じられているかを説明し、続いて<B-58>で、「これ（豚肉）も肉でしょう。これも美味しいでしょう。」と質問する日本人に対して、「私は「いくら美味しくても、禁じられていることはしません。あなたたちも何かをしようとしたとき、『これはしないように、だめです』と言われたら、それはやってはいけなideでしょう。あなたたちもそれを守っているでしょう。私たちも同じことです。禁じられたことはしません。」と答えました。」と語っている。ここで太字にした部分に注目したい。2回目のインタビューは、Nさんが来日して9か月の時点で行われた。9か月経たとはいえ、Nさんの日本語能力はけっして高いレベルには到達していなかったと考えられるが、Nさんは自分の日本語能力を駆使して、Nさんも周りの日本人も、規範を守る人間であるという点では同じであること、両者ともしてはいけないと言われたことはしないという共通点を持っているということに言及することによって、Nさん自身と日本人との間に共有できる落としどころ（第三の場所）を提示し、食生活上の異なりを解消しようとしたと考えることができる。

以上のエピソードを言語生態学に基づき解釈すれば、Nさんは、賄い料理に宗教上食べられないものを出され、最初は重要な困難に直面したものの、限られた日本語能力を用いて相手に事情を説明し理解してもらった。職場で皆が同じ賄いを食べるという慣行があったため、最初はこのNさんの賄い料理の否定とその事情の説明に対して、職場のスタッフも疑問と抵抗を示した。つまり、職場スタッフとNさんのそれぞれの自己保存が表出し、そこに異なりの対立が生じた。しかし、さまざまな方略を使い、互いの共通性を提示するNさんの適切な説明により、スタッフの共感が得られ、最終的には相互理解に至った。そして、このことは、職場の賄いの慣行に変化をもたらした。つまり、全員に同じ食事を用意していたのが、個人的な事情を考慮した食事を用意する新たな賄いのやり方が生まれたのである。この職場の賄いのやり方の変化において、Nさんとスタッフ間の異なりの内在的統合が実現したといえよう。

4.5 まとめ

【研究1】では、在日バングラデシュ人が日常生活の中で直面している問題にどのように対応をしているかについて検討した。日本語学校の学生2人のインタビュー・データをSCATで分析を行った。その結果を以下にまとめる。

研究課題 1-1 では、在日バングラデシュ人が職場で直面する問題を解決する過程を通して彼らの考え方や価値観の中にどのような変化が見られるかを探った。日本語学校の学生であるIさんが3つのアルバイト先で直面した場面をSCATで分析した。Iさんは、アルバイトIの場面では、時間に対する価値観や仕事の進め方など、自分が今まで経験していない多くの異なりに直面した。そして、職場の上下関係や指示の仕方などの慣行を適切に把握していなかったため、外国人スタッフとの間に軋轢が生じた。

アルバイトⅡでは、契約にはなかった終業時間の延長で問題が起きた。その職場では当然の慣習であったが、Iさんにとってはそれが理解できないことであった。結局、アルバイトⅠとⅡ共に、Iさんは仕事をできるような環境を作ることができなかった。この時点で、Iさんはできたことも、できなかったことも、自分が持っている日本語能力や仕事の進め方のような能力によって捉えていた。Iさんは自分が置かれた環境、周囲の人との関係、その職場の慣行などを捉える能力が不十分だったと見られた。岡崎（2009：78）は「世界と自己の間にあるつながり、つまり関係をとらえる認識」のことを生態学的世界認識と述べている。このような、人がどこにいてもその場で自分の位置を把握し、周囲のコト、モノ、人との自分の関わりを正確に捉える力、すなわち、生態学的リテラシーがそのときのIさんには欠けていたといえる。

一方、アルバイトⅢでは、Iさんは必要なとき、事前に連絡することによって時間を調整してもらったり、店側の必要に応じて自分が調整したりすることによって、互惠性が見られ来日してははじめ落ち着く職場ができた。つまり、Iさんは自分が置かれた場所の環境や周囲の人のことを配慮した上で行動をとっていた。この時点でIさんの中に生態学的な考えが無意識的に育成されていたともいえる。すなわち、生活の過程でさまざまな体験をしたり、問題に直面したりすることによって、自分の考え方や価値観に変化が見られた。また、このような変化により、日常生活で直面する問題への対応ができるようになると考えられる。

研究課題 1-2 では、在日バングラデシュ人が宗教上タブーとされる食べ物について周囲の人の理解を得るために、どのような対応をしているかを日本語学校の学生であるNさんが職場で日本人同僚と賄い料理についてやり取りしている場面をSCATで分析した。Nさんは、アルバイト先の賄い料理にイスラム教で禁じられている食材が入っていて、自分はイスラム教徒なのでその料理は食べられないということを周りの日本人の同僚に丁寧に伝えた。しかし、イスラム教の宗教的な理由による食材制限にことほとんど知らない日本人スタッフと、日本語で十分説明できないNさんの間に相互理解の齟齬が起こった。そこで、Nさんは、自分の立場について周りの日本人の理解を得るために、食文化や生活文化が違っても、どの文化でも「してはいけないこと」「守らなければならないこと」があり、自分にとっては、イスラム教の食材制限はそれに当たるもので、どうしても守らなければならないと丁寧に説明をくり返し、日本人スタッフの共感を得られ、最終的には相互理解に至った。このケースでのIさんの対応を考えると、自分自身が周りの日本人の同僚の気持ちや疑念に配慮した上で自分がどう対応すればいいかを考えた。相互配慮を通して、相互理解ができ、その結果、双方が納得できる解決に向けての具体的な調整行動が明確になり、イスラム教の食材制限に触れない賄い料理を作るという新しい場を展開することができた。

上掲の2つの研究課題について、IさんとNさんの問題解決の過程をみると、周囲のコト、モノ、人を配慮した上での行動が、相手の理解を得、問題解決に有効であることがわかる。言い換えれば、生態学的リテラシーを身につけることがこのような問題解決に重要だといえる。

【研究1】では、在日バングラデシュ人が日常生活で直面している問題について述べた。しかし、第2章でも見たように、在日バングラデシュ人にとっては、自分の生活の場を広げ、より豊かな生活を作り上げるために、地域コミュニティにどう参加していくかという点も重要である。在日バングラデシュ人が日常生活の中で地域コミュニティや日本社会とどのような関わりを持っているか、そして、新たな社会参加によって在日バングラデシュ人の生活はどう変わるのか、次章の【研究2】で考えたい。

第5章 【研究2】生活の場を広げるための社会参加

5.1 質的調査の背景

日常生活において、在日バングラデシュ人が周囲のコト、モノ、人とどう関わり合っているのか、その実情について、前章では、問題と解決のプロセスに焦点を絞って分析と考察を行った。【研究2】では、在日バングラデシュ人がより良い生活を目指してどのように社会的関係を構築するのか、という点を明らかにする。なお、本研究における「より良い生活」とは、自身を良好な言語生態と人間生態に置くことである。特に、自分の生活の場を広げ、周囲の人に自国の文化や習慣、価値観などを認めてもらい、日本社会でネットワークを広げていくことに焦点を当てる。

5.2 研究方法

5.2.1 調査対象者

本章では、【研究1】と同様の方法で収集した社会人2人のインタビュー・データを分析し、言語生態学の観点から考察する。バングラデシュ人が日本に定住する場合、日本語学校に入学し、1年余り日本語を勉強した後、大学や専門学校に進学したり、就職したりして日本に残り生活するという流れがもっとも典型的だと考えられる。そのため、今回のデータ選定に際しては、そのルートに乗っている2人を選定した。本章でデータとして提示する2人の協力者（AさんとSさん）の属性は次のとおりである。

Aさんは30代の男性で、2006年10月に交換留学生としてG大学に留学した。2008年4月からH大学の修士課程（国際開発専攻）に入学し、同大学院卒業後、2010年10月に姫路市内のアパレル関係の会社に就職した。2014年10月には、同社の東京支店に移動になった。Aさんは来日前、バングラデシュのダッカ大学で300時間以上の日本語学習経験があり、来日時点で日本語能力は、本人の申告によれば、旧JLPT4級から3級の間のレベルだった。G大学で留学生用の講座やボランティア教室で日本語学習を続けていて、インタビュー時点でJLPT N2に合格していた。

Sさんは30代の男性で、2006年12月に静岡市内の日本語学校の留学生として来日した。SさんもAさん同様、バングラデシュのダッカ大学で300時間以上の日本語学習経験があり、来日時点で日本語能力は旧JLPT4級から3級の間のレベルだった。日本語学校を卒業後、東京の専門学校で2008年4月から2012年6月までITとコンピュータ・グラフィックスの2つのコースを修了している。その後、2012年7月から東京で、中古車販売とレストラン経営を行っているT社で正社員として働いている。

5.2.2 調査方法と分析方法

本章では、【研究1】と同様の方法で半構造化インタビューを行い、AさんとSさんが、生活の場をより豊かにするためにどのように周囲のコト、モノ、人に配慮し、どのように社会参加をしていたのかを探る。そして、調査協力者の語りの中から彼らの意識や態度、価値観の変容を明らかにする。両者のデータの

詳細は次の通りである。

表 5-1 分析対象とするデーター一覧

氏名	インタビュー	日付	時間
A さん	1 回目のインタビュー	2014 年 11 月 23 日	1 時間 1 分
	フォローアップ 1	2015 年 4 月 18 日	26 分
	フォローアップ 2	2015 年 4 月 21 日	16 分
S さん	1 回目のインタビュー	2013 年 7 月 26 日	1 時間 5 分
	フォローアップ 1	2013 年 8 月 3 日	18 分
	フォローアップ 2	2015 年 5 月 3 日	30 分

分析方法として大谷 (2008、2011) の SCAT (Steps for Coding and Theorization) を採用した。

5.2.3 分析対象の選定

在日バングラデシュ人の生活の場が広がり、豊かになる背景には、松本 (2000) が指摘するように、地域の人との関わり合いのあり様が関係していると考えられる。では、在日バングラデシュ人は、実際にどのように周りの人々と関わり合い、ネットワークを構築し、自らの生活の場を広げているのだろうか。

その実態を探るために、上掲 2 人のインタビュー・データを上述した SCAT を用いて分析した。4 段階のコーディング作業の結果、得られた「テーマ・概念」を紡いで、全体ストーリーラインとエピソードごとのストーリーラインを作成した。

分析の過程を明確にするために、次節に A さんのインタビューから抽出した注目すべき部分のマトリックスを提示する。また、分析・考察に際しては、必要に応じてフォローアップ・インタビューで得られた発話を分析し、A さんが日本でどのように生活の場を広げ、社会参加を実現しているのかを明らかにする。なお、上述したように、紙幅の制限があり、全体マトリックスを提示することは難しいため、分析対象とするエピソードのみマトリックスを提示し、分析・考察過程を述べる。

5.3 研究目的と研究課題

1 節で述べたように、【研究 2】では、在日バングラデシュ人が日常生活の中でより良い生活を目指して、社会参加を通して、どのような行動をしているか、明らかにすることを目的とする。具体的な研究課題は次のとおりである。

研究課題 2-1 どのように社会参加をし、自分の生活の場を広げているか。

研究課題 2-2 異質とされる文化的背景への周囲の理解をどのように得ているか。

5.4 Aさんのデータ分析

5.4.1 Aさんのストーリー概要

本研究の研究課題の1つは、日本での生活において、自らの生活の場を広げ豊かにするために、日本語を使ってどのような社会的活動を行っているかを明らかにすることである。Aさんのインタビューでは、姫路にいたころ、日本人コミュニティとの強い関わりを持っており、そこでバングラデシュを紹介するイベントに参加したこと、そして、バングラデシュの教育に関心を寄せる一人の日本人女性と、ボランティア活動などを通して交友関係を持っていたという、日本での生活をより豊かにしていたと思われる興味深いエピソードが観察された。本エピソードは、研究課題を明らかにするために適切であると考えたため、分析対象とした。

5.4.2 分析結果と考察：国際交流センターを通しての人間関係

5.4.2.1 SCAT 分析の結果

本項では、Aさんの「地域の国際交流センターを通しての人間関係」のエピソードについての分析結果を述べる。まず、SCATによって分析した結果（マトリックス）を表5-2に提示する。表中、下線を付してある部分は、インタビューの中でAさんが日本語で発話した部分を表している。また、マトリックス中の<1><2><3><4>は、SCATの4段階のコーディング作業、すなわち、<1>はテキスト中の注目すべき語句、<2>はテキスト中の語句の言い換え、<3>は<2>を説明するようなテキスト外の概念、<4>はテーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）を表している。マトリックス中空欄になっている箇所は、テキストの内容が本研究の分析対象にならないと判断したところである。

表5-2 Aさんの「地域の国際交流センターを通しての人間関係」のSCAT分析

番号	発話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>
142	Aさん	東京に来たのは1ヶ月・1ヶ月半なので、まだできていません。でも、姫路にいたとき、「 <u>姫路国際交流センター</u> 」で日本語を学んでいました。毎週土曜日から日曜日に行っていました。	<u>姫路国際交流センター</u> 、日本語を学んでいた、毎週	地域機関、必要な能力の向上、継続的学習、費用がかからない	周囲のリソースの利用	生活に役立つ組織との関わり、新たな居場所
143	聞き手	そのときは、もう日本語能力が十分あったでしょう。				
144	Aさん	そうですね。それでも、行っていました。勉強することは…、まだ勉強する必要があります。	それでも、まだ勉強する必要があります	学習継続の意思	言語能力の必要性に気づき現状に不満足	向上心、努力の継続
145	聞き手	主に何を勉強していましたか。				
146	Aさん	そこで勉強、勉強といっても主に「読解」です。ボランティアの先生でした。新聞を持ってきて、それを読まされ	勉強、読解、ボランティアの先生、新聞	学習の場、生教材を使った活動、	周囲のリソースの利用、実践的な活動、日	日本語能力を目指す

		ました。そして、それを説明してくれました。		地域日本語教育	本語能力上級	
147	聞き手	月何回でしたか。				
148	A さん	月 4 回でした。				
149	聞き手	つまり、週 1 回ですね。				
150	A さん	週 1 回です。				
151	聞き手	どうして勉強したのですか。そのとき、自分の仕事や勉強で必要だったでしょうか。あるいは、勉強したら何か利点があると思っていましたか。				
152	A さん	いいえ、仕事のためではありませんでした。自分のためでした。自分のためといっても、そのときすぐ必要なわけではありませんでした。将来のことを考えて、言語能力の向上を目指して。	自分のため、将来のことを考えて、言語能力の向上	自らの学習、とりあえずの将来の備え	将来役立つ能力	自分自身への投資、将来性
153	聞き手	来て、どのくらい経ってからの話ですか。				
154	A さん	姫路にいたとき、仕事を始めたころ、来日して 4 年のときでした。				
155	聞き手	そうですか。そのとき、既に 2 級レベルぐらいだったのですね。				
156	A さん	はい、2 級に合格した後のことでした。そして、1 級はまだ合格していないので、いまはそれも目指しています。	1 級はまだ合格していない、それも目指して	日本語能力試験	正式な検定試験	将来性、具体的な目標設定
157	聞き手	あなたは（修士課程を）英語で勉強しましたね。（今は日本語で）2 級に合格し、1 級を目指していますね。1 級はとても難しいですね。英語で勉強したのに、日本語のトップレベルを目指す理由は何でしょうか。				
158	A さん	理由を言うと、もし将来日本語教師になるチャンスがあれば、と思っています。それも目標のひとつです。将来、バングラデシュに帰国して（日本語の）教師になれる機会があれば、というのが大きな目標です。そして、日本で仕事するときも必要です。漢字がよくできれば、言葉がよくできれば、自分に利益があります。今も感じていることですが、仕事の 100% が分かるわけではありません。メール、また本も読まされる、これを読みなさいとか指示さ	日本語教師になるチャンス、帰国、大きな目標、日本で仕事するときも必要だ、漢字、言葉がよくできれば自分に利益、仕事の 100% が分かるわけじゃない、1 級合格を目指している、勉強した	日本語教師志望、業務に必要な日本語能力、学習意欲、困難を感じる場面、最高レベルに目標を設定、継続の意思	志望職種に就くのに必要なものとしての日本語能力さまざまな利益をもたらす、学習継続の意欲	自国でのキャリア形成、道具的動機付け、将来性

		れます。レポートも分からないところがたくさんあります。そこでも（日本語能力）が必要です。とにかく、今も東京に来てからも1級を合格することを目指しているので、どこかで勉強する機会があれば、学校のようなものがあれば勉強したいです。	い			
159	聞き手	そうしたら、帰国することも考えている、ということですか。				
160	A さん	将来、帰国するつもりです。ずっと日本にいたつもりはありません。				
161	聞き手	帰国してからも、今日本で作っているネットワークが続くと思いますか。				
162	A さん	はい、続きます。なぜなら、今はそんなに連絡を取り合っていないんですが、私はバングラデシュ人よりも日本人の友達が多いです。彼ら（日本人）とあちこち行くことが多いです。（来日して）岐阜に来てからこの8年で。それで、自分にいろいろな利点もありました。例えば、姫路にいたとき、私はフリーマーケットで日本人の女性と一緒にカレーを売りました。その女性はバングラデシュで学校を設立しています。フリーマーケットなどで彼女と一緒にカレーを売りました。その利益を彼女は学校設立などに使います。だから、ボランティア活動もいいと思っています。	バングラデシュ人よりも日本人の友達が多い、彼らとあちこち行くことが多い、いろいろな利点、フリーマーケットで日本人の女性と一緒にカレーを売りました、ボランティア活動	日本人との豊かな交流、バングラデシュに関心を持つ日本人との出会いと共同作業、ボランティア活動への関心	目的を共有する活動に日本人と参加、対等な関係性、自分自身をリソースとして提供	継続可能なネットワーク構築、自国と関わりのある人との出会い、互恵的な関係
163	聞き手	1つは精神的にいい気持ちですね。もう1つは何か具体的なメリットがありますか。				
164	A さん	具体的なメリットは直接的にはありません。				
165	聞き手	お金のことは置いておいて、他の分野でも何か役立つことや将来何か…				
166	A さん	そうですね。将来何か役立つことはあると思いますが。人との関わりは…、今は自分も楽しいので参加しています。将来自分が何かをするとき、彼らにサポートしてもらえるかも、と思います。ネット	自分も楽しい、彼らにサポートしてもらえ、ネットワークがあればいい	日本人とのネットワーク、自分にとってのメリット、将来の支	将来のための基盤作り	支援を期待できるネットワーク

		ワークがあればいいですね。		援の期待		
167	聞き手	その女性の方とはどのような関係でしょうか。				
168a	A さん	最初は「 <u>国際交流センター</u> 」で日本語を学んでいたとき知り合いました。そこでバングラデシュ料理のイベントをやりました。 <u>国際</u> 、彼らは（国際交流センターでは）いろいろなイベントを実施していました。その中で一度「バングラデシュの紹介」というイベントを開催し、そこでバングラデシュ料理紹介もありました。3 時間のプログラムでした。パワーポイントのスライドでバングラデシュの人口などについて話すことと、その後、カレーをご馳走することでした。その女性は、たぶんそのチラシを市役所で見つけた。それで連絡してきました。そして、ベンガル語を学びたいと言いました。「私はバングラデシュに行きました。とても気に入りました。バングラデシュで学校を設立したいです」とも言いました。バングラデシュについて興味を持っていることが分かりました。その後、毎週 <u>国際センター</u> に顔を出していました。そのたびごとに2時間ぐらい一緒にベンガル語を勉強しました。	<u>際交流センター</u> 、「バングラデシュの紹介」というイベントを開催、バングラデシュ料理紹介、連絡してきた、バングラデシュについて興味を持っていることが分かった、学校設立の希望、毎週 <u>国際センター</u> に顔を出していた、2時間ぐらい一緒にベンガル語を勉強した	新たな人間関係構築につながる出会い、日本人からの働きかけ、母国の紹介、母語を日本人に個人教授、活躍場として「国際交流センター」、目的をもった定期的接触	自国の誇りが持てる活動に参加、重要なネットワーク構築、自分の知識が相手のリソースになる経験、継続的な関係	新たな居場所、豊かな生活の場、自信の高まり
168b	A さん	それから、バングラデシュで学校を設立することが主な目的だと話してくれました。彼女自身がそんなにお金を持っているいなかったため、いろいろなイベントを開催し、人々にアピールし、援助してもらっていました。そして、バングラデシュから洋服を輸入し、販売していました。このようにしてお金を貯めていました。私は周辺の地域に秋祭りなどのとき彼女と一緒に出かけました。（だから） <u>きっかけ</u> と言うと、彼女が <u>国際交流センター</u> から情報を収集し、連絡してだんだん…。付き合いが長いので、私のことは何でも知ってい	バングラデシュで学校を設立、いろいろなイベントを開催、お金を貯めていました、秋祭りなどのとき彼女と一緒に出かけた、 <u>きっかけ</u> 、 <u>国際交流センター</u> から情報を収集、付き合いが長い、私のことは何でも知っている、とても	バングラデシュの教育に関する日本人、学校設立資金集めの努力、地域イベントに参加、新たな関係の機会、交流の継続、信頼関係構築	複数の活躍の場として「国際交流センター」、熱心な女性の活動に対する共感、長期継続した個人的な関係に対する自信と信頼	あるリソースをいかした更なるネットワークの拡大、信頼関係構築

		ます。私ととてもいい関係です。	いい関係			
--	--	-----------------	------	--	--	--

表 5-2 に示した分析の結果、以下のようなストーリーラインが得られた。

Aさんは日本語教室への参加、バングラデシュの文化紹介など、日常生活におけるさまざまな場面で、地域の国際交流センターと関わっていた。そのような組織との関わりはAさんの生活にとって役立つ経験であり、自分の新たな居場所として捉えていた。Aさんはその段階で日本語が十分できていても、道具的動機付けから将来を見据えた自分への投資として努力を継続していた。Aさんは地域の国際交流センターのイベントを通して自国と関わりのある人と出会い、互恵的な関係を通して継続可能なネットワークを構築していた。その関係性は、将来支援が期待できるネットワークとなる可能性がある。このような社会参加によって、Aさんは自信が高まり、豊かな生活の場の構築もできたといえる。また、信頼関係構築によって、あるリソースをいかして更なるネットワークの拡大を目指す姿勢もみられた。

次に、上掲の研究課題 2-1、すなわち、在日バングラデシュ人がどのように自分の生活の場を広げているのかについて、Aさんのインタビュー・データを詳しく分析・考察する。このストーリーラインの内容について、言語生態学の観点からの分析に必要な情報を得るために、複数回フォローアップ・インタビューを行い、社会参加の場面で具体的にどのような言語的なやり取りがあったのかを確認した。考察では、必要に応じてフォローアップ・インタビューで得た情報を参照する。

5.4.2.2 考察

Aさんは地域の国際交流センターのイベントで、バングラデシュに学校を作ろうとしている日本人女性と出会った。本項では、Aさんがこの日本人女性との交流を通してどのように生活の場を広げていったのかを考察する。

5.4.2.2.1 Aさんの社会参加の過程

まず、Aさんの社会参加の過程について考察するにあたり、Aさんとその日本人女性との交流関係の全体像について述べる。

発話番号<168b>「付き合いが長いので、私のことは何でも知っています。私ととてもいい関係です」「バングラデシュで学校を設立することが主な目的だと話してくれました」から、Aさんと日本人女性の間で信頼関係が構築されていたことを推察できる。

Aさんはなぜこのような社会参加に関心を抱いたのか、そして、それを実現するために、自らどのようにイニシアチブを取っていったのかを考察する。<162>では、8年にわたる日本滞在での日本人との関わりについて語る中で、この日本人女性に言及している。当時、この日本人女性は、バングラデシュで学校を設立しようとしていたこともあり、「バングラデシュ人との交流」や「ベンガル語学習」などの具体的な動機を持ってAさんと関わっていたようである。一方、A

さんも日本人との関わりと日本語の運用力など、将来役立つと思われる能力の向上を志向していた。このような事情から、両者の間に互恵的な関係が生まれ、お互いに積極的に助け合うことができたのだと考えられる。たとえば、バングラデシュではボランティア活動の場は限られており、ボランティアをすることの認知度はまだまだ低い。また、大学の卒業生がカレー販売などの活動を行うことは、社会ではあまり評価されない。このような背景を持つ A さんが日本でカレー販売などのボランティア活動に参加したことは、自ら日本社会に積極的に参加しようとする意志の表れであると言える。

また、〈168b〉では、「彼女自身がそんなにお金を持っていなかったため、いろいろなイベントを開催し、人々にアピールし、援助してもらっていました。」と述べ、〈162〉では「フリーマーケットで一緒にカレーを販売していました。」と述べている。すなわち、A さんは日本人女性が何を求めていたのか、自分がどのような行動をすればお互いに役立つか、を考慮した上で行動していたということがうかがえる。そして、〈166〉で「将来自分が何かをするとき、彼らにサポートしてもらえるかも。」と述べているように、自分の将来におけるメリットも視野に入れて人間関係を作っていたと考えられる。

5.4.2.2.2 社会参加による A さんの生活の変化

この女性との交流が A さんにとってどのような意味を持っていたのか、この問いをより深く検討するために、フォローアップ・インタビューを2回行い、2人の間で交わされた具体的やり取りについて尋ねた。フォローアップ・インタビュー①では、以下のような語りが得られた。

聞き手：どうして乗り気になったのですか。

A さん：乗り気になった理由は、彼女が外国人でありながら、バングラデシュのために何かしようとしたからです。私はバングラデシュ人として母国をサポートできたら嬉しいと、思いました。外国人である彼女がバングラデシュのためにこれだけ支援活動をくれているからです。

聞き手：あなたのその考えを彼女とシェアしましたか。（つまり）そのとき、伝えましたか。

A さん：いや、そのとき、「あなたはバングラデシュ人のためにやってくれているから、お手伝いします」というふうに直接は言いませんでした。「いいですよ。土・日は休みだから、どちらかの日に来てください。一緒にベンガル語の勉強をしましょう」と言いました。プログラム（イベント）は毎月あったわけではありません。2～3ヶ月ごとに一度ぐらいでした。そうした時、彼女は私に「このようなプログラムがあるので、ご都合はいかがでしょうか。参加することができますか。」と私の都合を聞いていました。私は事前に予定がなければ、断りませんでした。参加していました。このように、さまざまな活動に参加しました。このようにして、だんだんいろいろな

活動に関わっていました。

Aさんは、言葉を教える、あるいは誘われた活動に参加するなど、その女性のためにとった自分の行動について、その女性が自分の国を支援してくれている人だからという恩義というよりも、自分も母国の支援活動そのものに加わりたい（「バングラデシュ人として母国をサポートできたら嬉しい」という、その女性と志を共有する者として説明している。この一連の語りから、活動へのAさんの積極的な参加の背景には、バングラデシュの支援のために尽力する日本人女性の姿に触発されて起きたAさんの変化があるように思われる。

Aさんは、その女性との出会いをきっかけに、その関係が自分の日本での生活や将来に何らかのメリットをもたらすことを視野に入れ、交流を維持する。そして、日本人でありながらバングラデシュの支援に奔走する女性に感銘を受けた。それが彼女と共に活動に参加し、自身の言語や文化的リソースを積極的に提供する行動につながったのではないだろうか。Aさんと日本女性のこのような交友関係の展開は、前章で観察したデータのように、何らかの異なりの対立が顕在化し、その解決のための交渉を通して関係が構築されるプロセスとは大きく異なっている。

言語生態学の観点から考えると、Aさんは、バングラデシュとの関わりを持つ日本人女性とさまざまなイベントに参加することを通して互恵的な関係を作っていたと言えよう。自国であれば、Aさんが積極的に参加するとは考えにくい行為（たとえば、大学卒業者がカレーの販売をする、ボランティア活動をするなど）も、日本における自分の周囲のコト・モノ・人のことを視野に入れ、配慮しつつ行動していたことの表れであるといえる。外国人でありながら、母国バングラデシュの学校設立に向かって努力する女性の「視座」を取り入れることによって、自分の視野が広がり、世界観が変わった。その変化がAさんの生活を豊かなものにしたのではないだろうか。Aさんはこのような社会活動に参加した経験について、次のように語っている。

聞き手：そうですか。そして、このような活動に参加したことによって日本の社会のなかで自分の立場に何か変化がありましたか。

Aさん：もちろん。日本にバングラデシュ人の友達も大勢います。彼らのほとんどは自由時間にお金を稼ぐためにアルバイトをしています。（彼らは）お金を儲けることを考えています。ですが、私はお金のことには考えませんでした。金を稼ぐことができる人もできない人もいますね。それをしなければならないというわけではありません。仕事の給料で生活できていたので、土・日の自由時間を使ってこのような活動に参加することによって自分の能力を向上させることもできました。そこで日本語を学んでいたし、同時に、日本に滞在していて、日本文化、日本社会を知る勉強にもなりました。無料で教えてもらっていたと言えます。

Aさんはこのような社会活動に参加することについて、日本語学習だけではなく、日本文化や日本社会についても学ぶ貴重な機会であると価値付けている。また、このような学びは、たとえ授業料を払っても経験することができない貴重なものであると考えていることがうかがえる。

バングラデシュ人の来日目的はさまざまである。しかし、一般的にお金を儲けることを最優先される場合が多い。特に社会人の場合、経済的な目的が最優先される傾向がある。Aさんの語りにも見られるように、多くの在日バングラデシュ人が、休日や暇な時間を自身の収入を増やすために利用することが多い。一方、Aさんは社会との関わり合いを重視している。このことから、Aさんは、日本で生活する上でお金よりも重要なものがあることを認識していたと考えられる。ここで扱った社会参加のエピソードが来日してから4年後に生じている。また、日本滞在期間8年の時点で行なわれたインタビューにおいて、Aさんは自身が経験した社会参加を肯定的に意味づけている。このことから、Aさんは長期的な日本滞在を志向し、周囲のコト、モノ、人との深い関係を作ることによって、より良い生活の場を構築していたといえよう。このようにAさんの社会参加は、当時の人間関係や生活の質を向上させただけでなく、将来の重要なネットワークにもつながっていた。

5.5 Sさんのデータ分析

5.5.1 Sさんのストーリー概要

Sさんは2006年に日本語学校の学生として来日し、現在東京で就職している。Sさんは来日以来、アルバイトや正社員として、さまざまな職場で、さまざまな仕事を経験している。Sさんには、2013年7月26日と2013年8月3日に計2回インタビューを行った。そして、2015年5月3日フォローアップ・インタビューを行った。

Sさんはイスラム教徒で断食の時期に自分の宗教や自分の生き方が誤解されないようにアルバイト先の店長に自ら断食の背景、やる方法などを説明している。Sさんの「自文化の説明」のエピソードは日本での生活の場を広げようとする努力が見られるという意味で興味深いため、分析対象として選定した。

5.5.2 分析結果と考察：自文化を認められる

5.5.2.1 SCAT 分析の結果

本項では、Sさんの「自文化の説明」のエピソードについての分析結果を述べる。まず、SCATによって分析した結果（マトリックス）を表5-3に提示する。表中、下線を付してある部分は、インタビューの中でSさんが日本語で発話した部分を表している。

表5-3 Sさんの「断食についての説明」のSCAT分析

番号	発話者	テキスト	<1>	<2>	<3>	<4>
58	Sさん	(笑)みんなそうあるべきでしょう。私たちのイスラム教、ムスリムの場合、それ(信仰心)がなければ	イスラム教、それ(信仰)がなければ	宗教的規範、自文化、宗教的行為	自文化、周囲の評価、自分	信仰心の表れとしての行為、周囲

		ばなりません。その時、本当のムスリムだねと言ってくれます。私は今断食しています。私のボスもとても喜んでくれています。	ればなりません、本当のムスリム、断食、ボスもとても喜んでくれています	に対する上司の賞賛	の宗教に対する矜持	の尊敬
59	聞き手	はい。				
60	S さん	断食の意味を説明し、理解してもらいました。うまく説明できたと思います。あとで(ボスが)ホームページに載せました。「このようなムスリムの人がここで働いていて、断食をしながら、ちゃんと仕事もやっています。」と書きました。断食のことをどう説明したか、言いましょうか。	自分の行為の説明し、理解してもらいました、(ボスが)ホームページに載せました	日本語で自分の行為の適切な解説、理解達成、上司による対外的アピール	日本語のやり取りに対する肯定的自己評価、宗教的行為に対する上司の積極的評価、第三者に情報拡散、自分の存在の公表	日本語運用能力に対する自信、上司の高い評価、具体的な行動による可視化、勤務先における自分の存在価値(リソース)の認識
61	聞き手	もちろん、どうぞ。				
62	S さん	私はなぜ断食しているかを説明しました。「私の国に大勢の貧乏の人々がいます。彼らは3食、食べられません。1食を食べても、苦勞して2食食べても、 <u>3回、食べる</u> ことできない。 <u>お金もないから</u> できない。 <u>それで私たちちょっと普通だから、金持ちじゃないけど、普通。それで、今断食をやる</u> のため、 <u>今3時か4時(から食べていない)…。今どう気持ちになる。何も食べないとき気持ちどうなる。それ分かるように、私たち断食をやります。一ヶ月の断食が終わったら、そのあと、お祭りが</u> あります。その時、 <u>金持ちたち、貧乏達に少しずつもお金をあげる。みんなこの感じであげたら、このお金で、何か仕事とかいいものを</u> 買って生活やる。」と説明しました。それを聞いて、日本人は「いいじゃん、これ」と言っていました。できるだけ頑張って、彼に説明しました。	なぜ断食しているかを説明しました、 <u>何も食べないとき気持ちどうなる、金持ちたち、貧乏達に少しずつもお金をあげる、日本人は「いいじゃん、これ」、頑張って、彼に説明</u>	日本語で詳細な説明、断食の背景にある戒めや思いやり、分かち合いの精神、相手の理解、伝えるための可能な限りの努力	自己保存への努力、自分の宗教のいい面にアピール、丁寧に詳細な説明による理解	断食の倫理的な側面の強調による日本人の共感の獲得
63	聞き手	(しゃぶ禅の)ホームページにそのようなことをも書かれるのですか。				
64	S さん	(しゃぶ禅の)他の支店がたくさんあるのですが、他の店の人たちにも、自分の所にはこのようなムスリムの人がいると伝えたよう	他の店の人たちにも、ムスリムの人がいると	他の支店への自分の存在のアピール、飲酒の	自分が他の支店に知らせるべき情報	ニュース価値のある情報となりうるムスリム

		です。彼ら（同僚たち）と乾杯するとき、私はジュースで乾杯します。彼らはビールでします。私がビールを飲んだりしたら、 <u>ああ豚</u> だけダメ、 <u>あとなんでも大丈夫</u> 、と思われてしまいます。そんなことを言われないようにしています。	伝えた、 <u>あとなんでも大丈夫</u> と思われてしまいます。そんなことを言われないように	場での規範遵守、誤解の恐れと予防	となる、宗教的規律を守る姿勢の提示、誤解されないように自分を律する	として自分の行為、宗教的タブーに対する態度の一貫性、誤解の予測と回避のために慎重な行動
65	聞き手	うん。				
66	Sさん	私はそのようにしています。しかしだからと言って、私が嫌われているわけではありません。ボスは、「君は君の文化に従い、私たちは私たちの文化に従う」と言っています。レジ、お金などで信頼関係の話になるわけですが私は、これは私自身の責任（で考えること）だと思います。誰も見ていないかもしれないが、今日が最後の日というわけではないのですから。	嫌われているわけではありません、「君は君の文化に従い、私たちは私たちの文化に従う」と言っています、レジ、お金、信頼関係、私自身の責任	不安がない関係性、お互いの文化を尊重する、金銭関係に誠実な態度	互いの領域を尊重する上司の態度、従業員としての自分を守ることが信頼関係につながる	居場所の確保、ムスリムとしての自己保存、相互の尊重、信頼関係は、宗教的違い、関係の継続、業務における責任ある態度の重要性
67	聞き手	分かりました。でも、なぜ日本人はこのようなことをとても大切にしていると思いますか？あるいは、そのことで皆の態度はどう変わりましたか。				
68	Sさん	ずいぶん変わったと思います。レジは店長だけではなく、バイトの人もやっていました。営業時間が終わってレジ閉めるとき、伝票通り、金額はぴったりでした。（同じ日）みんな多かれ少なかれ、レジに関わる仕事をしていました。店長が忙しい時、バイトの誰かがレジに立ったこともあったと思います。	ずいぶん変わった、 <u>レジ閉め</u> のとき、伝票通り、金額はぴったりでした	肯定的な印象、信頼、責任のある仕事	重要な役割を任せると	責任のある仕事のチャンス

表 5-3 に示した分析の結果、以下のようなストーリーラインが得られた。

Sさんの信仰心の表れである断食の行為は、周囲から尊重されている。Sさんは日本語運用能力に自信があり、断食の倫理的な側面を強調した説明をすることによって周囲の日本人の共感を獲得した。店長は、Sさんの行為を高く評価し、ホームページへの投稿という具体的な行為を通してその評価を可視化し、Sさんは勤務先における自分の存在価値（リソース）の認識することができた。Sさんは、ニュース価値のある情報となりうるムスリムとして自分の行為を認識し、宗教的タブーに対する自分の態度の一貫性を保つことで、誤解の予測と回避するという慎重な行動をとっていた。それによって、自身のムスリムとしての自己保存を実現し、また周囲とも尊重し合う関係になっている。信頼

関係ができていれば、宗教的相違があっても関係は損なわれないこと、そのためには、業務における責任ある態度が重要であると語っている。

次項では、上掲の研究課題 2-2、すなわち、在日バングラデシュ人が周囲の人に働きかけ、どのように異質だとされる文化的背景への理解を得ているかについて、S さんのインタビュー・データを詳しく分析・考察する。研究課題 2-2 を言語生態学の観点から明らかにするために、再度フォローアップ・インタビューを行った。このフォローアップ・インタビューのデータも参照しつつ、受け入れ側の日本人に自分の文化的背景に対する受け入れ側の日本人の理解を得られ、評価されたことによって S さん自身や周囲がどのように変わったかを確認する。必要に応じて、フォローアップ・インタビューで得た情報を参考にする。

5.5.2.2 考察

ここで扱う事例は、職場で S さんの上司に向けた断食の説明のエピソードである。この職場で S さんが断食することによって、何か問題が生じたわけではない。しかし、S さんにとっては、日本人側から見て異質の文化である断食のことを上司に理解してもらい、職場で自分が自由に宗教上の規律に則った行動ができるようになることは大切なことであった。S さんが、相手に断食のことを正しく理解してもらうためにどのような対応をしていたのかを表 5-3 から考察する。

5.5.2.2.1 自文化への理解を獲得する過程

まず、S さんと店長の人間関係の全体像を記述する。発話番号<58>では、「私は今断食しています。私のボスもとても喜んでくれています。」、<66>「ボスは、「君は君の文化に従い、私たちは私たちの文化に従う」と言っています。」のような発話、そして<60>で見られたボスが S さんの話に耳を傾けてくれたことなどから、お互いに信頼の関係があったことを推察できる。断食のことを具体的にどう説明したかに関し、S さんは次のように語っている。発話番号<62>「私の国に大勢の貧乏の人々がいます。彼らは 3 食、食べられません。一食を食べても、苦勞して二食食べても、三回、食べることできない。お金もないからできない。それで私たちちょっと普通だから、金持ちじゃないけど、普通。それで、今断食をやるのため、今 3 時か 4 時(から食べていない)…。今どう気持ちになる。何も食べないとき気持ちどうなる。それ分かるように、私たち断食をやります。一ヶ月の断食が終わったら、そのあと、お祭りがあります。その時、金持ちたち、貧乏達に少しずつもお金をあげる。みんなこの感じであげたら、このお金で、何か仕事とかいいものを買って生活やる。」(下線の部分はインタビューで日本語で語られていたことを示す)。ここで S さんは断食の倫理的な側面の強調することにより、日本人の共感の獲得しようとしている。S さんは宗教に関し、他人のことをどれだけ配慮すべきかを説明し、自分の誠実さをアピールしていたともいえる。この<62>では、S さんには日本語でどのように説明したかを思い出しながら再現してくれた。この時点で、S さんは日本語で説明できる能

力が十分身についていたと思われる。日本人にとって断食という習慣はあまり馴染みのあるものではないため、Sさんは、それを丁寧に言葉に表す必要性を感じていたといえよう。

そして、Sさんは職場で日本人側の信頼を得ることはとても大事だと感じていた。宗教などの自文化を認めてもらうために信頼関係が重要な働きをする。そこで、発話番号<66>で「レジ、お金などで信頼関係の話になるわけですが、私は、これは私自身の責任（で考えること）だと思います。誰も見ていないかもしれないが、今日が最後の日というわけではないのですから。」と述べているように、Sさんは正直に働くことを重視している。

このエピソードから、Sさんが問題の起きる可能性を回避するために工夫していたということがわかる。Sさんは日本語学校、専門学校、アルバイトなどのさまざまな場面で日本人と接触する経験があったため、相手に配慮する重要性を理解していたと考えられる。

5.5.2.2.2 自文化に対する周囲の承認によるSさんの生活の変化

Sさんは、日常生活で何か問題に直面しそれを解決したというわけではない。しかし、自分の宗教、文化などを相手に正確に伝えることによって、自己保存に成功し、周囲の人との宗教上・文化上の異なりの対立を回避することができ、結果として異なりを内在的に統合することにより、プライドを持って仕事を継続することができた。その後のSさんの生活の変化については、インタビュー内容から分からなかったため、フォローアップ・インタビューで確認した。以下のような語りが得られた。

聞き手：よかったですね。そういう出来事があって、あなたの気持ちはどうでしたか。自分の中で何か変わりましたか。

Sさん：とてもいい気持ちでした。1番は、説明できたことです。2番は、安心して宗教を守れたからです。自分の宗教のこと誰かが悪く思ったら、その時給がいくら高くても本当のイスラム教の人なら働かないでしょう。だから、私にとってとても重要でした。

聞き手：そうですか。それで自分が日本での生活で何か変化を感じましたか。

Sさん：そんなに大きな変化はありませんでした。逆に言うと、理解してくれなかったら、大きな問題が起きただろう。つまり、仕事は続けられなかったと思います。でも、認めてくれたことで安心でした。そして、他の人まで伝えてくれることは本当に嬉しかったです。多くの人がイスラム教について正しいことを知ると、僕たちも日本社会で安心でしょう。最近世界でイスラムのことはあまりいい印象はないでしょう。

フォローアップ・インタビューの語りからも、断食のことを日本人店長に理解してもらったことによって、Sさんは自信をもつことができたということがわ

かる。また、近年のグローバル化の中で宗教的なアイデンティティだけで誤解される恐れも高くなっているという状況の下、少なくとも自分が関わる周囲の人々に自分の宗教や文化を正確に理解してもらえることは非常に需要であろう。それは日本社会で生活の場を広げ、より良い生活に繋げるためには欠かせない要因であると考えられる。

Sさんの説明が店長に理解された結果、Sさんは職場でも問題なく宗教的な規律を守ることができた。店長からは、〈66〉「君は君の文化に従い、私たちは私たちの文化に従う」のように言われた。つまり、Sさんと店長の間の相互理解の達成によって、Sさんと職場の人々の間に起きる可能性のあったムスリムの宗教的な規律をめぐる異なりの対立は、回避されたといえよう。

さらに、〈60〉では、「あとで(ボスが)ホームページに載せました。『このようなムスリムの人がここで働いていて、断食をしながら、ちゃんと仕事もやっています。』と書きました。」から、店長がSさんの断食という宗教的な規律を積極的に肯定したことがわかる。また、Sさんと店長の関係が安定していたことによって〈68〉「レジは店長だけではなく、バイトの人もやっていました。営業時間が終わってレジ閉めのとき、伝票通り、金額はぴったりでした。」のように重要な仕事も任されるようになった。

Sさんの宗教的な規範に対して店長の承認が得られた結果、Sさんは安心して職場で行動できるようになったといえる。更に、店長がホームページにSさんの情報を投稿したことによってSさんの自身の宗教へのプライドが一層高まったと推測される。こうしたプロセスを経たことにより、職場はSさんにとって安心して働ける場となった。在日バングラデシュ人にとって、職場は生活する上で、非常に重要な居場所である。それゆえ、自分の考えや行動に対して、そこにいる人々の理解を得ることは重要であり、結果的に自分の生活の場を広げることにつながる。

5.6 まとめ

【研究2】は日本での生活において、自らの生活の場を広げ豊かにするために、日本語を使ってどのような社会的活動を行っているか、を明らかにすることを目的とした。そのために、社会人2人のインタビュー・データをSCATで分析した。その結果を以下にまとめる。

まずは、Aさんの結果を概観する。Aさんは地域の国際交流センターを通してバングラデシュと関わり合いを持つ日本人女性とイベント参加などをしていた。将来のネットワークを目指して、普段バングラデシュでは考えにくいカレー販売などのような活動にも積極的に参加していた。日本人女性と互恵的な関係ができ、相互配慮によって日本での生活の場を広げていた。Aさんは自分の日本滞在をもっと意義のあるものにするためにこのような社会的な活動に関わっていた。Aさんにとって日本社会との関わり合いによって、精神的に誇りを持つことができるようになった。つまり、ボランティアという社会的活動への参加は、直接的にAさんのより良い生活につながっていた。

そして、本研究で扱ったもう1人の社会人のSさんは、職場で断食というイスラム教の習慣を説明していた。誰かに要求されたわけではなく、自分が周囲

の環境を見て、日本人が理解できない断食のことを説明した方が良いと判断し、自分の立場がもっとはっきりさせるつもりで自ら説明した。その結果、自分の居場所であるアルバイト先でもっと落ち着いて、自文化へのプライドを持って働けるようになった。

上記 2 人のデータ分析結果、両ケースとも問題解決ではなく、自分の立場・生活を更によくするために主体的に行動していることがわかる。人間は誰でも常に問題に直面しているわけではない。しかし、誰しも社会の一員としてより良い生活を志向している。だからこそ、誰しも周囲のコト、モノ、人に自分を認めてもらえるように努力することを通して、より良好な人間生態場を構築しようとしている。

【研究 1】では、在日バングラデシュ人日本語学校の学生 2 人のインタビュー・データを分析し、日常生活でどのような問題に直面しているか、そして、その問題へどう対応しているかを分析・考察した。そして、【研究 2】では、社会人 2 人のインタビュー・データを同様に分析・考察し、在日バングラデシュ人の日本社会への参加の過程を明らかにした。【研究 1】および【研究 2】では、問題解決の場面であれ、社会参加の場面であれ、調査協力者にとって、当事者として周囲のコト、モノ、人に対する関わりを構築していくためには、生態学的リテラシーが重要であることがわかった。しかし、上掲の成果は、4 人の質的データを言語生態学の理論的枠組みの中で丁寧に分析・考察した結果得られた仮説である。その仮説が、在日バングラデシュ人一般にとってどれぐらい汎用性がある仮説として認められるのかを検証する必要がある。次章では、在日バングラデシュ人 169 人を対象に行った大規模質問紙調査によって得られたアンケート・データを集計・分析し、日本に暮らすバングラデシュ人がどのような場面での日本語使用を必要だと感じているかを明らかにする。そして、【研究 1】および【研究 2】で得られた生態学的リテラシー育成の重要性が、その大規模質問紙調査の分析結果の中でどのように検証できるかを報告する。

第6章 【研究3】在日バングラデシュ人の日本語使用の実態

【研究1】および【研究2】では、在日バングラデシュ人4名に対するインタビュー・データを詳細に分析し、彼らが仕事や生活の上でどのような問題に直面し、どう対応しているか、そして、どのような社会参加をし、生活の場を広げているかを、言語生態学的の見地から探った。その結果、在日バングラデシュ人の日本語使用や生活実態を知るためには、日本語能力だけではなく、周りのコト、モノ、人との関係をどのように構築し、自分自身を含めた当事者の生活をより良いものにするために活かしていくかを考える能力、すなわち生態学的リテラシーが必要であることが明らかになった。しかし、これらは限られた調査対象者のインタビュー・データの分析の結果であり、これだけで直ちに在日バングラデシュ人の日本語使用や生活実態を十分に把握したと言うことはできない。これらの結果をバングラデシュの日本語教育改善のために有効活用するためには、より多くの在日バングラデシュ人の日本語使用や生活実態を調査し、【研究1】と【研究2】で得られた知見が確認できるかどうかを検証する必要がある。

そこで、【研究3】では、在日バングラデシュ人を対象に、どのような場面での日本語使用の必要を感じているかを量的に調べるために、大規模な質問紙調査を行った。

6.1 研究課題

【研究3】では、在日バングラデシュ人の日本語使用実態を把握し、日本語使用を必要と感じている場面を明らかにするために、質問紙調査を行う。そして、その調査の結果を踏まえ、来日を目指すバングラデシュ人日本語学習者にどのような教育が必要であるかに関する示唆を得ることを目的とする。

【研究3】では、具体的に次の研究課題を設定する。

研究課題：在日バングラデシュ人は、日常生活のどのような場面で日本語使用を必要だと感じているか。

6.2 調査・分析

6.2.1 調査内容

在日バングラデシュ人の日本語使用について、日常生活、学校、職場、子供の教育という4つの場面について、計70の質問項目を準備し、「どれくらい日本語を使用しているか（使用頻度）」「どれくらい必要だと感じているか（使用必要度）」などを尋ねた。使用頻度と使用必要度は4段階評価で調査した。調査票の詳細は、添付資料①を参照されたい⁸。

⁸調査では、「どれくらい難しいと感じているか（困難度）」も尋ねたが、当該行動を経験していない者が多かったため、言語行動に対して困難度が示せず、回答の中に欠損値が非常に多かったことから、今回の分析対象から除外した。また、調査では、日常生活の場面だけではなく、学校、職場、子どもの教育についても尋ねたが、それらは該当する調査協力者のみに回答を求めたため、項目によって回答数に大きなばらつきがあった。そのため、本章では、これらの項目についても分析対象から除外した。

上述したように、データの分析・考察は、使用頻度と使用必要度について行ったが、使用頻度に関しては、アラム（2015）で集計・分析の結果を述べており、本研究では、「日常生活」の場面の 42 項目の中で在日バングラデシュ人がどのような場面で日本語を必要だと感じているかについて分析・考察した結果を報告する。

42 項目の質問を決定した過程は次の通りである。質問項目は、国立国語研究所（2010）の調査票から 32 項目、名古屋大学（2008）から 8 項目、文化庁（2010）から 5 項目を抽出し、バングラデシュ人が回答することを念頭において、筆者が必要に応じて加筆修正を加え、最終的に 38 項目に絞った。さらに、筆者自身の生活経験から今回の調査で質問に含めた方がいいと判断した 4 項目を追加し、計 42 の質問項目を作成した。筆者が加えた 4 項目は、「項目 27：テレビの娯楽番組（バラエティ・ドラマなど）を見て理解する」「項目 29：フェイスブックなどの SNS を使い、友人・知人と日本語でやり取りする」「項目 30：知人の日本人に生活上の問題について相談する」「項目 35：日本人に自分の宗教上の習慣について説明する」であった。

回答は、1：とても必要、2：時々必要、3：あまり必要ではない、4：全然必要ではない、の 4 段階評価で求めた。集計の時点で平均値や因子得点の高いほうが使用必要度が高くなるように、数字を入れ替え集計した。

調査票は、ベンガル語で作成した。また、英語版も作成し、希望する協力者に配布した。調査期間は 2014 年 6 月～2015 年 2 月である。調査票は手渡し、メール、郵送により配付した。

6.2.2 協力者

今回の調査は、バングラデシュ日本留学同窓生協会（Japanese Universities Alumni Association in Bangladesh）や筆者の知り合いのネットワークを活用し、日本に住むバングラデシュ人 450 人に調査協力を依頼した。在日バングラデシュ人の日本語使用の全体的な傾向を掴むことが目的であったため、年齢、性別、職業・在留形態、滞日期間、日本語能力などを限定せず調査協力を依頼し、最終的に 187 人から回答を得た（回収率：41.56%）。187 人の協力者の調査時点の在留形態は、日本語学校の学生が 64 人、大学・大学院生が 45 人、社会人が 60 人、家族滞在者が 12 人、その他は 6 人であった。また、男性が 164 人で、女性は 23 人であった。そして、バングラデシュ、日本を問わず、日本語学習経験がある協力者は 162 人、ない協力者は 25 人であった。

【研究 3】では、家族滞在 12 人とその他の在留形態の 6 人を除き、169 人分のデータを集計した。現在、バングラデシュ人が留学のために日本に入国する場合、文部科学省などの奨学金を受けて日本の大学・大学院に留学するケースと、民間の日本語学校に留学するケースの 2 つがある⁹。また、日本語学校や大学を卒業して、日本で就職するバングラデシュ人もいれば、IT などの仕事で来日す

⁹ 在バングラデシュ日本大使館のホームページによると、2013 年度バングラデシュからの国費留学生数は 96 人である。一方、日本語教育振興協会のホームページによると 2014 年度バングラデシュから日本語学校に留学した学習者数は 119 人である。

るバングラデシュ人も少数ではあるが存在する。これらの理由で分析対象を 3 つの在留形態の協力者に絞った。

6.3 調査結果

6.3.1 因子分析の結果

在日バングラデシュ人の日常生活に関する 42 項目について使用必要度を明らかにするために因子分析を行った。SPSS 22.0 バージョンで日常生活上の 42 項目の使用必要度に関する回答を因子分析した。42 項目について、検出力の高い最尤法による因子分析を行い、初期の固有値が 1.0 以上に達した 10 因子を説明因子として採用した。ついで因子間の相関を仮定して斜交回転（プロマックス法）による回転を行い、因子負荷量の絶対値が 0.40 に満たない項目を削除しつつ分析を反復し、最終的に 29 項目を分析対象とした。その結果、表 6-1 に示した 7 つの因子が抽出された。この段階でデータの KMO 値は 0.854、バートレットの球面性検定は 0.1%水準で有意であり、このデータが因子分析に適合することが確認された。また、7 因子の信頼性を検証するために、それぞれに対する α 係数を求め、7 因子のいずれも α 係数は 0.70 以上であり、因子が尺度として有効であることも確認した。抽出された因子の統計量を、次ページの表 6-1 に示す。

因子分析で得られた 7 つの因子は、以下のように命名した。第 1 因子は、「履歴書を書く」「求人広告を読む」「就職面接を受ける」「契約書を読む」「求人条件を問い合わせる」の 5 項目からなり、いずれも仕事に関わりが深い行動であることから、「仕事」と命名した。第 2 因子は、「ゴミの出し方について尋ねる」「チラシや掲示板から情報を読み取る」「知人の日本人に問題について相談する」「地域イベントで日本人と雑談」「近所の人とのトラブル対応」「地域の施設利用」「日本人に自分の宗教について説明する」の 7 項目からなり、いずれも地域コミュニティとの関わり合いに関連する行動であることから、「地域コミュニティとの関わり合い」と命名した。第 3 因子は、「病院で病状を説明する」「医師の説明を理解する」「問診表に記入する」「薬の説明を読む」の 4 項目からなり、いずれも医療に関わりが深い行動であることから、「医療サービスを受けるための行動」と命名した。第 4 因子は、「困ったときアパートの管理人・大家に相談する」「賃貸契約書を読んで理解する」「市役所で住所変更等の手続きをする」「イベントの知らせを読む」の 4 項目からなり、居住地域における様々なことに関連する行動であることから、「居住地域における生活者としての行動」と命名した。第 5 因子は、「飲食店で料理の材料の確認」「飲食店でメニューを読んで注文」「買いたいものの場所を尋ねる」の 3 項目からなり、お店かレストランで何かを買う行動であることから、「店内の購買行動」と命名した。第 6 因子は、「駅員への質問」「駅や車内でのアナウンスを理解する」「ネットで路線案内を確認する」の 3 項目からなり、いずれも交通に関する情報収集に関連する行動であることから、「交通情報の確認」と命名した。最後に、第 7 因子は、「テレビやラジオの災害情報」「テレビやネットの天気予報」「テレビのニュース」の 3 項目からなり、様々なメディアが提供する情報を理解できるかどうかに関連する行動であることから、「メディアからの情報収集」と命名した。

表 6-1 7 因子の統計量 (パターン行列の因子負荷量)

項目	言語行動	因子						
		1	2	3	4	5	6	7
	因子1: 仕事	α 係数 = .967						
NQ40	日本語で履歴書を書く	.1023	-.034	-.015	-.049	-.090	.023	-.007
NQ38	求人広告を読み、条件を理解する	.935	.096	-.011	.048	.013	-.043	-.037
NQ41	日本語で就職面接を受ける	.930	-.066	.036	.009	-.049	.005	-.008
NQ42	仕事の契約書(会社や工場、アルバイトなど)を読んで内容を理解する	.924	-.112	.030	.047	-.005	.063	.001
NQ39	電話で求人条件の不明な点について問い合わせる	.893	.173	-.035	-.042	.154	.001	-.093
	因子2: 地域コミュニティとの関わり合い	α 係数 = .846						
NQ31	近所の人にゴミの出し方について尋ねる	.092	.725	.043	-.131	-.004	.030	-.054
NQ32	自宅へのチラシや掲示板などから必要な情報を読み取る	-.157	.703	-.012	.040	.066	-.007	.025
NQ30	知人の日本人に生活上の問題について相談する	.050	.675	.027	-.103	-.009	-.136	.081
NQ33	国際フェアや地域の祭りなどのイベントに参加して、日本人と雑談する	.013	.655	-.131	.164	-.084	.153	.086
NQ34	近所の人とのトラブルに対処する	.009	.546	-.041	.249	.003	.022	-.044
NQ37	地域の施設(図書館、公民館、スポーツ施設等)の使用方法を係りの人に聞く	.174	.504	.034	.116	-.003	.062	.059
NQ35	日本人に自分の宗教上の習慣について説明する	-.003	.454	.116	-.085	-.063	-.004	.050
	因子3: 医療サービスを受けるための行動	α 係数 = .923						
NQ19	病院で医者や看護師に症状を説明する	-.059	.040	.957	.049	.019	.031	-.034
NQ20	病気・けがについて医者の説明を理解する	.019	.040	.955	.019	-.056	-.069	.018
NQ18	病院で初診の受付をして、問診表に記入する	-.021	-.096	.841	.130	-.004	.058	-.047
NQ21	薬局で出された薬に書かれた説明(種類、飲み方など)を確認する	.163	.035	.643	-.100	.035	.037	-.003
	因子4: 居住地域における生活者としての行動	α 係数 = .823						
NQ15	困ったとき、アパートの管理人・大家さんに相談する	.047	-.175	.102	.881	.037	.007	.095
NQ14	日本語で書かれた賃貸契約書を読んで理解する	.121	.010	.009	.655	.075	-.130	-.009
NQ13	引越しのとき、役所に住所変更等の手続きをする	-.145	.112	-.022	.652	-.007	-.099	-.071
NQ16	役所や国際交流協会の交流イベントのお知らせを読む	-.030	.128	.158	.617	-.075	-.017	.046
	因子5: 店内の購買行動	α 係数 = .755						
NQ2	飲食店で店員に料理の材料を確認する	.043	-.090	-.073	.072	.926	.004	.067
NQ1	飲食店で写真のあるメニューを読んで注文する	.042	-.015	-.041	-.033	.758	-.057	.044
NQ4	店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる	-.192	.139	.246	.000	.430	.131	-.089
	因子6: 交通情報の確認	α 係数 = .800						
NQ8	駅員に行き方や乗り換えなどについて質問する	.008	.070	-.006	-.101	-.050	1.001	-.036
NQ7	駅の構内や乗り物の中でアナウンスを聞く	.017	-.009	.101	-.201	.090	.664	.160
NQ10	ネットで「路線案内」を確認する	.035	-.079	-.045	.301	-.025	.493	.016
	因子7: メディアからの情報収集	α 係数 = .790						
NQ24	テレビやラジオの災害情報を理解する	-.042	.091	-.027	-.033	.110	-.083	.830
NQ25	テレビやネットで天気予報を理解する	-.114	-.028	-.046	.050	-.040	.186	.828
NQ26	テレビのニュースを見て理解する	.191	.137	.054	.058	-.054	-.131	.468

アラム (2015) は、上述の質問紙調査票を用いて在日バングラデシュ人 111 人に対して、日常生活上の 42 項目の日本語使用頻度を調査し、その結果を報告している。それによれば、調査協力者の回答を因子分析した結果、「求職活動」「医療関連の行動」「交通情報の確認」「地域コミュニティとの関わり合い」「メディアからの情報収集」という 5 つの因子が抽出された。これらの因子は、今回の調査で抽出された 7 つの因子と比べてみると、特徴がよく似ていることが

わかる。このことから、在日バングラデシュ人が実際に日常生活の中で日本語を使用している場面と、将来にわたって日本語使用が必要になると感じている場面が非常に近いことが確認されたと言える。

6.3.2 使用必要場面の大別化

前節では、使用必要度に関する質問紙調査の結果、7つの因子が抽出されたことを述べた。本節では、その7つの因子に含まれる言語行動にどのような特徴が見られるか、言語行動の特徴の共通性の視点から7つの因子に含まれる言語行動を再分類し要約してみたい。

まず、表6-1に挙げられている因子3、因子5、因子6、因子7に注目する。それぞれの因子には、以下のような言語項目が含まれている。

表6-2 因子3、因子5、因子6、因子7に含まれる言語項目

因子	言語行動
因子3 医療サービスを受けるための行動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 病院で医者や看護師に症状を説明する ■ 病気・けがについて医者の説明を理解する ■ 病院で初診の受付をして、問診表に記入する ■ 薬局で出された薬に書かれた説明（種類、飲み方など）を確認する
因子5 店内の購買行動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 飲食店で店員に料理の材料を確認する ■ 飲食店で写真のあるメニューを読んで注文する ■ 店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる
因子6 交通情報の確認	<ul style="list-style-type: none"> ■ 駅員に行き方や乗り換えなどについて質問する ■ 駅の構内や乗り物の中でアナウンスを聞く ■ ネットで「路線案内」を確認する
因子7 メディアからの情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ■ テレビやラジオの災害情報を理解する ■ テレビやネットで天気予報を理解する ■ テレビのニュースを見て理解する

表6-2に含まれる言語行動を注意深く見てみると、「病院で医者や看護師に症状を説明する」「病院で初診の受付をして、問診表に記入する」「飲食店で店員に料理の材料を確認する」「店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる」「駅員に行き方や乗り換えなどについて質問する」「駅の構内や乗り物の中でアナウンスを聞く」「テレビやネットで天気予報を理解する」「テレビやラジオの災害情報を理解する」など、日常生活の中で生きていくために必要な状況・場面での日本語使用とまとめることができる。このような場面での日本語使用は、その場での問題解決が必要なことであり、一定の手順やコトの進行が理解できれば、日本語能力に大きく頼ることなく、同様の行動や対応を繰り返すことができるという意味で、ルーティン性という共通性を持っている。また、このような場面で起こる問題は、さほど長い時間をかけて対応しなければならないというものではなく、一時的、あるいは即時的な対応で解決できるものが多い。日本語能力の観点からすれば、このような場面では、特定の語彙や表現、文型（いわゆる定型表現）に慣れていれば、おおむね対応できると考えられる。本稿では、

これらの言語行動をサバイバル場面における言語行動と呼ぶ。

次に、表 6-1 に挙げられている因子 1 と因子 4 の言語行動に注目したい。因子 1 と因子 4 には、表 6-3 に整理される言語行動が含まれている。

表 6-3 因子 1、因子 4 に含まれる言語項目

因子	言語行動
因子 1 仕事	<ul style="list-style-type: none"> 日本語で就職面接を受ける 電話で求人条件の不明な点について問い合わせる 日本語で履歴書を書く 求人広告を読み、条件を理解する 仕事の契約書（会社や工場、アルバイトなど）を読んで内容を理解する
因子 4 居住地域における生活者としての行動	<ul style="list-style-type: none"> 困ったとき、アパートの管理人・大家さんに相談する 日本語で書かれた賃貸契約書を読んで理解する 引越しのとき、役所に住所変更等の手続きをする 役所や国際交流協会の交流イベントのお知らせを読む

表 6-3 の 2 つの因子には、「日本語で就職面接を受ける」「電話で求人条件の不明な点について問い合わせる」「困ったとき、アパートの管理人・大家さんに相談する」「引越しのとき、役所に住所変更等の手続きをする」などの言語行動が含まれているが、これらの言語行動は、周りの人との一時的な相互行為のみで問題を解決することは難しい場面での日本語使用と考えられる。上述のサバイバル場面における言語行動とは違って、このような場面では、特定の語彙や表現、文型を覚えていれば直ちに対応できるということではない。言語行動にルーティン性はなく、むしろ相手の反応に合わせて臨機応変にこちらの対応を調整し、それに合わせて適切に日本語を使用することが求められる。ある程度時間をかけて、問題の所在を確認し、相手の立場や考え方に配慮しながら、当事者同士で話し合っって問題解決に当たらなければならないケースが多い。本稿では、このような場面の日本語使用を、臨機応変な問題解決が必要な場面における言語行動と呼ぶ。

表 6-1 には、もう一つ因子が残っている。それは因子 2：地域コミュニティとの関わり合いで、「近所の人にゴミの出し方について尋ねる」「自宅へのチラシや掲示板などから必要な情報を読み取る」「知人の日本人に生活上の問題について相談する」「国際フェアや地域の祭りなどのイベントに参加して、日本人と雑談する」「近所の人とのトラブルに対処する」「地域の施設（図書館、公民館、スポーツ施設など）の使用方法を係りの人に聞く」「日本人に自分の宗教上の習慣について説明する」の 7 つの言語行動から成っている。これらの言語行動は、日常生活を送るうえで絶対に必要ということとは言えないものの、日本での生活

をより豊かにし、生活の場を広げ、その生活を楽しむために、積極的に周りのコト、モノ、人との関係を広げていくときに必要となる言語行動とまとめることができる。このような場面では、自分自身の興味や関心、好奇心、将来設計、友人関係や知り合い関係の拡大など、一人の人間として、周囲の社会と関わりをもち、新しい活動の場を求めて社会参加していくことに関わる言語行動という特徴を持っている。本稿では、このような場面の言語行動を外の世界への積極的な社会参加の場面における言語行動と呼ぶ。

以上の分析から、在日バングラデシュ人が日本での日常生活の中で、大きく3つの場面で、すなわち、①サバイバル場面、②臨機応変な問題解決が必要な場面（以下、臨機応変な問題解決場面と略す）、③外の世界への積極的な社会参加場面（以下、外の世界への社会参加場面と略す）で日本語使用の必要性を感じていることが明らかになった。ここで、注目したいのは、【研究1】と【研究2】で明らかになった問題解決場面と社会参加場面が、上掲の②の臨機応変な問題解決場面と、③の外の世界への社会参加場面として、【研究3】の量的な質問紙調査の結果でも確認されたことである。言い換えれば、【研究1】と【研究2】で4人の在日バングラデシュ人のインタビュー・データを質的に分析・考察した結果が、169人の在日バングラデシュ人を対象にした量的な質問紙調査でも検証・確認されたということである。

では、臨機応変な問題解決場面と、外の世界への社会参加場面として、調査協力者は具体的にどのような場面に遭遇しているのだろうか。次項では、具体的な場面で生態学的リテラシーがどのように必要だと考えられるか、質問紙調査の中で行われた自由記述の内容から検討したい。

6.3.3 自由記述で見られた特徴

質問紙調査では、上掲した選択肢調査の他に、「日本での生活上にどのような場面で困難を感じましたか」「勉強や日本のことで、来日前、バングラデシュにいる間に知っておけばよかったと思うことはありますか」という質問について、ベンガル語での自由記述回答を求めた（詳細は、添付資料①を参照のこと）。分析にあたっては、筆者がベンガル語から日本語に翻訳をし、翻訳の信頼性を得るために、第三者に翻訳の適正チェックを依頼し、その信頼性を確認した。本節では回答者の自由記述回答を内容的に整理し、具体的にどのような場面での困難を感じているか、また、その問題を解決するために、生態学的リテラシーがどのように重要であるかを見ていきたい。

まずは、自由記述の全体の特徴を見ていきたい。169人の調査協力者のうち117人から合計213件のエピソードの記述を得ることができた。そのうち93件は、ただ「日本語が必要」と書いているだけのものか、将来日本に留学したいと考えているバングラデシュの日本語学習者に対するアドバイスとして「日本語を勉強してください」と書いているようなものであり、本稿で分析・考察したいと考えている問題解決や社会参加に関する具体的なエピソードは書かれていなかったため、本章の分析対象から外した。残り120件の記述の内容を詳細に見ると、問題解決と社会参加に関するものが75件あった。残りの45件の記述は「電車で座ったら、隣の人が別の席に移動した」「駅が広い」「日本は女性

のために安全な国だ」「日本人の英語の発音は僕たちと違う」など、調査協力者が日本に来て周りの様子を観察して気づいたことを記述したものあり、何か問題や出来事が起きて、自分が当事者としてそれに関わったということについての記述ではなかった。本稿では、問題解決場面と社会参加場面に焦点を絞り分析を進めるため、調査協力者の傍観者としての気づきについて述べられた 35 件は分析対象から除外した。

75 件のコメントを大きく分けると、問題解決場面に関する記述が 68 件、日本での生活の場を拓げるための社会参加行動に関する記述が 7 件であった。それぞれの場面の詳細については、まず、問題解決場面については、記述数が多かった順に、イスラム教の食品・食材制限について (16 件)、車内での通話禁止やゴミ収集のルール順守などの公衆マナーについて (13 件)、職場での就業時間や仕事の進め方に関する問題について (11 件)、切符の買い方、電車の乗り換えなど、駅で遭遇するトラブルについて (9 件)、礼拝の場所の確保や断食など宗教的義務について (6 件)、病院で診療を受ける際に起こる問題について (5 件)、アルバイト探しに関わる問題について (4 件)、買い物場面の問題について (4 件) であった。全体を見ると、食品・食材制限と礼拝の場所確保というイスラム教の宗教的義務に関わる問題が合わせて 22 件と最も多く、次に、職場での就業時間やアルバイト探しなど、仕事に関わる問題が合わせて 15 件と多かった。また、車内での通話やゴミの処理など、日常生活でのルールの違いによる問題も 13 件と多かった。

社会参加場面については、日本人との関わり合いが 5 件と最も多く、周りの日本人との人間関係構築の難しさを述べているものが多かった。また、イスラム教について周りの日本人に説明するという経験談を述べたものと、周りの日本人とお互いの文化や習慣について教え合うことの大切さについて述べたものが、それぞれ 1 件ずつあった。

以上のように、自由記述を詳細に分析すると、内容的に 6.3.3 で見た 2 つの場面、すなわち、臨機応変な問題解決場面と外の世界への社会参加場面と深い関わりを持つと考えられる経験談が数多く挙がっている。次節では、【研究 1】で扱った問題解決場面と【研究 2】で扱った社会参加場面に照らし合わせて自由記述の具体的な経験談を分析する。

6.3.3.1 問題解決場面

上述したように、問題解決場面としては、イスラム教の宗教的義務や仕事の進め方、公衆マナーに関する記述が多かった。代表的な記述例を挙げ、実際にどのような問題があったのかを、詳しく見ていきたい。

まず、イスラム教における食品・食材に関する制限について述べられた問題から見てみよう。バングラデシュの国民の 9 割はイスラム教徒で、今回の調査協力者の 9 割もイスラム教徒である。彼らが抱えている最も大きな問題の 1 つは、周囲の人に宗教上でタブーとされる食品について説明することである。ある 20 代の日本語学校の学生は、料理に入っている豚肉について、次のような体験談を述べている。

【記述例 1】

多くの料理に豚肉が入っている。食べないと言ったら、一緒にいた日本人が気にしたようだ。私もうまく説明できなかった。(協力者：R-170、20代のイスラム教徒の男性で、日本語学校の学生)

記述例 1 のような問題については、中野他 (2015) が、在日ムスリム留学生が抱えている重要な問題の 1 つとして食材や食べ物の中身などに関する「飲食の制限による困難」を挙げている。【研究 1】の N さんのケースにも同様の問題があったが、日本に暮らすムスリムの場合、多かれ少なかれこのような食品や食材に関する問題は経験していると思われる。このような問題については、ただ単に相手に「自分は、これは絶対に食べない」と言うよりも、なぜ食べられないのか、自分にとって宗教を守ることとはどのような意味なのかを丁寧に説明する必要がある。自分たちの宗教的な理由による食事・食材制限を相手に理解してもらうためには、相手が納得できる説明を工夫する必要がある。【研究 1】の N さんが試みたような、誰にでもいろいろな理由で守らなければならないルールや慣行があり、それは相互に尊重されなければならないという、人として生きる上で誰もが考えなければならない共通の原則として、相手にわかってもらうように工夫すること、すなわち生態的リテラシーを持つことが必要になる。

イスラム教の宗教的義務については、食品・食材制限以外にも、いろいろな問題が述べられていたが、中でも礼拝の場所についての問題は深刻である。ある 20 代の日本語学校の学生は、外出先での礼拝について以下のような問題を記述している。

【記述例 2】

うちの外でお祈りすることは困難だ。適切な場所がないから。(協力者：R-169、20 代のイスラム教徒の男性で、日本語学校の学生)

敬虔なイスラム教徒は 1 日に 5 回の礼拝を欠かさない。在日バングラデシュ人の中にも当然のことながら、敬虔なムスリムは数多くおり、彼らにとって外出先で礼拝の場所を確保することは非常に重要である。特に、勤務時間内に 3 回の礼拝の時間が重なる可能性があるため、職場やその周辺に礼拝するためのスペースが必要となる。解決法としては、イスラム教における礼拝の意味を周りの人に理解してもらうことが必要になる。イスラム教では、どうして一日に 5 回の礼拝が必要で、しかもその礼拝はどこで行ってもいいというものではなく、神聖なる方角（キブラ）に向かって、定められた方式にしたがって行われなければならない。イスラム教で定められた方式に則って礼拝をするためには、然るべき礼拝の場所が必要であり、それを勤務先や教育機関内に確保したいという、ムスリムの願いを周りの日本人や関係者にわかってもらい、自分たちが望む礼拝が行えるように、自分たちが妥協・協力できる部分は調整し、双方にとって納得ができる解決法を探していくことが重要である。礼拝について、周りの人の理解が得られれば、落ち着いて自分の宗教文化を守ることができ、宗教的生活を保持することができる。

イスラム教の宗教的義務以外で多く挙げられたのが、日本の職場での慣行、特に就業時間に関わる問題であった。以下に、その代表的な例を挙げる。

「記述例 3」

午後 5 時からのアルバイトにちょうど 5 時に行ったら、叱られた。15～20 分前に着いて、ちょうど 5 時から仕事を始める準備が必要。わが国では違うでしょう。(協力者：R-104、20 代のイスラム教徒の男性で、日本語学校の学生)

記述例 3 の協力者は、20 代の日本語学校の学生で、自分がアルバイトをしていた職場で、契約時間ちょうどに仕事に行き叱られたことが、自国の職場の慣行や就業時間の感覚から理解できなかった。このような問題に直面した場合、まずは、日本人の就業時間に対する感覚、職場での時間の使い方に関する理解が必要である。日本では、仕事の開始時間の前に時間的な余裕を持って職場に行くのが慣行であると思われるが、来日して数ヶ月しか経っていない外国人の場合、このような慣行に慣れておらず、開始時間に職場に入っていればいい、終業時間になったら直ちに帰宅していいというような理解で行動すること多いと考えられる。このような問題の解決には、日本語能力だけではなく、職場の環境や周囲の人の行動を観察し、周りの人との良好な人間関係構築のために、自分自身の行動を調整する力が必要であろう。そして、自分と周りの人の双方が納得できる就業時間に関する共有理解を作り上げることが解決につながると考えられる。【研究 1】で、I さんは、アルバイトⅡのケースで職場の終業時間を自国の慣行で捉えたため、仕事を続けることができなかった。このような場面では、在日バングラデシュ人と周りの日本人、双方の当事者が互いの考え方や生活習慣に配慮し、自身の行動を調整する生態学的リテラシーが必要である。

以上、在日バングラデシュ人が日常生活の中で経験した問題として、主だったものを具体的な例を挙げながら、生態学的リテラシーの必要性の視点から説明した。次に、社会参加場面について、どのような記述があったのか、具体的な例を挙げて説明する。

6.3.3.2 社会参加場面

自由記述では、問題に直面している場面だけではなく、日本での円滑な生活のために、社会との関わりや自らとすべき行動についての記述もあった。以下は、いくつか代表的な記述の例を挙げて述べる。

まずは、周囲の人々にバングラデシュ人の生活文化について、何をどう説明したかについて述べられた体験談を一つ挙げる。

【記述例 4】

私にとっては、日本語使用のもっとも重要な目的は、近所の日本人と機会があるときディスカッションをすること。そして、私の宗教について彼らの質問に答えること。(協力者：R-078、30 代のイスラム教徒の男性で、大

記述例 4 を見ると、この調査協力者は、近所の日本人に自分の宗教（イスラム教）のことを説明することが非常に重要であると感じていることがわかる。近年、世界中でイスラム教に関わる、いろいろな事件が起きており、イスラム教に抵抗を感じている日本人も少なくない。従って、日本に暮らすバングラデシュ人にとって、周りの人にイスラム教のことを正しく理解してもらうことは、社会生活を営む上で、人間関係を構築していく上で非常に重要なことである。

【研究 2】の S さんが、職場の人に断食について説明し、理解を求めたように、イスラム教について近所の人の疑問に答える必要がある。自分の宗教に関して周囲の人の理解が得られれば、日常生活で彼らとの共存関係が作りやすくなっていく可能性がある。

また、社会参加場面で重要なのは、自分自身の生活の場を豊かにするために日本人や日本社会との関わり合いをどのように広げ、深めていくかである。ある 20 代の日本語学校の学生は、在日バングラデシュ人が周囲のさまざまな地域コミュニティや社会活動に参加していくことについて、次のように述べている。

【記述例 5】

日本に来るのは夢だった。日本滞在中、多くの日本人(地域コミュニティ)と接したい。色々な観光地に行ってみたい。このようなネットワークを誰にも紹介してもらっていない。(協力者：R-138、20 代のイスラム教徒の男性で、日本語学校の学生)

在日バングラデシュ人の多くは留学や就職の目的で来日しているが、日本社会や文化に興味を持ち、日本人と接触的な関わりを目指す人もいる。それによって新しい文化を体験することもできれば、自分の生活もより豊かにできる可能性がある。【研究 2】では、A さんは自らいろいろな機関や人とのネットワークを築き、ボランティア活動などを通して相手に歩み寄ることによって自分の生活の場を広げることができた。上掲の記述例 5 を見てみると、さまざまな地域コミュニティや日本社会との接触を希望していても、仲介してくれる人がおらず、接触機会が非常に限られていることがわかる。特に、来日して間もない人や、日本語学校や大学・大学院での勉強や研究が生活の中心になっている留学生にとっては、なかなか周囲の日本社会との接点を持つことは容易ではない。状況は決して簡単ではないが、【研究 2】の A さんのように、自ら一歩前に進む必要がある。すなわち、地域の交流センターなどをうまく利用し、自分の興味関心に合う団体・人との関わりあいを目指し、彼らがやっていることで自分が興味を持つものは何か、仲間にどう入らせてもらえるか、自分もそのグループ・人のために何かできることがあるのかなどを確認した上で行動する必要がある。

そして、【研究 2】の質的調査では、具体的な語りは見られなかったが、日本文化に興味を持ち、日本人との関わり合いによって、自分の興味・関心が広がっていく可能性があるという記述もあった。

【記述例 6】

ネイティブの日本人の知り合いがいたら、メリットがある。日本文化について教えてもらえるから。(協力者：R-047、20 代のイスラム教徒の男性で、日本語学校の学生)

上掲の記述例 6 の協力者は、日本文化に興味を持ち、それを知るためにさまざまな工夫をしていることがうかがえる。確かに、日本人の知り合いがいれば、日本のことをいろいろ教えてもらえる可能性が高くなるだろう。問題は、どのようにすれば、そのような関係を構築できるかについて考える必要がある。例えば、職場や学校などでもっと親しい関係作ろうとした場合、まず、相手に自分の目的や興味・関心、生活などをはっきり伝える必要がある。また、相手もどのような人か、どのようなことに興味があるのかなどをできる範囲で確認し、自分が興味を持っているものに関連があれば、有効な関わり合いができる可能性が高くなる。このように考えると、自分自身の来日目的や将来の夢、興味や関心などを広げたり深めたりするためには、自分のことを相手に伝え、相手のことを知り、その上で双方に意味のある思考や行動、時間を共有できる素地作りが非常に重要になってくることがわかる。その意味で、お互いを知り、互恵的な関係を作ることがよりよい生活を展開していくためには重要であることが確認される。【研究 1】と【研究 2】で明らかにしたように、お互いの立場や考え方価値観などを知り、双方の利益になるような関係を作り、協働作業によって自分たちの居場所を広げていくためには、生態学的リテラシーの発動が重要な役割を持っている。

以上、大規模質問紙調査の自由記述部分から、在日バングラデシュ人がどのような問題解決場面、あるいは、社会参加場面に関わり経験をしているのかを分析・考察してきた。その結果、周囲のコト、モノ、人のことを配慮し、当事者全員が納得・共有できる生態場を作り上げるための努力、すなわち生態学的リテラシーを持ち、それを日々の生活の中で発動させていくことの重要性を確認することができた。

6.4 全体考察

【研究 3】では、在日バングラデシュ人に大規模な調査を行い、彼らはどのような場面で日本語使用の必要を感じているかを明らかにした。その結果、①サバイバル場面、②臨機応変な問題解決場面、③外の世界への社会参加場面の 3 つの場面で日本語使用が必要とされていることがわかった。在日バングラデシュ人の日常生活での日本語使用を、これら 3 つのグループに分けて見てみると、各因子にまとめた言語行動の下位尺度の平均値によつての傾向としてサバイバル場面⇒臨機応変な問題解決場面⇒外の世界への社会参加場面の順でその使用必要度が低くなっている。この結果は、ある意味当然だと考えられる。海外で生活するためには、特に来日してまだ時間が経っていない在日バングラデシュ人にとっては、まずは日常生活の中のサバイバル場面を乗り越えなければならない。サバイバル場面は、緊急度は非常に高いが、一度、その場面を経験し、

うまく乗り越えることができれば、生活するうえで支障をきたす問題は少なくなっていくと考えられる。しかし、周りのコト、モノ、人との関わりが広く深くなるにつれて、即時的には解決できない問題や周りとの関係のあり方を考えなければならない局面に直面することが考えられる。それらは日本でよりよい生活を送るために、避けては通れない場面だと考えられる。

また、【研究 3】で明らかになった臨機応変な問題解決場面と外の世界への社会参加場面の問題を考えるためには、単に日本語能力だけではなく、周囲のコト、モノ、人との関わり合いやその環境を把握した上での行動が必要になる。すなわち、これらの問題を乗り越えるために、生態学的リテラシーを身につける必要がある。以上の点は、【研究 1】および【研究 2】の質的調査で明らかにしたことを支持するものである。質的調査では、限られた協力者のデータを分析したが、【研究 3】で在日バングラデシュ人に行なった量的な調査でも同様な傾向が見られ、日本での生活をより円滑に行なうために、生態学的リテラシーが必要であることが再確認された。言い換えると、問題解決場面と社会参加場面が量的調査によって確認されたことは、【研究 1】および【研究 2】で得られた知見が個別的な事例にのみ起きたことではなく、ある程度一般化が可能な現象であることを示すことができたと言える。

最後に【研究 3】で得られた知見をバングラデシュの日本語教育の改善のためにどう生かすかについて考えたい。上述した通り、【研究 3】では、在日バングラデシュ人の日本語使用必要場面と具体的な経験談を分析し、3つの使用場面の確認ができた。サバイバル場面での日本語使用の重要性については、国立国語研究所（2010）、名古屋大学（2008）、宇佐美（2010）、文化庁（2010）などの先行研究でも、その必要性が論じられているが、今回の調査の結果からも、在日バングラデシュ人が日常生活の中でサバイバル場面における日本語使用の必要性を強く感じていることが確認された。今回、大規模な質問紙調査で明らかになったサバイバル場面は、JF 日本語教育スタンダードなどの Can-do 記述を参考に、授業の具体的な目標設定に取り入れることが可能である。また、問題解決と社会参加場面において求められる生態学的リテラシーの育成には、教授法上の工夫が必要である。

以上を踏まえ、次章の総合考察では、【研究 1】【研究 2】【研究 3】の結果を基にバングラデシュの日本語教育の改善のための具体的な提言をしたい。

第7章 総合考察

本章では、これまで述べてきた3つの研究の結果を総括し、「バングラデシュ人の能力観」の観点から総合的な考察をする。その上で、バングラデシュの日本語教育および外国語教育への政策方略的な提言をする。

本研究では、バングラデシュのダッカ大学の日本語教育の内容と方法を改善するために、在日バングラデシュ人が日本での日常生活の中でどのような場面でどのように日本語を使って社会生活を送っているのかを明らかにすることを目指し、3つの研究を行った。それぞれの研究の目的と課題は次の通りである。

【研究1】

研究目的：在日バングラデシュ人は日常生活の中で直面している問題にどのように対応をしているか。

【研究2】

研究目的：在日バングラデシュ人は豊かな生活を目指してどのように社会的関係を構築しているか。

【研究3】

研究目的：在日バングラデシュ人は、日常生活のどのような場面で日本語使用を必要だと感じているか。

【研究1】および【研究2】では、日本に暮らすバングラデシュ人にインタビュー調査を行い、彼らの語りを言語生態学の理論を援用し、質的に分析した。まず、【研究1】において、在日バングラデシュ人が日常生活の中で直面した問題をどのように捉え、その解決に向けてどのような対応をしたか、さらには問題解決のプロセスの中で彼らの考え方や価値観がどのように変わっていったかを分析・考察し、その問題解決過程の中で彼らの生態学的リテラシーが他者との相互行為を通してどのように発動されたか、そのあり様を記述した。次に、【研究2】において、日本に7～8年暮らしている社会人の語りを分析し、日本での生活をよりよいものにするために、自ら周囲のコト、モノ、人にどのように働きかけ、新しい生態場（共有できる居場所）を獲得していったかを明らかにした。そして、彼らもまた生態学的リテラシーを身につけていることを確認した。

【研究1】および【研究2】は限られた調査協力者のデータ分析の結果であり、これをもって在日バングラデシュ人の全体的傾向ということはできない。そこで、【研究3】では、広く在日バングラデシュ人の日本語使用の状況を調べるために、在日バングラデシュ人169人を対象に、どのような場面で日本語使用が必要だと感じているかを明らかにするために質問紙調査を実施した。その結果、在日バングラデシュ人が日本語使用の必要を感じる場面は、大きく、①サバイバル場面、②臨機応変な問題解決場面、③外の世界への社会参加場面の3つに分けられた。そして、②の臨機応変な問題解決場面と③の外の世界への社会参加場面では、【研究1】と【研究2】で明らかにされた生態学的リテラシーが重要であることが確認された。

本章では、以上の研究成果を踏まえ、授業実践者の立場から総合考察を行う。

まず、7.1で、それぞれの研究で見られた在日バングラデシュ人の能力観について議論する。バングラデシュの日本語教育（ひいては外国語教育）はどのような能力観に基づいて行われているのだろうか。そして、その能力観は、実際に日本に暮らすバングラデシュ人が日々の体験の中で感じ、無意識的に抱いている能力観とどのように関係しているのだろうか。これを明らかにすることは、今後、バングラデシュの日本語学習者にどのような力を育成すべきなのか、さらには、バングラデシュの日本語教育、並びに外国語教育のあり方を改善していくために非常に重要な視座を提供できると考える。

7.2では、7.1での考察を踏まえ、本研究で明らかにした知見を現場にどのように活かすことができるかについて、ダッカ大学の日本語教育の授業内容・授業方法の改善および、バングラデシュの外国語教育全般に援用できる言語使用実態調査モデルの提示の2点から、提言を行いたい。

7.1 在日バングラデシュ人の日本語使用に見られた能力観

7.1.1 【研究1】で見られた能力観

【研究1】では、在日バングラデシュ人の日本語学校の学生2人のインタビューの語りから、彼らが周囲のコト、モノ、人と向き合うときに生じる問題にどう対応しているかについて考察した。

日本に来て数ヶ月の段階で日本語学校に通う2人の学生は、アルバイト先で、生活習慣や労働慣行、人間関係の捉え方について、日本とバングラデシュの考え方における異なりに直面したことを語っていた。最初の段階では、日本語能力が充分ではないことが周囲の日本人や外国人との問題解決を阻んでいる、あるいは、日本語が分かるようにさえなれば、このような対立はしなくてすむというように、日本語能力の不十分さを問題解決の難しさの原因に挙げていた。

しかし、彼らは日本語を使って何をどのように説明・交渉すれば、自分の考え方や価値観を維持でき、しかも周りのコト、モノ、人とうまく折り合いをつけられるのかを模索するようになる。そして、次第に、双方が納得・理解できる中間地点（共有できる居場所）をどのように見出すかを考えるようになっていく。たとえば、アルバイトの労働時間に関して不満を持っていた学生は、シフト制における他の学生との助け合い、職場のシステムとして整備された労働時間と人員配置の柔軟な調整に触れ、いつも自分の都合を主張するだけでなく、他者の視座を取り入れること、周囲と持ちつ持たれつ的な考え方で最善の方法を見つけていくことで、自分の生活のあり様が改善されることを学んだ。もう1人の学生は、宗教上のタブーである食品について職場の日本人の同僚に説明する際に、どこの国や地域にもしてはいけないことがあること、自分にとっては豚肉を食べることは、その「してはいけない」ことに該当すると伝えたことで、理解と共感を得た経験を語った。これら2人の語りは、言語生態学の理論で言えば、当初は孤立実体観的な能力観が強かった在日バングラデシュ人が、徐々に言語生態学的能力、生態学リテラシーを身につけ、周囲のコト、モノ、人に対して、どのような調整行動や配慮行動をとればいいのかを考えていくことができるようになったと捉えることができる。彼らはそれぞれの場で、周囲のコト、モノ、人に対して、自分と相手双方の利益を考え、考え方や習慣・

慣行を尊重し合い、互惠性を考えることができるようになっていった。

【研究 1】の分析結果から、在日バングラデシュ人にとって、周囲のコト、モノ、人との関わりの中で生じる様々な問題や課題を解決するためには、日本語能力を高めればそれで充分ということではなく、いわゆる生態学的リテラシーを育成することが必要であるということがわかった。確かに、日本語の単語や表現、文、日本事情に関する知識や情報を正しく教える・伝えることは重要である。それを否定することはできないが、検討すべきは、バングラデシュの高等教育機関で行われているような言語知識を教授する講義形式の授業だけを行うことによって、生態学的リテラシーを育成することができるかどうかである。来日して 7~8 ヶ月経った頃の 2 人の日本語学校の学生がそうであったように、周りのコト、モノ、人との接触機会が多くなり、様々な体験を通して、彼らは徐々に生態学的リテラシーを身につけてきたと見ることができる。それは、長い時間をかけた試行錯誤の道のりである。場合によっては、生態学的リテラシーを身につける前に日本での暮らしに挫折してしまい、来日当初の希望を諦めてしまうこともあるだろう。そう考えると、来日前に、「自己を起点」にして周りの環境で起きている現象やコト、モノ、人と、それらと自己との関連を把握し、自分の「生き方を考える方法論」（岡崎 2009a : 105）を、教室で学ぶ手立てを考えるべきではないだろうか。

7.1.2 【研究 2】で見られた能力観

【研究 2】では、在日バングラデシュ人がより良い生活を目指して自分の生活の場を広げるためにどのような行動をしているかを、社会人 2 人の語りから調べた。1 人は、イスラム教徒の断食の習慣について、職場の日本人に積極的に説明し、その日本人がネット上にその情報を流したことで、より多くの日本人に断食の習慣の意義を知ってもらいきっかけになった。それが日本人とバングラデシュ人が双方の習慣の違いとそれぞれの意義を理解し、共存していく道を開いたことを語った。もう 1 人は、地域の国際交流センターのバングラデシュ関連のイベントに参加して知り合った日本人が、バングラデシュの教育のために様々な活動を行っていることに共鳴したこと、その日本人との協働作業に参加することでバングラデシュ人として母国を支援する意義を実感し、バングラデシュに関わるより大きなネットワーク作りができたことを語った。

これらの語りに共通しているのは、【研究 1】に述べたような日本とバングラデシュの異なりの顕在化から生じた対立の解決の過程ではなく、自分の興味関心や宗教・信仰・価値観、さらには人間としてのアイデンティティに関わる社会的な事柄に自分が積極的に関わり、自分と周りの人々の生態場を拡張、新しい社会活動に参加することで自分自身の生活をより良いものにしていこうという行動の重要性である。【研究 2】で詳述したように、この 2 人のバングラデシュ人は、日本で 7~8 年の歳月を送っている。【研究 1】に述べた日本語学校の学生 2 人に比べて、日本語能力の面でも生態学的リテラシーの面でも、はるかに多くの経験と学びと気づきを日本での生活の中で得ていると考えられ、その結果として、上述のような社会参加に関わる語りができたと考えられる。

7.1.3 【研究3】で見られた能力観

【研究3】では、日本語の使用必要度の観点から在日バングラデシュ人の日本語使用について調査した。その結果、在日バングラデシュ人の日本語使用場面は、大きく、①サバイバル場面、②臨機応変な問題解決場面、③外の世界への社会参加場面の3つに分けられた。サバイバル場面での日本語使用は、必要な言葉や表現、定型表現を適切に使うことができれば、その場の課題を解決できるケースが多いことがわかった。例えば、目的地までの行き方を訊ねる場面であれば、何線に乗るか、どこで降りるか、あるいは乗り換えるかなど、どのような言葉や表現、文型が必要になるか想定することができ、それらの日本語を授業の中で語彙・表現として教えることが可能である。また、ロールプレイなどの活動を通して、それらの言葉や文型の運用練習も考えることができる。病院で自分の症状を説明する場面を考えてみると、実際に何度も病気になり、たびたび病院にかかることはそれほど多くないはずで、その意味で決して使用頻度は高くないと思われるが、自分の病状を説明する言葉や表現、あるいは薬や食べ物などの生活上の注意点に関わる言葉や表現などを知識として知っていることは、生活するうえでの安心感につながる。このような場面で必要になる言葉や表現を知識として教えること、そして、その運用練習を考えることは、ダッカ大学の授業の中で十分対応可能である。言い換えれば、【研究3】でサバイバル場面として整理された場面で用いられる日本語は、バングラデシュの日本語教室で語彙や表現、文型などを知識として教え、それらが用いられる場面を考慮した運用練習を工夫することで、ある程度のレベルまで学生の日本語能力を育成することができると考えられる。言語生態学理論の孤立実体的能力観の立場（第3章「理論的枠組み」参照）では、能力は個人が所有しているものとして捉えている。このような能力観に基づいた教育では、学習者の課題遂行にまず必要となるのは語彙や表現などのような知識であり、それらを教室で教えることが重要であると考えているといえる。その意味で、【研究3】で検討したサバイバル場面で必要な能力の育成に関しては、孤立実体的能力観に支えられた教育で一定の成果が期待できると推測される。

以上、バングラデシュ人の能力観について、今回の研究の中で考察できたことをまとめた。バングラデシュの日本語教育は、第1章に述べたように、言語知識提供の講義形式のものが圧倒的に多い。その背景には、言語知識や日本に関わる知識を教えれば、日本語についてよく知り、日本語が適切に運用できるようになるという教授観がある。しかし、本研究、特に【研究1】および【研究2】で考察したように、日本での生活では、日本語に関する言語知識だけではなく、それらをどのように使い、周囲のコト、モノ、人に配慮し、自分の考えや価値観などどう折り合いをつけて調整行動や配慮行動を進めていくか、言い換えれば生態学的リテラシーの習得が非常に重要である。日本留学や日本での就職、さらには日本社会や日本人の生活習慣、考え方に興味を持って日本語を学んでいるバングラデシュの高等教育機関の学生たちにとって、生態学的リテラシーを育成していくことこそ、今、求められている教育だと考えられる。

次節では、このような生態学的リテラシー教育をダッカ大学の日本語教育にどのように導入していけばいいかを、①生態学的リテラシー育成のために、3、

4年生の授業にケース学習を取り入れ、教授方法を改善すること、②サバイバル場面で必要になる日本語能力をCan-doで記述し、1～2年生の授業の学習目標とシラバス改善を図ることの2点から考え、さらに、バングラデシュの外国語教育全般に通じる政策方略的な視点から、③海外に暮らすバングラデシュ人を対象にした外国語使用実態調査の必要性を述べ、調査モデルを提示することの必要性を述べたい。

7.2 日本語教育現場への提言

上掲 7.1 で述べたことを踏まえて、バングラデシュの日本語教育の改善のために何が必要なのかを考えて行きたい。バングラデシュの日本語教育は、孤立実体的な能力観をもとに、学習者に多くの知識を与える教育が中心になっている。期末試験、卒業試験、就職面接などのほとんどは、人がどれぐらい知識をもっているかによって優劣を判断する評価方法を採用している。

7.1.1 および 7.1.2 で指摘したように、海外に暮らすバングラデシュ人の日本語使用や生活実態を考えたとき、知識だけを与える孤立実体的な能力観に基づいた教育だけでは不十分であり、生態学的能力観に基づいた教育実践が必要であることがわかった。つまり、周囲のコト、モノ、人のつながり、それらと自分とのつながりを把握し、そのつながりを視野に入れた適切な行動をとる生態学的リテラシーをどう身につけていくかが重要になる。次項(8.2.1)では、【研究1】および【研究2】の結果に基づいて、バングラデシュの教育現場における生態学的リテラシー育成の可能性について述べる。

また、7.1.3 で指摘したように、今後のバングラデシュの日本語教育に、これまでのような孤立実体的能力観に支えられた知識や情報の教授を中心にした授業が全く必要ないということではない。次項(7.2.2)では、【研究3】で明らかになったサバイバル場面での日本語使用を、従来の教育実践の中にどのように組み入れていけばいいかを検討する。

7.2.1 提言(1)【研究1】および【研究2】の知見を踏まえた授業改善：ケース学習の導入

本節では、【研究1】および【研究2】から得られた内容を授業改善にどのように活かすか、試案を述べたい。

【研究1】では、問題解決場面について考察した日常生活で周囲のコト、モノ、人と向き合う中で生じる問題を解決するためには、新しい環境や人との関わりを日常的に体験し、その変動や変化を感じ取り、考える能力、すなわち生態学的リテラシーを育成する環境が必要であることを述べた。そして、【研究2】では、日本社会では自分の生活の場を広げるためにも生態学的リテラシーが重要であることを述べた。生態学的リテラシーを育成する方法として、岡崎(2009a:105)は、対話的問題提起学習を提案している。岡崎(2010)は、対話的問題提起学習は、対話を通して学習者のペア双方が、問題提起用の「テキスト」に表された内容について考え、対話をするものであると定義している。岡崎(2010)は、対話的問題提起学習の目的は、日本語の4技能と考える能力を発動することを通じて、ツールとしての日本語を学習すると共に、内容について

考える能力の養成することであると述べている。対話的問題提起学習では、対話に参加する学習者は相手との議論の中で自分が持つ考え方や価値観に改めて気づき、自分と異なる考えに接する機会を得る。このような学習体験により、他人の考えを理解した上で自分の視野も広げていくことが可能になる。

近藤・金（2010）は、問題解決のプロセスを日本語教育の現場で取りあげる可能性を考え、日本語学習者（非母語話者）が日常生活のさまざまな場で生じる問題を自ら発見し分析し、日本語を使用して解決していくこと必要性を示し、「ケース学習」（近藤・金・ムグダ・福永・池田 2013）として教材化している。ケース学習は、事実をもとにして書かれたケース教材を使用するため、学習者は「現実起きた出来事を分析の対象にすることで、抽象的な内容を受身的に学ぶことから脱却できる」（近藤・金 2010）。ケース学習の実践は、主としてビジネス場面を取り上げ、学習者に仕事上の問題を疑似体験させている（近藤・金 2014）が、それは、現在のグローバル時代で生じている多面的な問題の解決策を導き出すことを主体的に学び合う場が提供できる点で、岡崎（2009a）が提案する対話的問題提起学習に通ずるものがあると考えられる。在日バングラデシュ人のインタビューの中で語られた実際の体験談もケース教材として活用できるのではないかと考える。本節では、ケース学習をダッカ大学の IML の授業に取り入れることを提言としてまとめたい。

近藤・金（2010：19）は、ケース活動の授業の流れを以下のように述べている。①オリエンテーション（5分）、②ケースを読み、話したいケースを選ぶ（10分）、③用意された設問に基づき、グループで話し合う（30分）、④クラス全体で意見交換や議論をする（40分）、⑤個人で一連の活動をふり返り、内省シートに記入する（5分+宿題）。そして、③のステップで話し合う設問として、「それぞれの気持ちを考えてみましょう」「この状況で何が問題だと考えますか」「あなたにも似た経験がありますか」「あなただったら、このような場合どのように行動しますか」「相談された場合、どのようなアドバイスをしますか」という5つの設問を挙げている。これらの活動を体験する中で、学習者は問題の所在を発見し、その問題が起こる背景に何があるのかを考え、他者の立場に立って問題を見直し、自身の問題解決方法を考えることができる。このような過程を経て討論することによって、自分と相手の考えを客観的に捉える能力が身につく、周囲のコト、モノ、人との関連を捉える力も身につけることが可能になると期待できる。それは、言語生態学リテラシーの育成につながるものと考えられる。

【研究1】および【研究2】では、12人の在日バングラデシュ人にインタビュー調査を行い、そのうち4人を分析対象とした。彼らの語りの中には、さまざまな問題が挙がっている。ダッカ大学の IML の日本語の授業でこれらの場면을ケース教材として用いた活動を実施することによって、学生たちは日本に暮らすバングラデシュ人が実際にどのような問題に直面しているかを知り、その問題を解決するためにどのような工夫をしているのかを知ることができる。表8-1にケース教材のサンプルとして、【研究1】で扱った2人の語りから抽出できた問題解決場面を教材化したものを載せる。

表 7-1 在日バングラデシュ人のインタビュー調査からケース教材として使用可能な場面

番号	協力者	ケース内容
1	I さん (アルバイトⅡ)	<p>私（ラハマン）は、6ヶ月前に来日し、大学進学を目指して日本語学校に日本語を勉強しています。勉強はもちろんですが、と同時に生活をしていくために毎日アルバイトをしています。バイト先は和食の店で、スタッフは私以外は皆日本人です。日本人チーフはとても親切で分からないことは何でも教えてください。</p> <p>しかし、毎日、残業があるため帰る時間が遅くなります。当初の契約では、就業時間は夜の 10 時半なのですが、ほとんど毎日残業しています。4～5 分延びるなら、あまり問題はありませんが、だいたい 20 分以上は延びています。うちに帰って料理をしたり、勉強したりとすることが多いので、正直、残業はとても困ります。</p> <p>このままずっと残業があつては困るので、ある日、チーフになぜ契約時間より終わる時間がいつも延びるのか聞いてみました。すると、「これはこの店のルールだよ」と言うではないですか。これにはとても驚きました。私は不安になったので、契約の時間通りに帰らせてほしいと言いました。でも、「それは難しい。」とチーフに言われてしまいました。これ以上残業に追われる日が耐え難かったので、仕事を辞めることにしました。なぜチーフは契約時間を守ってくれないのでしょうか。辞めたあともこのことをずっと悩んでいます。</p>
2	N さん (賄い)	<p>私（ハサン）は数ヶ月前に日本に来ました。将来日本で就職することを目指して、日本語学校で日本語を勉強しています。同時に、レストランでアルバイトをしています。今まで、マレーシアとドバイに 5～6 年ぐらい滞在したことがありますが、どちらの国もムスリムの人が多くて料理の食材などにあまり気をつける必要はありませんでした。日本の食品には、豚肉のようなイスラム教で禁じられている食材が入っているものが少なくないので、食材に気をつけなければなりません。</p> <p>アルバイトを始めたころ、知らずに豚肉が入っている賄い料理を食べてしまいました。そのあと、賄い料理に何が入っているのかが気になり、確認したら、豚肉が入っていたことが分かりました。イスラム教で絶対に禁じられているものなので、食べてはいけません。でも、バイト先の先輩が一生懸命作ってくれた料理なので、どう断ればいいのか困ってしまいました。</p> <p>私は、日本語が上手ではないですが、がんばって「この料理は食べられません」と説明しました。日本人が美味しく食べている豚肉を私たちが食べてはいけないことを聞いて、店側の人には驚きました。私は、どのように説明したら店の人に理解してもらえるのか、悩んでいます。</p>

ダッカ大学の IML の日本語コースは、4 年間のコースである。学習内容の大枠として、1 年目に「みんなの日本語Ⅰ」、2 年目に「みんなの日本語Ⅱ」を修了することになっている。2 年生を修了した段階で、日本に留学する学生がいるこ

とを考えると、本来であれば、2年生の最初から表 7-1 のようなケース教材を使用し、生態学的リテラシー育成のためのケース学習を始めることが望ましい。しかし、年間 60 コマ (120 時間) という限られた授業時間の中で、決められた教授内容に加えて、新たにケース学習の時間を設けることは、非常に難しい。

3 年生になると、「読解」「文法」「作文」と技能別の授業となる。そこで、筆者は 3 年生の「読解」の授業にケース学習を導入することを提案したい。読解の授業は 1 年間に 20 コマ (40 時間) あり、従来は日本で出版された教材 (詳細は、第 1 章の表 1-3 を参照) を使用してきたが、今後は、全 20 コマのうち半分の 10 コマ (20 時間) をケース学習に当て、上掲の表 7-1 のような在日バングラデシュ人が実際に体験したエピソードを教材として、近藤・金 (2010 : 19) が提案したケース活動の授業の流れに従って授業を行いたいと考えている。3 年生とはいえ、表 7-1 のような日本語で書かれた文章を理解し、その内容について、自分の体験を語ったり、自分の考えや意見、問題の解決策などを日本語でやり取りしたりするのは容易ではない。近藤・金 (2010 : 19) にケース活動の授業の流れとして挙げられているグループでの話し合いやクラス全体で意見交換や議論の活動はベンガル語で行うことも考える必要がある。

3 年生のクラスへのケース学習導入には、表 7-1 のようなケース教材をできるだけ準備しておくことが重要である。そのためには、在日バングラデシュ人の実際の体験談を用いて加工し、教材化する必要がある。そこで、今回、【研究 1】と【研究 2】でインタビューした 12 名の在日バングラデシュ人の語りから、ケース教材を作成することを考えている。【研究 1】で分析・考察した 2 名の語りは、表 7-1 のように教材化することができたが、他にも興味深いエピソードが多く語られている。例えば、来日して 1 年余りの日本語学校の学生は、アルバイト先で日本人の同僚が始業時間より少し前に出社して、仕事の準備をしているということに気づかず、時間ぎりぎりに出勤していたことが原因で、上司との関係が悪くなってしまったという体験談を語っていた。また、来日して 10 年余りで、バングラデシュで作られた洋服や飾り物を日本の会社に卸す仕事をしているバングラデシュ人は、バングラデシュ国内の不安定な政情のため、納期が遅れたことに対して、日本の会社との間に入って調整に苦労したというエピソードを語った。来日して 1 ヶ月ぐらいでベンガル語番組策に携わっているある男性は、番組収録のスケジュールが数秒ずれたことに対して、編集段階で調整すればいいと考えていたが、一緒に働く日本人のスタッフは、収録段階から時間を合わせることを強く求めてきたため、納得できなかったという体験を語った。これらの語りに見られる問題は、表 7-1 のように教材化した I さんと N さんの体験談と同様に、決まった語彙や表現、文型を知っていれば解決できるという性質のものではない。そうではなく、その解決に、当事者間の異なりの対立の背景や相手の立場、考え方、および仕事の仕方を理解すること、自分の考え方や生活・労働習慣を相手に理解してもらうこと、こういった歩み寄りのための対話を通して双方が共有できる新たな生態場を作ることが必要となる問題である。このような問題は、多様な考え方や問題解決方法を協働で探すことを目的とするケース学習に非常に適しており、生態学的リテラシーについて教室で議論するための格好の素材として活かすことができる。帰国後、可能な限

り早い時期に、まず、今回インタビューした 12 人の語りの中に現れたエピソードを、上掲の 2 例のようにケース教材化する作業を始めたい。これらを教材化し、授業の中で学生たちが自分だったらこのような問題にどう対応していくか、そのときどのような能力やスキルが必要になると思うか、その能力やスキルを身につけるために、どのような学習が必要か、学生たちと活発な議論を展開したいと考える。さらに、ケース学習の授業への導入には、ダッカ大学の日本語教師たちにこの方法の意義と活動を進める手順を理解してもらう必要がある。そのため、筆者は帰国後、ダッカ大学の日本語教師や関係者にその意義と具体的な教授方法について説明し、教師間のコンセンサスが取れるような場を作りたいと考えている。

7.2.2 提言(2)【研究3】の知見を踏まえた授業改善：サバイバル場面の Can-Do 化の試み

ダッカ大学の IML のこれまでの日本語の授業には、日本留学や日本での就職、日本文化や日本人の生活習慣や考え方などを意識した内容はほとんど取り入れられていない。本研究の【研究3】では 169 人の在日バングラデシュ人を対象にした質問紙調査の結果から、①サバイバル場面、②問題解決場面、③社会参加場面、大きく 3 つの場面における日本語使用の必要性が確認された。本節では、現行のダッカ大学の IML の日本語教育に上掲 3 つの場面のうちのサバイバル場面での日本語使用に関する調査結果がどのように活かせるか、試案を提案したい。

第 1 章に述べたように、ダッカ大学の IML では、日本語教育の目標が明確に決められていない。教師は、決められた教科書の内容を与えられた授業時間枠に合うように均等に配分し、割り当てられた授業を行うのみで、最終的に学習者がどのような能力を身につければいいのかはほとんど考えていない。教師同士で学習者の日本語学習の目的や動機を考え、授業の目標や内容、教え方などを調整するというような態勢はほとんどない。筆者はこのような状況を少しでも改善できるよう、本研究の【研究3】で明らかになったサバイバル場面の日本語使用を Can-do 化し、コースおよび授業の目標を明確にし、学習者が毎回の授業の終わりに、あるいは各学年の最後に自分たちは日本語でどのようなことができるようになるのかをはっきり意識できるような態勢を作ることを提言したい。

Can-do とは、言語の熟達度を「～ができる」という形式で示した文である。国際交流基金は、2010 年にヨーロッパの言語教育の基盤である Common European Framework of Reference for Language : Learning, teaching, assessment (以下、CEFR と略す) の考え方を基盤に、JF 日本語教育スタンダード 2010 (以下、JF スタンダードと略す) を発表し、6 つのレベル (A1、A2、B1、B2、C1、C2) の Can-do を示している。この Can-do を活用することによって、日本語の熟達度を客観的に把握したり、今後の学習目標を明確にしたりすることができる。そこで、【研究3】で得られた使用必要度に関する 7 因子の中からサバイバル場面と考えられるものを抜き出し、それぞれの因子に含まれる下位項目が、JF スタンダードの Can-do に照らし合わせて、どのレベルのどのような言語活動に相

当するのかを確認する。使用必要度で抽出した因子では「店内の購買行動」「交通情報の確認」「医療サービスを受けるための行動」「メディアからの情報収集」4 因子がサバイバル場面だと考えられる。その中の「店内の購買行動」を例にとって、具体的な言語行動を見てみると、「①飲食店で店員に料理の材料を確認する」「②飲食店で写真のあるメニューを読んで注文する」「③店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる」のような言語行動が含まれている。これら 3 つの言語行動を、JF スタンドの Can-do に照らし合わせ、関連する Can-do を拾い出してみると、以下の表 7-2 のようになる。

表 7-2 【研究 3】のサバイバル場面と JF Can-do の照合

【研究 1】で得られた使用場面	JF スタンドの Can-do	レベルと言語活動
飲食店で店員に料理の材料を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> レストランなどで、友人と食事をするとき、自分の食べられないものと、その理由を短い簡単な言葉で話すことができる。 相手もよく知っている定番料理（カレーなど）について、使う食材の種類などの簡単な情報を、友人に質問したり、質問に答えたりすることができる。 	JF (A2) 産出 JF (A2) やりとり
飲食店で写真のあるメニューを読んで注文する。	<ul style="list-style-type: none"> 飲食店でサンプルやメニューの写真を指さしながら、料理や飲み物を「これをください」など簡単な言葉で注文することができる。 和食の店のメニューを読んで、料理の名前や簡単な説明など、いくつかの情報を理解することができる。 飲食店などで店員に、料理や飲み物などを短い簡単な言葉で注文することができる。 	JF (A1) やりとり JF (A2) 受容 JF (A2) やりとり
店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる。	<ul style="list-style-type: none"> デパートの案内所で、欲しい商品が何階にあるかたずね、ゆっくりとはっきりと話されれば、答えを理解することができる。 デパートなどの店員に、買いたい物の売り場がどこにあるかなどについて質問し、いくつかの簡単な答えを理解することができる。 	JF (A1) やりとり JF (A2) やりとり

上掲の表 7-2 を見ると、【研究 3】で得られた「店内の購買行動」場面に含まれる 3 つの言語行動は、JF スタンドが提示する A1～A2 の Can-do と関わりがあることが確認された。

ダッカ大学の IML では、第 1 章に詳述したように、1 年生で『みんなの日本語』Vol.1 を、2 年生で『みんなの日本語』Vol.2 を終えることになっており、2 年間で初級レベルの日本語学習を終えることになっている。上掲のサバイバル場面「店内の購買行動」に含まれる言語行動は、JF スタンドの A1～A2 レベルに相当しており、教科書の学習内容に合わせて A1 レベルであれば 1 年生、A2 レベルであれば 2 年生の授業の学習目標として設定することができる。これらの項目は、実際に日本で生活しているバングラデシュ人が日本語を使って行っている言語行動であり、ダッカ大学の学生たちにとって、自分たちが学習した言語知識を運用する場面を疑似体験できる機会になるだろう。【研究 3】で得ら

れた他のサバイバル場面についても、それぞれの因子に含まれる言語行動を JF スタンドアードの Can-do と照合し、レベルと言語活動（受容、産出、やりとり、テキスト、方略）を確認し、それらを授業の目標に設定し、その目標達成を目指して練習や教室活動に取り組み、授業の終わりにはどれぐらい自分が目標を達成できたかを確認する、そのような授業をくり返し経験する中で、学生たちは自分自身の学習動機や学習目標を常に更新することができる。さらには、このような授業の継続によって、学年が進むにつれて学習意欲を失い、日本語学習を止めていく学習者が増えるという現象（第 1 章 p.7 を参照）を食い止める一策になるのではと考える。

また、提言（1）と同様にこの提言に関しても日本語教師の理解を得て、一緒に作業を進める必要がある。そして、期末試験の評価方法などの検討も必要である。

7.2.3 政府への提言

「1.4 バングラデシュの外国語教育政策の課題」に述べたように、政府は 2011 年に発行された『2010 年国家教育政策』において、海外に暮らしているバングラデシュ人の言語生活や社会生活に関する調査の重要性を謳っているが、まだこのような調査は実施されていない。

本研究では、日本に暮らすバングラデシュ人の日常生活での日本語使用実態を調査し、さらに言語生態学的な視点からよりよい生態場を構築・維持していくためには、日本語能力だけでなく生態学的リテラシーの育成が重要であることを主張してきた。本研究が行ったのは、日本に暮らすバングラデシュ人を対象にしたものであり、海外に暮らす全てのバングラデシュ人の外国語使用実態や日常生活の中で直面する問題解決に直接的にはつながらない部分も少なからずあると思われるが、本研究が採用した調査方法および分析方法を他の国や地域に暮らすバングラデシュ人を対象にした調査に援用することは可能であると考えられる。以下に、海外に暮らすバングラデシュ人の外国語使用実態および生活実態調査の内容と方法を、大きくバングラデシュ国内における調査と国外における調査、2 つの点から提案したい。

まず、国内においては、調査対象の目標言語の教育機関で学ぶ学習者を対象にした大規模なアンケート調査を行い、当該の外国語を学ぶ目的や動機、ニーズを明らかにする。これらの調査を通して、当該の外国語教育の目標と方針を明確にし、それらに合わせ、海外に暮らすバングラデシュ人を対象にした調査で何を調べなければならないか、調査内容と方法を明確化する必要がある。

次に、海外に暮らすバングラデシュ人を対象にした調査を考える。第一段階の調査として、実際にどのような場面でどの程度日本語を使用しているのか、あるいは必要だと感じているのかを明らかにした目標言語の使用実態調査を行う。そして、第二段階の調査として、この第一段階の調査で明らかになる具体的な問題場面や社会参加場面を一般化するために、量的な調査によってを実施する。

本稿では生態学的リテラシーの育成が在日バングラデシュ人の日本での生活に必要であることを明らかにしたが、他の在外バングラデシュ人の場合も、問

題の内容や社会参加の具体的な対象には本稿で述べた結果とは異なるものが現れると考えられるが、実際に日常生活の中で直面する問題をどう解決するか、新たな社会参加をどのように進めるかなどについての知見は、非常に重要である。

最後に、国外の 2 種類の調査の結果を国内で実施される外国語教育の場にどのように還元するかについて考える。本研究の出発点は、第 1 章に詳述したように、在日バングラデシュ人の日本語使用と生活実態に関する調査結果を、バングラデシュの日本語教育、とりわけ筆者が所属するダッカ大学の日本語教育を改善に活かすことができるかを、具体的に考えることであった。筆者の調査によれば、ダッカ大学で日本語を学ぶ学生の多くは、将来の日本留学や日本での就職、あるいはバングラデシュ国内の日系企業への就職を最終的な目標として考えている。そうであるならば、ダッカ大学の授業で行われる日本語教育は、その内容と練習方法において、学生たちのニーズや目的に繋がるものでなければならない。残念ながら、これまでのダッカ大学の日本語教育は、学生たちの想いから遠く離れたところにあったと筆者は考えている。在日バングラデシュ人が日本でどのように生活しているのか、彼らはその中で日本語をどのように使っているのか、自分たちは何を勉強すれば、日本に行ったときに、彼らのように周りの日本人といい関係を作ることができるのだろうか、日本の大学で勉強したり日本の会社や工場で働いたりするときにどんなことに注意しなければならないのだろうか、というような興味は、日本語を学ぶ学生たちの大きな関心事だと推察される。本研究が行った日本での 2 種類の調査結果は、在日バングラデシュ人が実際に体験したことであるがゆえに、学生にとって現実味があり、その結果に基づく授業実践は、疑似的体験ができる活動として受け入れられるのではないだろうか。教師は、コースや授業の学習目標を明確にし、その目標達成に向かって、何をどのように教えればいいのか、教授内容や教授方法の改善に努めなければならない。何をどう教えればいいのかを、具体的に検討し、改善の方向性を明確にするために、本研究が日本で行ったような 2 種類の調査に結果は非常に示唆的であると考えられる。

以上のような流れを図示すると、以下の図 7-1 のように示される。

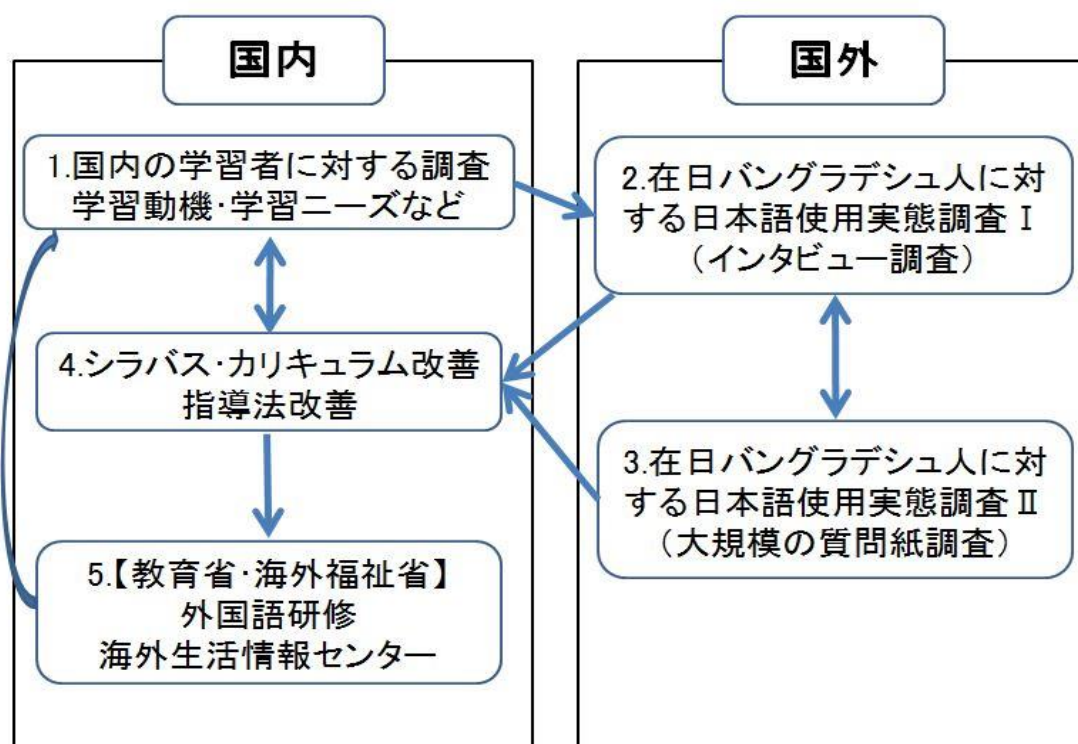


図 7-1 海外に暮らすバングラデシュ人の外国語使用実態調査モデル図

図 7-1 に示された調査モデルは、日本に暮らすバングラデシュ人のみならず、海外のさまざまな国や地域に暮らすバングラデシュ人の外国語使用実態と生活実態を把握することに大きく貢献できると考える。また、国内に目を向けてみれば、バングラデシュでは、国内の少数民族の言葉や外国語の研究を行う目的で国際母語研究所（International Mother Language Institute）のような機関も創設されているが、今まで国内の少数民族の言語に関する調査・研究活動はほとんど行われていない。本研究の調査モデルは、言語がどのように使用されているのか、言語の使用と並行してどのような能力の育成を考えなければならないかという点を考えるために、有効な手立てとなる可能性を持っている。その意味で、外国語だけではなく国内の少数民族の言語使用に関する調査にも活かすことができると考える。

海外でのこのような調査を実施することに関しては、政府の複数の省や局が関わっているので、どのように誰にこの調査モデルを提案するかについて考えなければならない。まずは、ダッカ大学で関係者の政策立案者たちを招き、正式なディスカッションの場を作りたい。そのディスカッションの結果をマスメディアやネット上で広げ、多くの人に情報として伝える。ディスカッションのフィードバックを参考に関連省にレポートの形で具体的な調査モデルを提言する。

第8章 まとめと今後の課題

8.1 本研究のまとめ（本研究の意義）

本節では、本研究が学術的な研究として、どのような意義を有しているかを、整理したい。

まず、第一に、バングラデシュのダッカ大学の日本語教育改善のために、新しい言語能力観の導入と、生態学的リテラシー育成の重要性を示したことである。本研究では、在日バングラデシュ人の日本語使用実態を、サバイバル場面、臨機応変な問題解決場面、外の世界への社会参加場面の3つ場面の日本語使用に分類・整理し、在日バングラデシュ人が日本でより良い生活をするためには、日本語能力だけではなく、「生態学的リテラシー」（岡崎 2009a）の育成が重要であることを明らかにした。また、本研究では、孤立実体的能力観（「能力とは個人に備わっているもの」で、生得的あるいは努力で形成されるもの（岡崎 2009a:29））、に基づいた教育が行われてきたバングラデシュの日本語教育に、生態学的能力観（「能力とは個人を取り巻くコト、モノ、人と多様で多次元な関係で発動」であり、コト、モノ、人との間の生態学的関係形成を通して形成される（岡崎 2009a:29））という言語能力のとらえ方を導入し、生態学的リテラシーの育成の内容と方法を具体的に提示した。さらに、バングラデシュ国内に生態学的リテラシーの育成を考える基盤を作るための構想を提示した。

第二に、本研究では、在日バングラデシュ人の日本語使用実態や生活実態を参入側の視点から、周囲のコト、モノ、人との関わり合いのあり様を言語生態学の理論的枠組みの中で分析・考察した。今まで言語生態学の観点から見た外国人の言語使用などを研究する場合、教育実習などの教授場面で、受入れ側の視点から分析・考察されたものが多かった。今回は参入側の観点から、しかも、バングラデシュ人研究者が、日本に暮らす同胞が日常生活の中で、周りの日本人や日本社会との間に生じる軋轢や問題の解決に、さらには新しい社会活動やコミュニティへの参加とネットワーク構築に、どのように挑んでいるかを明らかにし、生態学的リテラシーの重要性を検証した点に大きな意義がある。また、本研究では、言語だけではなく、個人の考え方や価値観なども言語生態学の観点から分析・考察したことによって、言語生態学の理論もより広い範囲で捉えられることを示した。

第三に、本研究は、バングラデシュ国内の日本語教育を改善したいという筆者の強い思いから始まっているが、その改善の内容と方法について、日本に住むバングラデシュ人の生活の実態を調査し、各種のデータを分析・考察する過程で得られた知見をバングラデシュで日本語を学んでいる学習者のためにどう活かせばいいかを考察した。その結果、これまでバングラデシュで行われてきた日本語教育の内容や方法と、新たな能力観に基づく教育内容と教育方法を、有機的に融合した改善案を提案することができた。

第四に、バングラデシュが国の政策として行なっている、海外への労働力提供（マンパワー・エクスポート政策）に関連して、海外在住のバングラデシュ人の外国語使用実態と生活実態を調査・研究するモデルを提示し、国が在外のバングラデシュ人に対して、どのような支援・サポートを考えていかなければ

ならないのか、その方向性を示した。

本研究で得られた知見は、日本に暮らす外国人留学生や外国人生活者が日本でより良い生活を実現するために、周りのコト、モノ、人とのような関わりを構築すればいいのかについて、日本社会への参入側の視点から新しい知見を示すことができた。

8.2 今後の課題

第7章では、【研究1】【研究2】【研究3】の成果を踏まえ、バングラデシュの日本語教育の改善と、バングラデシュのマンパワー・エクスポート政策に対する4つの提言をまとめた。

第一の提言は、【研究1】【研究2】で得られた知見に基づく。日本に暮らすバングラデシュ人にとって、日々、直面するさまざまな問題を解決する上で、また、日本社会との新たなネットワークを構築し、より良い生活を作り上げていく上で、生態学的リテラシーが非常に重要であることを踏まえ、バングラデシュの日本語教育の授業に反映させるために、ケース学習の実践を提案した。具体的には、ケース学習を実践する際の教材となりうるケースのサンプルとして、今回の【研究1】で扱った日本語学校の学生2人の事例を教材化し提示した。そして、今後の課題としては、計12人のインタビュー調査で得られた問題解決場面の語りの中から教材化できる事例を拾い出し、日本語による教材化の作業を進め、ダッカ大学のIMLの初級レベル修了者（3年生と4年生）を対象にケース学習の授業を実践し、実際に学習者の考え方や姿勢、態度にどのような変化が見られるのか、それが生態学的リテラシーの育成にどう繋がっていくと考えられるのか、確認と検証作業の実施が必要である。

第二の提言では、【研究3】の知見に基づき日本語使用に関わるサバイバル場面を、ダッカ大学のIMLの日本語コースおよび日本語授業の目標に設定することを提案した。一例として、「店内の購買行動」に含まれる言語行動を、国際交流基金の日本語教育スタンダードのCan-doサイトと照合し、それぞれのレベルと言語活動を確認し、授業の学習目標として提示することを示した。今後の課題としては、質問紙調査の使用頻度と使用必要度、それぞれの因子分析の結果得られた7因子に含まれる言語行動を、JFスタンダードのCan-doと照合し、それぞれのレベルの言語活動を確認すること、そのレベルに応じてダッカ大学のIMLの1年生、および2年生の授業の学習到達目標をCan-doで示し、学習者が授業で何を学ばばいいか、授業終了時に何ができるようになっているのかを意識化させることが必要である。

第一、第二の提言を実現するためには、バングラデシュで日本語を学ぶ学習者が必要とする情報を効率よく提供できる環境づくりも重要である。日本留学や日本での就職を目指す学生や、日本の文化、生活習慣、日本人の考え方などに興味を持って日本語学習を継続したいと考えている学生にとって有益な情報を提供できる場作りとして、筆者の研究室を学生にオープンな情報プラットフォームとして開放することを考えている。現在、日本語、日本語教育、日本留学、日本での就職、日本事情などの情報を最も多く有しているのは、在バングラデシュ日本大使館の文化課の情報交流センターとバングラデシュ日本留学同窓生

協会（JUAAB）である。現状では、IML はそれら 2 機関と非常に親密な協力・連携態勢を持っているとはいえないが、今後、当該 2 機関と協力・連携し、情報共有の道を探りたい。また、JSC は日本研究の修士プログラム（2 年）を持っていることから、日本研究に関するさまざまな文献や資料を多く所有しており、JSC との連携・協力も IML の学生に提供する情報の充実のために必要である。また、筆者は、本研究を行う中で、筆者は日本国内に住むバングラデシュ人とさまざまなネットワークを構築することができた。帰国後は、このネットワークを最大限有効活用し、日本国内の奨学金制度やバングラデシュ関連のイベントや NPO 活動、地域の国際交流センターや地域コミュニティの中で展開される多様な交流活動の情報を可能な限り収集し、情報プラットフォームに提示し、学生たちに紹介していきたいと考えている。

第三の提言として、第 7 章では教育省および海外在住福祉就職省に対して、海外に暮らすバングラデシュ人の外国語使用実態調査実施を提案した。本研究は、その調査の具体的な方策となる調査方法と結果の分析方法のモデルを提示した。海外に暮らすバングラデシュ人の外国語使用実態や生活実態を調査し、在外のバングラデシュ人がそれぞれの居住地で、日々、どのような問題に直面し解決しているのか、さらにより豊かな生活をするために自らの居場所をどのように広げていこうとしているのかを明らかにすることは、バングラデシュの外国語教育政策に対する有益な情報提供となるだろう。今後の課題として、まず、教育省、あるいは海外在住福祉就職省にどのように調査モデルの有効性を説明できるかを考えなければならない。

以上の課題について検討し、順次実行に移していくことで、バングラデシュにおける日本語教育の教育現場、教育機関、そして言語政策の改善に向けた一歩を踏み出したいと考える。

参考文献

(日本語文献)

1. アフタモヴァ・イローダ(2012)「日本企業で働く在日ウズベキスタン・ムスリムから見た異文化間葛藤と異文化教育の課題についての事例的研究」『上智大学教育学論集』46、49-60.
2. アラム、モハメッド アンサルル(2005)「会話力を高めるための授業の提案—バングラデシュの日本語学習者を対象に—」『日本言語文化研究会論集』創刊号、149-176.
3. アラム、モハメッド アンサルル (2011)「バングラデシュの大学生が日本語を継続しにくい要因—動機付けに関わるインタビュー調査から—」『政策研究大学院大学・日本語教育指導者養成プログラム 10 周年記念シンポジウム報告書』58.
4. アラム、モハメッド アンサルル (2013)「在日バングラデシュ人が日本語使用環境をどのように捉えているか—ライフストーリー・インタビューから—」『政策研究大学院大学第 23 回日本言語文化研究会 口頭発表』(http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/report/docs/23th/23th_alam.pdf 2015 年 8 月 18 日アクセス) .
5. アラム、モハメッド アンサルル(2015)「使用頻度から見た在日バングラデシュ人の日本語使用の実態—留学生と社会人に対する質問紙調査から—」『言語政策』11、7-20.
6. 市嶋典子 (2013)「在日ムスリム留学生の宗教的葛藤と留学生支援」『言語文化教育研究会 2013 年度研究集会大会予稿集』109-114.
7. 井上晶子 (1999)「アジア系ムスリム就労者のストレス対処—バングラデシュ・パキスタン・イラン出身男性を対象に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』39、255-264.
8. 宇佐美洋 (2010)「実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類—「生活のための日本語」全国調査から—」『日本語教育』144、145-156.
9. 大谷尚 (2008)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要 (教育科学)』54(2)、27-44.
10. 大谷尚 (2011)「SCAT : Steps for Coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学:日本感性工学会論文誌』10(3)、155-160.
11. 岡崎敏雄 (2003)「共生言語の形成 - 接触場面固有の言語形成」宮崎里司・ヘレン・マリオット (編)『接触場面と日本語教育 - ネウストプニーのインパクト』明治書院、23-44.
12. 岡崎敏雄 (2006)「言語生態学における心理・社会両生態領域間の相互交渉的関係—言語政策の基礎としての、「巨視的モデル」の生態学的評価—」『筑波大学地域研究』27、17-33.
13. 岡崎敏雄 (2009a)『言語生態学と日本語教育—人間の存在を支えるものとしての言語』凡人社.

14. 岡崎敏雄 (2009b) 「生態場における生態学的意味の生成— 第一、第二段階の生成—」『筑波応用言語学研究』16、1-14.
15. 岡崎敏雄 (2010a) 「生態場における生態学的意味の生成 - 第三段階の生成：意思の形成段階における生成」『日本語と日本文学』50、1-17.
16. 岡崎敏雄 (2010b) 「持続可能性教育として日本語教育の学習のデザイン— 教室活動・シラバスデザイン・教師の役割—」『筑波大学地域研究』31、1-24.
17. 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生』弘文堂.
18. 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂.
19. 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.
20. 国立国語研究所 (2010) 『「生活のための日本語」に関する基礎的研究—段階的発達の支援をめざして—〈中間報告書〉』.
21. 近藤彩・金孝卿・ムグダ ヤルディー・福永由佳・池田玲子 (2013) 『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習—場所のダイバーシティで学び合う—』ココ出版.
22. 近藤彩・金孝卿 (2010) 「ケース活動」における学びの実態—ビジネス上のコンフリクトの教材化に向けて—」『日本言語文化研究会論集』6、15-31.
23. 近藤彩・金孝卿 (2014) 「グローバル時代における日本語教育：プロセスとケースで学ぶビジネスコミュニケーション」『National Symposium on Japanese Language Education 2012』国際交流基金シドニー日本文化センター、103-115.
24. 杉原由美 (2010) 『日本語学習のエスノメソドロジー - 言語的共生化の過程分析』勁草書房.
25. 鈴木寿子 (2013) 『共生社会の構築を支える日本語教師養成の実践研究』早稲田大学モノグラフ 94、早稲田大学出版部.
26. 武田里子 (2011) 「第2章 インタビュー調査から (1) 外国人住民のもつ「つながり」方の多様性」『東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター』12、31-39.
27. 中東靖恵 (2014) 「岡山県総社市に暮らすブラジル人住民の言語生活—外国人住民の日本語学習支援を考える—」『社会言語科学』17:1、36-48.
28. 中野祥子・奥西有理・田中共子 (2015) 「在日ムスリム留学生の社会生活上の困難」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39、137-151.
29. 名古屋大学 (2008) 『外国籍住民の日本語学習における実態等予備調査委託調査報告書』(平成19年度豊田市委託事業) (http://www.toyota-j.com/misc/ja_text_71.pdf 2015年8月18日アクセス).
30. 半原芳子・佐藤真紀・三輪充子 (2012) 「持続可能な多言語多文化共生社会を築く「共生日本語教育」の可能性—日本語母語話者と日本語非母語話者の言語的共生化の過程に着目して—」『多言語多文化—実践と研究』4、168-193.

31. 平野美恵子 (2011)「共生日本語教育実習における実習生間の言語的共生化過程の研究」お茶の水女子大学 博士論文 (未公開) .
32. 松本久美子 (2000)「バングラデシュにおける日本語教育・日本留学事情 : 現状と今後の課題」『長崎大学留学生センター紀要』8、101-114.
33. 茂戸藤恵 (2012)「外国人が職場で感じるギャップや抵抗—アジア 5 カ国を対象としたグループインタビューから—」『Works review』7、150-153.

(英語文献)

34. Erling E. J., Seargeant P., Solly M., Chowdhury Q. H., Rahman S. (2015). English for economic development: a case study of migrant workers from Bangladesh. London: British Council.
(http://englishagenda.britishcouncil.org/sites/ec/files/2999_BC_0U%20Eltra%20Booklet_05b.pdf 2015 年 8 月 18 日アクセス) .
35. Glaser, B. G. & Strauss, A. L. (1967). The Discovery of Grounded Theory. Strategies for Qualitative Research. Aldine.
36. Haugen, E. (1972). *The ecology of language*. California: Stanford University Press.

ホームページ

- ① 国際交流基金ホームページ (2012 年度 日本語教育機関調査)
《<http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/bangladesh.html>》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ② 国際交流基金ホームページ (JF 日本語教育スタンダード)
《<https://jfstandard.jp/top/ja/render.do>》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ③ 国際交流基金ホームページ (みんなの Can-do サイト)
《<https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ④ 在バングラデシュ日本大使館ホームページ (Statistical Information)
《<http://www.bd.emb-japan.go.jp/en/education/statiscalInfo.html>》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ⑤ 日本語教育振興協会ホームページ (公開資料)
《<http://www.nisshinkyō.org/article/index.html>》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ⑥ 日本語教師のページ (ARC Academy) ホームページ (用語検索)
《<http://www.nihongokyoshi.co.jp/manbow/manbow.php?id=337&TAB=1>》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ⑦ 日本外務省ホームページ (国・地域)
《<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>》 2015 年 8 月 18 日アクセス

- ⑧ 日本法務省ホームページ（出入国管理統計統計表）
《http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html》
2015 年 8 月 18 日アクセス
- ⑨ 文化庁ホームページ（「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について）
《http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/nihongo_curriculum/pdf/curriculum_ver09.pdf》 2015 年 8 月 18 日アクセス
- ⑩ バングラデシュ教育省ホームページ（National Education Policy 2010）
《http://www.moedu.gov.bd/index.php?option=com_content&task=view&id=338&Itemid=416》 2015 年 8 月 18 日アクセス

本論文に関する既発表論文

論文

1. アラム、モハメッド アンサルル(2015) 「使用頻度から見た在日バングラデシュ人の日本語使用の実態—留学生と社会人に対する質問紙調査から—」『言語政策』11、7-20. (査読つき)

学会発表

1. 「バングラデシュの大学生が日本語を継続しにくい要因—動機付けに関わるインタビュー調査から—」(政策研究大学院大学・日本語教育指導者養成プログラム 10 周年記念シンポジウム、日本言語文化研究会、政策研究大学院大学、2011. 12) .
2. 「在日バングラデシュ人が日本語使用環境をどのように捉えているか—ライフストーリー・インタビューから—」(政策研究大学院大学第 23 回日本語文化研究会、2013. 8).

表と図

表一覧

表 1-1	バングラデシュの日本語教育：教育段階別機関数・教師数・学習者数
表 1-2	ダッカ大学の3機関の日本語教育の概況
表 1-3	IMLの日本語授業の概要
表 4-1	分析対象とするデータ一覧
表 4-2	Iさんの「アルバイトⅠ」のSCAT分析
表 4-3	Iさんの「アルバイトⅡ」のSCAT分析
表 4-4	Iさんの「アルバイトⅢ」のSCAT分析
表 4-5	Nさんの「宗教上の食文化（賄い）」のSCAT分析
表 4-6	Nさんの2回目のインタビュー・データ
表 5-1	分析対象とするデータ一覧
表 5-2	Aさんの「地域の国際交流センターを通しての人間関係」のSCAT分析
表 5-3	Sさんの「断食についての説明」のSCAT分析
表 6-1	7因子の統計量（パターン行列の因子負荷量）
表 6-2	因子3、因子5、因子6、因子7に含まれる言語項目
表 6-3	因子1、因子4に含まれる言語項目
表 7-1	在日バングラデシュ人のインタビュー調査からケース教材として使用可能な場面
表 7-2	【研究3】のサバイバル場面とJF Can-doの照合

図一覧

図 1-1	本研究の構成
図 7-1	海外に暮らすバングラデシュ人の外国語使用実態調査モデル図

資料 1: 調査票

在日バングラデシュ人の日本語使用に関わる調査

この質問紙調査は、在日バングラデシュ人の日本語使用実態を把握するために実施するものです。このアンケートの結果につきましては、個人が特定されないように使用します。また、研究や教育以外の目的で使用されることはありませんので、御協力をお願い致します。

アラム モハメッド アンサルル

国際交流基金日本語国際センターおよび政策研究大学院大学連携プログラム 博士後期課程 【E-mail: ansarul_alam@hotmail.com】

A. 基本情報

【必要な部分を記入し、○か✔をしてください。どれにも該当しない場合はその他に書いてください。】

1. 年齢 : _____
2. 性別 : () 男 () 女
3. 住んでいる県 : () 東京 () 埼玉 () 千葉 () 神奈川 () その他: _____
4. 宗教 : () イスラム () ヒンドゥー () その他: _____
5. 身分について教えてください。

(1) 来日時 () 日本語学校 () 大学・大学院 () 仕事 () 家族滞在 () その他 _____

(2) 現在 () 日本語学校 () 大学・大学院 () 仕事 () 家族滞在 () その他 _____
6. 仕事について教えてください。

(1) 学生の方 アルバイトを ① () していない ② () している → 【「している」と答えた人は次の (3) に答えてください。】

(2) 学生以外 仕事を ① () していない

② () している → () 正社員 () 非正規社員・アルバイト → 【(3) に答えてください。】

(3) 仕事内容 ① () 事務関係 ② () IT 関係 ③ () 飲食業 ④ () 製造業 ⑤ () その他 _____
7. 通算滞日期間 ① () 1 年未満 ② () 1 年～2 年未満 ③ () 2 年～5 年未満 ④ () 5 年以上
8. 日本にはあとどのくらい滞在する予定ですか。 ① () 1 年未満 ② () 1 年～2 年 ③ () 2 年以上 ④ () 未定
9. 結婚していますか。 ① () はい ② () いいえ 【「はい」と答えた人は次の (1) ～ (2) に答えてください。】

(1) 配偶者の国籍 ① () バングラデシュ ② () 日本 ③ () その他 _____

(2) 家族を日本に呼び寄せていますか。① () はい ② () いいえ 【「はい」と答えた人は (3) に答えてください。】

(3) 呼び寄せている/同居している家族 ① () 配偶者 ② () 子供 _____ 人 年齢 1 番目 _____ 才 2 番目 _____ 才 3 番目 _____ 才

③ () その他(例: 母親) _____
10. 自国で日本語学習経験がありますか。① () はい ② () いいえ 【「はい」と答えた人は次の (1) ～ (4) に答えてください。】

(1) 教育機関 ① () 大学 ② () 民間学校 ③ () その他 _____

(2) 総学習時間 ① () 50 時間未満 ② () 50～149 時間 ③ () 150～299 時間 ④ () 300 時間以上

(3) 学習目的【一つに○】 ① () 留学 ② () 自国での就職 ③ () 日本での就職 ④ () 日本での家族滞在

⑤ () その他 _____

(4) 来日前に日本語能力検定試験 (JLPT) 取得した級 ① _____ 級 _____ 取得年 ② () もっていない
11. あなたは日本で日本語を勉強していますか／したことがありますか。

① () はい ② () いいえ 【「はい」と答えた人は次の (1) ～ (2) に答えてください。】

(1) どこで日本語を勉強していますか／しましたか。【○はいくつでも】

① () 日本語学校 ② () ボランティアの日本語教室 ③ () 大学の日本語講座 ④ () 企業内研修

⑤ () 知り合いの日本人から ⑥ () 知り合いの外国人から ⑦ () 独学 ⑧ () その他 _____

(2) 今までの**日本での**総学習時間はどのくらいですか。

① () 50 時間未満 ② () 50～149 時間 ③ () 150～299 時間 ④ () 300 時間以上
12. 日常生活全般の中でどの言語を主に使用していますか。

ベンガル語＝B、日本語＝J、英語＝E、その他の場合、言語名を書いてください。

例：事務所で主に日本語を使い、たまに英語とベンガル語を使う場合、①番の[]に[J]と②番の[]に[E、B]と書きます。

(1) 家庭での使用言語 ①[] ②[]

(2) 日常生活(買い物など)での使用言語 ①[] ②[]

(3) 学校・大学での使用言語 ①[] ②[]

(4) 職場(アルバイトも含む)での使用言語 ①[] ②[]
13. 今後、日本語の勉強をしたいと思いませんか。【一つに○】

① () はい → (1) に答えてください ② () いいえ → (2) に答えてください

(1) 「はい」と答えた人は、その理由は何ですか。【○はいくつでも】

① () 次の場面が必要だから () 学校 () 職場 () 求職 () 日常生活 () 知人との会話 () 子供の学校

② () 興味があるから ③ () その他 _____

(2) 「いいえ」と答えた人は、その理由は何ですか。【○はいくつでも】

① () 既に十分な日本語能力がある ② () 勉強や仕事で日本語が必要ない ③ () 勉強する場所を知らない

④ () 時間がない ⑤ () お金がない ⑥ () 興味がない ⑦ () その他 _____

B. 日常生活での日本語使用についてお答えください。【該当する人は3ページ目のC、D、Eも同様にお答えください。】

(1)あなたは日本語で次のような経験をどれぐらいしたことがありますか？下の表の右の1～4から一つ選んでください。(2)そのとき、どれぐらい難しいと感じましたか。1～4から一つ選んでください。今まで一度も経験したことがない人は、「5. わからない」を選んでください。(3)現在のあなたにどれくらい必要ですか？1～4から一つ選んでください。
例：あなたは知り合いの日本人にいつも挨拶していて、日本語でそれは全然難しいと思わないし、とても必要な行動だと思っている場合、下の表の1行目の【例】のように答えてください。○でも✔でもOKです。

言語行動(項目)		(1)経験がありますか よくある =1 時々ある =2 あまりない=3 全然ない =4				(2)どれぐらい難しいですか とても難しい =1 かなり難しい =2 あまり難しくない=3 全然難しくない=4 分からない =5					(3)どれぐらい必要ですか とても必要 =1 時々必要 =2 あまり必要ではない=3 全然必要ではない=4			
例	知り合いの日本人に挨拶をする	①	2	3	4	1	2	3	④	5	①	2	3	4
1	飲食店で写真のあるメニューを読んで注文する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
2	飲食店で店員に料理の材料を確認する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
3	買い物のとき、食品の材料の表示を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
4	店内で買いたいものの場所を店員に尋ねる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
5	店で買った品物の返品や交換をする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
6	ほしい物をネットで注文する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
7	駅の構内や乗り物の中でアナウンスを聞く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
8	駅員に行き方や乗り換えなどについて質問する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
9	路線図や時刻表を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
10	ネットで「路線案内」を確認する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
11	銀行や郵便局の窓口で現金の引出、振込、送金などをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
12	現金自動支払機（ATM）で現金の引出、振込、送金などをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
13	引越しのとき、役所に住所変更等の手続きをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
14	日本語で書かれた賃貸契約書を読んで理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
15	困ったとき、アパートの管理人・大家さんに相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
16	役所や国際交流協会の交流イベントのお知らせを読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
17	在留期間の延長などについて役所などの外国人相談窓口で相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
18	病院で初診の受付をして、問診表に記入する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
19	病院で医者や看護師に症状を説明する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
20	病気・けがについて医者の説明を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
21	薬局で出された薬に書かれた説明（種類、飲み方など）を確認する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
22	役所や勤務先からの定期健診に関する通知を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
23	災害・事故時に他の人に助けを求める	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
24	テレビやラジオの災害情報を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
25	テレビやネットで天気予報を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
26	テレビのニュースを見て理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
27	テレビの娯楽番組(バラエティ・ドラマなど)を見て理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
28	近所の人に挨拶をする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
29	フェイスブック等の SMS を使い、友人・知人と日本語でやり取りする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
30	知人の日本人に生活上の問題について相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
31	近所の人にゴミの出し方について尋ねる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
32	自宅へのチラシや掲示板などから必要な情報を読み取る	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
33	国際フェアや地域の祭りなどのイベントに参加して、日本人と雑談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
34	近所の人とのトラブルに対処する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
35	日本人に自分の宗教上の習慣について説明する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
36	知らない人や機関から初めてかかってきた電話に対応する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
37	地域の施設（図書館、公民館、スポーツ施設等）の使用方法を係りの人に聞く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
38	求人広告を読み、条件を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
39	電話で求人条件の不明な点について問い合わせる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
40	日本語で履歴書を書く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
41	日本語で就職面接を受ける	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
42	仕事の契約書（会社や工場、アルバイトなど）を読んで内容を理解する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4

C. 留学の経験のある方は、以下の項目にもお答えください。【回答の仕方は前ページのBと同様】

言語行動(項目)		(1)経験がありますか よくある =1 時々ある =2 あまりない=3 全然ない =4				(2)どれぐらい難しいですか とても難しい =1 かなり難しい =2 あまり難しくない=3 全然難しくない=4 分からない =5					(3)どれぐらい必要ですか とても必要 =1 時々必要 =2 あまり必要ではない=3 全然必要ではない=4			
43	先生に自分の勉強・進路について相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
44	授業の内容について学生同士で議論する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
45	日本語で短いレポートを書く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
46	日本語の参考文献を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
47	授業や研究会で自分の考えを日本語で話す	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
48	文化祭などで自分の国を紹介するプレゼンテーションをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
49	事務担当の人に奨学金・経済的な支援について聞く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
50	先生に電話で欠席・遅刻を連絡する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
51	先生とメールのやり取りする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4

D. アルバイト・仕事の経験のある方は、以下の項目にもお答えください。【回答の仕方は前ページのBと同様】

言語行動(項目)		(1)経験がありますか よくある =1 時々ある =2 あまりない=3 全然ない =4				(2)どれぐらい難しいですか とても難しい =1 かなり難しい =2 あまり難しくない=3 全然難しくない=4 分からない =5					(3)どれぐらい必要ですか とても必要 =1 時々必要 =2 あまり必要ではない=3 全然必要ではない=4			
52	自分の業務に関する書類を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
53	職場（会社や工場）の表示や注意書きを読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
54	仕事内容・方法についての上司の指示を理解し、適切な行動をとる	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
55	顧客や取引先からの電話に対応する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
56	日報や報告書を書く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
57	会議に出席し、意見交換する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
58	作業の進め方等について改善方法を上司に提案する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
59	休憩時間中に職場の人と雑談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
60	上司に電話で欠勤・遅刻・早退の連絡をする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
61	上司に口頭で早退や休暇等の許可を求める	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
62	メールで取引先や顧客と仕事上の連絡を取り合う	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
63	ミスを起こしたとき、上司・同僚に謝罪する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4

E. 日本の学校(幼稚園・保育園も含む)に通っている学齢期のお子さんをお持ちの方は以下の項目にもお答えください。【回答の仕方は前ページのBと同様】

言語行動(項目)		(1)経験がありますか よくある =1 時々ある =2 あまりない=3 全然ない =4				(2)どれぐらい難しいですか とても難しい =1 かなり難しい =2 あまり難しくない=3 全然難しくない=4 分からない =5					(3)どれぐらい必要ですか とても必要 =1 時々必要 =2 あまり必要ではない=3 全然必要ではない=4			
64	学校や幼稚園、保育園からの配布物や連絡ノートを読み、必要なものを準備する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
65	先生との連絡ノートに返事や子どもの様子などを書く	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
66	子どもの宿題を手伝う	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
67	先生に会って子どもの勉強や生活について相談する	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
68	保護者会（PTA等）に参加し、先生の話の聞いたり、他の保護者と意見交換をしたりする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
69	学校の給食の献立を読む	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4
70	役所で保育園・学童保育の申請手続きをする	1	2	3	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4

F. 上で回答した項目の中で、困難を感じた具体的な場面を思い出して説明してください。

G. 日本での生活の中で、日本語使用以外に、生活文化や習慣がバングラデシュと違って困ったこと、対応が難しかったことがあったら、自由に書いてください。

H. 地方公共団体(市町村)や地域の人々にどのような要望がありますか。重要だと思うもの、5つに○をつけてください。

- ①

☐ 外国人向けに、日本語教室を開く
- ②

☐ 外国人に対して、日本の生活文化や習慣についてのセミナーを開く
- ③

☐ 外国人向けに、日本の労働規範・考え方についてのハンドブックを作成し配布する
- ④

☐ 外国人向けに、地域や会社の掲示、お知らせなどを多言語対応にする
- ⑤

☐ 地域や会社の掲示、お知らせなどに簡単な日本語を併記する(例：ふりがなをつける)
- ⑥

☐ 外国人向けに、外国人専門の相談員を置く
- ⑦

☐ 日本人に対して、外国文化や外国人の習慣についてのセミナーを開く
- ⑧

☐ 日本人に対して、外国人住民との「接し方」や「話し方」のセミナーを開く
- ⑨

☐ 日本人に対して、外国語の教室を開く
- ⑩

☐ 日本人と外国人との交流会を開く
- ⑪

☐ 学校で外国人児童のために、ボランティアの日本語教師をおく
- ⑫

☐ 学校からよく配られる手紙やお知らせに簡単な英訳をつける
- ⑬

☐ その他

【

】

I. 勉強や日本のことで、来日前、バングラデシュにいる間に知っておけばよかったと思うことはありますか。自分の経験から自由に書いてください。

＊もし良かったら、あなたについて次のことを教えてください。

氏名：

携帯：

メール

ご協力ありがとうございました。

[ベトナム語版] জাপান প্রবাসী বাংলাদেশীদের জাপানি ভাষা ব্যবহারের উপর জরীপ

সুপ্রিয় বাংলাদেশী ভাই/বোনেরা, আমি ঢাকা বিশ্ববিদ্যালয়ের জাপানি ভাষা বিভাগের সহকারী অধ্যাপক। বর্তমানে জাপানে পিএইচডি গবেষণা করছি। আমার গবেষণার অংশ হিসেবে, জাপান প্রবাসী বাংলাদেশীদের জাপানি ভাষা ব্যবহার জানার জন্য এই জরীপটি পরিচালনা করা হচ্ছে। আপনাদের দেওয়া তথ্য গবেষণা ছাড়া অন্য কোন কাজে ব্যবহার করা হবে না; এবং জরীপের ফলাফলে ব্যক্তিগত কোন তথ্য প্রকাশ করা হবে না। আপনাদের সহযোগিতার জন্য ধন্যবাদ।

মোহাম্মদ আনছারুল আলম, পিএইচডি গবেষক, National Graduate Institute for Policy Studies & The Japan Foundation

মোবাইল: 080-9447-1727 (Softbank), ই-মেইল: ansarul_alam@hotmail.com

একঃ সাধারণ তথ্য

[নির্ধারিত অংশটি যথাযথভাবে পূরণ করুন। উত্তর বাছাই করার ক্ষেত্রে বৃত্ত (○) বা টিক (✓) চিহ্ন দিন। বাছাই করার মত উত্তর না থাকলে ‘অন্যান্য’-র ঘরে লিখুন।]

১। বয়স: ২। লিঙ্গ: (ক) পুরুষ (খ) মহিলা
৩। কোন জেলায় বাস করেন? (ক) টোকিও (খ) সাইতামা (গ) চিবা (ঘ) কানাগাওয়া (ঙ) অন্যান্য _____
৪। ধর্ম: (ক) ইসলাম (খ) হিন্দু (গ) অন্যান্য _____

৫। জাপানে আপনার ভিসা স্ট্যাটাস কী?
(১) যখন জাপানে এসেছেন→ (ক) জাপানি ভাষার স্কুলের ছাত্র (খ) বিশ্ববিদ্যালয়ের ছাত্র (গ) চাকুরীজীবী (ঘ) ফ্যামিলি (ঙ) অন্যান্য _____
(২) বর্তমানে→ (ক) জাপানি ভাষার স্কুলের ছাত্র (খ) বিশ্ববিদ্যালয়ের ছাত্র (গ) চাকুরীজীবী (ঘ) ফ্যামিলি (ঙ) অন্যান্য _____

৬। আপনার বর্তমান চাকুরী প্রসঙ্গে-
(১) ছাত্ররা জবাব দিন→ খণ্ডকালীন চাকুরী (আরুবাইতো) করছেন? (ক) না (খ) হ্যাঁ [‘হ্যাঁ’ জবাবদানকারীরা (৩) এর উত্তর দিন]
(২) যারা ছাত্র নন তারা জবাব দিন→ চাকুরী করছেন? (ক) না (খ) হ্যাঁ→ () খণ্ডকালীন () খণ্ডকালীন [‘হ্যাঁ’ জবাবদানকারীরা (৩) এর উত্তর দিন]
(৩) কী ধরনের কাজ? (ক) অফিসিয়াল (খ) আইটি (IT) (গ) খাবারের দোকান (ঘ) কারখানা (ঙ) অন্যান্য _____

৭। এখন পর্যন্ত জাপানে বসবাসের সময়- (ক) ১ বছরের কম (খ) ১ থেকে ২ বছর (গ) ২ থেকে ৫ বছর (ঘ) ৫ বছরের বেশী
৮। জাপানে আরো কতদিন থাকার পরিকল্পনা রয়েছে? (ক) ১ বছরের কম (খ) ১ থেকে ২ বছর (গ) ২ বছরের বেশী (ঘ) অনির্ধারিত

৯। আপনি কি বিবাহিত? (ক) হ্যাঁ (খ) না [‘হ্যাঁ’ জবাবদানকারীরা (১) ও (২) এর উত্তর দিন]
(১) আপনার স্বামী/স্ত্রীর জাতীয়তা: (ক) বাংলাদেশী (খ) জাপানি (গ) অন্যান্য _____
(২) আপনি কি স্বপরিবারে (স্বামী/স্ত্রী, সন্তানসহ) জাপানে আছেন? (ক) না (খ) হ্যাঁ [‘হ্যাঁ’ জবাবদানকারীরা (৩) এর উত্তর দিন]
(৩) একসাথে থাকা সদস্য→ (ক) স্বামী/স্ত্রী (খ) সন্তান _____ জন, সন্তানের বয়স→ ১ম জন _____ বছর, ২য় জন _____ বছর, ৩য় জন _____ বছর
(গ) অন্যান্য (সম্পর্ক লিখুন। যেমন: মা) _____

১০। আপনি কি বাংলাদেশে জাপানি ভাষা শিখেছেন? (ক) না (খ) হ্যাঁ [‘হ্যাঁ’ জবাবদানকারীরা (১) থেকে (৪) এর উত্তর দিন]
(১) কি ধরনের প্রতিষ্ঠানে শিখেছেন? (ক) বিশ্ববিদ্যালয় (খ) প্রাইভেট স্কুল (গ) অন্যান্য _____
(২) মোট কত ঘন্টার কোর্স করেছেন? (ক) ৫০ ঘন্টার কম (খ) ৫০-১৪৯ ঘন্টা (গ) ১৫০-২৯৯ ঘন্টা (ঘ) ৩০০ ঘন্টার উপর
(৩) জাপানি ভাষা শেখার প্রধান উদ্দেশ্য কী ছিল? [যেকোন একটি বাছাই করুন] (ক) জাপানে পড়তে যাওয়া (খ) দেশে চাকুরী
(গ) জাপানে চাকুরী (ঘ) জাপানে পরিবারের সাথে থাকা (ঙ) অন্যান্য _____
(৪) দেশে থাকতে জাপানি ভাষার দক্ষতা যাচাই পরীক্ষা বা JLPT পাশ করেছিলেন? (ক) না (খ) হ্যাঁ→ লেভেল _____ সাল _____

১১। জাপানে জাপানি ভাষা শিখেছেন বা শিখছেন? (ক) না (খ) হ্যাঁ [‘হ্যাঁ’ জবাবদানকারীরা (১) ও (২) এর উত্তর দিন]
(১) কোথায় শিখেছেন বা শিখছেন? [একাধিক উত্তর দেওয়া যাবে] (ক) জাপানি ভাষার স্কুলে (খ) স্বেচ্ছাসেবকদের ক্লাশে (গ) বিশ্ববিদ্যালয়ের জাপানি ভাষার ক্লাশে (ঘ) কর্মক্ষেত্রে ভাষা কোর্সে (ঙ) পরিচিত জাপানিদের কাছে (চ) পরিচিত অন্য দেশীদের কাছে (ছ) নিজেনিজে (জ) অন্যান্য _____
(২) জাপানে মোট কত ঘন্টা জাপানি ভাষা শিখেছেন? (ক) ৫০ ঘন্টার কম (খ) ৫০-১৪৯ ঘন্টা (গ) ১৫০-২৯৯ ঘন্টা (ঘ) ৩০০ ঘন্টার উপর

১২। জাপানে সামগ্রিক জীবনযাপনে কোন ভাষা কতটুকু ব্যবহার করেন?
বাংলা হলে ‘ব’ জাপানি হলে ‘জ’ ইংরেজি হলে ‘ই’ অন্যান্য ভাষার ক্ষেত্রে পুরো নাম লিখুন।
উদাহরণ: কোন স্থানে মূলত বাংলা ব্যবহার করেন। মাঝেমাঝে ইংরেজি এবং জাপানি ব্যবহার করেন। সেক্ষেত্রে, প্রথম ঘরে ‘ব’ লিখে দ্বিতীয় ঘরে ‘জ’, ই’ লিখবেন।

(১) ঘরে কোন ভাষা ব্যবহার করেন? মূলত→ [] এছাড়াও []
(২) শপিং ইত্যাদি দৈনন্দিন কাজে কোন ভাষা ব্যবহার করেন? মূলত→ [] এছাড়াও []
(৩) স্কুল/ বিশ্ববিদ্যালয়ে কোন ভাষা ব্যবহার করেন? মূলত→ [] এছাড়াও []
(৪) কর্মক্ষেত্রে কোন ভাষা ব্যবহার করেন? মূলত→ [] এছাড়াও []

১৩। এখন থেকে জাপানি ভাষা শেখা/শেখা অব্যাহত রাখার প্রয়োজন আছে? (ক) হ্যাঁ (খ) না [উত্তর ‘হ্যাঁ’ হলে (১) ‘না’ হলে (২) এর জবাব দিন।]
(১) জাপানি ভাষা শিখতে বা শেখাটা কেন চালু রাখতে চান? কোন ক্ষেত্রে এর ব্যবহারের প্রয়োজন রয়েছে? [একাধিক উত্তর দেওয়া যাবে]
(ক) নিজের স্কুল/বিশ্ববিদ্যালয় (খ) কর্মক্ষেত্রে (গ) চাকুরী/খণ্ডকালীন কাজ (বাইতো) থোঁজা (ঘ) দৈনন্দিন জীবনযাপন
(ঙ) জাপানি বন্ধুদের সাথে আলাপ (চ) বাচ্চর স্কুল (ছ) ভাষাটির প্রতি আগ্রহ আছে বলে (জ) অন্যান্য _____
(২) কেন জাপানি ভাষা শেখার/শেখা চালু রাখার প্রয়োজন নেই? [একাধিক উত্তর দেওয়া যাবে] (ক) জাপানি ভাষায় ভাল দক্ষতা আছে
(খ) পড়ালেখায়/কর্মক্ষেত্রে জাপানি ভাষার প্রয়োজন নেই (গ) কোথায় শেখা যায় তা জানি না (ঘ) সময় নেই (ঙ) পড়ার টাকা নেই
(চ) পড়ার আগ্রহ নেই (ছ) অন্যান্য _____

দুইঃ দৈনন্দিন জীবনে জাপানি ভাষার ব্যবহার নিয়ে নিচের প্রশ্নগুলোর উত্তর দিন। উত্তরটি টিক চিহ্ন/বৃত্ত বা আন্ডারলাইন দিয়ে চিহ্নিত করুন।

(১) জাপানি ভাষায় নিচের কাজ/ঘটনার অভিজ্ঞতা সম্পর্কে ডানদিকের কলামের ১ থেকে ৪-এর মধ্যে যেকোন একটি বাছাই করুন।

(২) তখন কতটুকু কঠিন লেগেছিল, ডানদিকের মাত্রার কলামের ১ থেকে ৫-এর মধ্যে যেকোন একটি বাছাই করুন। একবারও অভিজ্ঞতা না থাকলে, [৫ জানিনা] বাছাই করুন।

(৩) এখন জাপানি ভাষায় ঐ দক্ষতার প্রয়োজনীয়তা সম্পর্কে শেষ কলামের ১ থেকে ৪-এর মধ্যে যেকোন একটি বাছাই করুন।

উদাহরণঃ আপনি পরিচিত জাপানিদের সাথে সবসময় শুভেচ্ছা বিনিময় করেন, একাজ একদম কঠিন মনে হয় না এবং জাপানি ভাষায় একাজ প্রয়োজনীয় বলে মনে করলে, নিচের উদাহরণের মত উত্তর দিন। [উত্তরকে ○ বা ✓ বা আন্ডারলাইন দিয়ে চিহ্নিত করুন।]

দৈনন্দিন জীবনে জাপানি ভাষার ব্যবহার (১ থেকে ৪২) প্রতিটি প্রশ্নের জন্য উদাহরণের মত সব (৩টি) কলাম থেকে উত্তর বাছাই করুন)		(১) অভিজ্ঞতা আছে? প্রায়/খুব = ১ মাঝেমধ্যে = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪	(২) কতটুকু কঠিন ছিল? খুব কঠিন = ১ মোটামুটি = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪ জানিনা = ৫	(৩) বর্তমানে কতটুকু প্রয়োজন? খুব = ১ মাঝেমধ্যে = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪
উদা পরিচিত জাপানিদের সাথে শুভেচ্ছা বিনিময় করা		১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১	রেস্টুরেন্টে ছবি আছে এমন মেন্যু পড়ে খাবারের অর্ডার দেওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২	রেস্টুরেন্টের স্টাফদের কোন নির্দিষ্ট খাবারের উপকরণ সম্পর্কে জিজ্ঞাসা করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩	খাদ্যদ্রব্য কেনার সময় তা তৈরীতে ব্যবহৃত উপাদান পড়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৪	মার্কেটের স্টাফের কাছে কাঙ্ক্ষিত বস্তুর কাউন্টার কোথায় তা জানতে চাওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৫	সুপার মার্কেট ইত্যাদি থেকে কেনা পণ্য ফেরত দেওয়া বা বদল করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৬	কাঙ্ক্ষিত জিনিস ইন্টারনেটের মাধ্যমে অর্ডার দেওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৭	রেল স্টেশন বা বাসের এ্যানাউন্স (ঘোষণা) শোনা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৮	রেলস্টেশনের স্টাফের কাছে কোন স্থানে যাওয়া বা ট্রেন পরিবর্তন সম্পর্কে জানতে চাওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৯	বাস/ট্রেন চলাচলের রুটের চিত্র, সময়সূচী পড়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১০	ইন্টারনেটে ট্রেনের সময়সূচী, ভাড়া দেখা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১১	ব্যাংক বা পোস্ট অফিসের কাউন্টারে টাকা উঠানো/জমা দেওয়া/পাঠানো	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১২	ব্যাংক বা পোস্ট অফিসের ATM-এ টাকা উঠানো/জমা দেওয়া/পাঠানো	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৩	বাসা পরিবর্তনের সময়, পৌর অফিসে (যেমনঃ শিয়াকশো) ঠিকানা পরিবর্তন করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৪	জাপানি ভাষায় লেখা বাড়িভাড়ার চুক্তিপত্র পড়ে স্বাক্ষর করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৫	বাসার কেয়ারটেকার বা মালিককে বাসা সংক্রান্ত কোন সমস্যার কথা জানানো	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৬	বিদেশীদের জন্য সহযোগিতা সংস্থা বা পৌর অফিসের বিভিন্ন অনুষ্ঠানের নোটিশ পড়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৭	ভিসার মেয়াদবৃদ্ধি ইত্যাদি বিষয়ে পৌর অফিস বা বিদেশীদের সেবাপ্রদান কেন্দ্রে পরামর্শ করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৮	যেকোন হাসপাতালে প্রথমবার যাওয়ার সময়, স্বাস্থ্য সংক্রান্ত প্রশ্নমালা পূরণ করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
১৯	হাসপাতালে ডাক্তার ও নার্সকে নিজের রোগ সম্পর্কে বলা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২০	রোগ সম্পর্কে ডাক্তারের ব্যাখ্যা বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২১	ঔষধের দোকান থেকে দেওয়া ঔষধের ব্যাখ্যা (ধরণ, পান করার পদ্ধতি) পড়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২২	পৌর অফিস থেকে আসা স্বাস্থ্যপরীক্ষার নোটিশ (সময়, প্রয়োজনীয় জিনিস) পড়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৩	দুর্যোগ, দুর্ঘটনার সময় অন্য লোকের কাছে সাহায্য চাওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৪	টিভি বা রেডিওতে প্রাকৃতিক দুর্যোগ সম্পর্কে তথ্য শুনে বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৫	টিভি বা ইন্টারনেটে আবহাওয়ার তথ্য দেখে বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৬	টিভি সংবাদ শুনে তার বিষয়বস্তু বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৭	টিভির বিনোদনমূলক অনুষ্ঠান (ভ্যারাইটি শো, নাটক ইত্যাদি) শুনে বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৮	প্রতিবেশীদের সাথে শুভেচ্ছা বিনিময় করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
২৯	জাপানি ভাষায় ফেইসবুক, মোবাইল ম্যাসেজ ইত্যাদি ব্যবহার করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩০	পরিচিত জাপানিদের কাছে নিজের দৈনন্দিন জীবনের কোন অসুবিধায় পরামর্শ করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩১	প্রতিবেশীদের কাছে ময়লা ফেলার পদ্ধতি জিজ্ঞাসা করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩২	বাসায় বিলি করা লিফলেট (চিরাশি), এলাকার নোটিশবোর্ড পড়ে প্রয়োজনীয় তথ্য জানা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৩	বিদেশীদের অংশগ্রহণে স্থানীয়ভাবে আয়োজিত অনুষ্ঠানে আগত জাপানিদের সাথে গল্প করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৪	জাপানি/বিদেশী প্রতিবেশীদের সাথে কোন সমস্যা হলে তা মিটিমাট করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৫	জাপানিদের কাছে, নিজের দৈনন্দিন জীবনের ধর্মীয় রীতিনীতি সম্পর্কে বলা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৬	অপরিচিত লোক বা প্রতিষ্ঠান থেকে আসা ফোনকলের জবাব দেওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৭	স্থানীয় লাইব্রেরী, কমিউনিটি সেন্টার, স্পোর্টস ক্লাবের ব্যবহার বিধি নিয়ে সংশ্লিষ্ট স্টাফকে জিজ্ঞাসা করা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৮	নিয়োগ বিজ্ঞপ্তির নোটিশ পড়ে প্রয়োজনীয় শর্তাবলী বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৩৯	নিয়োগ বিজ্ঞপ্তির অস্পষ্ট বিষয়ে নিয়োগকর্তার কাছে ফোনে জানতে চাওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৪০	জাপানি ভাষায় জীবনবৃত্তান্ত (বায়োডাটা) লেখা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৪১	জাপানি ভাষায় চাকুরীর/কাজের ইন্টারভিউ দেওয়া	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪
৪২	চাকুরীর চুক্তিপত্র পড়ে তার বিষয়বস্তু বোঝা	১ ২ ৩ ৪	১ ২ ৩ ৪ ৫	১ ২ ৩ ৪

তিনঃ যাদের জাপানের স্কুল/বিশ্ববিদ্যালয়ে পড়ার অভিজ্ঞতা আছে, তারা নিচের প্রশ্নগুলোর উত্তর দিন। [উত্তরের ধরণ ২য় পৃষ্ঠার মত]

স্কুল/বিশ্ববিদ্যালয়ে জাপানি ভাষার ব্যবহার (৪৩ থেকে ৫১) প্রতিটি প্রশ্নের জন্য পূর্বের মত <u>সব (৩টি) কলাম থেকে উত্তর বাছাই করুন</u>		(১) অভিজ্ঞতা আছে? প্রায়/খুব = ১ মাঝেমঝ = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪				(২) কতটুকু কঠিন ছিল? খুব কঠিন = ১ মোটামুটি = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪ জানিনা = ৫				(৩) বর্তমানে কতটুকু প্রয়োজন? খুব = ১ মাঝেমঝ = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪				
৪৩	শিক্ষকের সাথে নিজের পড়ালেখা ও ভবিষ্যৎ (ক্যারিয়ার) নিয়ে আলোচনা করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৪৪	ক্লাশের পড়ার কোন বিষয় নিয়ে অন্য ছাত্রদের সাথে আলোচনা করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৪৫	জাপানি ভাষায় সংক্ষিপ্ত রিপোর্ট লেখা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৪৬	গবেষণা ইত্যাদির জন্য জাপানি ভাষায় রেফারেন্স বই পড়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৪৭	ক্লাশে বা সেমিনারে নিজের মতামত জাপানি ভাষায় বলা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৪৮	সাংস্কৃতিক অনুষ্ঠান বা কোন প্রতিষ্ঠানে নিজের দেশকে নিয়ে জাপানি ভাষায় প্রজেন্টেশন দেওয়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৪৯	স্কুল/বিশ্ববিদ্যালয়ের সংশ্লিষ্ট স্টাফের সাথে বৃত্তি বা অনুদান সম্পর্কে কথা বলা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫০	অনুপস্থিত বা ক্লাশে পৌঁছাতে দেরী হলে, শিক্ষককে ফোন করে জানানো	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫১	শিক্ষকের সাথে ই-মেইল আদান প্রদান করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪

চারঃ যাদের চাকুরী/খণ্ডকালীন কাজ (আরুবাইতো) করার অভিজ্ঞতা আছে, তারা নিচের প্রশ্নগুলোর উত্তর দিন।

কর্মক্ষেত্রে জাপানি ভাষার ব্যবহার (৫২ থেকে ৬৩) প্রতিটি প্রশ্নের জন্য পূর্বের মত সব (৩টি) কলাম থেকে উত্তর বাছাই করুন)		(১) অভিজ্ঞতা আছে? প্রায়/খুব = ১ মাঝেমঝা = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪				(২) কতটুকু কঠিন ছিল? খুব কঠিন = ১ মোটামুটি = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪ জানিনা = ৫					(৩) বর্তমানে কতটুকু প্রয়োজন? খুব = ১ মাঝেমঝা = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪			
৫২	কর্মক্ষেত্রে নিজের দায়িত্ব সম্পর্কিত কাগজ/নির্দেশনা পড়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৩	কর্মক্ষেত্রে লেখা বা ঝুলানো বিভিন্ন সতর্কবাণী পড়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৪	কাজের বিষয়বস্তু ও পদ্ধতি সম্পর্কে বসের নির্দেশনা অনুযায়ী কাজ করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৫	কর্মক্ষেত্রে আসা ফোনের জাপানি ভাষায় জবাব দেওয়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৬	দৈনিক প্রতিবেদন (রিপোর্ট) বা নির্দেশ অনুযায়ী কিছুর উপর প্রতিবেদন লেখা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৭	মিটিং-এ অংশগ্রহণ করে, মত বিনিময় করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৮	কাজের পদ্ধতি ইত্যাদির উন্নয়ন সম্পর্কে বসকে কোন ধরনের প্রস্তাব দেওয়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৫৯	কর্মক্ষেত্রে বিরতির সময় অন্যদের সাথে জাপানি ভাষায় গল্প করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬০	অনুপস্থিত বা পৌঁছতে দেরী হলে, বসকে ফোনের মাধ্যমে জানানো	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬১	বসের কাছ থেকে মোখিকভাবে ছুটি বা তাড়াতাড়ি চলে যাওয়ার অনুমতি চাওয়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬২	ব্যবসায়ীক কাজে ক্রেতা ও অন্যদের সাথে ই-মেইলের মাধ্যমে জাপানিতে যোগাযোগ করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬৩	কর্মক্ষেত্রে কোন ভুল করে ফেললে, বস বা অন্য সহকর্মীদের কাছে ক্ষমা চাওয়া	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪

পাঁচঃ যাদের সন্তান জাপানের স্কুল/ইয়োচিএন/হোইকুএন-এ পড়ার অভিজ্ঞতা আছে, তারা নিচের প্রশ্নগুলোর উত্তর দিন।

সন্তানের শিক্ষার ক্ষেত্রে জাপানি ভাষার ব্যবহার (৬৪ থেকে ৭০) প্রতিটি প্রশ্নের জন্য পূর্বের মত <u>সব (৩টি) কলাম থেকে উত্তর বাছাই করুন</u>)		(১) অভিজ্ঞতা আছে? প্রায়/খুব = ১ মাঝেমঝ = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪				(২) কতটুকু কঠিন ছিল? খুব কঠিন = ১ মোটামুটি = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪ জানিনা = ৫					(৩) বর্তমানে কতটুকু প্রয়োজন? খুব = ১ মাঝেমঝ = ২ তেমন না = ৩ একদম না = ৪			
৬৪	স্কুল/ইয়োচিএন/হোইকুএন থেকে আসা নোটিশ ইত্যাদি পড়ে প্রয়োজনীয় জিনিসের ব্যবস্থা করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬৫	সন্তানের নোটবুকে (রেনরাকুচো) শ্রেণীশিক্ষকের কাছে প্রয়োজনীয় তথ্য এবং সন্তানের অবস্থা লিখে পাঠানো	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬৬	সন্তানের বাড়ীর কাজে (হোমওয়ার্কে) সাহায্য করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬৭	শ্রেণীশিক্ষকের সাথে দেখা করে সন্তানের পড়ালেখা এবং জীবনযাপন নিয়ে আলোচনা করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬৮	অভিভাবকদের গ্রুপে (PTA ইত্যাদি) অংশগ্রহণ করে, শ্রেণীশিক্ষকসহ অন্যান্য অভিভাবকদের সাথে মতবিনিময় করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৬৯	স্কুলের লাঞ্চের মেন্যু পড়া (বাচ্চা খেতে পারবে কি না তা জানার জন্য)	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪
৭০	পৌর অফিসে হোইকুএন-এ ভর্তির আবেদন করা	১	২	৩	৪	১	২	৩	৪	৫	১	২	৩	৪

ছয়ঃ উল্লেখিত বিষয়গুলোর মধ্যে বিশেষভাবে সমস্যায় পড়েছেন এমন কিছু সম্পর্কে বিস্তারিত লিখুন।

সাতঃ জাপানে জীবনযাপনে জাপানি ভাষার ব্যবহার ছাড়াও, বাংলাদেশের চেয়ে ভিন্ন রীতিনীতি, প্রথা ইত্যাদি কারণে সমস্যায় পড়ার কোন অভিজ্ঞতা থাকলে লিখুন।

আটঃ স্থানীয় পৌর কর্তৃপক্ষ এবং এলাকাবাসীর কাছে কী ধরনের সহযোগিতা আশা করেন?

বেশী গুরুত্বপূর্ণ মনে করেন এমন ৫টি তে টিক চিহ্ন ○ বা ✓ আন্ডারলাইন দিয়ে বাছাই করুন।

- (১) [] বিদেশীদের জন্য জাপানি ভাষার ক্লাশের (শিক্ষার) ব্যবস্থা করা
- (২) [] বিদেশীদের জন্য জাপানের দৈনন্দিন জীবনের সংস্কৃতি, প্রথা ইত্যাদি বিষয়ে সেমিনারের আয়োজন করা
- (৩) [] বিদেশীদের জন্য জাপানে কাজ করার আইন, জাপানিদের কাজ করার ধরণ নিয়ে হ্যান্ডবুক তৈরী করে বিলি করা
- (৪) [] বিদেশীদের জন্য স্থানীয়ভাবে বিলি করা নোটিশ, বিজ্ঞাপনগুলো একাধিক ভাষায় অনুবাদ করে দেওয়া
- (৫) [] স্থানীয়ভাবে বিলি করা নোটিশ, বিজ্ঞাপনগুলো সহজ জাপানি ভাষায় লেখা (যেমনঃ ফুরিগানা দেওয়া)
- (৬) [] বিদেশীদের পরামর্শ দেওয়ার জন্য বিদেশীদের বিষয়ে বিশেষজ্ঞের ব্যবস্থা করা
- (৭) [] জাপানিদের জন্য বিদেশীদের দৈনন্দিন জীবনের সংস্কৃতি, প্রথা ইত্যাদি বিষয়ে সেমিনারের আয়োজন করা
- (৮) [] জাপানিদের জন্য বিদেশীদের সাথে কীভাবে মিশবে, কীভাবে কথা বলবে, সে বিষয়ে সেমিনারের আয়োজন করা
- (৯) [] জাপানিদের জন্য বিদেশী ভাষার ক্লাশের ব্যবস্থা করা
- (১০) [] জাপানি এবং বিদেশীদের জন্য সাংস্কৃতিক বিনিময়ের ক্ষেত্র (পার্টি ইত্যাদি) তৈরী করা
- (১১) [] স্কুলে বিদেশী শিশুদের জন্য জাপানি ভাষার ভলান্টিয়ার শিক্ষকের ব্যবস্থা করা
- (১২) [] স্কুল থেকে প্রায় দেওয়া হয় এধরনের চিঠি, নোটিশে সহজ ইংরেজি অনুবাদ সংযুক্ত করে দেওয়া
- (১৩) [] অন্যান্য []

নয়ঃ জাপানি ভাষার ব্যবহার এবং জাপানের বিভিন্ন বিষয়ে এমন কিছু কি আপনার নজরে এসেছে, যা বাংলাদেশে থাকা অবস্থায় শিখে আসলে বা প্রস্তুতি নিয়ে আসলে ভাল হত? আপনার অভিজ্ঞতা থেকে লিখুন।

যদি আপত্তি না থাকে নীচের তথ্যগুলো প্রদান করুন। (প্রয়োজনে যোগাযোগের ক্ষেত্রে ব্যবহার করার জন্য)

নামঃ

মোবাইলঃ

ই-মেইলঃ

সহযোগিতার জন্য আন্তরিক ধন্যবাদ।

資料 2:I さんのインタビューの全体マトリックス（1 回目と 2 回目）

SCAT (Steps for Coding and Theorization)を使った質的データ分析						
2014 年 11 月 Iqbal さん 1 回目インタビュー						
番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外の内容	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
1	聞き手	今日、来てくださってありがとうございます。今日は君の来日目的、日本での生活などについてインタビューします。そして、経験したことをシェアしていただければと思います。				
2	I さん	はい。				
3	聞き手	まず、どんな目的で来日したか、を教えてください。				
4	I さん	来日した第 1 目的は高等教育を受けることです。私はバングラデシュで学士と修士課程を修了してきています。バングラデシュから直接日本の大学に入学することは難しいです。大学に入学ができなかったため、日本語学校に入りました。日本語学校を修了してから日本の大学で経営学を勉強したいと思っています。私の背景(専門)は経営学なので、経営学をもっと勉強したいです。主な理由はこれです。同時に、子供のころから、日本社会、日本の文化、日本の経済にも興味を持っていました。だから、子供のころから日本に興味を持っていて、来日を目指していました。このような夢を持って来日しました。	高等教育、日本語学校、経営学、子供のころから、日本社会、日本に興味、夢	背景知識、留学、進路、日本への憧れ	バングラデシュの教育制度、日本の大学で研究するための不十分であるため、直接大学ではなく日本語学校に来る留学生が多い	将来のために憧れの国である日本へ留学
5	聞き手	留学は奨学金ですか、私費ですか。				
6	I さん	今は私費で勉強しています。	私費	経済的な負担	明るい将来のための投資	留学の価値
7	聞き手	日本では私費留学は費用がかかりますね。大金をかけて来日し、将来経営学を学びたいわけですね。				
8	I さん	はい。				
9	聞き手	これは君の人生、キャリアにどのくらい役に立つのでしょうか。				
10	I さん	きっと役立つと思います。日本の学位は価値があります。日本のある程度有名な大学から学位を習得し、平行して日本語の練習も続ければ、日本でも就職ができる可能性があります。そして、自国でもやりたいことがたくさんあります。帰国してから、日系企業で働くことも考えられます。その場合、日本文化に触れたり、学んだりすることがバングラデシュでもい	日本の学位、日本語、日系企業で働く、日本文化に触れる	高等教育、キャリア、専門知識と言語能力の結合	学歴社会としてのバングラデシュ、欧米や日本の大学の学位に対する高い評価	本国でのキャリア貴重な知識獲得の機会や経験
11	聞き手	じゃ、これは将来役立つと思っているわけですね。				
12	I さん	はい、それを期待しています。				
13	聞き手	来日を目指して何か特別な準備をしましたか。				

14	I さん	はい、来日のために準備しました。第一段階は、日本語習得でした。ですから、最初はダッカ大学の日本語コースに入ることにしました。そこに入学しました。入学してから、熱心に日本語の授業に参加していました。私が入学する2年前に兄も入学しました。彼は〇〇先生の組に入るように勧めてくれました。私はその組に入りました。自分の努力、それからもちろん先生のサポートでスムーズに進んでいました。これは第一の準備でした。同時に、日本についての記事(を読んだり)、日本語スピーチ大会などに参加したりしていました。このような準備もしていました。そして、自分に役立つような日本に関する情報に注目していました。何かオファーがあれば受けることができるかなと考えて。	日本語習得、ダッカ大学、自分の努力、先生のサポート、日本に関する情報	日本語学習、日本や日本人コミュニティへの関心	バングラデシュで一番日本語教育環境が恵まれているダッカ大学に入学、家庭でも日本について興味、教室外のリソースの有効な利用	親戚や日本語学校のサポートを中心に来日準備
15	聞き手	記事は日本についての日本についての新聞記事などですか。				
16	I さん	はい、そうです。新聞に出るものとか…				
17	聞き手	来日してからどのような印象を受けましたか。自分が考えていた日本と実際の日本、何か違っていましたか。				
18a	I さん	日本は本当に…子供のころから日本に来たいと思っていました。来日してから、日本は（自分の国とは）違うということに気づきました。特に、日本人は時間をとても大切にします。これは第一の印象です。日本人は時間をとても大切にします。このことは、自分がアルバイトを始めたとき、もっと強く感じました。アルバイト先の日本人は仕事がとても速かった、とても速いです。最初は、彼らについていけなかったです。第二は、工作中に10分のブレイク、休憩がありました。10分の休憩だったが、私は8分～10分ぐらい休んでいたが、日本人は5分で戻ってきていました。彼らは休憩に行く前に何をするか計画を立てていて、戻ってきてすぐやってしまいます。とても速いです。	子どものころから日本に来たいと思っていた、日本人は時間をとても大切にする、日本人は仕事が速い	日本への関心、仕事のスピード、時間に対する考え方	観察者、自分との違いの気づき	時間の観念における自文化との際立った差異に対する驚き、日本文化に対する高い評価、焦燥感
18b	I さん	そして、私にも（仕事を）速くやるよう求めてきました。これは私の生きた体験になりました。そして、日本語学校でも、先生や校長先生はとても親切でとても速い(仕事が)です。そんなことに気づきました。また、クラスメートはみんな外国人です。中国、ベトナム、インドネシア、フィリピンの学生がいます。彼らも（同じ意味で）日本は違うと思っています。バングラデシュとは違う(日本が)ことが気づきました。	日本語学校の先生も速い、日本語学校のクラスメートも同じことを感じている	仕事の速さ、自分だけの観察ではない	日本人の仕事の速さ、周囲の非日本人の評価	仕事の速さにおける日本人の特殊性、根拠としての非日本人の評価
19	聞き手	クラスメートたちもそれぞれの国と比べて日本は違うと言っているわけですね。				
20	I さん	はい。				
21	聞き手	アルバイトの話をしていましたね。今は何かアルバイトをしていますか。				
22	I さん	今はアルバイトをしていません。したいから、今は求職中です。				
23	聞き手	アルバイトは1つやったことがあると言っていましたね。どうやってそのアルバイトを見つけましたか。				
24	I さん	日本に私のおじさんがいます。おじさんが紹介してくれました。そこで働いていました。	日本にいるおじ、アルバイトの紹介	親戚からの就職支援	血縁関係の支援による日本社会とのつながり	血縁ネットワーク 日本社会へのチャンネル
25	聞き手	どんな仕事でしたか。アルバイトだったかちょっと教えてくれませんか。				
26a	I さん	はい、もちろん。レストランのアルバイトでした。日本料理を作っていました。とても楽しかったです。楽しかった、同時に多少辛い経験もしました。楽しかったことは、そこにいた日本人のチーフはとてもいい人でした。彼はユーモアがあり、楽しく仕事していました(チーフが)。私を気に入ってくれていました。そして、いろいろなことを教えてくれました。明るい人だったので、私も落ち着いて働いていました。	楽しかった、日本人のチーフ、とてもいい人、いろいろなことを教えてくれた、私を気にいていた	日本人チーフとの友好な関係、指導者としての信頼感、自分にとっての居場所	日本人の上司に対する肯定的な評価、親密な関係、自己肯定観、自尊心	信頼できる初めての日本人との出会いと関係構築

26b	I さん	逆に苦い経験はというと、そこの XX 人のスタッフがいました。彼は私にときどき嫌がらせをしました。いじめともいえます。これはちょっと嫌な経験でした。日本語があまりできないので、いじめられたり、バカと言われたりしました。これは辛い経験です。それ以外、日本は OK です。	XX 人のスタッフ、私に対する嫌がらせ、日本語があまりできない、いじめ、バカと言われた	外国人スタッフの言動、日本語能力不足が原因のいじめ	対立関係の（唯一の）原因としての日本語能力不足	自分ではどうにもならない日本語力不足、外国人スタッフの言動への批判
27	聞き手	他の外国人が君に対してそのような行動をしたというわけですか。				
28	I さん	はい。そのとき、日本人と XX 人の区別がだいたいできました。日本人のチーフはとても丁寧に仕事を教えてくれていたが、XX 人は怒りっぽくて、親切ではありませんでした。このことから日本人は素晴らしいとあらためて感じました。	日本人チーフはとても丁寧に仕事を教えてくれていた、XX 人は怒りっぽく親切ではない	XX 人に対する否定的なイメージ、日本人チーフに対する肯定的イメージ	熟練者としての教え方の比較、日本人に対する肯定的な評価	業務指導におけるチーフへの肯定的、外国人スタッフへの否定的評価、非日本人と日本人の対比、日本人に対する肯定的イメージの強化
29	聞き手	そのアルバイトはどのくらい続けましたか。どうして辞めましたか。				
30	I さん	辞めた主な理由は、XX 人との苦い経験、あるいは彼の陰悪な振る舞いです。時々ひどいことをされたので、嫌になってやめました。また、家からも遠かった。学校から直接（バイト先に）行っていたが、家に帰るのが遅くなったので勉強に支障が出ました。このような理由で辞めました。このようにいくつかの理由で辞めました。	XX 人との苦い経験、陰悪な振る舞い、家からも遠かった、勉強に支障	人間関係の悪さ、日本語学習に悪影響を及ぼす要因	XX 人スタッフに対する非難、埋め合わせとしての他の要因	退職の原因としての XX 人スタッフの言動と学生の自分への支障 自身の行為の正当化
31	聞き手	仕事は君のおじさんが紹介してくれたのですね。				
32	I さん	はい。				
33	聞き手	そのため、君は履歴書を書いたり、インタビュー（面接）を受けたりしましたか。正式な手続きがありましたか。				
34	I さん	はい、履歴書が必要でした。履歴書（を書くの）はおじさんが手伝ってくれました。近くのコンビニから、市販の履歴書を買って、記入した上で、持って行きました。面接がありました。いろいろなことを聞かれました。だいたい答えることができました。そのとき日本語はまだまだ不十分だったので、簡単な日本語で答えました。パスポートも見せました。履歴書を書くときちょっと大変だったが、おじさんが手伝ってくれてなんとかできました。	履歴書、おじさんが手伝ってくれた、面接、日本語はまだまだ不十分、簡単な日本語で答えた	求職活動、おじさんのサポート、不十分な日本語能力ながらも課題達成	生活の場を作るために親戚の助け	血縁関係ネットワークの支援
35	聞き手	バイト先で他のスタッフと起きた問題の解決のために何かしようとはしなかったのですか。				
36	I さん	はい、解決しようと思いました。日本人チーフに伝えました。もっと頑張ってくださいと言われました。そして「XX 人は社員で、君はアルバイトなんだよ」と言われました。2 人の間には差があるんだよと。チーフは私のことを気に入ってくれていました。「彼（XX 人）は君の仕事のためにいろいろな事を言ってくれているのだから、もっと頑張ってください」と言われました。頑張っては見ましたが、我慢できなくなって辞めました。	解決しようとした、頑張ってくださいと言われた、XX 人は社員、君はアルバイト、XX 人スタッフは君のために言ってくれている、もっと頑張ってください、我慢できなくなって辞めました	問題解決に向けたチーフへの訴え、チーフへの期待とチーフの反応、XX 人スタッフに対するチーフの肯定的コメント、努力の要請、努力の限界	調停者への期待、職場での上下関係・役割関係への理解の要請、XX 人の言動に対する正反対の評価、納得していない、譲歩の継続の不可能さ	XX 人社員との対立チーフへの自分側に立った仲裁の期待、譲歩と努力の要請、交渉プロセスにおける異なりの外在化、自己保存
37	聞き手	それは仕事が遅かったからですか。それとも他の原因もあったと思いますか。				

38	I さん	私が感じているのは、私にも問題があったということです。仕事が遅かったことも認めます。同時に、（XX 人の）自尊心の問題だったともいえます。チーフは私によく冗談など言っていました。私もそのような冗談を楽しんでいました。でも、チーフは XX 人とそのようなことはしていませんでした。だから、彼はやきもちを焼いていました。それも原因でした。仕事ができなかったことが 60%で、チーフが私のことを気に入って、いろいろな話をしてくれたことが 40%か 30%原因だったと想います。時々チーフは彼に対して、私に対するのとはちょっと違う態度をとっていました。	私の仕事が遅かった、自尊心の問題、XX 人スタッフははやきもちを焼いていた、チーフは私のことを気に入って、時々チーフは彼に対して、私に対するのとはちょっと違う態度	職場の一員としての自分の未熟さ、チーフの自分の関係と XX 人との態度の比較、XX 人の自分に対する嫉妬	自分の落ち度への言及、対立の原因の分析、XX 人スタッフに対する非難への埋め合わせ	3 人の関係性と各々の心理、対照的なチーフの態度、責任の再分配、自己の正当化
39	聞き手	そこで言語能力が影響したと思いますか。				
40	I さん	はい、もちろん。まず、日本語を十分学習していなかったことです。特に、日本のレストランで使用する日本語をほとんど知らなかったともいえます。それは大きかったです。例えば、仕事でチーフあるいは他の日本人社員が「〇〇」を持ってきて、と言われても、その「〇〇」って何を示しているか分かりませんでした。あるいは、料理の名前は分かりましたが、どういう風にお客さんに出したらいいの分かりませんでした。普段教えてくれましたが、忙しいとき、彼らも「〇〇」はこれだ、ここにあると、一々説明する時間がありませんでしたね。これは私の至らない点でした、学んでこなかったからです。そして、日本のレストランに関する他のもの、マナー、態度にも足りない部分がありました。それも感じました。	日本語を十分学習してこなかった、レストランで使用する日本語、何を示しているか分からなかった、どういう風にお客さんに出したらいいのか、マナー、態度	仕事ができなかったことを示す具体例	問題の原因としての日本語能力、日本の社会・知識不足の具体的な説明	孤立実体的能力観に基づいた能力、知識の捉え方
41	聞き手	どんなところが足りませんでしたか。				
42	I さん	日本のレストラン（職場に）行った時や帰る時の挨拶、出るときの挨拶、あるいはお客様への接し方、このようなことに私の至らない点がありました。何を話さなければいけないのか、言語能力が足りませんでした。少しずつ乗り越えていましたが、そのとき感じたのはこの弱点は無くさなければならないということです。日本の文化ではマナーはとても大事です。日本人はマナーにとっても気をつけています。	挨拶、お客様への接し方、私の至らない店、言語能力が足りなかった、乗り越えていた、弱点は無くさなければならない、マナー	言語能力が不足、マナーを身につける	持っている知識を重視	孤立実体的能力観に基づいた日本語についての捉え方
43	聞き手	日本のマナーの話が出ましたね。世界のどの国でもそれぞれのマナーがあるでしょう。わが国と日本のマナーの間に著しい差を感じましたか。				
44	I さん	はい、もちろん。				
45	聞き手	例えば？				
46	I さん	日本のマナーはバングラデシュより非常にレベルが高いです。特に、日本人は何か間違ったことをしたら、すぐごめんなさい、ごめんなさい、すみませんと繰り返し言います。具体的な例を挙げると、この間、電車の中である女性が私の足を軽く踏んでしまいました。その人は何回もごめんなさい、ごめんなさいと言ってくれました。私は「大丈夫です」と言いました。日本人はマナーにとっても気をつけています。他の例をあげると、電車の中では日本人は全然話しません。朝、出勤の車内で、みんな静かにしています。数日まえ私の前に座っていた人が携帯電話を電車の床に落としました。落ちたのはその人の携帯だったのですが、彼は私にごめんなさいと言いました。また、私の学校でのことですが、先生が、ある日 2 分遅れて授業に来ました。「遅れてすみません」と何回も言いました。「遅れてすみません」「遅れてすみません」と。それからある日授業中に先生の携帯が突然鳴りだしました。大事な電話だったのかもしれませんが。先生はいつも携帯をマナーモードにしていますが、その日は忘れたようです。携帯が鳴ったとたん、先生は電話を切って、繰り返し「ごめんなさい」「ごめんなさい」と言いました。私たちが普通しないこと、気づかないことがここではとても大切にされています。ちょっとした間違いでも、自分が悪かったと認め、謝ります。	日本のマナー、非常にレベルが高い、すみませんと繰り返しいう、日本人はマナーにとっても気をつけている、携帯をマナーモードに、普通しないこと、気づかないことがここではとても大切にされている、自分が悪かったと認め、謝る	バングラデシュと日本のマナーの違い、ミスを認める、謝る習慣		傍観者の視点での観察、「行動規範」の異なりに気づき
47	聞き手	OK。君は国でも 2 年ぐらい日本語を勉強して、他にも色々な情報を集めたと言っていましたね。さっき言ってくれたマナーなどのことは、国にいたときどれくらい知っていましたか。				

48	I さん	自国にいたときも少しは知っていました。実は日本人と接触する機会があまりありませんでした。そんな機会があれば、このようなこと(マナーなど)がよく習得できます。でも、わたしは、ええと。学んだのはほとんど授業を通じてでした。教室で先生に、日本のビデオを見せてもらいました。担任の〇〇先生に(ダッカ近郊の) Jahangirnagar 大学に交流会に連れて行ってもらったこともありました。そこにいた日本人先生にも少し教えてもらうことができました。一番大事なのは、日本人と接触する機会で、そうしたことがあれば、色々学ぶことができます。(国で)学んだこと(マナー)はすべてビデオやたまの日本人との接触の機会を利用したものです。	日本人と接触する機会、学んだのはほとんど授業を通じて、日本のビデオを見せてもらった、Jahangirnagar 大学に交流会、そこにいた日本人先生	自国での日本語学習の効果、教師からのサポート、日本人と接触機会	自国で「行動規範」への気づき機会の不足	「既有能力」として保持される自国での学習経験の意義
49	聞き手	今、来日して4ヶ月ぐらいですね。主にどのような場面で日本語を使用していますか。				
50	I さん	日常生活でいつも日本語が必要です。特に私の日本語学校で。何か分からなかったら、日本語で説明します。そして、買い物でも、日本人の店員の多くは英語が苦手で、私が日本語で話さなければなりません。そのとき、自分の足りないところ(日本語能力)にも気づきます。日本語が必要だと強く感じます。駅でも日本語を使います。どこかへ行きたいとき、行ったことのないところに行きたいとき、そこにいる人、駅員に説明しなければならぬ、私が。どうやって行ったらいいのか、何番線かなどと尋ねるとき日本語が必要です。日本語はいつも必要だと思います。	日常生活でいつも日本語が必要、日本語で説明、買い物、日本人の店員の多くは英語が苦手、自分の足りないところにも気づく、尋ねるとき日本語が必要だ	日常場面での使用、英語使用機会に限られている	生活の質が豊かにするために日本語の必要性/日本語を使用しなければならぬ場面で自分の実力に気づく	十全的な人間生態における不可欠な要素としての言語能力
51	聞き手	今言ってくれた日本語を使用している場面のどこかで特に困ったことがありますか。				
52a	I さん	はい。一回、最初は(日本語学校に入学して)3日目、学校に行く途中だった。そのとき、柏でたぶん事故があった。電車が止まっていた。そのとき、来たばかりで、通い始めて3日目の学校に行く途中だった。そのとき、どうやって行くか、分からなかった。そのとき、そこにいた日本人に「もうすぐ学校が始まる時間です。学校は柏ですが、どうやって行ったらいいですか」と訊いた。するとこうやって行きなさいと教えてくれた。日本人の親切な男性が携帯電話を貸してくれて、知り合いの人がいれば電話してみなさいと言った。私は「おじさんがいるから、電話してみます」と言い、彼に電話した。さらにその駅員に確認し、学校に着いた。これは1つの経験だ。思いがけない経験だった。	学校に行く途中だった、電車が止まっていた、通い始めて3日目、日本人に〇〇と訊いた、教えてくれた、携帯電話を貸してくれて、駅員に確認し学校に着いた、思いがけない経験だった	来日したばかりの時点での困難、見知らぬ人に助けを求めた、助けてもらって目的地に行けた	助けを求める、助けを求める際「既有能力」の活用	助けを求める際の「既有能力」の活用と成功体験
52b	I さん	もう1つの面白い経験は、幾日か前、私は上野で電車を乗り換えようとしていた。ちょっと急いでいた。その時私服の警官2人が目の前に現れて「 <u>ごめんなさい、あなたの在留カードをちょっと見せてください</u> 」といい、片隅に連れて行かれた。在留カードを見せたら、OK、OKと(言われた)。それにしてもちょっと当惑した。警察官から在留カードを見せるように言われたことなど初めてだったからだ。でも、見せたら、OKだった。そして今日(も同じようなことがあった。)私の最寄駅の錦糸町に急いでいた。11時42分の電車に乗らないといけなかったからだ。そのとき警官が現れた。私が急いでいるのを怪しいと思ったようだ。この男はカードがないから慌てていると思ったのだろう。目の前に立たれて、在留カードを見せてくださいと言われた。すぐ出してみせた。前と同じことになった。警官は「 <u>ごめんなさい</u> 」と言い、「 <u>頑張ってください</u> 」と言ってくれた。こんなことが起きたのは2回目だった。普通は問題ないが、時々うろたえることがある。	急いでいた、私服の警官2人、片隅に連れて行かれた、在留カードを見せたらOK、OKと、ちょっと当惑した、急いでいるのを怪しいと思ったようだ、警官は「ごめんなさい」と言い「頑張ってください」と言ってくれた、時々うろたえることがある	警察に身分を確認される、厄介を感じる、カードの提示による解決	法的な機関や人との接触場面での緊張	言語以外の要素での解決
53	聞き手	どうしてうろたえるんですか。				
54	I さん	うろたえる…うろたえる第1の理由は、日本語が完璧にできないこと。これは第1の弱点だ。そのため、気弱になってうろたえてしまう。なぜならば、流暢に日本語がしゃべれれば、色々なことが簡単に把握できるはずだから。また、私が外国人だから、彼らと付き合うのもうまくいかな。このようなこともあって、まだ完全に慣れていない、日本に。	日本語が完璧にできない、第1の弱点、気弱になってうろたえてしまう、流暢に日本語がしゃべれれば、私が外国人、彼らと付き合うのもうまくいかな	不十分な言語力よっての緊張、外国人として日本の生活に慣れていない	言語使用に関する不安	恐怖心や不安、交流が困難な原因としての日本語能力不足

55	聞き手	どのような場面で日本語を使用しているか聞きましたが、どのような場面で日本語の使用がもっと必要だと思いますか。				
56	I さん	これ以外にも日本語を使うことがもっと必要な場面がある。特に、私が今アルバイトを探しているため、そのためにとても重要である。アルバイト先はどこでも、レストランにしてもスーパーにしても、言語能力は第1に要求される。彼らと話す、彼らの話を理解する、彼らの指示を理解してすぐやること。私がアルバイトを見つけるのに時間がかかっている理由は言語(能力)だ。	日本語を使うことがもっと必要な場面、今アルバイトを探している、言語能力は第1に要求される、彼らの話を理解する、彼らの指示を理解してすぐやること	休職活動、言語能力の重要性、会話力、バイトが見つけない理由	自分の言語能力不足への気づき・不安	言語能力と生活の密接な関係
57	聞き手	はい。				
58	I さん	2 番目は、日本語をもっと早く習得できたら、日本の色々な図書館に行って、彼ら(図書館などの日本人)と話して、本を読むことができる。そして、学校の先生方ともっと良い関係を築ける。そして、日本人の友達もできる。日本人の友達と自由に会話ができればできるほど友達が増える。日本人友達が増えたら、チャンネル(ネットワーク)ももっともっと増える。それで、日本語がすべての段階で必要だと思っている。	日本語をもっと早く習得できたら、図書館、本を読む、学校の先生方ともっと良い関係を築ける、日本人の友達、チャンネルももっともっと増える	読書、交流関係の広がり、関係性の質の向上	日本語習得が可能にする地域施設の利用、日本社会との関わり合い、ネットワーク構築	日本語能力獲得がネットワーク構築の質の向上と拡大実現に不可欠、孤立実体的能力観
59	聞き手	そうですね。現在、日本人の友達や知り合いがどのくらいいますか。				
60	I さん	まだ時間が経っていない(来日してから)から…でも、日本人の友達が少しできた。名前も言った方が良いね。ケイタ、(と言います。)私によく電話してくれる、私の日本人の友達だ。彼はとてもいい人だ。彼は東京に住んでいる。時々私と会う。とてもいい人だ。あるいは私の日本語学校の先生だ。なかなか親切だ。何か情報があったら、メールやLINE (SNS の1つ)で教えてくる。そして、私が住んでいるところの隣人、隣の部屋の(人)、彼も友達のようなものだ。まあ、数人の日本人の友達はできた。言葉が原因で遅れている。(友達ができないこと)	日本人の友達が少しできた、名前も言った方が良いね。彼はとてもいい人だ、時々私と会う、日本語学校の先生、なかなか親切だ、メールやLINE (SNS の1つ)で教えてくる	日本人との関わり	言語能力の必要性、SNS などの利用	人間関係・ネットワーク構築、孤立実体観
61	聞き手	どう遅れていますか。あるいは、なぜそう思っていますか。				
62	I さん	言葉が原因で遅れていると思う理由は、言葉をなるべく早く丁寧に彼ら(日本人)に対して使えば、彼らも丁寧に答えてくれるから。日本で一番気づいたことは、私には知らないことがあっても、それが日本人に説明できたら、彼らはとても親切に答えてくれる。この間、知らないところへ行くとき、お巡りさんに(道を)尋ねたら、彼はできれば私を目的地に連れて行ってさえくれるような感じだった。彼らと日本語で流暢に話せたら、スムーズに、丁寧に(会話することができたら)、彼らと楽に交流すること(コミュニケーション)ができる。	言葉が原因、知らないこと、日本人に説明、親切に答えてくれる、お巡りさんに(道を)尋ねたら、流暢に話せたら	コミュニケーションのための不可欠な手段、警官への印象の変更	こちらの言語使用で変化する相手の反応	スムーズな相互作用になるかどうかは言語能力次第
63	聞き手	来日してから4ヶ月ですね。最初のとき直面した問題と今直面している問題に変化がありますか。				
64	I さん	ええと…、少し変化はある。3ヶ月前の言語能力より今の能力が少し高い。(前より)少し分かるようになった。私に影響を与えた日本人の行動の1つは、彼らは簡単にはあきらめず、辛抱するということだ。いつも頑張ってくださいと言う。我慢してやってみてくださいと言う。来日してから今までこれを見習うよう努力している。これはとても気に入っている。日本人は助けてくれる。何かできないときも、説明すれば助けてくれる。	今の能力が少し高い、影響を与えた日本人の行動、彼らは簡単にはあきらめず、辛抱するということ、頑張ってください、我慢してやってみてください、これは気に入っている	言語能力の上達、日本人の行動による動機付け、頑張ること	日本人の支援的で粘り強い態度、肯定的評価、自分への影響	共感できる日本人的な要素の取り入れ
65	聞き手	学校の生活について教えてください。学校はどうか、など。				

66	I さん	いい学校だ。まあまあ有名(学校)だといえる。そこは、先生はみんな日本人だ。だがベトナム人と中国人の先生も1人ずついる。学校はとても楽しい。みんな親切だ。1つの例を挙げたい。数日前、クラス担任の先生が近くの公民館に連れて行ってくれた。グループのみんなをその人に紹介してくれた。先生の知り合いの人もいた、彼らに紹介してくれた。彼ら(公民館の人)は10分ぐらいの時間をくれた。色々教えてくれた。公民館利用の仕方を説明してくれた。これはとても良かった。そしてその日、日本料理屋に行ってお食事した。食事し、帰ってきた。とても楽しかった。学校のことでもうひとつ気に入っている点がある。夏の長い休みがあった。先生は夏休みに北海道に行ってお土産に)、私たちのためにお菓子を買ってきた。みんなに一個ずつ配ってくれた。このことはとても気に入った。	いい学校だ、学校はとても楽しい、みんな親切だ、近くの公民館に連れて行ってくれた、日本料理屋に行ってお食事した、私たちのためにお菓子を買ってきた、このことはとても気に入った	日本社会への参加、グループで外食、お土産	日本社会との出会いに教師のサポート/ 教師からのお土産の習慣に驚き	日本社会との関わりの第一歩、教師のサポートに対する好感
67	聞き手	学校で日本語使用上で何か問題がありますか。自分の実力は十分でしょうか。				
68	I さん	言語使用上の問題はある。その理由は、流暢に話せばいい気持ちだが、少ししかしゃべれないとき、あまりいい気分にはならない。自分自身楽しくない。まずは、満足感がない。2番目は、なんとか話を通じさせることはできる。全力で説明し、どうしても話が通じないときには、事務所にいる中国人の先生が英語が流暢なので、英語で説明していただいている。だが、日本では日本語ができないと何もできない。だから、日本語は最も必要なものだ。	言語使用上の問題、流暢に話せば、満足感がない、どうしても話が通じないとき、事務所にいる中国人の先生が英語が流暢	自己満足、言語能力が不十分、必要に応じて他言語に頼る	限られた場面で英語使用、日本語の不可欠性	低い自己評価、コミュニケーションのために既存能力を使用した上での工夫
69	聞き手	今はまたアルバイトを探していますね。				
70	I さん	はい。				
71	聞き手	求職活動でどんな経験をしていますか。どんなこと(条件)が要求されていますか。				
72	I さん	1番要求されているのは日本語だ。2番目は漢字だ。漢字能力がちょっと低くてもなんとかなる。それは書くときに必要になるから。でも、話すため(仕事の面接)に1番目は日本語だ。2日前に電話もした。たぶん、私は十分伝えることができなかった。これも(うまくいかなかった)1つの理由だ。日本語が必要だ。2番目は紹介だ。紹介はとても重要とされる。第1は、日本語だ。言葉はとても重要だ。	1番要求されているのは日本語、漢字、電話もした、私はすべてまとめて説明できなかった、2番目は紹介	日本語能力、人脈	以前叔父の紹介で就職できた経験	日本語力は求職に最重要
73	聞き手	主にどんな仕事を探していますか。また、電話したところはどんなところですか。				
74	I さん	電話したのはコーヒESHOP(喫茶店)に。Mountain Coffee という名前だ。そして、Burger King に電話した。両方の会社と同じことを言われた。日本語をもっと頑張るように言われた。それから、…ハローワークに紹介されてある会社に行った。そこでも同じことだった。日本語が要求された。日本では日本語がとても重要、とても重要だ。	電話、コーヒESHOP、日本語をもっと頑張るように言われた、ハローワーク、日本語が要求された	最初の接触段階、日本語能力、求人ネットワークの利用	直接知人の紹介の有無、求職で低い言語知識が問題になる	最初の接触段階拒絶される体験の、繰り返し、日本語最優先の意識強化
75	聞き手	どのくらい重要ですか。どのレベルまでできたら、このような仕事ができると想定できますか。				
76	I さん	少し想定はできる。それは、彼らと80%ぐらい(コミュニケーション)ができたら、大丈夫だ。私はもっと頑張らないと。彼らの基本的な要求は彼らの話を理解できること。私は(彼らの)話はすべて理解できるわけではない。あるいは分からない。それが私の問題だ。この問題が乗り越えられるように、努力している。これができたら、日本語はOKだ。	想像、80%ぐらい、話を理解できること、すべて理解できない、私の問題だ、乗り越えられる	相互理解、あきらめず挑戦	実際の在日経験から日本語使用上の相互理解の大切さに気づき	相手の要求に応えられるだけの日本語力
77	聞き手	80%と言っていますね。「話が分からない」と言っていますね。彼らは会話と聴解を重視していますか。				
78	I さん	はい、もちろん。もちろん、なぜかという、会話と聴解、両方のことだ。会話は、彼らが何か言ったら、それを理解し、すぐ指示通り行動できたら、OKだ。また、彼らの話はどのくらい聞き取れたか、彼らに私の話がどのくらい通じたか、それは彼らにとってとても大事だ。そして、彼らは電話会話の際の丁寧さも見ている。	会話と聴解、指示通り行動、彼らにとってとても大事、電話会話の丁寧さ	言葉のやり取りに焦点、敬語	電話会話の難しさ	発話の聞き取りと理解を重視

79	聞き手	インタビューの冒頭で、日本では経営学を勉強したいと言っていましたね。今はどのような計画でしょうか。あとどのくらい日本にいますか。				
80	I さん	また繰り返すが、大きな希望を持って来日した。まずは日本語を学んでいる。日本語を1年半から2年勉強して、日本語でしかるべきところまで行きたい。N3 レベルぐらいまで上達できれば、そして、次の年に専門学校に入学することも考えている。それが適切ではなければ、次の年、大学に行くことも考えている。大学で2年間のMBA(経営学修士課程)を勉強したい。MBAを修了してから、いい会社が見つけれたら、就職したい。そうして、日本の学位プラス日本語、日本文化の知識が身につく。帰国することも考えられる。国(バングラデシュ)の日系企業で働いてもいい。これが私の計画だ。日本で高等教育を受けるために少なくとも5年間ぐらい日本に滞在しなければならない。日本を知るために。その後、帰国することもあるが、いい仕事が見ついたら日本に残ることも考えている。	大きな大望、日本語、適切なポジションに上達、N3 レベル、専門学校、大学で2年間のMBA、いい就職、日本の学位プラス日本語、日本文化、日系企業、計画	しっかりした目標で来日、進路の計画	バングラデシュで経営学卒者のニーズが高い、欧米の国と違って日本の場合、語学学習のルートで来られる	キャリアに重要な先進国の教育(学位)、帰国を左右するの有無
81	聞き手	日本語、日本文化のことは繰り返し言っていますね。勉強やアルバイト以外に日本人コミュニティとどういう関わりがありますか。				
82	I さん	日本人コミュニティと結びつきはある。でも、それほどではない。原因は、また同じこと、言語(日本語)。会話がよくできたら、よく関わりあうこともできる。だが、日本の色々なお祭りがありますよね(お祭りと日本語で言っているが宗教的なものばかりでなく、いわゆるフェアやフェスティバルも含んでいるか?)…日本人はお祭りを彼らはとても楽しんでいる。見ていても楽しい。時々駅から出て来ると、外国人あるいは日本人が色々書かれてあるポスターを持って立っている姿が見える。そうすることで何か意味を伝えようとしている。私は日本人コミュニティと接したいという強い思いを持っている。なぜならば、それで日本についてもっと知ることができる。そのコミュニティの目的なども知ることができる。わが国と日本のコミュニティの違いを把握したい。だから、このコミュニティ、日本のコミュニティと接したい。	日本人コミュニティ、会話、お祭り、見るのも楽しい、日本人コミュニティと接したいという強い思い、わが国と日本のコミュニティの違い	日本人コミュニティへの強い関心、弱い結びつき、接点を持つことへの志向、日本文化の面白さ、自国との比較	宗教や経済の影響であまりカラフルではない自国の文化や祭りと日本の対比	接触が少ない日本人コミュニティへの強い関心、自国との文化の違い
83	聞き手	どうして日本とバングラデシュのコミュニティの違いを把握したいですか。				
84	I さん	理由として日本文化に耽溺している(Addiction)、惹かれているからだ。彼らの文化はちょっと違う。そこから学ぶこともある。だから、そこから色々学びたい。そして、これ(日本文化)から得られる成果(知識)を私の国で活かしたい。	日本文化、耽溺している、学ぶこと、得られるメリット、私の国で活かしたい	異文化への強い興味、将来のため知識獲得	海外生活の経験が一生の宝物、自国で海外での経験が誇りとしての評価	日本文化への執着心、日本文化の知識獲得と自国への貢献
85	聞き手	日本人コミュニティに接したいと考えているわけですが。この点で手伝ってくれる人はいますか。				
86	I さん	今までにその点で手伝ってもらったことはない。特に来日して泊めてもらった親戚、おじさん、おばさんたちからそのようなサポートをしてもらったことはない。彼らも忙しいから、自分たちもそれほど(日本人コミュニティと)接していない。あるいは、彼らは接することあまり興味がなかった。私のように最初から(日本人コミュニティに)興味はなかったかも。彼らが私を手伝ってくれることはなかったが、自国の日本語コースの担当(で来日中)の〇〇先生に電話したら、手助けしてくれた。先生は忙しいが、公民館に行くように私にアドバイスしてくれた。これ(公民館)はどこにあるか、どうやって行けるか、などを教えてくれた。私はその指示通り、交番に行って聞いた。警官も手助けしてくれた。それから市役所に行っても聞いた。だいたい自分でやろうとしている。だが、誰かが完璧なチャンネルを紹介してくれたら、あるいは完璧なチャンネルのラインが見つけられたら、もっと速く進めたのに。	おじさん、おばさん、サポートをいただいていない、彼らも忙しいから、自分たちもあまり接していない、〇〇先生に電話したら助けてくれた、交番、市役所、完璧なチャンネル	日本人コミュニティと日本にいる親戚の希薄な関係、別のルートで情報を得る	日本人コミュニティに紹介できる人が限られているが、様々なリソースを利用している。自分が単なる外国人ではなく、日本社会の一員として滞在したい	日本人コミュニティへの関わり、様々なチャンネルやリソース利用、試行錯誤、より効率的なチャンネルへの欲求
87	聞き手	おじさんたちは日本人コミュニティとそれほど接していないと言いましたね。それはなぜだと思いますか。				

88	I さん	その理由は…、彼らの個人的な理由もあるかも。でも、私が見る限り、彼らは忙しい。仕事しているから。日本にほとんどの外国人はお金のために来ている。だから、仕事、自宅、買い物などでたいてい手一杯だ。彼らはそれ以外に何かする計画はない。彼ら(おじさんたち)は忙しいから、助けられないかも。あるいは、不得手なところがあるかも、言語の面から。どうやって話すか、どうやって助けるか、そういう点でも苦手な面があるのかも。	個人的な理由、彼らは忙しい、外国人はお金のために来ている、それ以外に何かする計画はない、弱点もあるかも、言語の面から	出稼ぎの目的で来日、時間や言語能力の制限	出稼ぎ文化、海外に行くほとんどの人は道具的な動機が強い	血縁ネットワーク親戚、道具的な動機が強い出稼ぎ労働者、知的好奇心の有無、
89	聞き手	彼らは困ったとき、病気や経済的に困ったら、お互いに助け合っているから、日本人からの助けは要らないと思いますか。				
90	I さん	このような考えを(おじたちが)しているなら、それは間違いだと思う。日本に滞在するなら日本人と接しなければならぬ。これは第一の条件だ。なぜかという、日本人は助けてくれる。このことは私の短い滞在期間でも自信を持って言える。だから、彼らは自分たちでお互いに助け合って、病院などへ行くこととか、床屋に行くことができて、日本人との接することはとても大事だ。なぜかという、来日したからこそ日本人と接しなければならぬ、日本を知っておくべきだ、これは私の考え方だ。彼らのことはちょっと分からないが、どちらかと言うとそんなに接してはいない。	それは間違い、日本人と接しなければならない、これは第一の条件だ、日本人は助けてくれる、自信を持って言える	日本滞在の条件、地域コミュニティとの関わり の利点	バングラデシュ人同士でのコミュニケーションが多い日本人に接しない場合が多い	日本にいること、日本人との接触と知識習得の意義、根拠としての体験
91	聞き手	病院の話が出ましたね。君は日本の病院に行ったことがありますか。				
92	I さん	はい。一回行ったことがある。自分の(病気の)ためではなかったが、そこからも色々学んだ。				
93	聞き手	何を学びましたか。				
94	I さん	私はいとこを連れて行った。そこ(病院)に着いて(いとこが)まず保険証を見せた。そこにあるカードに名前や年齢などを記入した。記入してから受付に出した。それから名前を呼ばれた。すべての手続きがとても素晴らしくて気に入った。とても静かな環境の中でみんな順を踏んで(Step by step)手続きをしていた。そこで薬ももらった。それからまた違うところ(カウンター)に行った。とてもいいやり方だ。日本の病院のシステムが気に入った。	保険証を見せた、カードに名前や年齢などを記入、すべての手続きがとても素晴らしくて気に入った病院のシステム	診断の手続き、病院の制度	日本の病院の手続きが可視化されていて、順番に一つ一つ進んでいくことがバングラデシュの制度と違う	日本の医療機関の診察際の手続き、肯定的評価
95	聞き手	いとこさんが病気でしたか。				
96	I さん	はい、いとこが病気だった。				
97	聞き手	病院で見たことは最初の経験だったでしょうね。そこで日本語の使用はどうでしたか。君が1人で行ったら、お医者さんに病状を説明し、薬をもらうことができたと思いますか。				
98	I さん	(笑)…ちょっと難しい。なぜかという、私が学習した日本語は限られている。広い海に例えたら本当に限られている。病院で一番先に感じたのは、看護師やお医者さんと話したとき、医療関係の言葉などは知らないことに気づいた。分からないことが多い。それで、私はどちらかという、話すのを少しにして、私のいとこ、小学生だけど、日本滞在期間が長いので、日本語がだいたい分かるので、彼女が説明した。そこで学ぶことができたわけだが、自分が1人で行ったら、困っただろうと思う。最初どこに行くか、どこでカードを作るか、どこに申し出るか、などで困ったかも。言葉ができないから、あるいは、医療関係の言葉に関して困ったと思う。	難しい、学習した日本語は限られている、医療関係の言葉などは知らない、日本語がだいたい分かるので、彼女が説明した、自分が1人で行ったら、困ったかもしれない	病院に関わる難しい専門用語、1人で行くのは不安	簡単な場面の日本語習得、特殊の場面の日本語使用に困難	既習知識や言語能力を超えた相互行為を求められる場面、単独では遂行困難
99	聞き手	日常生活で、バスや電車の利用、あちこち行くことに関して何か困ることがありますか。				

100	I さん	ええと、そのような場面でも多少問題はある。もちろんある。いつも日本語が必要だと感じているので。例えば、何か気に入っても、(言葉で)現すことができない。この間、31 日に渋谷に行った。そこでハロウィンというお祭りがあった。そのお祭りの色々な男女が色々な服装で現れた。とても気に入った。彼らとこれについて話したかった。これはどうやって始まったとか。興味をひかれた。しかし興味を引かれたということを実現することができなかった。言語能力が流暢ではなかったため。言語能力がとても必要だと感じた。流暢に話すことができたなら、彼らと率直に会話ができ、少しは接することができたと思う。それから、数枚写真を撮って、ちょっと話をした、自分ができる範囲で。それで帰ってきた。だが、その時も言語の必要性を感じた。(苦笑い?)	多少問題、ハロウィンというお祭り、とても気に入った、色々な男女、色々な服装、興味を引かれた、表現することができなかった、言語能力がとても必要だ、ちょっと話した、自分ができる範囲で	自国で未体験の行事、自発的な行動、残念な気持ち	新しい知識の欲求、としての関心	日本人とのやり取りへの欲求、実現に必要な日本語能力の不足の痛感、孤立実体的能力観
101	聞き手	インタビューはあと少しで終わりますが、日本で円滑に生活するためにどんなもの・環境が必要だと思いますか。				
102	I さん	日本でのスムーズな生活をするためには、第一必要なものは言語、つまり日本語だと思う。第二は、漢字だ。なぜかという、日本の新聞、雑誌、辞書、日本の事務所、どこでも漢字が使われている。看板にも漢字が使われている。駅でも漢字が使われている。いつも漢字で、英語はほとんどない。全然使われないとも言える。だから、言語(能力)はとても必要だ。第二に、漢字はとても必要だ。漢字を習得できたら、多くのことが分かる。言語(やり取り)ができれば、彼ら(日本人)ともっと接することができる。	第一必要なものは言語、つまり日本語、第二は、漢字だ、彼ら(日本人)ともっと接することができる	日本語能力、コミュニケーション	日常生活やバイト先でのやり取りに「話すこと」「聞くこと」、そして、街で見当たるものを理解するために「漢字」の必要性を感じている	コミュニケーションに必須の発話能力、情報収集に必須の漢字の知識、孤立実体的能力観
103	聞き手	日本での生活経験を踏まえて、来日前に「これをやっておけばよかった」と感じていることがありますか。				
104	I さん	はい、もちろん。第一は、私の人生で、今までの人生で最も大きな間違いだったと思うのはダッカ大学日本語コースをシニア(2 年目)のとき途中で辞めてしまったこと。なぜかという、そのコース、2 年目の、最後まで継続できたら、言語能力がもっと高かった。あるいは、もっと前に(日本語コースに)入学できたら、もっと勉強できたのに。これはいつも感じている。言語(学習)にもっと時間を使えたら、もっとよかったと思う。	人生で最も大きな間違い、辞めてしまったこと、言語(学習)にもっと時間を使えたら	バングラデシュで日本語学習を継続しなかったことの反省	日本では日本語能力が不可欠なものである。来日前に、それが気づいていない人が多い	自国で日本語学習を継続しなかったことへの後悔
105	聞き手	そうですね。もう 1 つ質問をします。私たちはよくレストランで食べたり、食品を買ったりしますね。彼らの食生活は私たちとかなり違うでしょう。食品を買うとき、あるいは(レストランで)食べるとき困ったことがありますか。				
106	I さん	ちょっと困ることがある。日本のレストランの食べ物は私たちとかなり違う。例えば牛肉あるいは鶏肉などのように似ているものもあるので、レストランでそのようなものを買って来なければならない。食品を買うとき、(店員に伝えるのが)大変だけど、一生懸命説明している。もう 1 つ、全然違うものは、私たちバングラデシュ人は豚肉は食べない。でも、日本ではこれはよく使われている、よく食べられている。そして、豚の油も使われている。それは私たちは好きじゃない、食べない。だから、それ(食品)に豚肉が入っているか、豚の油が使用されているか聞かなければならない。このような問題に直面したことがある。このような問題を克服できるよう頑張っている。	食べ物は私たちとちょっと違う、食品を買うとき大変、一生懸命説明している、私たちバングラデシュ人は豚肉は食べない、乗り越えるように頑張っている	異なる食文化、禁じられている食品、判断能力	海外でバングラデシュ人もイスラム教徒の人も少ない国のひとつは日本だ。食生活に様々な工夫が必要だ	宗教上に禁じられている食品の区別に困難
107	聞き手	そうした問題が残っている、ということですね。				
108	I さん	はい、そうだ。				
109	聞き手	OK、今バングラデシュから来日を目指している人のために、どのようなアドバイスをしますか。				

110	I さん	彼らのためにアドバイスというか、第一は日本はとてもいい国、とても楽しい国だ。ここでは言葉ができれば、（日本社会と）十分に接することができる。だから、まず言語を重視したい。来日前に学んでくる語彙が多いほど、良く言葉ができればできるほど良い。アルバイトのために、日本文化に溶け込むために、買い物に、駅で切符を買うことから目的地に行くまで、あらゆる場面で言語が必要だ。第二に、ガイドラインが必要だと言いたい。自国で先生や親戚の誰かが日本語を学習するのと同時に日本文化、政治などの本を読んで勉強するようにアドバイスしてくれたら、良いと思う。	日本はとてもいい国、とても楽しい国、（日本社会に）接すること、良く言葉ができればできるほど良い、語彙や文法、アルバイト、ガイドラインが必要だ	日本に対する憧れ、事前準備、日本社会への統合、自国での提供可能なリソースとしてのガイドライン	自国で日本の経済や技術のことが知られている、社会や生活のことはほとんど知られていない	日本という国に対する肯定的評価、生活のあらゆる場面、サブバイバルから関係構築まで、必要な言語能力、習得量が生活の質を左右、自国でのガイドラインの提供、孤立実体的能力観
111	聞き手	文化って何を勉強してきますか。どんな文化を学んできたら、いいですか。				
112	I さん	日本のマナーだ。日本の映画、日本のアニメ、日本のドラマなど見られたら、（マナーを）大体習得できる。特に、日本人と接することができたら、いいでしょう。また、手助けをしてくれる先生がいたら助かる。	日本のマナー、日本人と接する、助けになる先生、助けていただける	日本社会、公衆文化、現地のリソース	グローバル化で、インターネットも広がっている時代で、リソースを利用する	目的地の人のマナーに対する知識
113	聞き手	色々聞かせてありがとうございます。来日目的、君の夢などを聞きました。最後に何か一言を言いたいですか。例えば、インタビューで聞けなかったが、言いたいことがありますか。何でもいいです。				
114	I さん	そうしたことは…日本ではそういったことがもちろんあると思います。日々新しい経験をしていくでしょう。日本人、日本文化のことを知れば、知るほど日本滞在に有益になる。1つ強調したいのは、自らの熱意がなければならないということだ。自分を日本人に合わせる必要がある。例えば、本を読んで私たちは日本人は勤勉であると勉強したが、正直に言うと、私たちはそれほど（日本人ほど）勤勉になることはできない。だから、自分たちのレベルを上げる必要がある。もっと努力しないと。もっと（仕事を）スピードアップしないと。もう1つは、日本人は繊細な仕事をする。それは素晴らしいことだと思っている。どんな小さいことでも彼らはそれを大事にしているので、できあがった物はとても素敵だ。このような仕事の完璧さをみんな学ぶべきだ。	日々新しい経験、日本文化、日本滞在に利益、自らの熱望、自分を日本人に合わせる必要、私たちはそれほど働くことができない、もっと努力しないと、仕事の完璧さ	学びへの熱心さ、仕事に対する国民性、文化に関する知識と生活の関連性、新しい環境に自分を統合させる	あまり馴染みのない社会での成功、その社会との関わり合い、相手文化と統合する構え	日本文化、日本人への同化志向
115	聞き手	どこでそれを見ましたら、なぜそう思っていますか。				
116	I さん	すべてのところに見える。特に日本では食品の出し方、展示の仕方はとても美しい。私もやったことがあるのでできないことはないが、彼らほどではない。自分の経験が（十分で）ないから。ある食品の値段 70 円、あるいは 100 円なら、提示の仕方を見ると 1000 円に見える。とてもきれいに提示している。	食品の盛り付けの仕方、私もできるが彼らほどではない、とてもきれいに提示している	丁寧な仕事の仕方	外見の価値観	見た目によって物の価値観の評価
117	聞き手	提示ってレストランなどでの出し方のことですか。				
118	I さん	はい、はい。そして、このスーパー、とてもシンプルなものでも、家で通常使っているカーペットでも、窓のカーテンでも、すべてのものはきちんと提示されている。シンプルなものでも基準が高い。ここからも学ぶことがある。	きちんと提示されている、シンプルなものでも基準が高い、学ぶこと	提示の仕方	商品の提示にも仕事の丁寧さが現れる。	提示の仕方によって物の価値観の評価
119	聞き手	今日、お時間ありがとうございます。また何か聞くかもしれません。必要ならフォローアップインタビューにもご協力お願いします。				
120	I さん	もちろん。協力できて私もとても嬉しいです。				
121	聞き手	ありがとうございます。				
122	I さん	はい。				

SCAT (Steps for Coding and Theorization)を使った質的データ分析

2015 年 3 月 Iqbal さん 2 回目インタビュー

番号	発話者	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
1	聞き手	イクバルさん、2 回目お時間いただき、ありがとうございます。来日してからどのくらい経っていますか。				
2	I さん	今は…半年越えて、7 ヶ月ぐらいね。				
3	聞き手	7 ヶ月？去年の 7 月からの学期に来ていますね。すなわち、7・8 ヶ月ぐらいですね。				
4	I さん	はい、7・8 ヶ月ぐらい。				
5	聞き手	分かりました。日本はどうですか。				
6	I さん	日本…以前よりも暮らしやすくなったと感じています。経験も積んでいるし、いろいろなことも分かるようになっていいるし、以前と比べていい感じになってきています。（日本のことを）知れば知るほどいいなと思うようになりました。	経験も積んでいる、以前と比べていい感じ、知れば知るほどいい	体験から来る自信、充実感	緊張からの開放	日本社会での生活上の安定感
7	聞き手	そうですか。この前、話したのは 4 ヶ月前ですね。この 4 ヶ月で生活上で何か重要な変化がありますか。				
8	I さん	生活の面です。当然いくつかの変化が起きています。特に、私の言語能力は以前と比べて向上したような気がします。そして、どこかへ行くこと、何かを探して見つけること、日本人とのコミュニケーション（会話）すること、全体的に上達しました。（これから）時間と共にもっと上達していくでしょう。だんだん上達しています。	生活、変化が起きている、言語能力、日本人とのコミュニケーション上達した、全体的に上達した	言語能力の向上、自信が身に付く、情報検索		言語能力向上に伴う自信と楽観的な見通し、自律的な行動の広がり
9	聞き手	はい。ここで「上達」って何を示していますか。もう少し具体的に教えてください。				
10a	I さん	「上達」は特に、アルバイト先で、そして、電車で移動するとき、学校でも上達したことを感じています。特に、アルバイト先ですね。以前は、萎縮したり、心細く感じたりしていましたが、いまはほぼ克服できました。来日直後に自分が頼りにならなくて、いつも不安を感じていました。今は一人であちこち行けるようになりました。そして、アルバイト先で以前の不安は今は感じていません。今、アルバイト先の社員というか、正社員とのやり取り、あるいは、返答をすることはできるようになりました。	以前は萎縮したり心細く感じたりした、自分が頼りなくて、いつも不安を感じていた、正社員とのやり取り、あるいは返答することができるようになった	言語能力の向上、緊張感や不安の減少、自信の高まり	日常生活への慣れ、緊張感や不安感の克服、以前との比較	様々な場面における来日時と現在の対照的な自分のあり様、自律的な生活、日常生活での自信
10b	I さん	特に前のアルバイト先のチーフとの出来事をここで挙げたいと思います。12 月にその仕事を始めました。そこの店長あるいはチーフは面接のとき、仕事は午後 6 時から 10 時半までだと言っていました。ですが、いつも 10 時 52 分、10 時 53 分あるいは 10 時 50 分ごろになってから、「今日はこれで終わり。帰ってもいいよ。」と言われました。一ヶ月、ほとんど毎日これが繰り返されました。それがとても気になりました。私は学生ですから、時間はとても大切です。時間が欲しいです。それで、ある日、チーフになぜ私に余分な仕事をさせているかと尋ねました。契約の時間より 20～22 分もオーバーしています。そのとき、そのチーフというか店長の答えは「ここでのルールはこうだ。仕事は 10 時半まででも、その後も残ってしなければならない」というものでした。私は、それは 10 分、5 分、7 分ぐらいならいいけど、毎日 20～22 分、18 分、20 分、16 分ぐらいともなると私にとっては問題だと伝えました。すると向こうはそのとき「それはどうしようもない。ここでアルバイトをするなら、このようにしないといけない」と言いました。それで私はそのとき、私も「それなら、私は新しい仕事を探す」と言いました。彼らも「いいよ」と言い、私はその仕事を辞めました。なぜこうなったかというと…	仕事は午後 6 時から 10 時半まで、10 時 50 分になってから、とても気になった、なぜ私に余分な仕事をさせるのか、時間はとても大切だ、契約の時間より 20～22 分もオーバーしている、「ここでのルールはこうだ」、新しい仕事を探す、仕事を辞めた	契約時間と実際の終業時間に差、慢性化した残業に対する不満、取り合ってもらえなかった主張、自分にとって時間の意味	アルバイトの雇用条件と理解の齟齬、労働に対する自分なりのルール、不当な労働に対する疑問の表明、上司による職場の慣行の尊重の要求、退職を選択	勤務時間をめぐる職場の慣行、自分の信念と職場の上司との異なりの対立、自己保存としての退職
11	聞き手	はい。どうぞ続けて。				

12	I さん	なぜかという、私は自信がついてきていたんです。この仕事を辞めても新しい仕事を見つ けることができるという気持ちがありました。ですから、そのアルバイトをやめたんです。	自信、仕事を辞めても新し い仕事を見つけることがで きる	楽観的な行動	自信	再就職できる自信、リ スクの高い行動
13	聞き手	そうですね。余分に仕事させられたことによって、辞めてしまったわけですね。自分の事情を 説明し、10 時半までに終わらせるように交渉しなかったのですか。				
14	I さん	はい。そのことは伝えました。10 時半までなら、助かります。その場合、20～25 分で家に帰っ て、2 時間ぐらい勉強することができます。他の仕事（家事）もあります。これは彼らに伝え ました。勉強と同時に料理などの家事もしなければなりません。しかし、それを言っても向こ うは聞いてくれませんでした。自分たちの言い分を主張してきました。	家に帰って、勉強すること ができる、勉強と同時に料 理などの家事もある、向こ うは聞いてくれなかった	事情説明、勉強と仕事 の両立、学生の本分、 勤務先の無理解	労働慣行をめぐる 異なり、交渉の決 裂、	学生と立場での主張、 自己保存の先鋭化、異 なりの対立
15	聞き手	はい。				
16	I さん	確かに（以前）仕事ももっとスピードアップするように言われたこともあります。私は（アル バイトを始めた）最初から仕事をできるだけ速くするように努力していました。まあ、彼らは いい人でした。最後に（営業時間の終わりごろ）注文が入ったとき、対応したことを「頑張り ましたね」と褒めてくれました。	仕事ももっとスピードアッ プ、仕事をできるだけ速く するように努力した、彼ら はいい人、褒めてくれた	仕事の効率化、肯定的 評価	要求に応える姿勢	人間関係構築、承認を 得るための努力
17	聞き手	10 時半までの仕事は具体的にどんな仕事でしたか。				
18	I さん	どうしてそういう仕事が発生したかという、（そのレストランでは）ラストオーダーは 10 時、9 時 55 分～10 時ごろに入っていました。それに対応してから、片付けし始めていました。 片付けながら注文にも対応していました。お客様は 10 時 40 分、45 分あるいは 35 分に帰って いました。お客様が帰ると、その使い終わった皿を洗わなければなりません。それで、 勤務が 10 時 50 分を越えてしまっていました。これは結構な（長い）時間といえます。	ラストオーダー、9 時 55 分 ～10 時ごろ、片付けながら 注文にも対応、勤務が 10 時 50 分を越えてしまってい た、結構な（長い）時間	労働慣行、残業、営業 時間の使い方、バイト 先の制度への不満	労働慣行に対する 異なり	システム化された残業 に対する疑問
19	聞き手	先ほど、最初のころは、仕事のスピードを速くするように言われたと言うことでしたね。				
20	I さん	はい。				
21	聞き手	君の仕事ぶりに、彼らはどの程度満足していましたか。あるいは、君自身はどう評価していま すか。				
22	I さん	どこであろうと最初のころは仕事に慣れるまで少し時間がかかります。仕事になればスピー ドは上がります。そうでないと時間がかかります。だから、最初のころはちょっと時間がかか っていました。少し時間かかっていた、あるいは、できませんでした。ですが日毎に改善 できていたと感じています。	仕事に慣れるまで時間がか かる、慣れればスピードは 上がる、日毎に改善できて いたと感じている	自己評価、仕事に対す る慣れ、スピートアッ プ	慣れ、高い自己評 価、労働能力の向 上	自信、能力向上、能力 向上の実感、自己肯定
23	聞き手	つまり、自分では満足できていたということですね。				
24	I さん	そうですね。だいたい満足できていたと思います。				
25	聞き手	1 ヶ月間その仕事をしたわけですが、言語使用上に何か困ったことがありましたか。				
26	I さん	言語に関する問題は最初のころは多少ありました。日本語は細かいところで意味が微妙に違っ てしまう言語なので、時々理解できないことがありました。多少問題はあったことは確かです。 来日してから 5・6 ヶ月で完全に（日本語を）習得することは不可能でしょう。そして、私たち は教科書で「普通形」を学びましたが、彼らの話し方はちょっと違っています。私と話すとき には…。私は「丁寧形」で話しましたが、彼らは私に対して「普通形」を使いました。（話し 方が）ちょっと違っていたし、彼らの話すスピードが速かったです。日本人の会話はスピード がとても速くて、私には理解しにくいものでした。	日本語は細かいところで意 味が微妙に違ってしまっ た、5・6 ヶ月で完全に習得 することは不可能、「普通 形」、「丁寧形」、彼らの 話し方はちょっと違ってい る、スピードが速かった	日本語の特徴、日本語 理解の難しさ、教科書 で学ぶ日本語と実際 に使われている日本 語の異なり、スピード	教科書の日本語の 限界、日常生活の 中での日本語理解 の難しさ	教室場面と実際の場面 で日本語使用の違い、 会話参加の困難
27	聞き手	教科書で習ったのは「丁寧形」でしたか、「普通形」でしたか。				
28	I さん	教科書は主に「丁寧形」でした。				
29	聞き手	そうですね。				

30	I さん	みな私に対して速いスピードで話をしました。例えば、私たちは「いいです」と言うところを、彼らは「いいよ」と言います。このような場合、言葉はちょっと（分かりにくい）…	速いスピード、彼らは「いいよ」と言う	丁寧体と普通体、受容の難しさ		
31	聞き手	4ヶ月前に話したときは、仕事をひとつ辞めた後でしたよね。				
32	I さん	はい。				
33	聞き手	そのとき、仕事を辞めた原因として、「言語能力」と「仕事の速さ」を挙げていましたね。それと比べて、まあ、そこにいたある外国人（の同僚）とうまくいかなかったこともあったかと思いますが、そのときと比較して今回の仕事を1ヶ月で辞めた原因には、同様な、あるいは違った要素がありますか。				
34	I さん	ええと…、同じようなことはと言えば合わなかったこと、つまり時間が合わないことです。それから、前の仕事のときと比べて今回は日本語が上達しています。	時間が合わない、前の仕事のときと比べて今回は日本語が上達している	時間調整の難しさ、日本語能力の向上	日本語能力、自信、時間調整	
35	聞き手	はい。				
36	I さん	その仕事で良かったことと言えば私の言語能力が以前と比べてあがったことです。同時に、仕事もスピードアップできました。そうしたことには満足しています。ですが、遅くまで仕事をさせられたことが不満でした。	言語能力が以前と比べてあがった、仕事もスピードアップ、満足、遅くまで仕事、不満だった	日本語能力の向上、仕事の効率化、残業に対する不満	日本語能力と仕事の効率アップに対する満足感、外的要因による退職	1つ目のアルバイトとの対照的な言語、業務遂行における向上
37	聞き手	ここでちょっと伺いたいのは、この2つの仕事を辞めた理由に何か比較できますか。				
38	I さん	前の仕事との比較…、今回の仕事でスピードが速くなった、言語能力も高くなったです。ですが、一番問題として感じていたのは時間通りに終わらせてくれなかったことです。遅れて帰らせることです。そして、前の職場で一人の外国人がいて、彼は私を嫌がらせをしました。この仕事でこのようなことはありませんでした。この面でましでした。前の仕事で言葉の理解が不十分でしたが、この仕事で比較的にできるようになっていました。これもいい点でした。だけど、問題は遅くまで仕事をさせられることです。	前の仕事との比較、スピードが速くなった、言語能力も高くなった、一番問題、時間通りに終わらせてくれなかった、前の仕事で言葉の理解が不十分	日本語能力の向上、仕事の効率化、残業に対する不満、人間関係上の問題がなかった	残業に対する考え方の異なり、異なりの対立、良好な人間関係	人間関係の問題、勤務時間の問題、異なりの対立
39	聞き手	次の仕事先では他にどのような人がいましたか、スタッフは何人でしたか。				
40	I さん	スタッフは10人ぐらい、ホールとキッチンを含わせて10人ぐらいだった。				
41	聞き手	君の仕事はどこでしたか。				
42	I さん	私はキッチンで。ホールでは仕事していない。ほとんどはキッチンだった。				
43	聞き手	キッチンには何人いましたか。				
44	I さん	5人ぐらいいた。				
45	聞き手	他はみんな日本人ですか。				
46	I さん	はい。				
47	聞き手	彼らとの関係はどうでしたか。				
48	I さん	彼らとの関係はまあまあ良かった。				
49	聞き手	何か分からなかったとき、助けてくれましたか。いい経験も、よくない経験も何でもいいから、何かあったら、教えてください。				
50	I さん	まずは、チーフのこと、他のスタッフより良い人だった。チーフが私に色々教えてくれた。他のスタッフも良い人たちだったが、彼（チーフ）のことはちょっと特別視していた。	チーフのこと、他のスタッフより良い人だった、私に色々教えてくれた、ちょっと特別に視していた	上司との関係、職場環境		良好な人間関係
51	聞き手	すなわち、チーフははっきりと分かるような形で助けてくれたんですね。				

52	I さん	はい。				
53	聞き手	しかし、その仕事は1ヶ月で辞めてしまいましたね。その後、今は何かしていますか。				
54	I さん	今はまた別のところで仕事をしています。同じような仕事です。これもレストランの仕事です。キッチンで料理を作っています。以前のところと比べてこれの方がよくて、自分に向いていると思っています。	同じような仕事、以前のところと比べてこれの方がいい、自分に向いている	慣れている仕事、今の職場に対する満足感	慣れた仕事で落ち着く	同業種の職場、仕事への慣れ、安心感
55	聞き手	まず、そこのキッチンのスタッフについて、何人いますか、どんな人たちですか、簡単に教えてください。				
56	I さん	そこは、ホールとキッチンを合わせて、ちょっと（人数が）多くて20人ぐらいいます。シフト制なので、キッチンにだいたい8人で、ホールは12人ぐらいが働いています。ホールで働いている人のほとんどは学生だから、それぞれの（勤務）時間を短くし、みんなに仕事が行き渡るようになっています。	シフト制、ホールで働いている人のほとんどは学生、それぞれの（勤務）時間を短く、みんなに仕事が行き渡る	働いている人が多い、学生が多い、勤務時間の調整	学生アルバイトが働きやすい環境	良好な労働環境、仲間との調整行動
57	聞き手	キッチンでは8人全員がいつぺんに働いているんですか。				
58	I さん	いいえ、キッチンには5人が入っています。				
59	聞き手	そこには君以外に外国人がいますか。				
60	I さん	いいえ、他の外国人はいません。				
61	聞き手	そのスタッフとの関係はどうですか。彼らといっしょに仕事することはどうですか。				
62	I さん	他のスタッフとの関係は良いです。仕事で分からないことがあると教えてくれます。最初、全く分からなかった時も教えてもらって助かりました。	他のスタッフとの関係は良い、仕事で分からないことがあると教えてくれる	良好な人間関係、親切的なスタッフ	支援が得られる場	同僚の支援への感謝
63	聞き手	そこでは勤務時間はどうですか。時間通りに帰らせてもらっていますか。				
64	I さん	前のような問題は新しい職場ではありません。時間になったら、彼らのほうから「終わり」と声がかかって、「タイムカードを押してください」と言われます。5分、7分ぐらい超過することはあるが気になりません。その程度なら問題はありません。だいたい時間通りに終わっています。3、4分の遅れは気にしません。	彼らのほうから「終わり」、タイムカード、だいたい時間通りに終わる	問題にならない程度勤務時間の延長	終了時間に対する安心感	
65	聞き手	なぜ彼らは時間通りに帰らせてくれるのでしょうか。君の方から勉強のこととか言いましたか。				
66	I さん	自分からは言っていないです。私が帰ってしまっても、他のスタッフがいるからです。ですから、帰らせてもらえます。私と同じような状況の人がもう一人いて、彼も用事があるときは早くあがることがあります。例えば、今日は私が早く帰って、あしたは他の人が早く帰るというようなことになります。誰か必ずいるから、店は私を時間通り帰らせることができます。	他のスタッフがいるから、帰らせてもらえる、誰か必ずいる	シフト制、お互いに助け合う	安心感	互助的、互恵的關係
67	聞き手	その後、誰かが（新たに）入りますか。あるいは、そこに別の人がいるということですか。				
68	I さん	誰かがいるのです。				
69	聞き手	そうですか。				
70	I さん	（学校で）試験があるときなどは、そう申し出れば時間より早く帰らせてもらえます。例えば、あしたは試験だと伝えれば1時間とか2時間前に帰してもらえますが、その場合は事前に伝えておかねければなりません。伝えておけば、検討してもらえます。今日はだめだけど、次のときは言ってくれば、考えてみるとか言われます。交渉の余地があります。	試験があるとき早く帰らせてもらえる、事前に伝えておけば検討してもらえる、交渉の余地がある	事前に説明、交渉、早退できる、事前連絡の必要性	労働時間の調整・交渉	労働時間の調整、柔軟な対応、学生の状況への配慮
71	聞き手	そうですか。これについてももう少し具体的に教えてください。時々、試験や勉強のために早退させてもらっているわけだね。				
72	I さん	はい。				
73	聞き手	どういう風にそれが可能になるのでしょうか。またそのことを店側はどう見ていますか。				

74	I さん	実は、試験のことは7日、…5日前に連絡しなければなりません、例えば今月20日とか、22日に試験があるからとか言えば勤務時間を変えてくれました。夕方7時から10時まで、あるいは、6時から9時まで、というふうに調整してくれたんです。それに伴ってその日、私と一緒にシフトに入っていた人の時間が長くなりました。	試験のことは7日…5日前に連絡しなければならぬ、勤務時間を調整してくれた、一緒にシフトに入っていた人の時間が長くなった	事前連絡、勤務時間の調整、他のスタッフとの調整	職場の責任者による時間の調整、柔軟なローテーション、実際に調整してもらえた経験	雇用者によるシフトの調整、柔軟な労働環境、事情に合わせる勤務時間
75	聞き手	そうですか。				
76	I さん	（他の人の時間を）長くし、私のを短くしてくれたんです。私と一緒にもう一人の学生が働いています。彼も同様に試験があるときはそうしてもらっています。つまり事前に言っておけば、（勤務）時間を調整してもらえます。	もう一人の学生が働いている、彼も同様に試験があるとき、時間を調整してもらえる	学生に対する待遇、仕事時間の調整、事前連絡、他のスタッフも同様な現象	時間調整、互恵性・互助性、手続きすれば学生は誰でも調整してもらえる	柔軟な労働環境、仕事への安心感、制度として確立した時間調整システム
77	聞き手	はい。				
78	I さん	店長は、彼は私を1時間前に帰らせるように工夫してくれました。その代わりに、他の人の時間を調整しました。	店長、帰らせるように工夫、他の人の時間を調整	シフト制の有効性	時間調整	異なり、解決、
79	聞き手	それはつまり、交渉してみれば、何か解決法が見つかるかもしれないということでしょうか。				
80	I さん	そうですね。うまくいっています。				
81	聞き手	例えば、交渉してもうまくいかないこともありますか。				
82	I さん	1回ありました。なぜかというとその日はたぶん月曜日で店が混んで忙しい日でした。このような忙しいときには、「今回は難しいが、また今度ね」と言われます。レストランが忙しいときは、頼んでも駄目だということが分かりました。	忙しいとき、「今回は難しいが、また今度ね」と言われる、忙しいときは頼んでも駄目だ	希望の却下の経験、次の交渉の余地、レストランの事情の理解	状況に合わせた雇用者の調整行動に対する配慮、拒否の理由説明と次の可能性の示唆による学生への配慮	相互配慮、想像力、自己保存の保留
83	聞き手	そのときは、君はどう思ったか。				
84	I さん	そうですね…。そのときは、自分に「また別のときには許可してもらえるので1回駄目だと言われても仕方ない」と自分を納得させました。なぜかといえば、相手が私の都合を考えてくれるなら、私も向こうの都合を考えなければならないと思うからです。	1回駄目だと言われても仕方ない、自分を納得させた、相手が私の都合を考えてくれるなら、私も向こうの都合を考えなければならない	了解、持ちつ持たれつ、相互扶助、納得	お互いの事情に対する配慮、互恵的な労働環境	異なりの対立の回避・解決、異なりの内在的統合、調整行動、配慮行動
85	聞き手	来日以来、今の仕事は3つ目だね。				
86	I さん	はい。				
87	聞き手	この仕事はどうやって見つけましたか。				
88	I さん	この仕事は、実は、自分で、自分で探そうと思った。そして、日本にいる親戚のおばさんも助けてくれた。おばさんは「あなた自分で仕事を探しなさい。私とあなたのおじさんもあなたのために仕事を探しているから。」と言ってくれた。おばさんは私に「日本では飲食店では食べ終わった後にメニュー（領収書）をくれるが、そこに値段とその店の電話番号が記載されているから、領収書に、色々なレストランで食事し、その電話番号を集めなさいとアドバイスしてくれた。私もその通りにした。色々なレストランで食事し、各レストランから領収書を集めた。集めてから、私はそれぞれの店に電話した。電話したら、「うちは今はアルバイトを募集していないから、後日電話してください」など断られることがほとんどだった。「日本語をもっと練習してから連絡ください」と言われたこともある。	自分で探そうと思った、親戚のおばさんも助けてくれた、店の電話番号、領収書、それぞれの店に電話した、断られることがほとんどだった	親戚からのサポート、一人での求職活動、直接電話で求職活動、日本語学習の必要性	積極的な求職活動	血縁ネットワークの助言、積極的な求職活動、自主性

89	聞き手	はい。				
90	I さん	「 <u>日本人</u> 並みの言語能力が必要だ」と言われた。そこは高級レストランだった。とても大きいレストランだ。そこからはそんなふうに言わした。	<u>日本人</u> 並みの言語能力が必要だ、高級レストラン	母語話者並みの日本語能力	上級レベルの日本語能力の必要性	日本語能力向上の必要性
91	聞き手	はい。				
92	I さん	その後も引き続いて何箇所にも連絡したところ、あるレストランの店長が「それでは面接に来てください」と言ってくれた。出かけていくと、「今何をしているか」「どこで勉強しているか」「学校の名前は何か」「どこに住んでいるか」など質問されたが、ちゃんと答えることができた。	引き続いて何箇所にも連絡、「それでは面接に来てください」と言ってくれた、ちゃんと答えることができた	面接、日本語による応答	日本語能力向上の確認	自身の力による課題の達成
93	聞き手	はい。				
94	I さん	それでむこうは彼らは満足し、「では、（仕事に）来てください」と。その後、必要な手続きを終えてから終わらせて、仕事し始めた。				
95	聞き手	お婆さんの国籍は？				
96	I さん	バングラデシュ人だ。				
97	聞き手	お婆さんは電話番号を集めるアドバイスだけしましたか。それとも、他にも具体的に色々サポートしてくれましたか。				
98	I さん	いや、具体的に何か手伝ってはくれなかった。				
99	聞き手	はい。				
100	I さん	なぜならば、お婆さんも忙しいし。子供がいるので、子供（育児）のためにさく時間が長いんだ。だから、私に自分で探すように言った。自分で探せばと。（なぜなら）バングラデシュでは仕事を得ようとするとは賄賂を使ったり（誰かの）紹介が不可欠だが、ここでは賄賂なんて問題外だし、紹介はあった方が良いが、言語能力があれば、あるいは、 <u>真面目</u> だと思えば、採用してくれる。	お婆さんも忙しい、バングラデシュ、賄賂、言語能力があれば、 <u>真面目</u> だと思えば、採用してくれる	一人の求職活動、バングラデシュと日本の求職活動の違い、不正な求職活動、能力主義の社会、まじめな態度の重要性	実力主義、能力主義、共に働く人間としての適性に対する評価	賄賂が当然の自国との違い、職務遂行に十分な能力、人柄の評価、孤立実体観的な考え方、関係性への着目
101	聞き手	その場合、「紹介」がなくてもいいですか。				
102	I さん	そうね。その場合、「紹介」がなくても済む。「言語能力」があること、「就労許可」があること、そして、そのほか働くための条件が満たされていることを確認できたら、採用してくれる。	「紹介」がなくても済む、言語能力、就労許可、働くための条件が満たされていることを確認できたら	言語能力、就労許可（法的な認可）、採用条件	実力主義、能力主義	紹介に代わる保証、実力
103	聞き手	今まで3ヶ所で働いていますね。2ヶ所はもう辞めましたね。特に、辞めた仕事、1つ目は日本料理のお店でしたね。				
104	I さん	はい。				
105	聞き手	そして、2つ目は何でしたっけ？				
106	I さん	2つ目も日本語料理屋だった。				
107	聞き手	日本料理ですね。そして、3つ目、すなわち、今の仕事は？				
108	I さん	これも日本料理だ。				
109	聞き手	特に、この間言ってくれた最初目の仕事、あるいは2番目の仕事でいいんですが、数ヶ月経った今の時点でどう思いますか、続けようとしたら続けることが可能だったと思いますか。前の2つの仕事のことで。				

110	I さん	前の2つの仕事を比較したら、特に最初の仕事のことを言わないと。そこのチーフはいい人だった。比較するなら、2番目の仕事より、最初のほうが気に入っていた。2つの仕事は時間のことでちょっと厳しかった。最初の仕事は言語能力があったら、話し合って問題解決できていたかもしれない。	最初の仕事、そこのチーフはいい人だった、2つの仕事は時間のことでちょっと厳しかった、最初の仕事は言語能力があったら、話し合って問題解決できていたかもしれない	時間に関する問題、言語能力に関する問題		言語能力欠如から来る不本意な退職、孤立実体観的な考え方
111	聞き手	はい。				
112	I さん	そこにいたXX人が何か言ってきたら返答ができたろうにと思う。例えば、それはそうじゃなくてこうでしょう、それはこうやったらどうでしょう、というふうに。あの時は（言葉が）分からなかったから。今なら、克服できたろうにと思う。	何か言ってきたら返答ができたろう、あの時は（言葉が）分からなかった、今なら克服できたろう	言葉による問題解決、高い言語能力の必要性、言葉による説明、意見を述べる	孤立実体観、自信	自己保存を可能にする言語能力、孤立実体的能力観
113	聞き手	そうですか。すなわち、今の語学力がそのときあったら、その仕事を辞めなくても済んだということでしょうか。				
114	I さん	はい、辞めなくても済んだと思う。	辞めなくても済んだ	高い言語能力の必要性	孤立実体観的な考え方	言語能力への信頼、よりよい選択、孤立実体観的な考え方
115	聞き手	先ほどおぼさんの話が出ましたが、最初の仕事もおじさんが紹介してくださったんですね。				
116	I さん	はい。				
117	聞き手	このようにここにいる他のバングラデシュ人とはどのような関わりがありますか。				
118	I さん	みんなとは電話で連絡を取り合っている。おじさんとは直接（対面で）会っている。週2回程度とか、また、祝日にもよく会う。その他のバングラデシュ人の知り合いは少ない。知り合いになった人との連絡は主に電話になる。なぜなら、私の休日とみんなの休日はそれぞれ違うから。また、休日には色々な予定があって自分のために時間を使って終わってしまう。それで、他人のための時間が作れない。あるいは、少ししか作れない。皆も同様だ。	電話で連絡、バングラデシュ人の知り合いは少ない、私の休日とみんなの休日はそれぞれ違う	バングラデシュ人との接触機会が少ない、電話での連絡	バングラデシュ人との接触機会の少なさ	同国人と希薄な関わり
119	聞き手	前回のインタビューで日本人友達の話をしていましたね。ケイタ君ですね。				
120	I さん	はい。				
121	聞き手	今、もっと増えたか分かりませんが、どうでしょう。日本人のお友達は何のくらいいますか。				
122	I さん	日本人の友達は前と比べて、人数はそんなに増えていない。限られた数しかないと言える。今の仕事を始めてから1ヶ月半ぐらいで、ホールで働いているスタッフのうちには数人の学生もいて、彼らとは友達のような関係ができていると言えると思う。それ以外、（バイト先の）外での友達は増えていない。	日本人の友達、人数はそんなに増えていない、ホールで働いているスタッフ、彼らとは友達のような関係ができている	日本人との接触機会、限られた接触機会、職場の日本人との友好関係、日本人との関わり、職場での友達	限られた日本人との接触機会、職場の日本との関係	限られた関わりで人間関係構築に困難
123	聞き手	そうですか。その数人（の友人）とはどのように交流していますか。				
124	I さん	彼らとは…電話で連絡している。この間、彼が1回会いに来てくれた。私のためにプレゼントを持ってきた。	電話で連絡、彼が1回会いに来てくれた、私のためにプレゼント		限られた接触機会、電話での連絡、	限られた接触機会
125	聞き手	それはケイタ君のことですか。				
126	I さん	はいそうだ。ケイタさんだ。彼とはそのような付き合いが続いている。そして、もう1つ、電車で知り合った人のことを話したいと思う。	電車で知り合った人	出会い	偶発的な出会い	出会い
127	聞き手	オーケー。				

128	I さん	電車の中で日本人の女性と知り合う機会があった。彼女はたぶん、私が外国人だから興味を持ったのだと思う。乗り換える駅について、彼女も私も乗り換えるのが一緒だった。そのとき、彼女が近づいて来て「どこから来たか」「何をしているか」を聞いて来た。また話をしたいとのことだった。彼女は私に自分の電話番号を教えて、「連絡してね」と言った。しばらくたってからある休日に彼女に電話してみた。そのときから、連絡し合うようになった。しばらく LINE や電話で連絡を取り合った後、ある日、彼女から「どこかで会いましょう」と誘われた。それで会いましょうということになり、互いに時間を調整しあって、会った。夕方にあるレストランに入って、（一緒に）食事した。色々話をするうちに、彼女がちょっと違う話題を取り上げた。	電車の中で日本人の女性と知り合う機会、彼女は私に自分の電話番号を教えて「連絡してね」と、連絡し合うようになった、彼女から「どこかで会いましょう」と誘われた、彼女がちょっと違う話題を取り上げた	見知らぬ人に声かけられた、新しい人間関係、食事に誘われる	電話などの連絡の過程を経てから一緒に食事に行く	新しい人間関係
129	聞き手	はい。				
130	I さん	彼女の話の焦点は宗教にあった。（私を）宗教に勧誘しようとしているような気がした。ちょっと話しているうちに、彼女が何について話したがっているのか、分かった。実は、私は個人的に宗教に関して話すのは好きじゃない。私が他の人の宗教について話したらそっちも嫌がるでしょう。だから、（宗教について）何か言われることも、自分から言うことも好きではない。話の途中でそのことに気づいて、このようなテーマでは話さないほうがいいと思ったので「 <u>話さない</u> と（ <u>話さない方が</u> ）いいです」と言った。	（私を）宗教に勧誘しようとしているような気がした、私は個人的に宗教に関して話すのは好きじゃない	プライバシー、微妙な問題	話題への違和感、異なりの対立	話題への警戒感、異なりの対立、敏感なテーマに対する
131	聞き手	はい。その人はどんな人でしたか。年齢、職業など知っていますか。				
132	I さん	はい。食事しながら話をした。年齢は聞かなかったが、見たところ 50～52 歳ぐらいだったと思った。				
133	聞き手	そうですか。				
134	I さん	それが彼女の仕事だったと言っていた。他の仕事はしていなくて、その仕事にとっても興味を持っているようだった。そのことにずいぶん熱心だった。				
135	聞き手	彼女はいったい何を期待していたのでしょうか。				
136	I さん	彼女の狙いは私を彼女の宗教に誘い込むことだった。最初は色々言っていた。日本はとても美しい国だ、日本の経済はとても強い、日本の富士山はとてもきれいだ、などと話したあと、また富士山の話になった。富士山の下に仏陀がいるなどと言い出した。（それを聞いて）彼女が何に興味を持っているかが分かった。彼女はそんなふうに仏教について話しをした。そして、私に紙を見せた。そこには仏教のことが書かれていた。「この宗教に入信しませんか、仏教徒になりませんか」と聞かれた。私は「それは無理です。たとえ死んでもあり得ないことです。だから、それについていくら説明しても『 <u>無駄な時間</u> 』になるだけです」と答えた。「『 <u>無駄な時間</u> 』になりる、話さなくても（話さないほうが）いいです」と答えたら、彼女もその話題について話は続けなかった。残りの時間は 2 人と、つまり彼女ともう一人の女性がいたので、3 人で普通の会話をしていた。話が終わって帰ってきた。彼女の主な目的は仏教の布教だったんだ。	彼女の狙いは私を彼女の宗教に誘い込むことだった、彼女が何に興味を持っているかが分かった、仏教について話、たとえ死んでもあり得ないこと	仏教への勧誘、自分の宗教との対立、異なり、自分の意思をはっきり述べる	相手の目的の発覚、拒絶	期待と異なる相手の意図、交渉の拒絶
137	聞き手	君が彼女にそのことで話してもどうにもならないと言ったから、その後その話題は出なかったんですね。その後、彼女と連絡はありますか。				
138	I さん	その後は、彼女と連絡することはほとんどない。私も彼女も連絡していない。彼女は、私がそのこと分野（仏教）に興味がないことが分かったのでしょうか。だから、（その後）彼女は私に連絡して来ない。私も連絡していない。	彼女と連絡することはほとんどない、私がそのこと分野（仏教）に興味がないことが分かった	縁が切れた		関係の終結
139	聞き手	ちょっと話題を変えます。学校の生活はどうですか。勉強や他のこと。				

140	I さん	日本語学校は前より楽しい。なぜなら、漢字が分かるようになったし、日本語も良く分かるようになったからだ。日本語クラスの担当の先生もとても良いひとで、いろいろと手助けをしてくれる。 <u>とても親切な人</u> だ。それで、語学力が上がった。それに今は、バングラデシュから学んできた（日本語）内容を終わって、その先（のレベル）に進んでいる。	日本語学校は前より楽しい、担当の先生、 <u>とても親切な人</u> 、語学力が上がった	言語能力の向上、担当教員の助け	学習内容を具体的に示すことによって上達したことを明確に示す	良好な日本語学習環境
141	聞き手	はい。				
142	I さん	次の（レベルの）テキストも <u>だいたい 80%終わります</u> （ほぼ 80%ぐらい終わった）。だから、私の語学力は以前と比べて向上したと思っている。学校のおかげで（こうなった）。だから、勉強への意欲もわいて来て、興味も高くなった。	語学力は以前と比べて向上した、勉強への意欲もわいて来て、興味も高くなった	順調な学習、自信、居場所としての学校、学習動機	言語能力の向上と学習動機の因果関係、高い自己評価	学習動機の上昇
143	聞き手	学校の先生、クラスメート、スタッフたちと学校の外でも交流がありますか。				
144	I さん	授業外のコミュニケーションといったら、…普通に時々ある。主に私の授業がない日とか、試験の前に、まあ試験があることは事前に授業中に知らせてくれるが、先生は個人的にもメールで「頑張ってください。漢字試験だから、よく準備してね。」と書いて送ってくれる。このようなメッセージを LINE やメールで伝えてくれる。そして、お正月などイベントのときにもメッセージをもらう。私もメッセージを送る。このようなやり取りをしている。（みんなで）パーティーをしたこともある。試験が終わってから、 <u>春休み、夏休み、冬休み</u> のような長期休みが始まるのだが、そのような休みの前に（みなで）パーティーしてから、授業が終わる。前回の <u>夏休み</u> のときは、私たちみんな柏のレストランで食事した。この間の <u>冬休み</u> のときは、一人のクラスメートがは彼の国の料理、ベトナム料理を持ってきてくれた。	先生は個人的にもメールで「頑張ってください。漢字試験だから、よく準備してね。」と書いて送ってくれる、前回の <u>夏休み</u> のときは、私たちみんな柏のレストランで食事した	事項連絡、お祝いのメッセージ、クラスメートとの娯楽活動	事項連絡程度の付き合い、教師やクラスメートとの希薄な関係	人間関係構築
145	聞き手	はい。				
146	I さん	みんなでその料理を食べた。日本語の先生は私たちのために映画を用意してくれた。私たちの教室に大型テレビがあって、そのテレビで日本の映画（を見た）、今題名は思い出せないが、子供向けの映画だった。子供向けのストーリーだったが、彼（主人公）は大人だった。学期の終わりに、その映画を見せてもらった。 <u>冬休み</u> が始まる前の日だった。	みんなでその料理を食べた、映画を用意してくれた、教室に大型テレビがあって、そのテレビで日本の映画（を見た）	娯楽、長期休み、いい思い出	長期休み前後の交流会	印象的な娯楽・交流
147	聞き手	はい。話は変わりますが、前回のインタビューのとき、日本人コミュニティ、日本社会に興味を持っていたと言いましたね。				
148	I さん	はい。				
149	聞き手	まだ同じように興味を持っていますか。				
150	I さん	はい、まだそのような興味がある。				
151	聞き手	（そのことでこれまでに）どの程度成果がありましたか。				
152	I さん	以前よりは、成果があったと思う。前はあまり（関わりを作ることが）できなかったが、今は少しできるようになった。そういう関係を築くことができた。どうやってかと言うと、 <u>区役所</u> に行った。 <u>区役所</u> でそうした関係の担当者と話をしてみたらホームページのアドレスといくつか印刷した資料をもらえた。そして、「このような社会（活動をしている）団体がある。連絡してみてください。語学力がもっと上がったら、もっといろいろ紹介できるから」と言ってくれた。	以前よりは、成果があったと思う、 <u>区役所</u> に行った	地域コミュニティに関わる興味、区役所での情報収集、日本語能力向上の重要性	地域コミュニティへの接触に向けた情報収集、接触活動はなし	目標達成に向けて情報収集、日本語の上達の促し、社会活動
153	聞き手	どのような団体ですか。				
154	I さん	ひとつは、ホームページを読んでみて、これは中国の団体だと思った。もう 1 つ紹介された団体は新宿にあって、これはたぶんバングラデシュ人の団体だった。私がバングラデシュ人だから、これを紹介してくれたのでしょう。ただ、まだ時間がなくてそこには行っていない。	ホームページ、これはたぶんバングラデシュ人の団体だった	適切な情報	目指していたことと教えてもらったことのギャップ	的確な情報収集
155	聞き手	彼らはどのような活動をしていますか。社会福祉の活動でしょうか。				

156	I さん	社会福祉関係の団体ようだね。この団体の会員になれば、何か困ったときに助けてもらえるし、あるいは、問題を乗り切るための手助けをしてくれるそう。直接そこは連絡を取っていない。	社会福祉関係の団体、困ったときに助けてもらえる	ボランティア団体	困ったとき助けの確保	生活の安全確保
157	聞き手	君は日本のコミュニティ、日本の文化、日本人との関わりを目指していましたね。そういう関わりの中、あるいは、ネットワークを見つけれられましたか。				
158	I さん	そういうネットワークはまだ見つかっていない。まだつながりを作ることができないでいる。				
159	聞き手	もう1つ聞かせてください。過去4ヶ月であるいは来日してから、日本語使用上あるいは直面した場面で何か困ったことがありましたか。				
160	I さん	はい。色々な問題…問題というよりよりの経験だね。				
161	聞き手	はい。				
162	I さん	日々色々な経験をしている。特に、以前はどこかへ行くとき不安を感じていた。まず、語学力不足だったし、しゃべる勇気がなかった。語学力が低かったためだ。現時点では、語学力がついてきている。そして、電車の乗り場、3番線とか、4番線とか、漢字がだいたい分かるから、どの電車がどこまで行くか分かる。電車の中の <u>駅員</u> （車掌）の話もだいたい分かるようになった。	以前はどこかへ行くとき不安を感じていた、語学力がついてきている	日本語能力の向上、日本語でのコミュニケーションに対する自信、自信が身に付いた、自由に行動	日本語使用に対する自信、孤立実体観	言語能力の上達、不安の解消、自身で解決可能なことの増加、孤立実体観的な考え方、
163	聞き手	（車内）アナウンスのことですか。				
164	I さん	はい。だから、コミュニケーションというか、交通手段は便利に使えるようになったと思う。もう1つ新しい経験をした。前にも同じようなことがあったが、今回はちょっと違う。私の最寄り駅でのことだ。学校に急いでいた途中だった。駅の中に警官が立っていた。	交通手段は便利に使えるようになった、駅の中に警官が立っていた			
165	聞き手	はい。				
166	I さん	私は急いでいた。そのとき、私のいところから電話があつて、そこで待っているように言われた。それで行かずに待っていた。それがちょうど警官の目の前だった。警官のいた場所から10～15フィート（3～5メートルぐらい）の距離だった。彼ら（警官）は私を見て、近づいてきて、「名前は？どこから来たか」などと訊いてきた。私は（在留）カードを見せた。すると、どこへ行こうとしているかと訊かれた。「 <u>学校に行くところだ</u> 」と答えると、彼らはちょっと意外だったようだった。面白いことに、私はそのときかばんを持っていたのだが、そのかばんに何が入っているかと訊かれたのだ。「何か <u>危ないもの</u> が入っているか」と尋ねられた。「ちょっと <u>見せてください</u> 」と。私は本などを見せてどうぞ見てくださいと言った。それでかばんを開けて見せたら、「ごめんなさい、すみません」と言い、去って行った。そういうことだ。彼ら（警察官は） <u>外人</u> を見たら、疑う。でも、私は恐れることはない。なぜなら、合法的に滞在しているのだからこれは問題になるとは思わない。新しい経験だった。	警官の目の前だった、どこへ行こうとしているっていかと訊かれた、かばんに何が入っているかと訊かれた、「何か危ないものが入っているか」と尋ねられた	身分確認、危険な人物として疑われた、恐怖感しない、日本語使用の自信、	以前の経験からの学び、日本語能力の向上	法的な滞在、自信、同じ体験の繰り返し、相手の行動パターン、余裕、自身の反応の変化
167	聞き手	そうですか。そろそろインタビューは終わりますが、ここでもう1つ教えてください。来日してほぼ8ヶ月ですね。この8ヶ月の経験を振り替えて、日本での生活に何が最も重要だと感じていますか。				
168	I さん	この8ヶ月で、日本滞在にとっても重要だと感じたもので1番重要なのは「日本語」、まずそれだね。第二は、「漢字」だ。なぜなら、どこに行っても一番必要なのは「話すこと」だ。だから、「言語」、そして、何かをするため、いい仕事をするため、社会との関わりのために、何か新しいことを理解するために「漢字」が必要だ。もう1つ気づいた点は、日本人の礼儀正しさと言うか、マナーというか、違いを感じる。日本人はバングラデシュ人と全く違う。彼らのこの礼儀正しさが目につく。ここから学ぶことがたくさんある。何かちょっとした間違いでも謝ること、ミスをしたらそこから学ぶこと、何かできなかつたら教えてくれることなどだ。総体的な礼儀正しさと言うか。	日本滞在にとっても重要だと感じたもので1番重要なのは「日本語」、一番必要なのは「話すこと」、「漢字」が必要、彼らのこの礼儀正しさが目につく	言語能力、漢字理解の重要性、日本人の丁寧さ、日本人のマナー		孤立実体観、日本滞在に必要な能力、発話能力、漢字の知識、

169	聞き手	今まで色々な仕事を経験しましたね。学校にも通っていますね。3つの仕事の経験がありますね。日本人との接触したこともありますね。特に、人間関係を作るとき、どのようなことに気をつけなければならないのでしょうか。いい人間関係を作るためにどのようなことに気をつけなければならないか、あるいは、どんな資質が必要だと思いますか。				
170	I さん	まず気をつけなければならないことは仕事上で間違いをしないことだ。これはとても大事だと感じた。いつも念頭に置いておかないと。間違いをおかしてはいけない。なぜなら、日本人が間違う率はとても低い。これは気をつけるべきことだね。それから必要な資質と言うと、やっぱり仕事のスピード、「とても速く」だね。仕事の速さと、第二に、言葉が流暢さであることだ。第三に、彼らと礼儀正しく接することだ。コミュニケーションができて、態度、ジェスチャー、話し方、全体的な体の姿勢など、それからレストランで働くときは料理の出し方などがとても重要だ。	仕事上で間違いをしないこと、日本人が間違う率はとても低い、仕事のスピード、彼らと礼儀正しく接すること	仕事の進み方、言語能力、姿勢		仕事の正確さと速さ、礼儀正しさ、孤立実体的な能力観
171	聞き手	ホールでの（客への）料理の出し方のことですね。				
172	I さん	はい、ホールでの出し方のことだ。必要な資質というこのようなことが挙げられると思う。日本人の振る舞いはすべての点で芸術的だ。彼らは物をきれいに提示することが芸術だと考えている。どの場合でも。	日本人の振る舞いはすべての点で芸術的だ、物をきれいに提示する	提示の仕方	丁寧な仕事	仕事の丁寧さ
173	聞き手	先ほど、必要なとき、何回か交渉して休ませてもらったと言っていましたね。困ったとき、このような交渉、お互いに話し合うことはどう思いますか。				
174	I さん	それは私はいいいことだと思っている。なぜなら、彼らに「こういう理由で休みが欲しい」「この仕事はこのようにしたらよいのではないか」などしっかり説明できれば、それはきちんと受け入れてもらえる。何か新しいことを言えば、彼らはまず <u>考えて</u> くれる。それで納得したら、そのようにしてくれる。	しっかり説明できれば、受け入れてもらえる、新しいことを言えば、彼らはまず <u>考えて</u> くれる	交渉の効果、説明の重要性、他者への配慮、	対立、協働、調整行動、配慮行動	解決を目指して交渉
175	聞き手	君の考えを聞きたいのですが、例えば、何か必要なとき、アルバイトに限らず、日本の生活でどこでも、自分から一歩進んでアプローチするようにしていますか。たとえ、拒否される恐れがあっても。認めてくれるか、くれないか分からない状況でも自分から何か言おうとしていますか、あるいはしたいと思っていますか。				
176	I さん	はい、もちろんしたいと思っています。今までもやってはいるが、それほど多くはない。何につけても、私よりも彼らのほうがしっかり考えている。私の頭に何かいい考えが思い浮かんだら、あるいは自分で考えたら、それを彼らに伝えて「これはどうでしょうか」と提案している。そうした場合、彼らの反応はたいいてい良い。	何かいい考え、提案している、彼らのほうがしっかり考えている、彼らの反応はたいいてい良い	提案、肯定的な反応	提案し、承認を得る立場	関係性への配慮、自分の提案への肯定的反応、自分を受け止めてくれる場、信頼
177	聞き手	それは職場の内外、どこでもそうしていますか。				
178	I さん	はい、どこでも。どこでもそういうことが起こりえる。ですが、職場以外だとこのようなことを起きる可能性は低い。				
179	聞き手	職場ではチャンスがあるわけですね。				
180	I さん	はい、職場で。なぜなら、職場では良く人同士のやり取りが行なわれるからだ。	良く人同士のやり取りが行なわれる	人間関係	最も頻度の高いインターアクションの場所として職場	相互行為を通して自分の存在をアピールできる場としての職場
181	聞き手	今日はインタビューにご協力くださり、ありがとうございました。				
182	I さん	こちらこそ、ありがとうございました、先生。				

謝辞

本論文を完成させるまでの間、多くの方々のご指導、ご助言、ご協力をいただきました。まず、この機会を借りて深く感謝申し上げます。

主指導の国際交流基金日本語国際センターの木谷直之先生、副指導の政策研究大学院大学の岩田夏穂先生、麗澤大学の近藤彩先生には、本論文の構想段階から脱稿に至るまで終始暖かい励ましと丁寧なご指導を頂きました。厚くお礼申し上げます。

博士論文審査委員会委員の政策研究大学院大学の園部哲史先生、鳥取大学の池田玲子先生には、審査の過程で本論文に対して貴重なコメントをいただき、深く感謝申し上げます。

政策研究大学院大学の今野雅裕先生、国際交流基金日本語国際センター所長の西原鈴子先生に貴重なご助言と暖かい励ましをいただきました。深く感謝申し上げます。同じくセンターのゼミ等で久保田美子先生、横山紀子先生、築島史恵先生、白井桂先生には、貴重なご教示をいただきました。心より感謝いたします。

センターの佐藤智照先生、松井孝浩先生には、データの分析方法についてご教示いただきました。そして、チューターをしてくださった菅生早千江先生、向山陽子先生、原田三千代先生、古屋憲章先生には、本研究についての貴重な助言と暖かい励ましをいただきました。心より感謝申し上げます。また、論文のための特別講義をしてくださった、明治学院大学の房賢嬉先生、早稲田大学日本語教育研究センターのトンプソン美恵子先生に感謝いたします。

データ収集に当たり、すべての協力者に、特にインタビュー調査で協力してくださった皆さんに感謝いたします。関西地域からも数多くの協力者のデータ収集に協力してくださったダッカ大学政治学科のDr. S M Ali Reza さん、そして、バングラデシュから色々な情報・データを送ってくださった志日本文化センターの岡林邦明先生にも感謝いたします。国立国語研究所の福永由佳先生にも、調査のため協力者や論文などを紹介していただきました。心より感謝申し上げます。

本研究のために 4 年半の休職をご許可くださり、また、現地調査時点でご協力やご助言をくださいました、ダッカ大学学長の Professor Dr. A A M S Arefin Siddique 先生に厚くお礼申し上げます。そして、私の所属機関であるダッカ大学現代言語研究所の Professor Iffat Ara Nasreen Majid 所長、および Md. Sultan Ahmed 前所長、研究所の同僚をはじめとして、国際関係学(IR)、日本研究センター(JSC)の学科長・所長、他の教員にも調査へのご協力をいただき、感謝いたします。

今回の留学の準備段階から、在バングラデシュ日本大使館の広報文化班大村浩志前班長をはじめとして、井川英樹氏、柘植亮司氏、有吉留美氏にも、バングラデシュにおける日本語教育の改善のための貴重なご助言やご協力をいただきました。

また、文部科学省から奨学金をいただき、日本での研究活動に役立させていただきました。心より感謝申し上げます。

家族を日本に呼び寄せる際には、政策研究大学院大学の今野雅裕先生、前学生支援室長の土谷隆先生と日本語国際センターの築島史恵先生にさまざまなサポートをいただきました。心より感謝申し上げます。

政策研究大学院大学の Candidate Seminar において発表した際に、司会進行をしてくださいました中田亮輔先生、様々な面でサポートしてくださいました同大学 CJLL の八木敦子先生、事務局の渡辺由希子さん、伊藤彩さん、工藤真紀子さん、国際交流基金日本語国際センターの竹田順二さんに深く感謝申し上げます。また、センターの先生方、図書館の方々、職員の方々に暖かく見守られて、研究を続けることができました。

そして、ゼミや研究室の先輩で先に博士号を取得したナビン・クマール・パンダさん、ウラムバヤル・ツェツェグドラムさん、ナヨアン・フランキーさん、張勇さん、グエン・ラン・アインさんには、貴重なコメントをいただいたことに感謝いたします。また、東京外国語大学の渡辺一弘先生にベンガル語の日本語訳をチェックしていただきました。ニクソン・レベッカさんに英文のネイティブチェックにご協力いただきました。お世話になった皆様に心から感謝申し上げます。

最後に私のために来日し、慣れない日本で様々な困難を共に乗り越えてくれた妻の Fazilatun Nesa、娘の Anisha Alam、息子の Zuberi Alam に感謝します。妻は、研究の面だけではなく、生活全般において心の支えになってくれました。自国にいる母の Saleha Begum と兄弟には、長年の日本留学について理解してくれたことに感謝しております。そして、私の博士論文完成を誰よりも喜んでくれたはずの天国にいる父の Mohammed Mahboobul Alam に感謝いたします。

2015 年 9 月

アラム モハメッド アンサルル